超克

倉田百三著

# 超克

倉田百三著

# 内容

# 善と福との一致に就いて

——序文に代へて——

私は今私の全生活の基礎を定める一つの根本假定を置かうとして居る。私は此れを今は信仰と云はないで假定と云つて置く。其れは此の假定が先きで崩壊する事を豫期して用心する爲ではない。私は今此の假定が私の今後の精神生活の内で、崩れる事は無いと信じて居る。然し此の假定を今私の精神生活の基礎に置いた許りで、未だ其の上に立つて生活し、其の體驗を重ねる事に依つて、生き生きと其の眞理である事を實證しない前に、此れを信仰と名づける事に氣がひける爲に、假定と云つて置くのである。私は今謙遜な、實に根深い確かさのある、然し平靜な心を以て此の假定を置く。其れは善と福との一致と云ふ觀念である。素より此の觀念は此れ迄とても自分にフレムドであつたのではない。さうあるべき筈のもの、さうあり度きものとしては、私の倫理的思想の内に深く横はつてゐた。又正統派の宗教家及び常識的な市井の善人には此れを信じて居る者

が少くない。然し私は此れ迄未だかつて一度も其れが事實であるとして信じ、從つて其の上に精神生活を据ゑようとした事はなかつた。其れは何故であるか。其れは此の地上の生活の相を見る時に必ずしも善人が惡人よりも幸福でなく、善と惡とが各々其の度に從つて福と禍との結果を得て居ないと云ふ事實を認識してゐるからである。素より善人が榮え、惡人が滅ぶ事實は此の世に於ても到る處に此れを視、法律や演劇に於いて其の原理が行はれて居る事は、動かすべからざる事實である。然し嚴密にさうであるか。例外はないか。此れと正反對の結果を生じて居るやうな例はないか。又善が福であつても其の善の度に比例して福であるか。又或る惡人が一層大なる惡人より、より多く禍ひである如き例はないか。かく吟味する時我々は地上の生活に於て、善と福との嚴密なる一致の事實を認める事は不可能である。故に我々は、市井の愛すべき善人の此の信念を遺憾ながら粗大なるもの、若しくはお目出度きものとして、受け容れる事が出來ない。善を愛し、惡を憎む正義感（ゲレヒテイツヒカイツン）の實に旺盛なるリップスも其の「倫理學の根本問題」の中に次の如く云つてゐる。

此處に「何の水をも濁さぬ」一人の「善」人がゐる。彼は自分の「役目」以外のことは何も考へたり爲たりしな

いために、その長上から喜ばれてゐる。彼は道徳的に貧弱であるが、この貧しさは彼の意識には上らない。彼の周圍にには物質上道義上多くの窮乏がある。併し彼はその前に眼を瞑る能力を持つてゐる。從つて彼はこの儘の自己と世界とに甚だ滿足して居る。更に運命も亦彼に恩惠を垂れる。彼は常に健康であり、如何なる災厄も彼の爲慣れたる生の歡樂を脅かさない。此の如くにして彼は高齡に達する――此の如きは人の最も幸福なりとする者の一人である。併し何人も道徳的偉大を以て彼に許さない。

此處に又一人の人があつて自ら高き道徳的理想を掲げる。さうして愈々猛烈にその實現を追求すれば益々苦く彼は裏切られる。彼は世界に於ける物質上並びに道義上の窮乏を見て眞底から之と惱みを等しくすることを避ける事が出來ない。さうして自己の本質の缺陷に對する意識も亦これに劣らず彼を苦める。而も亦外部的災厄さへ彼を追求するのである。彼の最も愛する者は彼から奪ひ去られる。彼は遂に不幸の中に窮死する――或人は彼を呼んで愚人と云ふ。或人は之に反して此處に高貴なる者が沒落したと云ふ。

最も善き者は最も幸福な者であるといふ命題は此の如き事實に如何に適用さるるか。確にそれはさうある可きことである。併し實際さうであると云ふのは無思慮な、殘酷な無情な樂天主義である。

――阿部次郎氏要譯

かくの如きは我々が欲すると欲しないとに拘はらず、現前の事實である。故に此れを變更する

事は出來ない。我々は只此れに順應する事が出來る許りである。然らば我々の精神生活を此の事實に順應せしめる道は如何であるか。其れは次の三つあるのみである。第一は善と福とは一致しないことを信じて、其れにも拘はらず、善を追求する道である。第二は善が福に一致する限りに於いてのみ、善を追求する道である。第三は此の事實あるにも拘はらず、猶善と福との一致を可能ならしむる如く世界觀を擴張する事である。我々は此の三つの道の中何れを選ぶべきであらうか。私は人間の本性に最も適合する、最も合理的なるものとして、第三の道を選ばざるを得ないものである。私は此れ迄此の三つの道を明瞭に區別して其の一つを選擇する事なしに、曖昧なる態度をとつて來た。然し今自分の態度を明瞭にしなければならない時期が來た。其れを明瞭に選擇して斷乎として決心しない限り、今後の自分の精神生活を支へる事が出來ない事を感ずる。今ソクラテス的勇氣を以て自分の爲すべき事をなさんと欲する時、それには其の條件として、其の事が合理的でなければならないことを知つた。(「强くなる道。」參照)。合理的でない限り、合理的でない處に眞の勇氣は生れない。故に此の三つの道の中、私は今最も合理的なるものを選擇して、此れを根本假定として、其の上に私の精神生活の基礎を置く事を決心したのである。然らば

何故に第三の道を自分の本性に適する、最も合理的なるものと判斷するのであるか。其の心的過程は次の如くである。

先づ善が福と一致する限りに於いて、善を追求すると云ふ事は、私を滿足させない。此れは倫理學上所謂功利主義であるが、其れが個人的功利主義たると社會的功利主義たるとを問はず、其れは本質的に支持すべがらざる立場である。其れは既に倫理學上見事に論破された立場である。善と幸福と一致する限りに於いて、善を追求すると云ふ事は、畢竟善を其れ自身の爲に追求するのでなく、幸福の手段として追求するのである。故に其の人にとつて價値があるのは、幸福であつて、善ではない。若し善がかくの如く其れ自身の價値を持たざるものであるならば、我々が善に對してかく迄感ずる内面的の感動は何處から生じるのであるか。然も幸福と矛盾して爲さるゝ善に對して特にかくの如き内面的感動を感ずると云ふ事實は如何に說明すべきであるか。私は善に其れ自身の價値を與へずには居られない。幸福は善の觀念と快樂とを結合したものである。故に若し善の其れ自身の價値を認めないならば、福とは畢竟快樂の事である。然るに快樂は其の發生の過程として、欲望を豫想する。欲望が充足された結果快樂が生ずるのである。我々が求め

るのは其の欲望の對象である。故に福と一致する限りに於いて善を追求すると云ふ第二の道は不合理である。其れは假令最大多數の最大幸福を追求する場合と雖も同樣である。

次に善と福とが一致しないものとすれば、私は善そのものゝ權威を感ずる事が出來ない。素より福を目的として、其の爲に善を求めるのではない。然し善が福と一致しない如き世界秩序に於いて、善を究極目的として追求する勇氣が支へられないと云ふ事は、果して我々の我が儘であらうか。弱さであらうか。私は最深の反省を以てして、其れを當然であると思はずにはゐられない。若し善が此の世界の、從つて我々の生活の究極目的であるならば、其の結果が福と一致すべき筈のものである。若し此れが一致しないならば、此の事は其の事自身が善が究極目的でない證據である。故に何ものをも犧牲にして此れを追求する必要はない。更にその究極目的が福と一致しない如き世界は、疑ひもなく不合理な世界である。世界秩序が不合理であると云ふ事は、其の世界に於いて我々が何事をも眞面目に努力する價値がないと云ふ事である。我々が自主的に服從すべき義務が存在しないと云ふ事である。從つて何ものをも捨てゝ善を追求すると云ふ事も義務でなく、必要でなく、且つ甲斐のない努力である。かくの如き世界に於いては、唯一の合理的

なる生活法は、總ての眞面目なる努力を捨てゝ、只自己の欲する儘に——恐らくは快樂を追求する事である。其の快樂に或る變化と明暗とを與へんが爲に、——結局快樂の量を大ならしめる手段としてのみ、善を追求する事である。卽ち第二の道に歸着する。然るに第二の道が合理的でない事は前述の如くである。更らに善と福とが一致しないとすれば、我々がかくの如くして追求する義務と、必要と、甲斐のない善に對して、我々がかく迄感ずる內面的な、涙ぐましき、且つ嚴肅なる感動を說明する事が出來ない。或人は恐らく其れはかくの如き感動が認識の誤謬より生じたる迷妄であるとなすかもしれない。然し果してさうであらうか。我々が他人の善行に對して持つ賞讃、自己の善行に對して自ら勞ふ心、福を棄てゝ善に殉じた善行に對して持つ感動は、迷妄より生ずるものであらうか。此の說明は自分の內面的經驗と一致しない。故に我々にとつて可能なのは、結局善と福との一致を可能ならしむる如く、世界觀を擴張する第三の道の他にはない。卽ち此の地上の生活以外に我々の死後の世界を認めて此の地上の生活に於いては、善と福とは嚴密には一致しなくても、全世界過程に於ては嚴密に一致する事を假定するのである。卽ち靈魂の不死、來世の存在を假定するのである。かくて善と福との嚴密なる一致を信じて善を追求す

るのである。云ふ迄もなく此の事は福の爲に善を求めるのとは全然別事である。我々の追求するのは善そのものであるが、善そのものが世界の究極目的であるが故に、必然的に福と一致するのである。換言すれば我々が善と福との一致を要求するのは、善が此の世界の究極目的である事の證據を求めるのである。幸福の爲に善を求めるのではなく、反對に、前に述べた如く、幸福の爲に善を求める第二の道に滿足する事が出來ないが故にこそ、善にそれ自身の價値を與へんが爲に此の如き要求を生ずるのである。約言すれば善の價値と權威の客觀的保證を求めるのである。善が必然的に福であるが如き合理的なる世界秩序の中に於いて、初めて我々は善を追求する合理的勇氣を持ち得るのである。此の如きは、決して我々が肆意を以て我が儘に假定するのではない。其れはカントが「實踐理性批判」の中に明晰に且つ嚴密に論證してゐる如く、我々の道德意識の事實そのものが、其の成立の爲の必須の條件として、其の客觀的實在性を假定せずには居られない、實踐理性の要請（ポスツラート）である。其れは我々が只主觀的にさうあり度いと願ふ丈けではなく、又さうありさうに思へる丈けではなく、さうなければならない、さうある事を要することである。我々は其れが如何なる内容のものであるかを、理論理性の對象として認識する事は出來ない。然し此れ

が客觀的に實在してゐる事丈けは、實踐理性の對象として要請する事が出來るのである。(カント「實踐理性批判」第一部第二章參照)。我々は靈魂の不死と、來世の存在を此れ以外の根據から論證する事は不可能であり、且つ此れ丈けで充分である。此の外の根據に於いては、我々は積極的に其の存在を論證する方法を持たない。只其れを否定する根據を否定し得る消極的論證をなし得るのみである。然し此の消極的論證は決して無効ではない。其れは我々の精神生活を唯物化から防禦し、宗教意識を迷妄であるとなすが如き越權と誤謬とから、我々を救ふには充分である。卽ち我々は普通に來世の存在をあり能はぬ如く考へるのは、如何なる根據に依るのであるか。其れは自然科學的認識の爲である。然るに我々は自然科學的認識の對象の性質、及び其の方法論上の吟味に依つて、其の限界を知り、其の限界以外に於いての適用を當然に拒否する事が出來る。其れは自然科學の價値を認めないのではなく、自然科學の性質が其の如き約束のものなのである。故に我々は、來世の存在を否定する常識的根據を否定すべきである。素より此の事は何等積極的なる肯定の根據を含んでは居ない。かくの如き肯定の根據はその否定の根據と共に自然科學の、一般に理論理性の、能力の限界を超えるのである。かくて我々は知識的には只實踐理性の必然的

要請としてのみ、靈魂の不死と來世の存在とを肯定することが出來るのみである。然し乍ら、我々は單に此れを理性の要請としてのみならず、此れを信仰する事が出來る。卽ち此れを論證せんとする要求を捨てゝ、信ずる事が出來る。かくの如き信仰は素より主觀的である。從つて其の客觀的妥當性を他人に論證し、若しくは要求する事は出來ない。然し我々は、他人に對する論證や、要求を放棄するならば、主觀的信仰にて充分である。我々が靈魂の不死や、來世の存在を求めるのは、他人に論證し要求せんが爲ではない。自己にとつては、信じ得れば足りるのである。我々は自分一個には、明瞭である事實が、如何にしても他人に信ぜしめ得ざる場合がある。例へば無實の罪に問はれたものが、裁判官を說服して證據を擧げて論證する事が出來ないからと云つて自分が無罪である事を自信する事に差支へはない。然し乍ら、かくの如き信仰は、只肆意を以て、自分が主觀的にかく願ふ若しくはかくあるらしいと云ふ丈けでなく、客觀的にさうあるものとして自分一個には信じられるのでなければならない。凡そ如何なる信念も我々にとつて此れ以上の確かさを持つ事は出來ない。かくの如き信仰が客觀的事實でない事はあり得るであらう。然し其れ以上の確かさは、我々の能力の限界を超えてゐる。又宗教的、道德的心情としては、此れ

丈けで充分である。素より一つの道德的心情は、其れが道德的正に一致する時、初めて客觀的善となる。然し道德的評價の對象となるのは、道德的正を射當てる事ではなく、射當てんと欲する心情である(リップス倫理學根本問題第五章參照)。我々に可能なる事は道德的正に一致せんとする最善の努力である。

自分は善と福との一致を可能ならしめる爲に靈魂の不死と來世の存在を實踐理性の要請として假定し、かくて其の價値と權威とを保證せられたる善を、合理的なる世界秩序の中に於いて、追求せんと欲するのである。此れが人間の本性に最も適合する合理的な道である事を信ずる。かくの如き善の追求の勇氣は全く合理的なる勇氣である。從つて自分が善と認識した以上、其の善を實行せざる事は恥辱である。今や私は此の實行を回避すべき何等の理由をも持つ事が出來ない。そして此れを實行する時、必然的に其の善に比例した福が生ずるのである。故に自分は其の事が善であると知つた以上は、必然的に此れを實行する德を持つ筈である。其の結果として、必然的に福を得べき筈である。只問題は自分が何が善であるかを知る事である。旣に此れを知つたならば德と福とは必然的に伴ふ筈である。此れ智と德と福との一致であつて、ソクラテス的勇氣の生

ずる根據である。故に此の生活法に立つ時、自分にとつて第一に必要な事は、善に對する智慧である。「善とは何ぞや」と云ふ認識である。善の認識が誤謬である時、必然的に德と福とを得る事が出來ない。然らばかくの如き善の認識は可能であるか。其れは地上に於いては相對的にのみ可能である。完全なる善の認識は地上の人間の能力を超えて居る。リップスの云ふ如く、完全なる善の認識には、第一に人間の内にあり得べき凡ゆる動機と目的とを知らなければならない。更に其のそれ〴〵の動機と目的との客觀的價値の上置と下屬との關係を知らなければならない。更らに一つの目的の實現から生ずべきあらゆるあり得べき結果を知らなければならない。かくの如きは地上の人間の智見を超えて居る。故に我々は、完全なる善の認識に、地上に於いて達することは出來ない。然しカントの云ふ如く最高善の理念が、實踐理性の要請として、かくの如き完全なる善の認識の可能を要求せしめる。我々は行爲に於いて、最高善を究極目的としなければならない。其れ故に最高善の認識が可能でなければならない。我々は此の可能を假定して我々の最上の智見を盡くして、善を認識し、かくて認識したる善を實行しなければならない。其れが客觀的善に一致してゐる限り、福と一致する筈である、此れ以上の合理的なる道は我々に許されてゐない

のである。素より善の認識は主觀的に各人にとつてそれ〴〵に異る善を認識するのではなく、客觀的に妥當なるものとして認識するのである。故に其れは初めより各人に各個の異りたる善を認めるのとは全然別である。併し乍らそれにも拘はらず、認識する主體は依然として主觀なるが故に、善の認識は其の人の智見の完全となるに從つて相違してゆく事はあり得る。此の意味に於いて、自分は今日善と認めるところのものを將來認め得ざるに到る時があるかも知れない。又其の反對もあるかも知れない。自分が此處で假定するのは善と知つた限りは其の善を實行し、其の結果が必然的に福と一致すると云ふ事である。此の原理そのものは、不易なるものとして假定するのである。今私は此の假定の上に私の精神生活の基礎を置かんと決心する、人は或ひは其れを自分の爲に危ぶむかも知れない。然し私は私の最善の反省を以てして、自分が此の決心を後悔する時が來るとは考へられない。何となれば、若し善と福とが嚴密に一致しないものとすれば、かくの如き世界を自分は合理的と感ずる事が出來ない。從つて自分にとつて可能なる生活法は個人的快樂主義に歸着する。若し自分が他日この決心を後悔する事があるとすれば、只個人的快樂主義の立場に立つ場合のみである。社會的幸福主義は、善と福との一致を信じない限り必然的に個人的

快樂主義に徹底すべきものである。成る程個人的快樂主義の見地よりすれば、自分の今の決心程愚かなるものはないであらう。然し乍ら個人的快樂主義は、靈魂の不死、來世の存在を要請する事が出來ない。其れを要請し得るものは、道德的意識のみであるが故に、此の主義は畢竟此の地上のみに於て、出來得る限り自分の快樂を追求する生活法となる。そして若し來世が存在しないならば、自分にとつて此の生活の快樂は追ふても、追はなくても、どうでもいゝ事にすぎない。我々が若し明日死ぬる事が確かであり、そして來世が存在しない事も亦確かであるならば、我々は所謂"Eat and drink, for we shall die to-morrow."と云ふが如き快樂の追求をなすであらうか。私はさうするとは思はない。私は屹度快樂を追ふ根氣さへも持たないであらう。然も個人的快樂主義は社會生活に於いては、其の手段としての勤勉や善を必要とする。然もかくの如き勤勉と善とは、內面的の喜悅なく、機械的に只手段としてのみなされなければならないが故に、其れは純粹の苦痛である。然も其の結果として味ひ得る快樂は、極めて少く、不安定であり、且つ其れ自身が他の苦痛を誘起する、其れは堪へ難き生活である。私は寧ろ手を拱いて死を待ち度い。況して私の恐らくは短かい生涯に於いて、猶更である。然も私は自ら殺す術を知つてゐる。そし

て其れを自分に禁止する何等の道德的根據をも、其の立場からは生ずる事が出來ない。

私は今善と福との一致の假定の上に立つて生活を初めんとするに當つて、かくの如き生活法が私の現實生活の事實として、如何なる結果となつて現はるべきかを二、三の例に就いて演習して見たい。

自分が若し他人から罵詈された時は如何であるか。若し其の罵詈が自分の人格に相當してゐるならば、其れは當然である。自分の爲すべき事は其れに相當せぬやうに自分の人格を向上せしめる努力をする事である。素より罵詈されたるに依つて精神的及び物質的に自分は禍ひを受けもするであらう。然し其の禍ひは自分が當然忍ぶべきものである。此れを忍ぶ事が出來ないのは、蟲の良さである。其の蟲の良さが通過するならば、合理的ではない。又此の場合假令自分が其れに相當してゐるにもせよ、他人を罵詈する事は、罵詈者の不德には相違ない。然し其の不德は其れに相當した報いを受けるのである。自分が其の不德に復讐する必要はない。我々は何の爲に他人の此の報いを希望せねばならないのか。其れが自分に何ものを與へるのか。他人の禍ひに依つて我々は積極的に何ものをも得るのではない。リツプスが云つてゐるやうに復讐と毀傷の悦びとは

實際ある事と、其の感情との一種の錯覺にすぎない。合理的なのは、只罵詈者が不德であり乍ら自ら愉快を感じてゐるといふ道德的不合理に對する不平のみである。然し其の不平は今や無意味となつた。故に自分は罵詈者に對して怒り、若しくは憎むべき理由を持たない。其れは罵詈者にとつて禍ひである。故に自分が若し其の禍ひの爲に罵詈者に同情する事が出來るならば――それは出來ねばならない筈である――其れは積極的に善である。そして其れは福を結果する。又此の場合他人の罵詈が自分の人格に相當してゐないならば、自分の人格は毫末も損傷されるのではない（「强くなる道」參照）。そして其の爲に受けた精神的及び物質的の禍ひは、自分が不當に受けたる禍ひであるが故に、自分の不當に受けたる福の償ひになるであらう。此の場合罵詈者は益々不德である。しかし其れに對して如何なる態度を取るのが合理的であるかは前述の如くである。

此處に若し不義の快樂が自分を誘つたならば如何であるか。例へば美しき女があつて、自分を誘つたとする、自分は彼女の肉體の美に惹き付けられる。然し彼女の精神の卑しさを嫌惡する。全體としての彼女の、女性としての人格は、自分を惹きつけない。換言すれば、自分は彼女を戀愛しない。然し其れにも拘はらず彼女の肉體のみを切り離して對象とするならば、換言すれば彼女

を人格としてゞはなく、肉欲を滿足せしめる爲の物として對する時、充分に自分を牽きつける。然も其事は彼女を苦しめない。寧ろさうされる事を反つてよろこぶ。其爲に彼女は自分にとつて恰も美しき玩具の如く見える。然も自分が彼女の誘惑を斥ける時、彼女は反つて苦痛を感ずる。かくの如きは、今の自分には力ある誘惑である。然し自分は他人の人格を物として取り扱ふ事の罪惡である事を確知してゐる。其れに依つて自分は相手を侮辱する事を確知してゐる。そして彼女がそれを苦痛と感じないのは、彼女の罪惡である事をも確知してゐる。自分が彼女の誘惑に從ふならば、自分も彼女も共に罪惡を犯す事を確知してゐる。然も其の誘惑を斥け難いのは何故であるか。其れはその罪惡感が弱いからではなく、其の快樂が著しく強いものだからである。然し其の不發の快樂は必ず報いられる。此の誘惑を斥ける事は苦痛と闘つてなす積極的善である。其れは福をうける。此の全身を衝動せしむるが如き快樂も猶且つ此れを斥けた方が自分にとつて福なのである、又相手を其の罪惡から防ぐ事は彼女の當座の苦痛であつても、實は彼女の爲に福である。素より此の場合禍と福とを計量して後者を選ぶのではない。罪惡を斥けんとする道德的意志が我々の無智に依つて、阻まれる事を防ぐのである。

更らに第三者が第三者に對して犯す罪惡に對する時如何であるか。例へば前の例に於て、かくして自分が其の誘惑を苦悶を以て斥け、其の純潔を保ちたる女を何の苦もなく他人が玩んだならば如何であるか。此の事の豫見は、我々の誘惑を一層强きものとするのである。此の場合我々の苦痛は、自分が善の爲に逸したる快樂を惜しむ心と、他人が惡の爲に得たる快樂を妬む心とに依つて、二重に强められたる道德的不合理に對する不平である。凡そ道德的不合理に對する不平の苦痛は、凡ゆる苦痛の中にて最も堪へがたきものである。其れは何ものに依つても償はれる事が出來ない。我々の精神の力のみを以て此の苦痛を忍耐する事が出來ると思ふのは人性を理解せざる者である。只我々が善と福との一致を信ずる時にのみ、償はれる事が可能である。即ち此の場合他人の不義の快樂は實は他人にとつて禍なのである。故に我々は自分の妬みと惜しみとが自分の無智である事を信じ、自分の不平を消す事が出來る。そして他人の禍ひに對する同情を感ずる事が出來る筈である。

かくの如く我々の態度の驚くべき變化は、只我々が善と福との一致を信ずるか、信じないかに依つて生ずるのである。然も此の一致は何故に信じられないのであるか。此れを信じる事は、さ

まで甚だしき妄想であるか。其れに就いては私は前述の如き根據以上を擧ける事が出來ない。そしてそれだけで自分にとつては充分であると感ずる，人は或ひは善と福との一致を信じなければ善を勵む事の出來ない心を功利的であるとするかも知れない。然し其れは實に怖るべき事を知らないものである。道德的不合理に對する我々の苦痛は、精神の力を以て忍耐し得ないものである。其れは人性の能力の限界を超える。然も此の苦痛は、正義感が強ければ強い丈け、益々高まるのである。此れを堪へ得ざる事は不名譽ではない。堪へ得んとする事は無理である。不合理なところに眞の勇氣は出ない。善と福との一致を、我々が要求せずにゐられないのは我々が快樂を其の報いとして要求するからではない。實に此の道德的不合理に對する我々の合理的なる不平から癒やされんが爲めである。聖書の中にあるキリストの「復讐は我れにあり、我れ必ず報いん。」と云ふ語や、又「天に於て報い多ければなり。」と云ふ語を捉へて、其れを以て、キリストを功利的であると云ふ人がある。然し乍ら、此れはキリストの心を解せざるものである。我々が善と福との一致を知つてゐたからと云つて其れは福の爲に善をなすのではない。善はそれ自身の爲になすのであるが、善が福と一致しない事が我々の正義感を滿足せしめないのである。キリストの「復

等かくするは彼等の頭の上に火を積むなり。」こ云ふ語は決して復讐心からではなく、只かくの如き正義感のみより發したのである。然らざれば「惱め責むる者の爲に祈禱せよ」こ云つた心こ一致しない。此の二つの語は外見上自家撞著であるけれごも、實際は同一なる正義感から發し得るのである。若し善こ福この不一致を信じながら、猶善に勵む勇氣が人間に堪へ得るこ云ふものがあるならば、其れは實に怖るべき思想である。かくの如きをこそ自分は眞の意味の傲慢であるこ云ひ度い。

此處に於いて自分はかのダンテの神曲の煉獄の觀念に正しき意義を感ずる。宗教意識に於いて必須の二つの條件は如何なる罪惡も必ず審判される事こ、及び如何なる罪惡も必ず赦免される事こである。私が「眞心がなくてもいゝこ云ふ意味に就いて」の中に書いた如く、我々が實際に一度び爲したる善惡の行ひは嚴肅に記錄さるべきである。其れは消し去る事は出來ない。天國は正義感こ矛盾する事は出來ない。故に我々が天國に入る迄には、我々の罪惡は淨められるを要するのみならず又償はれなければならない。其れは卽ち煉獄である。自分は何等かの形に於て此の煉獄がなければならない事を感ずる。卽ち我々の不義の快樂は、不當の苦痛に依つて償はれなければなら

ない。我々は罪惡を犯さないわけにはゆかない。然し我々が殉教や、正義の爲に受けたる苦痛、又他人の無智や誤解に依つて——卽ち一般に不當に受けたる苦痛は其の償ひとなるであらう。かくて此の生涯のみならず、天國に到る迄の凡ゆるあり得べき全世界過程に於いて、償はれなければならない。我々の救ひとは、我々が必ず天國に入り得るやうに、定められてゐる事である。「此の儘でいゝ」と云ふ安心立命は、我々が如何やうなる過程を通してにもせよ、兎も角も、天國に到り得るやうに定められてゐると云ふ信仰である。其れは我々の現在の狀態如何に拘はらず、信じ得べき事である。しかもその過程は不合理ではあり得ない。我々が若し自分の罪を淨めず、償はずして、淸淨となり切らずして天國に入る事が許されるとすれば、それこそ不合理であつて、天國の莊嚴と調和しない。我々は我々の究極の目的である、我々に定められてゐる惠みなる樂園が、完全なる事を望むべきであらう。然らば我々の罪を淨めず、償はずして、天國に入る事を許さるゝ事を望むべきではなからう。然らば自分は神曲の永遠の地獄を合理的と感じ得るか。私は其れは不合理と感ぜざるを得ない。其れは神の惠みと調和すると感じられない（此等の事に就いては他日書くであらう）。然し乍らかくの如きは我々の想像にすぎない。來世の形態に就いては、

我々は如何なる認識をも得る事は出來ない。只我々は其の條件を道德意識から要請する事が出來るのみである。然し乍ら私が善と福との一致を假定し、從つて必然的に來世を假定するのは、カントの哲學や、自然科學の限界の上に支へられて、初めて生じ得るのではない。自分の道德意識がそれを假定せずにはゐられないのである。從つてカントの哲學や、自然科學の限界が如何に動搖するにせよ、自分の道德意識の本質が變ぜざる限り、其の本質に必須なる此の假定が動搖する事は無い。上來私は此れを假定と云つて來た。私は此れを斷乎として信仰と云ひ得る時の來らん事を衷心から願望する。其れは今後私が此の假定の上に實生活を營む時、其の體驗を重ねるに從つて、其の眞理としての內面的活用(ウイルクング)が、自分をしてかく云ひ得る實力を感ぜしめるやうになるであらう。自分は其れを熱願する。

（一九二三・一一・一五）

# 人間主義と超克主義

我々の精神生活とは生命の超克的努力の過程である。我々が現にあるところの狀態と當にある可き狀態との對立、卽ち現實と理想との對立が存在する事は精神生活の豫件である。我々の精神生活は此處から出發する。精神生活とは現實を理想に一致せしめんとして、念々に現實を超克して行く生命の營みの過程である。併し乍ら理想と現實との對立は如何にして生ずるのであるか。此の對立が豫件であるとすれば、其れは同時に又與件でなければならない。我々の現實は固より我々にとつて與へられたるものである。然らば我々の理想は此與へられたるものに對して、未だ與へられざるものであるか。然り、其れは少くとも現實と同じ意味に於いて我々に與へられたるものではない。其れは未だ與へられざるものであるが故に我々は此れを獲得せんとして努力するのである。併し乍ら理想は又異なれる意味に於いて依然として我々に與へられたるものである事を忘れてはならない。其れは考へ得可きもの、一つの狀態として思ひ浮かべ得るもの、我々に取つて現實たり得可き筈のものとして我々に與へられたるものである。「積極道」の中に書いた如く

生命の内容をなすものは方向を附せられたる可能性の形に於ける與材である。我々の現實は此の方向を附せられたる可能性を帶ひたるものとして、已に理想的要素を具へて居る。則ち當にある可き狀態に到達せんとしつゝある一つの狀態である。此の可能性と方向とも亦我々に取つて與へられたるものである。理想とは此の與へられたる方向に與へられたる可能性を發展せしめたる究極として、我々が思ひ浮べざるを得ないところの狀態である。此の意味に於いて理想も亦現實と同じく我々にとつては與材であり、其れ自身に——其れが到達される事なしに——實在性を持つて居る。此の方向と可能性とを、換言すれば、理想的要素を除外する時、現實とは與へられたる事實でなくして、抽象的概念である。我々の本性が至上善に到達せんとする可能性を與へられて居るならば、此の可能性を認めずして我々の現實と云ふものは何所にも存在しない。我々が如何に醜く、惡しきものであつても、我々の現實は單に醜く、惡しきものではない。我々の現實とは至上善に到達せんとする可能性を帶びたる醜く、惡しきものである。逆に云へば、醜く、惡しき段階に於ける至上善に到達せむるとする可能性である。眞に具象的に我々の現實の事實を考へる時、我々は現實に此の理想的要素を含めなければならない。此の理想的要素を認めざる者は反つて現

實に徹底せざるものであると云はなければならない。現實主義が如何に徹底しても此の意味の理想的要素を否定する事は決して出來ない。現實主義が理想主義を排斥する事の正當なのは、此の可能性の眞に開發したる段階と、未だ開發せざる段階とを精確に辨別せずして、唯だ其の可能性を强調する事に依つて、其れが恰も已でに開發したるかの如く考へて努力を怠る理想主義を排斥する場合のみである。反對に其れが未だ開發せざる故を以て此の可能性其のものを排斥し去らむとする時、かゝる現實主義は不當である。何となれば其れは充分に現實的でないからである。我々は我々にとつて現實なる此の可能性の方向を洞察しなければならない。當に開發すべくして、未だ開發せざる可能性、卽ち我々の現實の構成要素として、現實の中にたゝみ込まれて居るところの理想を承認しなければならない。其れは我々の現實の中に眠れる像である。此の像を呼び醒まして、我々の現實なる醜き、硬き材料なる石を、一つの美しくして生々としたる彫像に完成せしめんとして、念々に努力して行くところに我々の現實の意義がある。理想が到達せられたる時にのみ現實の價値があるのではない。現實は念々に價値がある。それは恰も理想が到達せられたる時にのみ價値があるのではなく、到達せられつゝある念々に價値があるのと同樣である。何んと

なれば生命とは、成長して行く過程の全體であるからである。理想も現實も等しく我々にとつて所與である　造化にとつては其の創造のモチーフと材料とである。其一つをも缺く事は出來ない。故に我々の現實は此の可能性の發展の或る段階として悉く其れ〴〵に價値を持つて居る。併し乍ら其の可能性の發展の度に比例して價値の高下の差別がある。其れ〴〵の段階に於いて善であるが、至上善の段階に達する迄は止る事は出來ない。往相の世界に立つ時（「道心の三つの相に就いて」參照）、善とは至上善の段階のみであつて其れ以外の階段には多少とも惡と醜とを含むで居るからである。故に我々は不斷に現實の狀態を超克しつゝ至上善の狀態まで登攀せむとして努力しなければならない。至上善の世界とは我々にとつて考へ得べき生命の最後の分化發展の狀態である。其時我々の生命は最も豐富に、最も力強く、且つ最も調和したる狀態にあるものとして我々が思ひ浮かべ得る處の一つの計畫、構圖である。故に我々にとつて理想とは一つの試みの下圖の如きものである。併し乍ら其れが如何に下圖であつても我々の人格が最も完全なる狀態に達し得る爲めには、必ずそれに據つて、其通りを實現せざるべからざるが如き或者である。故に理想は、未だ實現せられざるものであつても、我々にとつて動かすべからざる價値を持つて居る。否

むしろ我々が念々に實現し行く現實は、此の理想に依つて、初めて價値あるものとして允許されるのである。其處に動かすべからざる理想主義の根據がある。故に我々が人格の完成を志して精神生活を營む時我々の肆意を以て或る階段の人格を撰びそれを以て安んずる事は出來ない。我々が既に人格の完成せる狀態として或る理想を思ひ浮かべ得る限りは、其の理想に到達せむとして不斷に登攀しなければならない。素より假令理想に到達し得ざるも、人格はそれ〲の段階に於いて其の價値を持ち得、然も其の段階に特殊なる美と味ひを持ち得る。例へば我々が人間らしさ（ヒューメン）と呼ぶこころの人格の或る階段は、充分に我々を惹き着けるに足る美を持ち且つ其の段階でなければ現はれない特殊な味ひを持つて居る。其れは寧ろ我々に最も親しき（ファミリアー）、其の世界にあつて最も「我が家に在る思ひ」のする、溫かき呼吸を感じ、また此のなつかしい地の匂ひのする段階である。我々は其の特殊の味を人間味と呼むで此れを愛する。此の世界に在つては、我々の怒りや、憎みや、嫉妬や、激情や、哀訴や、一言に約せば人間性の缺點も、溫かく受け容れられる。我々は人間としてかくの如き缺點を持つが故に、他人のかくの如き缺點にも同情する事が出來る。侮りをうけて怒る者や、戀慕して嫉妬する者や、悲しみに打たれて哀訴するものを見る時、我々は

其の心持ちを身にしめて同感する事が出來るが故に、此れを裁くよりも此れに愛を感ずるのである。併し乍らニイチエが「人間性は超克せらるべき或るものである」と云つたやうに我々は此の人間性の段階を以て滿足すべきではなく、此れを超克してより高き段階に登攀しなければならない。例へば嫉妬して居る自分の相を淺ましきものとして、又哀訴して居る自分の相を弱きものとして斥け、自分の矜りに堪へ得る丈けの段階に迄登攀すべきである。此處に我々の超克的努力が始まるのである。我々が此の人間性の段階に終始して、より高き段階を欲しいならば、それは自我感情の稀薄なるものである。我々は時代の或る反動的趨勢や、個人の生長の或る閲歴に依つて、特に此の人間性の段階に惹き着けられる時期があるものである。そして其の時期は實に必要である。少くとも此の段階を一度通過しないならば、如何なる高き段階に於いても、貧弱にして狹隘なるものとなるであらう。卽ち超人としては其の洞察と憐憫との對象の缺乏となり、聖人に於いては其の包攝と慈愛との世界の行きわたらぬものとなるであらう。併し我々があまりに長く此の世界に足を留めすぎ、其の味に馴染みすぎるならば、我々の人格は高貴なるものとなる事から妨けられるであらう。我々は人間性の自然を無視する僞善や、地の味ひを解せずして徒らに雲の上

の事のみを說く或る時代の思想の潮流に食滯する時、反動として人間性に無邪氣となり、率直となり、地の味に執着せむとする傾向を生じる。今日の時代を支配して居る現實主義はかくの如き反動の一種の現はれである如く見える。併し乍ら人間性の段階は我々が其れを通してより高き段階に登るべき一つの段階である事を忘れてはならない。それは我々が一度把握して後超克すべき段階である。我々が後に見殘すべき一つの世界である。精神の海を渡らむとする者は多くの港々を經て、彼岸に達しなければならない。我々が船出して、一つの港に碇泊しても、やがては其の港を後ろにして航路を進めなければならない。例へば此處に一人の人があつて、自分の醜さや弱さを隱さずして隣人に打ち開け、或は訴へるとする。其時其人は愛らしく、人間らしく見えるであらう。かくの如き人は又其の人間らしき態度に依つて、恐らくは仲間をつくるであらう。そして其の仲間同志の間に於いては、其の弱さと醜さとは互の同情と親密とを釀し、愛と相互扶助さへも生じるであらう。それは少くとも自己の醜さと弱さとを隱蔽し、防衞する僞善者が虛僞な社交を以て、冷やかに相反目するよりも確かに人間らしいことである。併し乍らかゝる仲間の世界に於いては其處に相互の缺點と弱さとを是認し合ふ卑しさがある。此れを鞭打たぬ姑息がある。

寞の温かき空氣の中には、かのツアラツストラが極力卑しむだ處の「同情」に依つて、相互の醜さ弱とを相殺し、帳消して一層高き世界に向かつて登攀する勇氣を蝕ましむる一種の德を含む議題がある。例へば、かくの如き人間らしき仲間が火鉢を圍んで親しく語り合つたとする。其處で或は女の話や、金の話や、其他樣々の、常に我々の心を捉へて居て然も高尚ではない處の話が、種々と話し交はされる。然もかくの如き世界に於いては、眞面目なる話は「氣障」として排斥せられる。女が欲しいと告白する事は欲しくないやうな面をすることよりは確かに人間らしいであらう。然し自分が女がほしいからと云つて、他人も欲しいだらうと忖度し（假令それが當つて居ても）、其の告白を強ひるが如き、所謂人間らしき態度は卑しい。自分の内なる肉欲を超克せむとして努力して居る時、我々はかくの如く率直に女ほしさを口にする氣にはなれない。然も我々は女がほしくないのではないが故に、相手に對して反抗するわけにもゆかない。若し反抗すればそれは氣障なものとなるであらう。故に我々は苦笑を以て（恐らくは己れ自らに對する）、其の仲間を去るほかはない。かくの如くして人間らしき仲間は我々の超克的努力を阻み、かゝる努力者を孤立せしめる。又自己の價を低くして、矜りを傷つけて、他人の前に自分の弱さと醜さとを露出し

て購ひ得る人間らしさは低卑である。其れは或る温か味と、正直と、愛嬌とを具へて居るけれども、高貴ではない。現代の人々は此の高貴と云ふ言葉に對して、反感を持ちすぎて居る。我々は低卑を離れて高貴を願はれなければならないと云ふ當爲を如何なる時代と場處とを問はず、公々然として主張して差支へない。如何なる時代であつても、我々が低卑に安んじていゝと云ふが如き事は許されない。今日極めて不人望な此の言葉は、精神生活に於いて、苟くも人格主義の立場に立つ限り、決して離す事の出來ない概念である。今日に於いては、自分は寧ろ人間味と云ふ言葉に食滯する。若し人間味とは人間として自然に與へられて居る傾好性を現在の段階に於て是認し、それをして其の附せられたる方向に向つて發展せしめる事を遮斷する事に依つて生ずるものであるならば、かゝる人間味は懶惰若しくは偸安である。しかのみならず、それは又不自然である。我々は其の本性に從つて、自ら高貴を願ふやうに造られて居るものだからである。例へば嫉妬や、憎惡や、哀訴をそれ自身に是認するが如き事は許さるべき筈のものではない。我々は此等のものを人間性の或る段階として是認し乍ら、然も此れを低卑なるものとして否定し、自己の人格の矜りの爲に此れを克服せむと努力しなければならない。選擇の立場に於いて許さるゝ此等の

ものも往相の立場に於いては此れを排斥し棄却しなければならない。かくして自分の後ろに見殘したる段階として、自分には許さずして、他人にはしばらく此れを許して、自己の觀照と慈愛との對象となさなければならない。人は或は他人に對して自分をより高き段階に置いて、觀照し慈愛するが如き事は僣越であると云ふかも知れない。互に仲間と共に手を取つて惱み、泣き、扶助する僚友の思想を悅ぶ或る種の人々は、かくの如き態度を他人に對して取る事も、他人より取らるゝ事も好まないであらう。併し乍ら精神の世界に於いては階級は嚴存する。一つの段階を超克して、より高き段階に登攀したる者は、自らより低き段階にある者に對して同悲よりも慈愛を、共に惱むよりも觀照せむとする立場に立つのは自然且つ當然である。人爲的な經濟的な階級でなく、德に據る階級は排斥すべき何等の根據も存在しない。若し他人から觀照され、慈愛さるゝ事を屑しとしないならば、自ら其の段階を超克することに依つて、其の傷ついた矜りを囘復する事が出來るのである。固より斯の如き矜りの傷つけられたる感じは當然なものであつて、それを厭ふ心は正當である。只自ら低き段階に在り乍ら、此れを超克せむと努力せずして、只慈愛され、觀照される事のみを避忌せんとするは無理である。其れは恰も高き山に登りたる者に麓に在る者

が低く見ゆることが止むを得ない如くに止むを得ない。聖人が我々に對して憐憫の情を催ほしたからと云つて聖人を責める事は出來ない。若し我々の矜りが傷つくならば、聖人の域まで登高する他はない。ダンテの「神曲」や、スエデンボルグの「天國と地獄」に於いて、天國にも階級がある如く、德の高さに從ふ階級は不合理ではない。一度人間性の味と美とを把握して後、此れを超克したる者は、自ら人間らしさに對して觀照と慈愛との心を起さないわけにはゆかない。嫉妬の苦しみを經て平靜に達したる尼は、戀の女を憐れまないわけに行かない。然も己れ自ら此れを超克したのは其の人間性の中に含まるゝ弱さと醜さとを自覺したるが爲であるが故に、人間性の段階にある人々に對する愛は彼等をして此れを超克せしめむとして勸進する行爲となつて現はれないわけにはゆかない。ツアラツストラが愛と同情とを區別し「其の同情を超えて一つの高處を持たざる總ての愛する者は禍ひなるかな。」と云つたやうに、我々は他人と同悲し、若しくは同じ心になるのみならば眞の愛ではない。眞の愛は其の中に同情を超えたる一つの高處を持たねばならない。故に一つの段階を超克したるものは其の段階に殘存せるものを眞に愛せむと欲する時、其れは手を取つて泣き合ふ同情でなく、鞭打ち、勵ます鉗鎚とならねばならない。此の意味に於

いて、自分は彼の仲間若しくは僚友の感じを好まないものである。若し相互の醜さ弱さを互ひに是認し合ひ、他人を裁かざる事と引き換へに、己れを裁かれざることの保證を得て、其處に同情と親和とが生じたのであるならば、かくの如くにして生じたる平和は一つの秘密契約に依る妥協であり、此の妥協の上に成立する仲間は、恰も惡人と惡人とが其の互ひの惡を是認し合ふ事に依つて造るところの結社に似て居る。或ひは相互の秘密を握り合ふ事に依つて、僞物と僞物とが一つに組み合ふ徒黨に似て居る。其れは一種の一致せる利害關係の組合である。我々は自分が罪惡を犯し、其の罪惡を他人に知らるゝ事を怖れる時、かくの如き仲間や、組合に加入せむことを勸誘されるものである。其の間の消息は實に卑しく、且つ恐ろしい。自ら罪を犯す者は他人が犯すことを喜ぶ。其れは仲間が出來るからである。其の仲間に依つて自分の罪惡が非難を免れ、又相手と相殺する事に依つて其れが恰も罪惡ではないかのやうに見えるからである。其處には又人間性の或る哀れむべき弱さもある。誰れか自己の醜き相を鏡に映して見る事を好む者があらう。我々は自分を糊塗し、僞瞞し、或ひは痲痺せしめて、自己正視の苦痛から免れ度くなる。あのストリンドベルヒの「ベリカン」の中に出る母親のやうに、他人も亦自分の如く罪を持つて居る事を知

る事はせめて、自分の心の安息である。かくて罪のおとづれは善のおとづれよりも罪人に取つて慰安である。かくの如くにして我々は自己の醜悪を蔽ひ若くは糊塗せんとする偸安の爲にも仲間を求める。我々は又人間性の段階の美と味ひとをその弱さと醜さとに眼を塞いで、其の儘に是認し、强調せむとする爲にも仲間を求める。其處には最早前者の如く良心の苛責なく、寧ろ一種の道德的興奮に近き熱情を以て、我々の其の弱さと醜さとを辯護せむとするのである。我々が超人的なるものに對して人間的なるものを、キリスト敎的なるものに對して自然的なるものを、リフアインされたるものに對して粗野なるものを、貴族的なるものに對して民衆的なるものを擁護せむとする時、我々は常に或る道義的に近き熱情を持ち、且つ常に類團を形成する。文藝復興や、今日の民衆運動の如きも此れに屬すると云つていゝ。かくの如き熱情ある民衆に對しては、此れに反對する、若しくは之を超越する者の聲は其の耳には響き難い。彼等には自ら內に恃むところの根據があるからである。然し乍ら、我々はかくの如き類團をも亦我々の眞實の登高を妨ぐる仲間の一種として、卑しむことを忘れてはならない。少くとも卑しみ得るに堪へる丈けの冷靜を持たねばならない。此の超越的態度なき者は眞に獨立せる精神生活を營み得ないものである、我々が

精神生活に於いて、最も警戒を要するのは「反動的態度」と「同情」とである。此の兩者は我々の眞理を視る眼を曇らせ歩みを本道より外らして迷惑せしめ、若しくは低回せしめる。共に我々をして主觀的偏局に陷らしめ、客觀的公正を失はしめる。我々は我々に先立つ時代が、又我々の住む時代が如何であるからと云つて、其れに反動して、自分の態度を偏局せしめてはならない。我々に先立つ時代が現實を無視して理想主義に走りすぎたからと云つて、我々の住む時代に理想を無視して現實主義に走りすぎなければならない事はない。我々の住む時代が地に着きすぎて天を忘れて居るからと云つて、自己が地を忘れて天につきすぎねばならない事はない。其處に時代の潮流に對して敏感すぎる者の偏局がある。精神生活者はあまりに潮の干滿に感じ易き河口灣の如く、若しくは外界の氣壓を感じ易き晴雨計の如くであつてはならない。自己が天地の間に絶對的に追究すべきものを追究し、取り容るべきものを、其の正當なる限界に於て、取り容れねばならない。自分一個に託されたる生命、魂を、天地の間に於いて、如何に生かし育てるかと云ふ事が、我々にとつて絶對的に必要なる事であつて、時代と社會とは此の絶對的條件に、正當に影響する權利を有する相對的條件にすぎない。此の意味に於て我々はすべからく時代を超越しなければな

らない。自分は寧ろ其の人の個人的一生の生長の歴史の上に生ずる「時代」の影響によつて規定さるゝ事を、内面的にして根本的なる精神生活者としての態度であると思ふ。例へば、青年時代と壯年若しくは老年時代とに於いて我々の思想が相違するのは、我々が一つの境地を一度把握したる後に非ざれば、他の境地に達する事能はざる根本的約束に基因するものだからである。自分の如きは自然主義流行時代に形而上主義者であり、人道主義の流行時代に人間主義であり、人間主義の流行時代に超克主義者となつて居る。此れは自分に取つては反動ではなく、必然的な動機に依つて、内面的連絡を以つて推移して來たのである。我々が年齢の變化や自分一個の直接の環境の狀態に從ひ、思想に規定を受ける事は、その個人的、心理的な點に於て、内面的根據を以つて居る。併し乍ら社會と時代との影響に依つて動かされ易い事は其の生活が外面的である證據であると云つていゝ。其處には可成りなギャップが存在する。社會や時代は素より我々の環境であるが、其れが我々の個人的生活に生々とした靈魂的な關係を持ち、我々の生活の方向を轉換せしむるが如き決定的動機となり得る力は、我々の戀愛の順逆や、肉身の生死や、愛の得失や等の個人的事情と比して、遙かに薄弱であるのが自然である。我々は精神生活の動機をかくの如き個人

的事情に持たずして、歴史と社會とに持つ者の心理にはそれが如何程眞實であるかに就いて、可成りな疑問を持たざるを得ないものである。素より社會と時代とを自分一個の問題として生々と感じ得る事は實に望むべき事であつて、貶黜すべき何等の理由も存在せざるのみならず、自分の働くインマネントにすぎる者は、其れが生々と感じられない事を自己の缺點として恥ぢなければならない。併し乍ら自己の個人的、心理的體驗に對して純粹でなく、神經鈍き者が、社會と時代との潮流に對して純粹にして鋭敏なる感受性を持つと云ふ事は奇異なる現象である。それは寧ろ在り能はぬ事である。自己の個人的、心理的經驗に鈍感なる者が、其の空疎なる內面を填充せむが爲に、社會と時代との情熱に藉口せむとすることは卑むべきである。況して其處には群衆心理に依る情熱と景氣とが存在するが故に、其れは自己の空疎なる主觀を糊塗するには恰好の材料である。かくの如くして時代と社會との情熱に憑かれたものゝ如く興奮する事は實に寂しい。素より時代と社會との情熱は眞理なき處に起るものではない。併しそれはしばしば極めて一面的であり反動的である。我々は「もつともである」若しくは「無理もない」と云ふが如き立場に終始してはならない。此れ精神生活者が「同情」を警めなければならない所以である。「もつともであ

る」事や「無理もない」事に對する同情は、「併し正しくはない。」と云ふ立場を保留しない時、即ち「此れを超えて一つの高處を持たざる」時、それは一つの姑息である。我々は精神生活者として は、時代と社會とに對して自己の獨立せる足場に立つて、此れを取り容れ、若しくは排斥し得るに堪へる超越的態度を保たなければならない。かくの如き超越的立場が不可能であると云ふのものは、凡ての精神生活が不可能であると云ふに等しい。それは思想の根本約束であつて、若しそれを許さないならば思想の世界は消滅する。何となれば若し初めより必ず一つの定められたる結論に達せざるを得ない如く强いられて居るならば、其處に可能なるはたゞ方法論とプロパガンダとのみであるからである。如何なる立場をも若し否定せむと欲すれば否定し得る自由を約束として初めて思想の世界は成立し得る。此の意味に於て、思想は個人的であり貴族的でなければならない。貴族的とは其の思想の内容が民衆のそれと一致しないといふ事ではない。況して共通の對象を持たないと云ふ事ではない。只民衆のそれと共通すると否とに關はらず、其の獨自の權利と自由とを保留すると云ふにすぎない。「自ら省みて直ければ千萬人と雖も我れ行かん」とする根據を持つ事である。民衆を愛するとは民衆と同ずる事ではない。負ふべきものを負はしめ、醜と弱と

を超克せしめむとする事こそ愛である。例へば暴力を否定せむとする事は民衆が暴力を是認して居る時は無論のこと、此れを是認する事を以て一種の義氣となして居る場合に於いて、思想家のなさゞるべからざる愛、義務である。我々は民衆に對する愛の爲めに「同情」を壓へてかくなさなければならない。例へば我々が電車に乘つて、醉ひたる紳士が車掌を毆打するのを目撃したとする。其の時若し車掌が怒つて其の紳士を毆り返へし、此れを車外に突き飛ばしたとする。其時我々の同情は素より車掌に傾くであらう。若し其の車掌が自ら其れをよい事ではないと思ひ、又車内を騷がした事をすまないと思ひ乍ら、あまりの事に立腹したのであるならば、我々は此れを非難する感情を持たず、寧ろ「いゝ氣味であつた」と思ふであらう。否若し其の車掌があまりに自ら咎めるならば「其の位の事は關はないよ」と云つてやり度くなるだらう。併し其の車掌が其れを當然と思ひ、自らそれを正しいとして主張するならば、我々はそれに反對しないわけには行かないであらう。又それが正しいか否かと問はるゝならば、「正しくはない。」と答へざるを得ないであらう。自分の子供が他人の子供から賣られた喧嘩を買つて、相手を傷け、自分も傷いて歸つた時に、我々はその事情を聽いて腹の底で子供の勇敢をほめて居ても、子供に「喧嘩してもいゝ」と

云ふ事は出來ないであらう。其處に善と正義そのもの丶不可侵の權威がある。而して思想家とは此の善と正義との權威の奉行であり、代辯者としての使命を持つものである。其處に同情の超克が缺くべからざるものとなつて來る。若しその人間的同情のために「他人を毆つてもいゝ」、「喧嘩してもいゝ」と是認するならば、道德の權威は保たれることはできない。我々は正義の奉行としての義しさを掲げたのである。一寸を讓れば一城を讓る。かくの如くして道義は頽廢するのである。正義の旗の高く樹てられたる山の麓にて民衆がその脆弱の裡に褻瀆することはさまで恐るるに足らない。併しその旗を引き下して、山腹に於て民衆がこれに狎れ、弄ぶ事を許す時それは恐るべきことの初まりである。自分は彼の芝居に於て、無頼の徒や、盗賊が、自己の惡事を誇る、いはゆる「タンカを切る」場面に於て、『お釋迦さあでも氣やあつくめい』と云ふのを聞く時不思議な感激に打たれる。彼等は様々な惡事を犯し乍らも、釋迦の尊むべき智慧者である事丈は認めて居るのである。其處には猶正義が支配して居る。様々の罪惡もなほ善の「位」を汚しては居ない。故に我々は彼等が『もう年貢の納め時』などゝ云ふ時憐れみの心を自然に起す事が出來るのである。そして彼等が罪惡を犯したのも其の然るべき原因があつたのであらうと思ひ、彼等も亦

釋迦の愛から漏れては居ない事を思ふて滿足を感ずるのである。併し乍ら我々が正義の旗を引き下ろして汚す民衆を見る時には、假令彼等の中に、盜賊や、無頼の徒とは比較にならぬ程の理由と根據とがあつても、我々は前の場合に於ける如く、自由に同情を働かしめる事が出來ない。安心して愛しかけ、手を握る事が出來ない。其處には一つの重大なる顧慮がある。我々の精神全體を支へる主柱の動搖がある。我々は彼等が正義の旗の不可侵を認めることを條件とせずしては、愛と同情との通路が遮斷されるのを感ずる。協同の基礎が見出されない。何故に民衆は正義の旗を引き下さなければならないのであるか。若し彼等の主張する處が正しいならば此の正義の旗こそ彼等が其の下に集まるべき絶好の場所でなければならない筈である。然も彼等は別の旗を立てんことを欲するのは何故であるか。其れは彼等の正義が神の正義に堪へないからである。換言すればそれは正しくないからである。我々は暴力の行使を正義として押し通さむとする時神を「目の上の瘤」にせねばならなくなる。神が衣食の道に關して、正義として命ずる處は累貧の道である事は疑ひを容れない。我々は此の道を神の正義として是認し、自ら此れに堪へ得ざるが故に暴力革命の道を選ぶと、何故に正直に我々の分限に相當した立場を、自ら標榜することが出來ないので

あるか。神の名に依つて、資本家を討伐する事が出來ないならば、神の憐みを受けて、資本家を討伐すべきである。神をなみして、其の正義の旗を引き下ろし、暴力を正義として通用せしめむとする事は一つの強引である。無理である。此の強引と無理とは時代の潮流に乘り、群衆の力に依つて或る處まで通るかも知れない。然し終局の成功、最後の勝利は不可能である。其の何物かに憑かれたる被催眠者の如き群衆心理は、自分には寧ろ一つの復讐の靈(スピリット)の支配する世界であるやうに見える。即ち彼のソドムとゴモラの驕れる民を懲罰した靈が民衆に乘り移つて、資本家を討つのである如く見える。我々は最後の場合に於いても、かくの如き神の怒りに奉仕するものとして精神を認めるものである場合に限り、民衆と握手する事が出來るのみである。神をなみし、其の律法の神聖を侵して、暴力を是認せむとする民衆は我々と共通點を持つ事が出來ない。其れは神の敵である。從つて其の奉行たる思想家の敵でなければならない。かくして經濟革命は一つの正義の觀念の革命であるからである。それは道德革命であり、純粹に原理上の革命として、思想家にとつて致命的の問題である。かくの如き革命に對しては思想家は自分の立場を明らかにする事は自己の生存權の問題である。若しも人格の獨立と自由との不可侵の原理が他の原理に依つて置

き換へられる事が、かくの如き革命の意義であるならば、我々は思想家としての最後の立場を奪はれるものである。故に我々は必死に抵抗しなければならない。而して人格の獨立と自由との不可侵の原理からは暴力を正義として認めることは不可能である。故に我々人格主義者が思想家である限りは暴力に依る革命を是認する事は不可能である。我々にとつて可能なのはそれを不正と認めて、しかも此れを許すこと、恰も前進の紳士に對する車掌の行爲に於けるが如くなす事の他にはない。然し乍らそれは我々が人間的同情の立脚地に立つ場合の事であつて、其の同情を超克して眞に正しさを負はしめむとする時、かくの如き立場は依然として一つの姑息である。我々は自分に對して暴力に酬ゆるに暴力を以てする立場を許さず、此れを超克せむとして自ら努力すると共に、他人に對してもかくの如き努力を勸進しなければならない。此れは單に暴力の行使に就いての自他に對する超克的努力の例にすぎないが、其他凡ゆる方面に亙つて同樣の超克的努力が營まれなければならない。而して此等は總て自他に對する「同情」との精神的闘ひである。かくてツアラツストラの如く我々の人間性を超克せむとする努力は我々の精神生活の基調となる。我々は、事々物々に當つて、日常に、不斷に、自分に對しても、他人に對しても、「超克せよ、超克せ

よ。」と叫ばなければならない。同情との鬪ひ、羨望と、嫉妬と、肉欲と、愚痴と、凡て卑しく、狹く、弱く、誇りなき事を超克せむと努力しなければならない。人間性の段階に於いては、尤もな、無理のない愛すべき心情も、此處に於いては排斥すべきものとなる。此處に我々の欲するのは高貴であつて、可憐ではない。悲壯であつて哀愁ではない。他人の才能を嫉妬する事は藝術家として無理のない事であつても、死んだ子の年を數へる事は母親として尤もな事であつても、立ち上がる力を失ふことは失戀の人の避け難き事であつても、誤解されて羨しきに倦み、虐待されて怨嗟することは人情の自然であつても、我々は此等を自己の醜弱、卑小として斥け、負ふべきを負ひ、負はしむべきを負はしめ、勇ましく起き上り、捨つべきを捨て、孤獨に堪へ、公けにして、強く、大きく輪を畫きつゝ登高せむと努力しなければならない。此の自我感情の誇りに生き、氣を負うて登高するものはツアラツストラである。かくして寂寥を喜び、民衆を輕蔑して鷲の如く巖角に孤立し、雲雷を其の脚下に眺める高山の嶺や、或ひは眞夏の大野に孤り燃ゆる太陽の如く只管自己の孤獨と誇りとを强調せむとするに到れるものは超人である。ツアラツストラの超人には此の個克主義の反動的なる强調と誇張とがある。其れは民衆との距離を强調し、孤獨を誇張す

る。民衆との距離は止むを得ざるものたるに止まらずして其の趣味となり、孤獨は其の寂寥に奉ずして誇りとなつて居る。其處に貴族主義の民衆主義に對する反動的なる誇張がある。かくの如き誇張は前にも述べた如く、精神生活者の警めなければならない一つの外道である。我々の超克主義が民衆の人間主義と手を分たなければならないのは、我々が民衆を愛しないからではない。我々の孤獨は我々が此れを欲せずして、然も避ける事の出來ない悲哀である。我々は此の別離と孤獨とを悲嘆を以て堪へるのに過ぎない。只其時我々の超克主義は我々の悲嘆の感情をも亦超克せむとして作用するが故に、其の感情はさめ〲とした涙や、弱々しき哀音とならないで、石の如く冷たき沈默となり、潮水の如く靜かなる忍受となり、更らに積極的に孤獨にして快活なる獅子の如き舞踏となるのである。然し乍ら其處には不自然にして偏執せる誇張と強調とが存在するが故に、其の誇張と強調とは更らに正順にして素直なる調和に洗淨められなければならない。卽ち今一度此の反動的超克主義の偏執が超克されなければならない。所謂「三様の變化」に於いて、駱駝は獅子となり、更らに小兒とならなければならない。佛敎に所謂「離着」とは先づ世を離れて法に着き、更らに法に着く事をも離れるに及むで眞に自由となるのである。超人主義の「怒り罵」

はも一度平らかになり、其のこだわりと偏りとは取り去られて素直となり、其の圭角は磨かれて圓満となり、其のあまりに氣を負ひすぎた誇りは、自らなる而も犯すべからざる威嚴として醇化されなければならない。一言に約せば超人は聖人とならなければならない。其處に於いては最早や民衆との距離を特に强調する必要なく、殊更に孤獨を誇る必要もない。何となれば既に民衆と着きすぎる憂ひなく、孤獨に堪へ得ざる恐れなきが故に、其の安全にして捉はれざる境地より自然に民衆に向つて下りゆき、孤獨の山を出でゝ市におもむき、民衆と交ることを素直に悦ぶ事が出來るからである。故に超人に對して反感を感じなければならなかつた民衆も、かくの如き聖人に對しては慰めと勵ましとの伴侶として此れを迎へる事が出來るであらう。何となれば彼等は今や民衆の友であり、仲間であるからである。只異れるは一度民衆より離れて高所に往き、再び還り來つたる民衆である。民衆と伍して民衆を引き上ぐるものは聖人である。聖人が山に隱れて獨善を樂しむ仙人的隱栖から、遂に市に現はれて民衆と伍して民衆を導く生活を選ぶに到るのは彼等が一層完成したからである。所謂「小隱は山にかくれ、大隱は市にかくる」と云ふが如く、又ツアラツストラも其の德と智慧とに飽滿して後、遂に民衆に向つて所謂「沒落」を初めた如く、一

度民衆を離れたる超克主義者は再び民衆に向つて還り來たる時がなければならない。彼の親鸞が自ら愚禿と稱して在俗の中に沒入し、又トルストイの神父セルゲイが修道院から出て民衆の中に沒し去つた如き此れである。かくの如くして初めて眞に民衆の仲間となり、僚友となる事が出來る。かくの如き民衆は最早や只の賤民ではない。それは一度貴族主義を通過し來れる民衆である。神の民である。貴族主義が民衆主義と握手し、調和し得る道は此の道の外にはない。初めより民衆を一歩も離れない民衆主義は、民衆をして賤民として止まらしむる惰情若しくは姑息である。かくの如き民衆として止まるに堪へざる事は自覺せるものとして當然の事である。かくの如き民衆の仲間若しくは僚友より、一度身を脫せむとする事を咎むる者は精神在活者ではない。行者ではない。此の意味に於いての貴族主義には正當なる根據がある。行者は一度民衆を離れて再び還り來たる迄、其の精神的遍歷を許されなければならない。親鸞は在俗に交つても只の凡夫ではない。セルゲイは民衆の間に沒しても只の民衆ではない。民衆主義がかくの如き意味での貴族主義をも許さない時、それは賤民主義である。我々は如何なる意味に於いても醜弱を醜弱として、低卑を低卑として、その儘放置する事は許されない。醜弱と低卑とは必ず超克されなければならな

い。人間は超克せられて超人となり、更らに聖人となり、かくて賤民と神の民とをつなぐ橋梁となつて再び還り來らなければならない。超克とは否定ではない。超克する事によつて包攝するのである。止揚するのである。人間と超人とを超克して聖人となる時我々は人間性の凡ゆる愛すべき、親しむべき味や、地の匂ひを忘れるのではなく、又超人の誇りと高居とを理解しないのではない。此等を把握し、超克して、高き段階に登攀したのである。此れを卒業して自由となつたのである。故に其の心境は人間の心理をも超人の心理をも隅々まで理解し得る。かくの如くして初めて民衆の仲間となり、僚友となつて然も此れに捉はれずして此れを引き揚げる事が出來るのである。故に其れは仲間であると同時に導師である。僚友であると共に豫言者である。民衆はかくの如き導師と豫言者とをも猶且つ其の仲間より排斥せむとするであらうか。其の僚友として受け容れないであらうか。かくの如き者は其の仲間の意に逆うて發言し、若くは必ずしも僚友と共に踊らざるが故に、彼等にとつて愛すべき者とならないかも知れない。少くともそれは民衆の欲する好餌を以て此れを釣る煽動家の如く民衆にとつて快きものとはならないであらう。然しかゝる無理解と孤獨とは素より聖人の欲する處ではなくても、旣に超人の境涯に於いて其の試練を經た

る後であるが故に、彼等を傷ける事は出來ないであらう。彼等は既に其の孤獨と無理解とに依つて傷つけられる恐れなき强き者となつたが故に、民衆に向つて「沒落」したのである。素より我々は超人ではない。猶更ら聖人ではない。而して又只の民衆でもあり得ない者である。然も民衆と手を分つ事の出來ない程民衆を愛して居るものであるならば、我々の取るべき道は超人となり聖人となつて後再び民衆に沒落する事に依つて、眞に民衆の仲間とならむ事を欲して征途の旅に發足する他はない。此れ我々が民衆への愛を正しく生かし得る唯一の道である。彼等と握手し、調和し得る唯一の道である。此の意味に於ける貴族主義をも認め得ない者とは我々は到底共通の立場を見出す事は出來ない。かゝる人々に向つては一種の深き痛ましさを以て別離を告げる外はない。恐らくは我々も亦何處かで再び相ひ會ふであらう。（一九二三・五・一）

# 卑しむべきものに就いて

我々は「憎むべきもの」と「卑しむべきもの」とを感じ別ける事が出來る。もとより此二つとも道德的に罪惡であつて、我々の良心はこれを非難する。此の二つとも我々の靈魂を死なしめるだけの價があつて、其の報いは地獄である。併し乍ら吾々の良心は此の憎む可きものと卑しむ可きものとに對して、別樣の調子を以つて非難する。前者に對して我々の起す非難の感情は憎惡であり、後者に對して起す非難の感情は侮蔑である。前者の甚だしきものに對しては我々は之れを眞二つに斬り裂かん程に欲するに對し、後者の著しきものに對しては、之れを斬る事さへも刀の恥として屑しとせず、吾々は顏を反け唾を吐いて去るのである。此の際我々の良心は前者よりも後者をより深く非難して居る。然も其の罪惡が齎すところの禍ひの結果から云へば、前者は多くの場合後者より甚だしいのである。殺人は詐欺よりもその及ぼす結果は大であり刑法上にも重く量定せられて居る。併し我々は或る殺人よりも或る詐欺に對して之れを道德的により深く非難するのである。我々は後者の場合に於いては、その罪惡の齎した結果の大小の意識から離れて、

純粹にその罪惡を生んだ人格そのものを咎責の對象とする。然もその人格の中に於いて、特にその尊威を構成する本質的部分、卽ち人格の人格たる特異の部分を選むで對象とする。此意味に於いて『卑しむべきもの』は『憎むべきもの』よりもその罪惡の質に於いて重いものといはなければならない。阿部氏も言つて居る樣に、ダンテの神曲の地獄に於いて罪を犯したる死者の靈魂はその罪の重さの度に從つて次第に下層に定められて居るにも關らず、ダンテが是等の靈魂に對して非難する感情は必ずしもその度に從はず、時として上層に定められたる靈魂に對して下層に定められたる靈魂に對するよりも一層烈しき感情を以つて非難して居るのである。例へばその最も著しい例は地獄前界に定められたる卑怯者の靈魂に對して示されたる侮蔑の感情である。卑怯者の靈魂が地獄前界に置かれたのは、その罪惡が地獄の第一獄の刑罰にさへも相當しないからでなければならない。然も地獄の下層に置かれたる靈魂さへも尙是を屑しとせざる矜りを持つて居るのである。

天は其美をそこなはざらん爲に、彼等をおひ出し、深き地獄亦これを收めず、何となれば、惡人も亦彼等よりは、やゝほまれありと信ずればなり。——神曲、地獄、第三曲、四〇——四二

即ち彼等は天使からも地獄の囚人からも共につまはぢきされて居るのである。自分が是れ迄『わるさにも色々ある。質のわるいわるさ、天國に遠いわるさは赦し難い』と度び〱云つたのは、此の卑しむ可きものを指したのである。實際我々は或る殺人者に對してよりも或る虚言者に對して遙かに赦し難い場合があるのである。それはその罪惡の性質が直接人格の本質に關つて居るからである。我々が『人格』を『物』に對して區別するのは、即ち人格が人格である所以を成す特異のものは『敬』の意識である。此の意識を自ら損ふものに對しては、我々は是れを人格と認めて憎惡の感情を起す事に困難を感ずる故に、即ち我々の憎惡にも相當せざるものとして侮蔑するのである。故に我々が侮蔑の感情を持ち得る事は我々が尚多少とも矜りを失はずして持つて居る證據であり、他人から侮蔑された時に是れに反抗し得る事も亦同樣の證據である。我々は他人から憎惡せられるよりも侮蔑せらるゝ時、それをより深き苦痛と感じるのである。『卑しむべきもの』は本來斯くの如き罪惡であるが故に、我々は之れを憎む可きものと對照する時一層その特質を强調し明瞭ならしむる事が出來るのである。其の最も著るしき例は被侮辱者が侮辱者と決鬪して之れを殺した場合である。此處に生じたる殺人と云ふ罪惡は、自分の人格を尊重する心が、その矜

りを誤れる手段によつて支持しようとする所より生じたものである。刑法は單に言葉を以つて相手を侮辱した者よりも、相手を殺した者に對して重く罰する。併し我々の良心は殺人者よりも侮辱者をより深く非難し得る事もあり得る。鹽谷判官と高師直との例の如きこれである。我々がかかる種類の殺人に對して特に同情を寄せるのは、その動機が我々の人格そのものゝ本質と直接に結合して居るからである。併し乍ら自分は此處に卑しむ可きものと憎む可きものとの特質を一般的に比較してその關係を明かにするのが目的ではない。此處には主として我々が卑しむ可きものとして考へる個々の行爲の實例を列擧して、之れを憎む可きものと對照しながら、考へて見たいと思ふのである。それに依つて我々が實際生活に於いて、特別に自から恥ぢなければならない所のもの、從つて最も避けなければならない所のものを、特に拔き出して、今一度新しく我々の目の前に据ゑ著け、我々の反省を刺戟したいのである。自分は特に日常生活的なるもの、然も我々の反省から逃れ易いものを、成る可く輕きものより數へて行きたいと思ふのである。

## 嘘言に就いて

總ての嘘言は卑しい。それは何等かの悪しき目的の爲に吐かるゝもののみならず、嘘言それ自身に於て卑しむべきである。從つて善き目的の爲に吐かるゝ場合と雖も猶それはそれ自身に於ては卑しきものであつて、我々の良心はその場合に於ても曇りと汚れを感じないわけには行かない。

善き目的が嘘言をジャスチイファイすると考へるのは良心の鈍さより來る。その最も極端な例を擧げれば肺病を診斷せられたる者に、その人が病氣の眞相を知つて落膽する事が病氣を增惡せしむるを虞れて、病氣を僞つて告げたとする。此の場合此の嘘言の目的は友達の健康の保持でありその動機は愛である。此の場合に於て嘘言を吐くことは何等良心を汚さゞる正しき行爲として是認せらるべきであらうか。自分はそれが止むを得ざるものであつても、猶依然としてその嘘言は是認する事が出來ないものである。卽ちその人は愛の動機から、善なる目的から惡なる嘘言を敢へて吐かざるを得ざる不幸な窮境に置かれたのである。我々は實際にその友人から自分の顏を直視されて、『本當の事を云つて呉れ給へ。嘘ではあるまいね。』と問ひ返へされた時、良心の痛みなくして『安心したまへ。君は肺病ではない。』と答へる事は出來ない。否むしろその嘘言なる事を、氣取られないやうに、相手の顏を見て、かく敢へて云ふ事は極めて困難である。從つて後に

到つて假りにそれにも拘らずその病氣が增惡した時に、その友人が『僕はむしろ自分の運命の眞相を知つてそれに堪へた方がよかつた。何故本當を云つて吳れなかつた。』と責められる時に我々は依然として謝罪するほかはない。かゝる不調和は人生の限界の一つである。我々は此の嘘言をそれ自身に於て是認せずして、惡しきものたる事を認め、その惡の原因を我々の存在の制約として忍受する道を選ばなければならない。かゝる不調和は淨土にはあるまじき制約である。我々がその制約がふさはしくない程の存在の形式に入り得る事を我々の彼岸の思慕としなければならない。そこに『人間』の『被造物』の信順がある。止むを得ない事と願はしい事とを區別する事は我々の道德意識が宗教意識に通ずる門である。我々が嘘言をそれ自身に於てかく卑しむのは、それが眞理に對する直接の裏切りだからである。眞を求むる我々の人格の本質的要求に對する對蹠的な乖反だからである。他の多くの惡德はそれ等が惡たる所以は其れ等が結局嘘僞に還元さるべきところにあるのであるが、嘘言はそれ自ら直接に嘘僞である。嘘言とは甲を非甲と主張する原本的な誤謬の主張である。我々はその時眞理そのものゝ尊威が直接に、露骨に冒瀆せらるゝ事を感ずる。それは我々の人格の根本要求に矛盾するのである。總て嘘言をそれ自身に於て卑しむ神

經の鈍きことは人格的に卑しきものゝ第一の表徴である。何等の惡しき目的なくして、その場をとりつくらふ僞に、或ひは話の興を添へる僞に、恐らくは不和と氣まづさを好まず、諧謔をよろこぶ人間らしき心から、吐かるゝ嘘言も亦卑しまれなければならない。出來得る限り嘘言を吐くまいとする神經は人格の尊威を保つ第一の資格である。此の神經にぶきものは他に加何なる美點あるも、それは遂に高貴(エーデル)である事は出來ない。故に思想家や藝術家に於て此の神經鈍き事は致命的の缺陷である。嘘言は微妙な狡猾な形をとつて思想家の言說や、態度や、藝術家の作品の中に竄入して居る。所謂『本物』と『贋物』とはこの點に於て別れる。『ほんもの』は尊ばれ、『にせもの』は卑しまれなければならない。それは決して見かけの謙遜や、同情や、外面生活の謹嚴さや又作品の文章の美しさや等に依つて見分けられるものではない。その人物そのものゝ質、自ら匂ふ空氣の純粹さ、その作品の文章の裏を流れて居る誠等に依つて、銳敏な神經が、卽ち自ら嘘僞を厭ふ神經が、その趣味と感覺とを以て感じ分けるのである。作品や文章に於ては眞實は生き、嘘僞は死ぬる事が實に露骨である。嘘言はかくの如くそれ自身に於て卑しきものであるが、それが更らに惡しき目的と動機とを持つ時には特に卑しむべきものとなる。人を陷れんが爲めの中傷や、

他人の友情を離間せしめんが爲の讒言や、自己の利益の爲にする阿諛や、自家廣告の爲にする法螺や、此等が卑しむべきものたる事は云ふまでもない。只特に此處に擧げて置き度いのは、相手の感情を弄んで、此れを享樂せん爲の遊戲的なる嘘言である。此の種の嘘言は相手の人格を弄び物とする點に於て、此れを物として取り扱ふ點に於て、直接に人格そのものに對する冒瀆であるが故に、その動機が利害問題を離れて居るに關はらず、その質の惡しきものである。それは文明的なる慘酷である、殊にそれが戀愛關係に於て行はれる時には、その動機が遊戲的なるこころより發し乍ら、それと最も反對なる人性の最も深き、眞面目なるものを蹂躙し死滅せしむる結果に導くことがある。我々は此の種の遊戲的嘘言に依つて傷つけられたる時、その侮辱の念が最も深刻であるのは當然である。我々は特に此の種の嘘言を愼しまなければならない。素より我々は絶對的に嚴密なる意味に於て、嘘言を吐かない事は至難である。むしろ不可能である。嘘言の中には又美くしき人情より生ずるものがある。又その『嘘から出た誠』もある。義弟の不身持ちをその母の前にかばう姨の嘘言はやさしき味ひを持ち、小春と治兵衛との愛の眞實は嘘から出た誠である。しかし乍ら出來得る限りは嘘言をつくまいとする努力と、嘘言をそれ自身に於て卑しむ神經とは、

高貴を願ふ人格の缺いではならない第一の用意である。

## 告げ口に就いて

告げ口とは私的の會合に於て或る人が第三者に就て語りたる惡口をその會合に列なつた一人が本人に向つて告げることである。これは或る人が實際に語らざりし事を僞つて告げる場合のみ指すのではない。かゝる行爲が卑しむ可きであるのは勿論であるが、たとひ事實語りたる事を本人に向つて告げる場合も亦卑しむ可きものである。吾々は惡口そのものが善いか惡いかの問題より獨立して、告げ口を卑しまねばならない。他人の惡口を言ふ事は、それが、本人に眞に中つて居ると考へて居る場合には、それはたとひ憎む可きものであり得ても、卑しむ可きものではない。併し告げ口は卑しむ可きものである。多くの場合我々は惡口を云ひ易きものである。もとより惡口を云ふ者は、それが本人に若し告げられても構はないだけの覺悟を持つて云ふべきである。併し多くの場合に於いて、その私的の會合に於いて、その惡口が本人に告げられる事を希望せず、又告げられざることを期待する事は自然である。告げ口する者は默々の間に惡口をする者

の此の希望と期待とを承認して置き乍ら、之れを裏切るのである。然も多くの場合無意識的に惡口を言ひ易き空氣を自から作れる責任を別たなければならないものである。恐らくは自分もその惡口に相槌を打ち少くともそれを氣持よく聞いたのである。多くの場合我々は他人の惡口を聞く時に或る毀傷の喜びを感ずる傾向を持つて居るものである。然も本人に對して『誰某は貴君の事を斯く〳〵惡口を言つて居た。』と告げるのである。何か爲めにする所あつて、或は媚びる爲めに爲すのがいけないのは勿論であるが、親切から爲す場合に於いても、告げ口と云ふ形は避けねばならない。最も卑しむ可きは自から意識的に惡口を云はせる空氣を作り、若し惡口を言はなければ、その人が卑怯者であるが如く見えるやうに仕向け、惡口を云はせて置き乍ら、その人と本人との友情を離間せん爲めに、特にその惡口を誇張して本人に告げる場合である。斯くの如き告げ口は惡口よりも遙かに非難に價する。惡口は勿論いゝものではない。殊に他人を傷つけんが爲めに、本人に中らない惡口を揑造する場合に於いて尙更らである。又たとひ當つて居ても、自分の缺點を棚の上にあげて置いて、他人の惡口をつく者は淺ましい。併しそれは告げ口よりは未だましである。惡口者には時として正直な腹の綺麗な者もあり得る。併し告げ口する者には如何な

る場合に於いても、よき心情の持ち主は存在しないと云つていゝ。好んで屢々告げ口をなす人格は卑しむ可き人格である。それは特に惡口者からその事を秘密にするやうに賴まれた場合は尙更である。此の場合の告げ口者は又特に義氣に乏しき者として卑しむ可きである。我々が若し此の告げ口を惡しき手段に利用するならば、人と人との關係は常に警戒を要するものとなり、その交りの幸福は失はれ、友情は常に脅かされるであらう。從つて又その告げ口者を卑しみ得ずして、告げ口を取り上げる者は亦その人格の高貴の德に於いて缺けたるものと云はなければならない。

## 或る種の謙遜に就いて

謙遜は美德である。自から反省する心強き者が、自己の現實を直視するに堪へる勇氣と公明とを持ち、且つその頭腦銳く、然もその抱いて居る理想が高い時には我々は自から謙遜とならざるを得ない。かくて我々は自己を懷うち精進の念を失はず、次第に高まつて行く事が出來るのである。此の種の謙遜は自己が神に對する謙遜であつて如何なる場合でも美しい。併し謙遜には又人

に對する種類のものがあり、自己以外の他人と對立せしめて比較する事に依つて生ずる謙遜がある。此の場合に於いても、遜謙は亦美德であり得る。蓋し我々は自己に對するが如き嚴酷さを以つて、他人を裁く事が出來ない。第一に自己の眞相を自己が知るが如くに、他人の眞相を知る事が出來ないからである。第二に自己を愛するが如く他人を愛して居ないからである。第三に裁く權利が我々にないからである。故に神に對して謙遜なる者、從つて自己の現實の醜さを知る者が他人に對する時其處に特別の事情がない限り、他人を自己より美しき者と考へるのが自然である。我々が其本性上、出來得るならば、醜よりも美が存在して居る事を願ふ者である限り、現實の相の不明なる他人に對しては、其の美點を見出さうとする筈である。然も充分に愛せざる者を責むる事は心苦しく、且つ自分が裁く權利を持つて居ないと感ずる時に、我々は自から他人に對して謙遜となる筈である。かゝる謙遜は自然であつて美しい。併し乍ら他人に對する謙遜の場合には又卑しむ可き種類のものもある事を忘れてはならない。第一に自己が醜き故に他人も亦醜きものでなければならないと推測して、其の承認を、從つて自己と同じ謙遜を、他人に強ひる謙遜は卑しい。此の場合に於いては、自己の謙遜が止むを得ざる承認であつて、出來得るならば自分が美しき者

であることを願ひ從つて他人も亦美しき者であらん事を願ひ乍ら、然も自から醜くして自然に謙遜にならざるを得ないといふその自然さと矛盾して居る。かゝる自然なる謙遜に於いては、自己の醜きを知る事は依然として他人の美を願ふことゝ矛盾しない筈である。我々は自他共に美しき者である事を願ふのであるが、只自己の醜さを認めざるを得ないと云ふに過ぎない。自己が醜きが故に他人が美しくある事を願ふ事が出來ないのは卑しい。然も此の謙遜の强制が自己の醜さと他人の醜さとを承認して相殺せしめんとする意識を持つ時には特に卑しい。もとより他人が其の醜さを露出し、我々が之れを認めざるを得ないにも關らず、高慢に處する時に、我々が片腹痛く思ふのは自然である。併し其の爲めに自分が謙遜でなければならない理由は少しも減じない。我々が謙遜でなければならないのは他人よりも醜いからではなく、神よりも醜いからである。謙遜の眞の根據は俺く迄も神に對する謙遜になければならない。他人に對する謙遜の場合は他人が自分より美しい時に、一層自分の醜さを感ずる積極的の場合に於いては自然であつて美しいが、他人が自分より醜き時に自分が美しき者かの如くに感じて他人に謙遜を强ひる消極的の場合は卑しい、何故なれば、それは我々の謙遜を生みたる心、卽ち我々が眞に美しき者たらんと願ふ心と矛盾

するからである。他人に對して眞に謙遜なる者の、其の謙遜を美しからしめるものは、若し他人が自から恃む所あつて誇つて居るならば、それを祝福する心でなければならない。もとより其の誇りが其の人に相當して居ない事を認識せざるを得ない場合がある事も止むを得ない。それは恰も黑き鳥が如何に虛心に眺めても、或は白からん事を欲して眺めても依然として黑く見ゆるが如くであつて、止むを得ないが、自己が黑き故に他人の黑きを强ひて穿鑿してこれを承認せしめんとするが如きは、本來謙遜の德の動機と一致せざるものであつて、卑吝である。殊に他人の持つて居る人間的な矜りに對して、特にそれを高慢として目立たしめんが爲めに、故意に自己を謙遜なる立場に置く事は卑しむ可きである。蓋し正しき謙遜と正しき矜持とは共に我々が高貴たらんと願ふ心より生れるものであつて、それは一つの楯の兩面の如く別つべからざるものである。我々が謙遜であり乍らも亦、誇りを持たざるを得ないのは實に自然である。若し我々が何等の誇りをも持ち得ない者であるならば、謙遜とは畢竟自棄若しくは卑屈に過ぎない。懶惰に過ぎない。故に他人が或る矜持を示して居る時に、それが人間的に同情すべき場合である事も亦あり得る。必ずしもその人が不謙遜でなく、寧ろ謙遜であり乍ら、否寧ろ眞の謙遜なる心の宿る程高貴なる理想

を抱いて居る爲めに、或る事情の下に、其の同じ心が矜持となつて現れて居る場合もあり得る。然もかゝる矜持は云ふ迄もなく、その人の理想に照らす時、もとより云ふに足りないものであるが故に、一撃の下に押し崩される筈のものである。その人の理想が高く、元來の謙遜な人であるならば、尙更その弱點は無防禦である。此の弱點を知り乍ら、より謙遜な地位に自分を置いて、その矜持を高慢として目立たしめ、その人をして赤面して立場を失はしめるが如き事は最も卑しむ可きである。斯くの如きは又僞善であり、心なき業である。我々は斯かる場合に於いては、寧ろその謙遜よりもはるかに矜持を愛するものである。衆目の前にかゝる謙遜がかゝる矜持よりも美德として迎へられるのは歎ず可きである。此處に甲はよく自から誇るに關らず、それはすつきりとして厭味なく、乙は常に自から遜るにも關らず、きざであり厭味であると云ふが如きは我々の往々目擊する所である。かゝる場合甲の誇りは乙の謙遜よりも心情的に純であることが多い。我々の謙遜は特に是等の厭味を伴ひ勝ちな德である事を忘れてはならない。不純な謙遜程臭氣ある、高貴の德に反するものは少ない。無邪氣に誇る者には其處に人間的な美と天眞さが現れるけれども、不純に謙遜なる者には一種特別な卑しさが現れる。故に更らに一般的に云へば矜持に伴はれ

ざる謙遜は卑しむ可きである。他人から非難された時に、自ら省みてその非難が當つて居る事を認められない時、心から是れに服する事が出來ないにも關らず、たゞ『自己の不德である』と云つて、只管謙遜するが如きも是れである。もとより心から斯く感じられる場合は別であるのは云ふ迄もないが、自己の衷なる矜りは是れに服して居ないにも關らず、たゞ總べてを自己の非として、ひたすら謙遜し、謝罪するのは醜である。それは自己に不忠實であり、眞理に不信であり、人格の尊嚴を傷つける。然もその謙遜に或る不純なる意識が伴つて居る場合は尙更醜である。例へば我々が他人から非難されて、ひたすら謙遜する場合は茶目にその非難者よりも自己を有德であるかの如く印象せしめるであらう。殊にその非難が當つて居る點が多く、之れを辯護することは自己の不利益となる時に、事實を明瞭にする事を避けるが爲めに卽ちその非難の當然な部分と不當な部分とを曖昧にして、ひたすら謙遜する事に依つて、その當然の部分をも、非難者の過失であつたかの如くに印象せしめんとする事も亦あり得るであらう。かゝる謙遜は最も卑しむ可きである。自分は寧ろ自己の服し難きは飽く迄も辯護し、事實を明らかにし、自己の人格の尊嚴を護る道を尊しとする。もとより自己の不德は不德として飽く迄も正直に認めなければならない。併

し吾々の過失や不德にも亦その伴つて來たる動機、及びその既に犯されたる不德や過失に對する淨めこ、償ひこの態度に於いて、その人の人格の價値は一層はつきりこ現れる事もあり得る。況してそれ等の過失や、不德に對する非難が初めより當つて居ない場合に、尙且つたゞ自己の不德こして謙遜し、謝罪するが如きは卑しむ可きである。最も卑しむ可きは最早や自己に對して何等の誇りをも持たない謙遜――こいふよりも自棄である。幇間や、奴隷や、或る種の藝人や等は是れである。自分は眞宗の或る種の人々の如く自己を徹頭徹尾惡人こしてその靈魂の中に聖靈或ひは善に對する何等の傾向を有せざるものこなす者をも此の類に數へたい。斯くの如きは高貴の德こ最も矛盾せるものである。併し是等は謙遜こ云ふよりも自棄若しくは自瀆こ云ふ可きであつて、謙遜の概念から寧ろ除外して、後に議るを適當するであらう。

## 裏ぎりに就て

總べての裏切りは卑しむ可きものである。裏切りこは他人の信に對して自己が責任があり乍ら、自ら止むを得ざる事情なくして、その信に反する行爲をなす事である。此處に止むを得ざる事情

といふのは、不可抗力及びより深き道徳的理由を指すのである。例へば總べての破約は自己に責任がある相手の信に反する行爲であるが、それが自然の不可抗力や或は約束の内容が不合理であつたために、止むを得ず實行不可能となつた場合は別としなければならないからである。其他の場合に於いては、總べての破約は裏切りの一種である。裏切りが卑しむ可きものとなる理由はそれが特に他人の自己の人格に對する尊重を自から傷つけるものとして、畢竟自己の人格の尊嚴を傷つけるものである上に、更に又一般に人格そのものゝ尊嚴を傷つけるからである。卽ち此の世界に於いて、人格は信用さる可きものであるとの觀念を損ふからである。既に信用と云ふ對人關係の成立し得て居る事は人格の尊嚴を豫想するものであつて、それ自身に祝福さる可き一つの事象である。我々は裏切りに依つて、他人を傷つけ、自己を瀆すのみならず、又此の有難き事象を滅すのである。此處に二人の盜人があつて、共に窃盜し一人が捕へられたとする。その時若しその盜人が仲間を賣るならば、それは仲間の信を裏切つた者であつて、その窃盜それ自身よりも遙かに卑しむ可き行爲である。更らに卑しむ可きは、その仲間を賣る事に依つて、その者の刑罰を免ずる事を餌として犯罪者を揚げんとするが如き行爲である。裏切りは其の相手の自己に對する

信用を、始めより裏切らんとする意志を以つて贏ち得たる時に於いて一層卑しむ可きである。例へば男子が初めより、弄びたる後棄てる事を意識し乍ら、結婚な約束して女子を誘惑するが如きである。又探偵や、間諜や、所謂犬の如きも亦是れに屬する。是等はたとひ其の目的が善なる場合に於いても、そして相手が惡人である場合に於ても、相手をして信用せしめ、初めより裏切る事を意識して爲す裏切りであるが故に甚だ卑しむ可きである。自ら此等の者となる事も、又此等の者を使用することも共に卑しむべきである。從つて此等の者を使用する總ての陰謀的政治や、戰術や、警察は卑しむべきである。賣國奴の如きも此の種のものに屬する者であるが、裏切りはその相手と及びその目的とが、『公』なものである場合よりも、『私』である場合に於て、特にその個人的なる關係が人倫の最も密にして、且つ本來信の上に立脚するものである場合に於て、特に卑しむべきものとなる。その師を裏切つた不信の弟子ユダが特に輕蔑されるのはその爲である。その君を裏切つた不忠の臣九太夫が特に卑しまるゝのも其爲である。師弟、君臣と云ふ人倫の關係は、總ての人倫の關係の中その本來の性質上最も信を要求するものであるからである。我々は死屍に對して特別な寛大の念を有する東洋の傳統の中に育ち乍らも、あの忠臣藏の七段目に於て、

である。是れを初めより勝敗の數既に定れる弱者若しくは少數者に、正義の爲めに味方する者と比べる時、その人格の尊卑は思ひ半ばに過ぎるであらう。自分は又自分が稱讃すべきと信ずる者若しくは非難すべきと信ずるものを他人の思はくをはゞかつて、敢へて稱讃若くは非難し得ざる者、例へば文壇の或る種の批評家の如きをも此の種の卑怯者の中に數へたい。總べて負ふべきものを負はざる者は卑怯である。自己の過失や、罪惡の責任を廻避するものは卑怯である。殊に自己の罪惡が自己にも他人にも既に明白なるにも關はらず、たゞ證據なきが故にのみ、之れを非認する者は最も卑しむべきである。我々はその者が罪惡を犯せる事が火を睹るより瞭らなるにも關らず、たゞ證據なきが故にその人を責める事が出來ない。若し責めればその人は自己の良心の聲を無視して、他人に汚名を負はしむるものとして、逆捩ぢを喰はしめるのである。かゝる卑怯者は卑しき者の中にても最も卑しきものゝ一である。又反對に他人がその罪惡を懺悔した時に、それを利用する者も亦最も卑しむべきものゝ一である。又相手の不正を義しく憎み得ず、その現在の苦しみを憐れむ餘り、或ひはやがて起るべき相手の苦痛をいたはるあまり、此れに正しさを負はしむるに堪へない『同情』をも亦卑しむ。此の種の同情は一種の卑怯であつて、彼のツアラツス

トラの最も卑しんだものゝ一つである。此等は總て闘ふべき時に闘はざる卑怯である。ダンテはその地獄の旅を初める首途に於て、その旅程の艱難に對する覺悟と共にその目撃すべき囚人の不幸に對する同情に對して又決心をした。卑怯とは總て性格の弱さである。自己の利害の爲のみならず、相手に對する憐憫や、同情や、好々爺的人情や等との闘ひに於て、弱きことも亦卑怯である。此の種の卑怯は特に慈愛深き者に於て誘惑となる。涙脆く、情實に捉はれ易く、自己の正善と信ずる事を決行し得ずして、相手をして不正なる、若しくは低卑なる立場より離れて、正しきに就き高きに登らしむる勇氣なき事は、畢竟人格の權威なき處に起因する。相手をして負ふべきものを負はしむるに堪へざる總ての人間的なる同情は、人格の權威よりも目前の感傷を重んずるものであるが故に卑しむべきである。從つて拒絶すべき事を拒絶し得ざる事も、要求すべき事を要求し得ざる事も共に卑怯である。我々は惡魔を拒絶し得ざる場合のみならず、善魔を拒絶し得ざる場合も亦卑怯である。而して後者は前者よりも我々にとつて一層深き闘ひを要する。我々は權力を以て脅す者を拒絶し得ても、涙を以て哀願する者を拒絶する事は難い。しかも我々が道の上に立つて嚴粛なる時、我々は後の者をも拒絶しなければならない。故に惡魔がすぐれたる求道者

を誘惑せんとする時は常に善魔の形をとる。傳說に云ふ、日蓮が身延山にその聖地を選ばんとする時、惡魔は老いたる親の形を現じてその恩愛と窮狀とを訴へて、孝心深き日蓮を哀願を以て退轉せしめんとした如き此れである。威を以て嚇し、利を以て誘ふ事能はざる者に對して、淚を以て訴へる事は最も有利なる手段である。其の最も狡猾なるは、相手の義氣を見込むで、哀願する事である。抑々義氣とは卑怯の反對である。故に義氣あるものは哀願されたる事を拒絕する事を屑しとしない。殊にそれが自己の利害を犠牲にする事を要求する場合に於て、猶更らである。故に假令依賴されたる內容が惡なる場合と雖も、自己の利害を恐るゝ卑怯者たらんことを避けんが爲に、敢へて此れを引き受ける。かくの如き心理を利用する者は最も卑しむべきであるが、此れを拒絕する動機が自己の利害を恐るゝ爲でなくして、その內容が善でない爲であるにも關はらず、卑怯者と思はるゝことを恐れて、敢へて拒絕し得ざる事は又卑怯である。反對にその動機が利害を恐るゝ爲であり乍ら、その拒絕の理由を內容の惡に藉るものも亦卑怯である。併し乍らかの俠客が弱きを助けて强きを挫き、俠氣を以つて惡しき權力に對して自己の利害を犠牲にして、危險を賭して戰ひたるが如きは、勇氣ある者と云はなければならない。その反對に自己の權力を恃み、

弱者に對して暴威を逞しくする事は卑怯である、最も卑しむ可きは虎の威を借る狐の如く、自己が無力なるにも關らず、他人の權力を傘に着て、始めより殆ど抵抗力なき弱者に對して慘酷に振舞ふ事である。總べて上に媚びて、下に傲なる或る種の官吏の如きも之れに屬する。

又自己の生命の慾望を主張する事に勇氣なき者も亦卑怯である。他人に嫉まれる事を恐れ、他人に負ふべき苦しみを負はしめるに堪へ得ず、自己の光輝と幸福とを餘りに眩ぶしがつて、自我の成長と發展とを躊躇する者も亦卑怯である。此の種の卑怯には人間らしき、美しさを伴ふて居る事は事實であるが、其の爲めに我々は此の種の卑怯を見逃してはならない。況してそれを美德と考へてはならない。此の種の性格の弱さは人格の偉威の爲めに、自我の生長の爲めに必ず克服せられざるべからざるものである。自我の生長は我々が神と自己とに負ふて居る義務である。自我の慾望はそれが正しきものである限り、飽く迄も積極的に解放要求されなければならない。他人が病氣なるが故に關らず、他人が醜き故に自己の美を磨かず、他人が才能なきが故に自己の才能を發揮する事を遠慮するが如きは、たゞにその人の心臟が弱い爲めばかりでなく、又自己の人格に對する尊重の念の缺乏せる者であつて、又卑怯であるといはなければならない。

# 或る種の贅澤に就いて

常識が普通に贅澤と呼ぶところのものにも種々の差別がある。贅澤とは一般の人よりもより豐富なる物質的消費をさすのであるならば、それは種類の如何を問はず、社會主義的見地からの不公平、或ひは基督教的立場からの愛の不足に歸せしめる事が出來ると云ふ點に於て、一種の罪惡である。併しそれはその事自身に於ては惡なる動機を含むでゐるものではない。しばらく個人的、心理的立脚地より考へて見れば、我々が自分の生活の欲望を出來得る限り解放追求せむとする時、その要件たる物質を出來る限り多く必要として來る事は自然である。殊に我々の精神生活を盛り又生かす材料として物質を要求して來る事は當然である。我々の生活欲望の規模が大であり、精神生活の豐富さと洗錬さとの度が大である丈け、それを盛り、生かすための材料は豐富であり、且つ洗錬されたものである事を要する。此の意味に於て若し或る個人が一般の人よりも生活欲望の規模が大であり、その精神生活が豐富で且つ洗錬されてゐるならば、卽ちその人の人格が衆にすぐれてゐるならば、一般の人よりもより多くの物質の消費を必要としてくるのは當然である。

此の意味の贅澤と雖も社會主義的或ひは基督教的立場からの批判を免れる事は出來ない。けれどもそれはそれ自身に於ては、即ち他との關係以外に於ては、悪しきものではなく、まして卑しむべきものではない。寧ろ地上の我々の生活があまりに物質的に束縛せられたるものである事を嘆ずべきである。實際此の種の贅澤に於ては、當事者は常に物質的過剩の意識の中に住んで居るところではなく、寧ろ常に甚だしき物質缺乏の意識の中に住んで居るのである。しかも一般の人から贅澤として非難される時に彼れは二重の苦痛を感じなければならない。例へば一人の趣味のすぐれた婦人があるとする。彼女がしばらく他との關係及び物質的束縛を度外視して考へる時、自分を美しく飾り度いと願ふのは、それ自身に於て悪しき事でない許りでなく、むしろ願はなければならない事である。故に彼女が自分の個性の美を出來得る限り生かすために必要な衣裳や、裝身具を心に描き、此れを獲たいと願ふのは當然である。自分は此の事は天國に於ても許されなければならない事であると信じる。しかし乍ら實際に彼女が撰ぶ事の出來る範圍は自分が理想とする所の物質約範圍より比較にならぬ程狹く、自分が獲得し得る限界は猶更ら遙かに狹い。かくて彼女は自分の理想に比しては比較にならない程貧弱にして不適當なる衣裳と裝身具とを以て、せめ

て自分を飾つてゐるのである。彼女の心は不滿と缺乏とに滿ちて居る。然も一般の更らに物質的缺乏を告げて居る人々からは此れを贅澤として非難されるのである。我々は此の場合それがどの點に於て非難に價するかを明瞭に辨別しなければならない。非難に價するのは彼女が自分を飾らむとする欲望ではなく、その爲に必要な物質を望むとする意志でもなく、彼女の實際に獲たる物質の量と質そのものでもない。それ等はむしろ善である。當然であり、氣の毒である。非難に價するのは彼女がそれを得る爲になさねばならない、他人への愛と奉仕との懈怠、もしくは積極的に他人に負はしむる勞苦にある。即ち他との關係に於て、惡となるのである。例へば自分が妹を贅澤であると云ふ故を以て非難する時に、彼女はそれが自ら感じて居る意識に對してあまりに相反である爲に、不思議な表情をする。彼女は常に物質的缺乏を感じ、自分が現在飾つて居るところの衣裳や裝身具は自分の趣味に適せざるものであつて、それを身につけて人の中に出る事を、殊に趣味のすぐれた人の前に出る事を恥ぢてゐるのである。それを自分が氣に入つて身につけてゐるのであると思はれる事を、それに依つて自分の趣味を測られる事を堪へ難い苦痛と思つて居るのである。しかも他人からも、兄からも贅澤であると非難される時、彼女が意外に感じる心理は肯

くことが出來る。それは彼女の得てゐる物質の量と質とに依るのでなく、それ丈けの物質さへ他人の勞苦を犧牲にせずしては得られない程我々の生活が物質的に束縛されてゐる處から生じる關係的な不德である。此の意味に於てはそれ自身非難に價する贅澤は物質の量及び質に依るのではなく、如何なる精神を以て、その物質の量と質とを要求するかの點になければならない。その精神が正しい時本質的に非難さるべき贅澤と云ふものは存在しない計りでなく、其處に存在するものは缺乏の意識のみであつて贅澤の意識ではない。此の意味に於ては贅澤と云ふものは何處にも存在しないと云つていゝ。又必ずしも或る精神生活の理想を盛る爲に必要なる物質でなくても、我々の無邪氣なる生活欲望を生かす爲の材料としての物質を如何に豐富に且つ選擇して求めても、それ自身に於て罪惡ではない。例へば子供がその遊戲に必要な玩具その他の物質を要求するが如く、我々が眞に無邪氣に我々の「試み」や「遊び」をなさむが爲に必要なる物質を求むる事もそれ自身に於ては非難に價しない。バベルの塔を築かむとする試みがもし無邪氣な試みであるならば、それが如何に多くの物質的材料を要求しても、それ自身に於て非難に價しない。常識が一般に贅澤として非難するものゝ中にはかくの如き精神生活を盛る爲の物質的材料及び無邪氣なる生活

欲望を生かす爲の物質的材料を豐富に且つ選擇して獲得使用する事を意味して居るものも多いことを知らなければならない。併し乍ら此等はそれ自身に於ては善なるもの、我々の生活内容そのものであつて、非難に價しないのであるが、只他との關係に於て經濟的に罪惡となるのである、凡そ經濟的罪惡は凡ゆる罪惡の中にてその他人の不幸を生み出す結果が大であるにも拘はらず、最も本質的に輕きものである。我々は結果の大小を以て罪惡そのもの丶質を計つてはならない。此の種の贅澤は實に同情すべき、少くとも許し易き罪惡である。此の種の贅澤に對して裁く心のあまりに鋭敏である者を自分は寧ろ寄であるとして卑しむ。かゝる人にはそれを裁く原因に嫉妬や、羨望や、其他の、贅澤よりも一層低卑なる動機を含むのが常であるからである。併し乍ら贅澤には此の種のもの許りではなく、それ自身に於て非難さるべき贅澤がある。それは非難さるべき精神内容を生かす爲の物質的材料を豐富に且つ選擇して獲得使用せんとする贅澤である。即ちそれに依つて眞價なきものが自己の價値を他人に印象せしめむとする虛榮心や、下賤にして醜惡なる欲望を滿足せしめんがため、或ひは物質を最もよく生かさんとする意志を缺いだ浪費より生ずる贅澤はそれ自身に非難に價する。此の種の贅澤こそ我々が最も正當に、從つて最も峻嚴に擯斥す

べきものである。彼の所謂成金がその自己の功績に依らざる偶然に依つて獲得したら、或ひは落ち込んで來たる富を以て、出來得る限り自己の下賤なる趣味と醜惡なる欲望とを滿足せしめんが爲に、如何にも露骨にあくどく、出來得る限りの物質的材料を使用し且つ物質に伴ふ權力に依つて自己の人格の無價値を掩うて價値あるものの如く無理强ひに印象せしめんとする無智と圖々しさとは擯斥すべきである。況して此の種の贅澤には一層本質的な罪惡、即ち他人の人格を物として取り扱ひ、物的價値を以て人格價値を蹂躙する事を伴ふのを常とするに於て猶更である。彼等が傲然と振舞ひ、すべての價値を金に換算する事が出來るかの如くに僭し、如何なる人格も利を以て誘ひ彻伏せしめ得るかの如く思ひ上がるのを見る時、誰れか輕蔑と反感とを感じないでゐられよう。それは彼等の占有する過剩な物質が他の民衆の缺乏の原因となると云ふ經濟的原因のみで非難に價するのではない。それ以上の本質的非難に價する。我々は彼の聖德太子の如き天輪聖王や、堯舜やダビデの如き明君が、如何に壯麗な宮殿の中に住んで居ても、これを本質的には非難しない。ロダンやゲーテの如き天才の趣味生活の所謂贅澤は勿論、玄宗や文左衛門の如き帝王らしき豪奢や、長者らしき風流や、更らにクレオパトラや楊貴妃の如き美人らしき驕奢や、更らに

下つては俠客や、若旦那や町娘の伊達と粋より生ずる物質的撰り好みや、職人氣質より生ずる凝り性の乙と云ふが如き趣味に對しても、それ等が如何に物質的材料の豐富と選擇とを要求しても、其處に盛りこまれ、生かされて居るこころの精神内容が價値を持つてゐる時には本質的に此れを非難しない。出來得る限りは寛大に、鷹揚に、大目に見のがすこそ一種の高貴の德であつて反對に吝臭く衒學的に詮議立てして、非難する心こそ寧ろ陋吝であると云はなければならない。けれども其處に何等の精神的價値が生かされないのみならず、下劣な、無作法な欲望が露骨に我々の認識を强制するが如くに現はれて居る贅澤は卑まないわけにゆかない。併し乍ら此れはまだ贅澤の最も賤しむべき種類のものではない。最も卑しむべき贅澤は、それ丈けの大なる規模も抱負もなく、物質的に貧弱であり乍ら、併も心中に於ては成金的贅澤を夢見て居る處の人格的の賤民が、平生は趣味あるものゝ所謂贅澤をも鵜の目して非難しておき乍ら、やゝ裕福となるや、その云ふに足らざる程の自己の裕福振りを他人に示さむ爲に、殊に自分より貧窮なるものにこれを誇らんが爲に爲す處の贅澤である。自分の知つて居る或る小官吏が或る會社に轉職して小金を貯め、やゝ「まはり」がよくなつた時、夫婦揃つて大島の羽織を着て、その羽織の裏を故意にめく

つて見せ、又わざと車を連ねて貧しく暮らしてゐる郷黨の小學教師の家を訪問し、その贅澤振りを見せつけたのを知つて居る。併も一方俥夫の賃金を苛酷に値切るが如きはその卑しさに於て成金の贅澤の比ではない氣がする。豐かならざる者が贅澤をなさんと欲して種々な無理を企て、あせつて居る姿程淺ましいものは少い。斯くの如くならば節約して暮し乍ら、心に餘裕ある者の方が如何に貴いか知れない。人格の品位を維持するに必要なる心の餘裕を保たむための節約は愛のための節約と共に實に貴い。かゝる贅澤者はかゝる節約者のために却つて憐憫せられるのである。かくの如き種類の贅澤者は心中に「美」に對する感覺を持つて居ないものであるが故に、彼等が美を求めるがために誤つて贅澤となれる人を非難する資格はないと云はなければならない。かくの如き種類の非難者が如何に世間に多いかを知らなければならない。贅澤の非難者が非難さるゝ贅澤者よりその心情に於てより卑しく、彼等の非難は只贅澤をなし得ざるがために生ずるに過ぎない場合が如何に多いかを思はなければならない。他人の贅澤を非難する資格あるものは己れが贅澤をなし得る境遇となつた時に、贅澤を爲さゞるものでなければならない。眞の意味の聖貧の人のみこの資格を持ち得る。しかも聖貧の人は自から貧しく暮し乍ら他人の贅澤を嚴しく裁

かないのを常とする。その嫉妬や、羨望や、樂欲より淨められたる心は、自ら囚縛せらるゝ處なくして衆生に對し得るが故に、その凡ゆる多樣なる生活の相は觀照と憐愍の對象となつて映じるのである。聖人が帝王や、長者や、女人や在俗の凡ゆる者と愛を以て結緣し得て併も此等から自己の誇りを傷けずして喜捨をうける事が出來たのはその爲めである。自分がかく云ふのは素より貪澤を正しきものとして肯定するのではない。凡ゆる貪澤は盡く罪過である。只その罪過にもそれが罪過である所以をなす原因と、その罪過の重さの度合とは多樣である。そしてその原因と重さの如何に關はらず、これを非難すると云ふ一つの行爲は別の原理に依つて評價されなければならないと云ふのである。

貪澤が卑しむべきものとなる特別の場合はそれが吝嗇と結合して現はれる場合である。貪澤はそれが物質に對する無頓着と結合して居る場合には無欲の一つの現はれとして或る無邪氣さ、若しくは淨さをさへ示す事がある。此れに反して物質に對する意識的なる執着と結合して居る場合にはその貪澤を實に卑しきものとなすものである。例へば一人の貴婦人があつて彼女は其服裝や、調度や、總てそれが自己に屬するもの、就中自己の虛榮心の滿足に役立つものには出來得る限り

贅澤であり乍ら、他人に對しては、殊に召使や俥夫や等の身分低き者に對して著るしく物惜しみする場合の如きである。此の二つの相反する贅澤と吝嗇との結合は一つの卑しき心の二つの異なりたる現はれ方にすぎない。所謂贅澤なる人にはかゝる吝嗇なる人が思ひの外多いものである。眞の慈善家は盡く質素な人である。身分不相應な贅澤はそれが他の方面の吝嗇と結合し、且つ不釣合な趣味を作ふて居る時には實に卑しむべきものとなる。自分に相應しき服裝をして居れば、充分に我々の愛を惹くに價する美くしき女が、只不釣合に贅澤な服裝をしてゐる丈けで、顰蹙せしむるものとなる場合は實に多い。物質は畢竟『こゝろ』を象徵化する手段に過ぎない。その『こゝろ』が美しきものでないならば、如何なる物質も用を爲さないのみならず、それは不釣合としての積極的な一つの醜である。素よりその『こゝろ』の美にも無限の段階がある。藥師寺の吉祥天の服裝の美くしさは、一人の小間使の服裝の美くしさよりも高いと云はなければならない。併し一人の小間使の小間使らしき美を現はせる服裝は、その忠實さと甲斐々々しさと、主人思ひの捧げた愛さ、行儀良さとを最も良く現はした服裝は、我々の愛を惹く丈けの充分な價を具へて居る。女運轉手や　女曲藝師の服裝でさへもそれがしいつくりと釣合つて居る時には我々の愛の惹くに充分であ

る。美はそれ〴〵の階段に於て皆美である。併し令嬢らしく見せんとする小間使や、女優らしく見せんとする女曲藝師は我々をして顰蹙せしめずにはおかない。換言すれば物質はそれが『こゝろ』の役となれる限りに於て、效果を以て生かされたる限りに於て、卽ち精神的の價値の創造に役立ちたる限りに於て、本質的には（他との關係以外に於ては）消費者に相應しいと云つていゝ。眞の意味の經濟的公平は各人がその生理的必需を保證されたる上に於て、その物質を生かし得る能力の度に從つて物質を與へられる事である。素より各人が此れを生かし得る最大限度迄物質を與へられる事は（天國に於ては此の事は可能でなければならない。）地上に於ては不可能であるが、その能力に比例して與へられる時、それは公平であつて、リップスも云ふ如く、或る人が或る人より、より多くの物質を與へられてもそれを何人よりも最もよく生かし得てゐる限りは贅澤ではない。素より如何にして、その能力を測るべきかの方法が發見されない限り、一般の制度としてはかゝる標準を用ゐる事は出來ないのであらう。併し我々が他人の物質的使用に對して、是非せんとする時には、此の標準を念頭に置いて評價しなければならない。併し乍らより高き精神的價値を生かすのに必ずしもより多量の物質を要するものではない。キリストの人格の美を生か

すには、帝王の服裝は相應しくない。モナ・リザの美を生かすにはサスキヤの服裝は相應しくない。併も前者は後者よりも高き人格と美とをより乏しき物質的材料を以て生かしたものである。故に我々は出來得る限り少量の物質的材料を以て、出來得る限り高き段階の美を生かす事を理想とすべきである。此れを要するに凡ゆる贅澤は盡く罪過である事を免れないが、その罪過を特に卑しむべきものとなすものは、經濟的原因に非ずして、その贅澤に結合して現はれる他の心情の卑しさである。自分が此處に特に取り扱ふ事を目的としたのは此の種の贅澤である。卽ち虛榮心と僭冒と、無智と、最惡の場合は吝嗇と結合せる贅澤は高貴を願ふものゝ、潔癖を以て排斥しなければならないところのものである。

## 隘吝に就いて

隘吝は贅澤の反對である。人格を卑しくする點に於ては贅澤よりも一層厭ふべきものである。贅澤には積極的意義がある。併し隘吝は生命の價値を創造せんとする積極的な意圖なく、只消極的に働くのみであると云ふ點に於て、徹頭徹尾價値を有せざる不德である。隘吝は總て生命の價

値を見出し得る處にその價値を否定せんとする心である。抑々生命はそれ自身積極的或る者である。故に總てのものを、其處に特別な抵抗なき限り、此れを積極的に見んとする事は凡ゆる見方の根本的約束でなければならない。故に我々は一つの人生の事象に對する時、出來得る限りはその中より價値を發見せんと努めなければならない。此れに反して出來る限り價値を否定せんとして、若しくは特に醜を發見せんとして臨むものは隘吝である。我々が白紙の如き何等の先入主なき心を以て對する時は、我々は人間の本能としておのづから積極的な見方をなすものである。見方が消極的であるといふ事はすでに不自然であつて何等かの成心ある證據である。此處に美と醜との混淆せる事象に對する時、我々は出來る限り美を生かし、その醜をも美と觀じ得る最善の努方を拂ふべきである。素よりかく云ふのはその美を不純なるまゝにて看過せよと云ふのではない。その批判はあく迄も峻嚴でなければならない。併し其處に寸毫でも美を逸し、或ひは我々の見方の深さに依つて美と成り得るものをも、醜として捨て去る事は單に我々にとつて損失であるのみならず、何者かに對する罪過である。例へば此處に一つの殺人があつたとする。此の時、それが殺人であるが故に罪惡であると云ふ見方のみをすれば、それは何處迄も罪惡である他はない。併

し若しその殺人が決闘に依るものであつて、彼れがその侮辱からその純潔なる矜りを傷つけられた爲めに、相手を倒したものであるならば、その殺人は假令罪惡であることは免れなくても、其處には自己の矜りを尊重する人格の善を發見することが出來る。その善に依つてその罪惡を異りたる視點から眺める事に依つて、その罪惡を幾何かの程度に於て赦し易きもの、神の憐れみを受け得るものとして取りなす事が出來る。凡ゆる惡はかゝる見方を以て辯護されなければならない。フランチエスカとポーロの姦淫や、石川五右衞門の偸盜や、ノラの文書僞造や、お七の放火や、此等は其處に善と美とを發見せむとする瞳を以て對する時には、如何に多くの我等の愛を惹き得るものを見出し得るであらうか。否、假令動機に於て善を含まざる過失或ひは罪惡より生じたる行爲と雖も、例へば『復活』や、『新生』の主人公の如き罪過の如きも、其後の淨めと償ひの態度をも合はせ見る時、其處に反つて人格の善を見出し得る場合もある。凡そ我々を感動せしめる人間的なる善と美とは寧ろかくの如き見方に依らずしては發見し得られないものである。天使らしきものゝ外の善は多少とも罪過を含むでゐないものはないからである。素より我々は天使らしき善と美とを求めなければならない。人間らしき善と美とに對する時それを天使らしき善

と美に依つて測ることは素より必要であるが、其處に天使らしからざる故のみを以て、善と美とを見出し能はざることは險である、かゝる見方こそ天使らしからざるものである。天使は自ら浮くしてしかも他人の罪過を赦し易きものでなければならないからである。他人の罪過を發見する時、出來得る限り此れを苛酷に裁き、黑く塗り立てむとする心は實に卑しむべきである。それはその人が已れもひそかにかゝる罪過を犯し、若しくは偶然犯さずにすむで居るに過ぎない場合に於て、猶更らである。多くの場合かゝる險吝は又無恥と結びついて居ると云つていゝ。自分は他人の罪過を裁くに險吝なることを自己の善行の條件とせずにはゐられない一切の善行者を卑しむ。

他人の罪過に就いて過酷なる場合のみならず、他人の名聲や、富貴や、才能や、美貌や總て他人の幸福に對し嫉妬し甚だしきは呪咀する事は又吝である。此れは他人の幸福を祝福する事が出來ないと云ふ點に於て吝であるのみならず、他人が幸福なる事に依つて自己の幸福がそれ自身に於て減ぜず、又他人が不幸となる事に依つて自分の幸福がそれ自身に於て增さないにも關らず、只他人の不幸を希望すると云ふ點に於て　全然消極的な吝である。自分が不幸である時に他人の幸福を祝する事が出來ず他人が幸福である事が自分の損失であるかの如く、甚だしきは罪惡でゞもある

かの如く考へるのは陰である。自分が病氣である故を以て健康者が舞踊する事を咎め、自分が醜きが故に美人が飾ることを妬むのは吝である。總て他人の幸福を祝福せずして此れに「けちつをけ」ようとする心は卑しむべきである。かゝる陰吝なる人々に依つて醸さるゝ空氣は凡そ美なるもの、強きもの、大なるものの誕生と生長とに適せざるものであつて、その世界は健全なるものをして窒息せしめる。若し高貴を願ふ人格を持つ者が自ら幸福であるならば、前に述べたかかる陰吝なる者に掣肘さるゝ事なく、遠慮する事なく、勇敢に自我の生長の爲めに前進しなければならない。若し不幸であるならば、自分の不幸を勇ましく忍受し、此れを負ひ、その運命を生かす道を工夫しなければならない。かゝる人は他人が自分に對して遠慮する事を却つて悦ばず、憐れみをかける事を屑しとせず、況して他人の幸福を羨望し、嫉妬してゐるが如く見なさるゝ事を堪へ難き侮辱と感ずるのを常とする。自分は幸運にあつて同情に負けずして、前進し得る者を尊敬すると共に、不運にあつて羨望に打ち克つて自己の誇りを保ち得るものを賞讃する。此兩者とも人間性の克服である。共に英雄的である。而して後者はその逆境を忍受する點に於て一層同情に價する悲壯である。不幸なるものは羨望し、幸福なる者は遠慮する世界は創造と生長とを阻む陰

吝と卑屈との濕地であつて、健全なるものゝ住むべき、自由の太陽の照らす天地ではない。或種の思想家や、藝術家の如く、不幸な境遇にあつてその運命を生かさむとする處より生れたる思想や、作品にあらざれば、好意を持ち得ず、偉大なるものは必ず苦痛と不幸の中より生れなければならないとなすが如きも險吝と云はなければならない。自分は悲哀と不幸との逆境にあつていかにこの險吝と鬪つて來たであらう。苦痛を通じての幸福のみならず、天來の幸福は更らに價値あり、不幸との鬪ひに於ける偉大のみならず、彼の太陽の如く光輝あるそれ自身積極的なる偉大は更に賞讃すべきである。ベートーフエンの音樂と共にモツアールトの音樂は偉大であり、キリストの生活と共に釋迦の生活は偉大である。順境も逆境も幸福も不幸も此れに處し此れを享くる心が高貴であるならば共に價値を持ち、偉大を生み得る。

他人の罪過や、幸福に對してのみならず、凡そ「積極的なるもの」に對して好意を持たざる心の傾向は總べて險吝である。祝祭や、儀式や、遊戲や、催しや、總べて人間の生活を豐富に、快活に、悅び多く、生き生きさせる處の一切の積極的なる企てはそれ自身に於いては尊重すべきものであつて、其處に特別の事情なき限りは、此等のものに對して積極的なる衝動を持つのが自然

であり、此れを祝福する心を用意してゐなければならない。素より是等のものは他の一層重大なる或ひは急を要するものに對して處を譲らなければならない。併し乍らそれは價値の優先を譲るのではなく發現の機會の優先を譲るのである。順序上先きにしなければならないものが、必ずしも價値が高いのではない。ましてそれ自身に於て輕んぜらるべき何等の性質を持つてゐるのではない。自分は彼の報徳教や、簡易生活の主張が此の順序の前後の問題以外に此等の積極的なるものそれ自身を排斥せむとする主張を含むでゐるならば、何處迄も此れに反對するものである。例へば婚禮や葬式の儀式を只冗費をはぶかむとする故を以て、出來る丈け簡單にし、或ひは省略するが如きは、それが止むを得ざる事情の下に深き愛惜を以て、爲さるゝ場合の外自分は此れに贊成する事の出來ないものである。我々は出來得る限りは目出度く婚姻を祝し、嚴かに葬式を送るべきである。我々が花嫁と花婿との交契の記念や、死者の靈魂を葬る爲めの儀式をさへ贅澤として排斥しなければならないとすれば、此の世界は如何に干乾びた慘めなものであらう。かゝる世界は只それ丈けを以て如何に生き甲斐なき、住むに價せぬ世界であるかを證據立てゝゐると云つていゝ。總て催しや、遊戯や、試みはそれが我々の生活の欲望を盛り、生かしてゐるものである

限り、それ自身積極的價値を持つてゐる。より高き生命價を有するものが、より高き價値を有するものであつて、それが物理的に或ひは因果的に條件的であるか否かに依つて、その價値を測る事は出來ない。我々は礎を築かずして座敷を造る事は出來ない。故に先づ礎を築かなければならないであらう。併しそれは座敷が礎よりも價値がない事を意味しない。總て實利的なるものは遊戯的なるものより條件的なものであるけれども、その生命價は後者の方が高いと云はなければならない。總てそれ自身に於て價値あるものと、功利的見方より生ずる價値とは別種の價値である。リップスも云ふ如く、固有價値と利用價値とははつきりと區別されなければならない。苟も固有價値を有するものは如何にその享受の機會乏しく、且つ多くの費用と深き鍛錬とを要し、遊戯的或ひは裝飾的なるものであつても此れを肯定せむと用意しなければならない。その用意を以つて人生の萬般の事象に對する時と、隘吝なる實用主義の眼を以て對する時とは、その豐富さと自由さと無邪氣さとに於て如何に大なる懸隔を生ずるであらうか。又他人の動作や感情の現はれ方に對して、その積極的なるものに對する貶黜或ひは不機嫌の感情を持つ傾向は又隘吝である。快活なるものを輕薄と、無邪氣なるものを無作法と、矜持を傲慢と、勇敢を粗暴と混同して、此等

を嫌忌する事は隘客である。自ら憂鬱にして愼ましきもの、或ひは謙遜にして物靜かなるものをその素質と趣味とから愛する事は素より差支へない。只その爲に他人の快活や、無邪氣や、勇敢や、矜持を肯定する事が出來ないのは隘客である。廣くして自由なる眼を以て他人の人格に對する時、其處には實に限りなく多樣なる個性の特色があつて、それがそれ〴〵に美くしく、我々の愛と興味とを惹き、かくて我々の交友は倦む事なき新らしき感興と刺戟とを與へられるのである。そのそれ〴〵の持ち味に觸れる悅びは人生の幸福の最も深くして複雜なるものである。缺點を具へ乍らも、その人格の本質が愛すべきものでありさへすれば、凡ゆる個性が我々の好意を惹き得るのである。或種の惡人が只四角四面にして隘客なる人物よりも我々の愛を惹き得るのはその爲である。例へば此處に春の庭に翼を擴げたる孔雀があつて、その絢爛たる尾を人の前に誇り示すが如き所作をなしたとする。其時我々は傲慢にして虛榮的なるものとして、嫌忌と輕蔑の情を以て顏を反けなければならないであらうか。隘客なるものは、恐らくかく爲し、或ひはそれを以て反省と教訓との材料となすかも知れない。併し我々は心から見惚れてその翼を美くしと讚めることも出來るのである。又その誇りを無邪氣なるものとして愛とユーモアとを以て受け入れる事も

出來るのである。そして我々は後の態度を以て遙かに自然にして公けなるものと觀ずる。凡そ物の見方や考へ方の陰吝であると云ふこと程、人格の偉威を傷つけるものは少い。我々は驕奢であり、放逸であると云はれるよりも陰吝であると云はれる時、人格の矜りの傷つく事を感ずる。强き自我感情の痛みを感ずる。我々は特に陰吝を卑しむ東洋風の教養の傳統の血を受けてゐるものである。我々が英雄や豪傑をその多くの缺點や、罪過にも拘はらず、此れを愛するのはその爲である。凡そ陰吝の卑しむべきものとなる原因はその一切のものに對する消極的なる傾向にある。生命の價値に對して、本能の自由に對して、約言すれば凡そ自我感情の力の意識に關して消極的なる處に存する。卽ち畢竟自己の人格に對する矜りの缺乏に存する。陰吝の最も極端なるものはかの吝嗇である。吝嗇とは凡そ物の消費に對する極端なる消極主義である。物の消費は生命の欲望の解放を意味する。人格の力の發動を意味する。少くともその條件である。故に吝嗇は凡そ生命の欲望の、人格の力の、發動に對する消極主義である。それは決して彼の多く利を獲て是れを蓄積し、出來得る限り此れを少しく消費せむと欲する守錢奴の貪欲と同一ではない。守錢奴はその所有を大ならしめる事に依つて人格の價値を大なるものとして印象せしめむとする誤まれる自我

感情より生ずるものである。故に彼等に於てはその消費を吝むは多く利を獲むとする事と共に、出來得る限り所有を增大せむと欲する所より生ずる。此れに反して吝嗇とは徹頭徹尾消極的なるものであつて、それは只自我感情の力の缺乏である。大なる企業と冒險と競爭とに依つて多くの財を獲得し、又此れを消費せざらむが爲には如何なる罪惡も鬪爭も敢へて厭はざる守錢奴の勇氣の如きは吝嗇漢に望むべからざるものである。彼等は自己の所有に屬する極めて僅少なる財物を所謂爪の先きに火をともす如くに、極めて微量づゝ消費して、此れに執着するのみであて、何等積極的に企つる事なきものである。多く儲けて多く散ずるものゝ反對である。宵越しの金を使はざる江戸兒氣質の反對である。此の吝嗇が快樂と結合する時その卑しさは一種特別な光景を呈する。彼等は出來る丈け少しく消費せむと欲するが故に、その享樂の材料となるものは矮少、低卑、粗惡なものとならざるを得ない。彼等はかゝる材料に未練がましく、戀着し、哀訴し、しかも出來る丈けの快樂を搾り出さむとするが故に、殆んど此れを嘗め、啜り、しやぶらむとするが如き陋態を呈する。彼等が人にかくれて、ひそかに耽溺して居る處の小さな陋室をのぞく時、我等は其處に人生と自我とに對する矜りの、慘めに、汚され盡くして居る光景を見るであらう。

# 大食若しくは貪慾に就いて

大食とは總じて物的價値を、必要以上に追求する事である。即ち人格價値を離り、生かす爲めの手段として以外に、物的價値を追求する事である。人格價値は如何に追求しても追求し過ぎると云ふ事はない。故に人格價値の世界に於いては大食若しくは貪慾と云ふものは存在しない。併し物的價値の世界に於いては、それが人格價値の手段として以上にそのものとして追求せらるゝ時大食若しくは貪慾と云ふ一つの罪過が生じるのである。物的價値の基礎をなすものは總ゆる種類の快感である。精神的快感たると官能的快感たるとを問はず總て我々が快感を快感として求める事は大食の第一歩である。抑々快感は慾求を豫想するものである。快感なるが故に慾求するのではなく、慾求が充足された結果として快感を生ずるのである。故に快感そのものを慾求の對象となす事は本末を顚倒せるものであつて、それは人格價値を目的とせざる行爲であるが故に、その慾求が充足された時我々の人格は毫末も高められないのである。然もそれのみに止まるならば、それはたゞ無意味であるに過ぎないが、それは最良の場合に於いても人格を弛緩せ

しむる。多くの場合に於いては積極的に人格を破損するのである。大食の最も原本的なるものは官能的快感の過度の追求である。官能的快感は總て我々の生理的必需の充足に必然的に結合して生ずるのみならず、又我々の精神内容の象徴として絕對に必要なる感覺と結合して生ずる。此の種の官能的快感は我々の慾求の對象ではなく我々の慾求の充足せられた時必然的に伴ふ結果であつて、我々は此れを避ける必要なく又避ける事の出來ないものである。たゞ此の種の官能的快感そのものを意欲の對象として追求する時に大食となるのである。例へば我々が空腹なる時食を攝るならば、我々の食欲の充足には必然的に味覺の快感が結合する。此の時我々が此の味覺の快感を感じたからと云つて、それは大食ではない。併しその味覺の快感を得むが爲に、食を攝り、生理的必需即ち自然の食欲以上に貪り食ひ、例へば彼の十九世紀末のフランスの或る種の快樂主義者の如く、一度食欲が飽滿すれば吐劑を用ひて人爲的に空腹ならしめてまで美食を貪るが如きは大食の最も典型的なるものである。我々は又我々の精神的欲望、例へば美を表徴せむと欲する時必ず感覺的手段に依らざるを得ない。ゆゑに美が形象（ヒルド）となつて現はれた時、その美が我々に與ふる精神的快感は感覺的快感と結合して居る。此の種の感覺的快感をも我々は避ける必要なく又避ける

事は出來ない。併しその感覺的快感を目的として我々が美の表徵を求める時、それは大食の第一歩である。味覺の快感を貪らむとする美食や觸覺の快感を貪らむとする好色や、精神的内容なき色彩、音響、香臭等の刺戟を貪らむとする事等は總て此の種に屬する。此等は初めより不自然にして轉倒せる人巧的なる意欲であつて、それ自身人格の弛緩を意味するものである。而して此の大食が度を過せば過す丈け、それは我々の人格的欲望を痲痺せしめる。此の種の快樂に耽る者は彼がより高き、精神的欲望を缺乏してゐる事の證據として卑しむべきである。彼の散歩や種々の運動（エキササイス）はそれに伴ふ自然の美や、遊戯の天眞等の精神的要素を除去しても、猶それは精神全體を清新にし緊張せしめる意味に於てそれ自身に官能的快感以外の精神的要素を持つてゐる。併し食欲や色欲はそれが生理的必需でない場合は、精神的要素の弛緩若しくは痲痺を意味する。素より食欲や、色欲もそれが快感を目的とする場合に於ても、その欲望が遂げらるゝ迄の過程は食卓や衣裳等の美に依つて裝飾され得る。併しそれはその欲望そのものが、何等かの精神的美を盛り生かしてゐると云ふのとは別事である。或る男が或る女の肩に手を置いた時、それは男の愛と戀慕との精神的要素を盛り生かしてゐる象徵的動作でもあり得る。併し食卓や衣裳の美は只是れに附著し

てゐるのみであつて、食欲ミ色欲ミは、其れ自身には何等の精神的要素をも生かしてゐるのではない。故にそれが生理的必需である場合は、快感を目的ごしてゐない欲望の充足ミして大食ではないけれごも、官能的快感を目的ミして遂げらるゝ時には大食ミなる。食欲や色欲のみならず、例へば沐浴の場合に於て、我々が清潔ミ爽快ミの爲に沐浴し、或ひはその陶然たる精神的快感が未だ美感の程度を越えざる限りに於て、沐浴する事は大食ではないが、その限りを越えて特に官能的快感の爲に入湯する時は、大食であつて我々の精神はその爲に弛緩する。彼の快感を求めて故意に長風呂し、又人に肩を打たせ、或ひは按摩せしめて、只管肉體的弛緩の陶醉を味はむする者を見る時、我々は特別に或る精神的弛緩の卑しむべき感を起さないわけにゆかない。官能的快感の追求を是認するものは、それが何等かの精神的價値を生かして居るか、若しくは生理的必需を充たして居るかの二つである。此れ以外の場合に於ける官能的快感の追求或は耽溺はすべて大食である。それは自己の人格の働らきを萎微せしめ、見るものをして卑しき感じを催さしめる。飢ゑて食ふ者、渇して飮む者は卑しき感じを與へない。併しそれは假令卑しむべきものでなくても精神的要素を含まざるものミして我々に粗野の感じを與ふる事は免れない。故に我々は此の避く

べからざる生理的必需を他人の耳目に觸れざる密室に於て充たし、若しくは他の精神的美を以て飾るのである。此れ我々の文化、カルチュアであつて、我々の精神が肉欲を支配してゐることの一つの現はれである。肉欲とは我々の肉體に直屬する生理的必需及び官能的快感の欲求である。肉欲が精神を支配して居る時其處には野卑の感じが現はれる。肉欲の追求は如何にそれが生理的必需であつても、粗野の感じを免れないが、それが官能的快感を目的とし、併もその度が著るしい時には、甚だ卑しむべき觀を呈する。我々は彼の飽食暖衣し、快樂を貪つて逸居し、淫欲に耽り、精神的要求の稀薄なるものを自ら卑しむ。飢ゑて食ひ、渇して飲み、勞働し、純潔にして肉欲少きものを自ら尊ぶ。生理的必需さへも大なるものよりも、小なるものを尊ぶ傾向を持つて居る。食欲や色欲の強き事は下根なるものとして、我々は彼の仙人や天人を尊ぶのである。蓋し我々が人格の尊嚴を保つ上に於て、何等かの他のものに依屬せざるべからざる事は、その獨立性の薄弱を意味するものであつて、我々は出來得る限り他のものに束縛せられずして、自足自立し得る事を人格の力として尊ぶのである。しかるに生理的必需が大である丈け、我々は物に依屬しなければならないからである。官能的快感の追求も亦それが大である丈け、我々は物に束縛されな

ければならない。生理的必需は我々が避くべからざるものであるが故に、その充足は我々の非難に價しない。けれども官能的快感の追求は、それが精神的内容を生かすための象徴としての用をなす場合の他に於ては、避くべきものであり又避け得るものなるが故に、我々の人格的非難に價する。官能的快感はそれ自身精神的要素を含まざるものであるが故に、その追求は必然的に精神的欲望の減退若しくは抑壓を意味する。多くの場合に於ては、人格價値を積極的に侵害し、蹂躙する。且つ官能的快感は物質の刺戟に依つて惹起せらるゝ快感であるが故に、此れを追求する爲には必ず物質を所有若くは使用しなければならない。故にそれは物的價値の尊重となり、利の獲得を必要として來る。利とは物的價値の感情である。此處に於て官能的快感の大食は利の大食、卽ち貪欲とならないではゐられない。併しながら物的價値は我々の官能的快感の追求によつて生ずるばかりでなく、我々の生理的必需の充足及び精神内容を盛り生かすための手段として物質を必要とする所より生ずる。この要件として我々はある程度の利を求めないわけには行かない。この程度に於て利を求むることは決して大食ではない。大食とはその程度を越えて、利を求める事である。卽ち必要の範圍を越えて、利を利として求めることである。抑々物的價値が我々にとつ

て價値である所以のものは、それが人格價値を盛るための材料として有用である爲めに過ぎない。我々がこの必要以外の利を求める事は無益であると云ふ許りでなく、それは生命の浪費として生命に對する尊重の念の缺乏を意味し、且つ多くの場合精神をして物質の下屬たらしむる事に依つて人格の尊威を傷けるものである。所謂「心を以て形の役となす」事は、乃ち人格の物質に對する降服である。凡ゆる種類の貪慾はこれに屬する。それが財貨或は財貨の變態たる金錢に關する貪慾の場合は前述の守錢奴の例である。併し乍ら守錢奴の心理には又或る同情すべき點が含まれて居るかも知れない。彼等は人心の頼むべからざるを感じ、人間の愛に失望する時、如何なる場合に於ても確實にして頼るべきものは財貨であつて、此れを所有して居る限り、他人に對して自己の威嚴を保つ事が出來ると思ふかも知れない。何となれば、如何なる場合に於ても、他人が財貨を尊重し、若しくは此れに屈從するが故に、他の如何なるものに依るよりも、確實に財貨の蓄積に依つて、自分の地位を確實にし、他人に對して威力あるものとしての誇りを保持する事が出來ると思へるからである。かくの如くして彼れが他の如何なる人格價値を追求する事をも捨てゝ、只管財貨の蓄積に傾注するのは或る道理を含むでゐると云はなければならない。蓋し我々は自己

の人格價値を他人の反應に依つて客觀的に具象化して認識せむと欲するが故に、我々が或る人格價値を具へても、必ずしも他人から尊敬と賞讃とを得ずして、却つて侮蔑と嘲笑とを受くる事が尠くないにも拘はらず、富は殆ど例外なく他人に對して威力を持ち得る事を見る時に、自己の人格の價値を、後者に依つて確認せむとするに到るには無理からぬ點もあると云はなければならない。尠くとも其處には彼をしてかくならしめし責任を我々の人格價値と物的價値との評價の不正確に預たしめなければならない理由がある。若し人格價値ある處には必ず尊敬があり、物的價値が人格價値に仕へて居る度合に從つてのみ尊重があるならば、彼はかくの如き方法を選ばなかつたかも知れないからである。併し乍ら如何に同情すべき點があるとは云へ、それは依然として誤謬である。且つ人格價値を他人の反應に依らずして、自覺に依つて、確認し能はざる點に於て、すでに人格の矜りを缺いで居る。併もその必要以上な財貨を獲得する手段が、自己の人格を傷つける事を條件とし、その蓄積されたる財貨の使用が、自他の人格をして物に服從せしめる事を條件としてゐる點に於て、此の種の貪欲は卑しむべきものである。我々はかの豚を卑しむ。それは彼れが物を選ばずして大食し、肥え太り、精神の働らきが遲鈍である爲である。財貨を人格價値

情耽溺家であるならば、それは幸福な場合には一つの痴態にすぎないけれども、不幸な場合には卽ち運命の威力が二人の上に落下した時には、其の痴態は忽ち現實の悲慘となつて報いられずには置かない。殊に相手の感情が眞實であつた場合に於ては、其の人は虛僞を以て他人を欺むき、此れを害うたのである。何等の害惡を他人に與へざる場合に於ても、芝居氣を以て他人に對して怒つて見せ、泣いて見せ、戯れて見せる事はその人の人格の尊威を傷けずにはおかない。それは虛言であり、僞善である。若しくは僞惡である。他人に對して惡意を持つてゐるものではないが、他人の運命を恐れざる點に於て罪惡である。その目的が官能的快感或ひは利でない點に於て、精神的傾向を具へてはゐるが、猶その目的が精神そのものにあらずして、精神作用に伴ふこころの快感にある點に於て、又一種の大食である事を免れない。凡そ必要以上に感情の表出の過多なる事はそれ自身に高貴の德に反するものである。我々は東洋風の、若しくはストイック風の、內に充ちる感情を出來得る限り少しの象徵に依つて表出する事を、高貴の德に適ふものとして尊ぶものである。『表情澤山』と云ふ事はその感情が眞實である場合に於てもエーデルなものではない。ましてや嘘僞なる感情を芝居氣を以て過剩に表出し、怒つて見せ、泣いて見せ、甘へて見せる事は卑し

むべきである、總ての思はせ振りは此の意味に於て斥けられなければならない。殊に男女關係に於て此の種の感情耽溺は最もしば〳〵行はれ、享樂の手段となり、卑しむべき大食となり易きものである。彼の遊戯戀愛と遊蕩と或る種の戀態性慾とは此れである、遊戯戀愛に於ては、自他の運命を恐れず、戀愛の眞似事をして其處に生ずる感情の快感を享樂するのであるが、それが運命の打擊に依つて、現實の悲慘に陷る時は、哀れむ可き痴態であるが、自己の運命は充分に守りつゝ、相手の運命に對しては、無關心に此の種の享樂に耽ける者は拔け目なき悧巧者として更らに卑しむ可きである。此の種の「決して損をしないところの快樂主義者」に對しては自分は特別に輕蔑を感ずるものである。更らに此の種の悧巧者同志の間に於て、互に運命の傷つかないやうに用心し乍ら、絕對に安全な雰圍氣の中に於て、凡ゆる芝居氣の、思はせ振りなる愛撫と嬌媚との祕術を盡くして、此の感情耽溺を享樂せむとする遊戯戀愛は最も卑しむべきである。次に遊蕩の心理も亦遊戯戀愛の一種であるが、只此れに肉欲の大食の結合したるものである。遊蕩兒は決して只肉欲のみを求めるものではない。それは女の色香、その醸し出す匂はしき空氣、その感情の甘さと潤ひ等の精神的要素に結合するところの快感を求めるのである。此の意味に於て蕩兒は彼の

肉欲を求めて他を求めざる貪婪にして動物的なる好色家よりも、同情すべき者である。彼等の或者には優さしき、人情に富みたる、愛に感じ易き、涙脆き性格の者も尠くない。只彼等は柔軟であつて嚴肅を缺き、若しくは磊落であつて愼重を缺いで居るのである。彼等の或者は可成り洗練されたる、而も精神的趣味を以て女を選び又卑しからざる態度を以て女に對し、惡意を持たずして愛撫し又保護するのである。素よりそれが遊蕩である點に於ての卑しさを免れる事は不可能であるが、彼等の「遊び」に於ては其處に「粹」と「俠氣」と「鷹揚」等の尊ぶべきものと、「野暮」と「意氣地なし」と「慳吝」等の卑しむべきものとを可成り鋭敏な神經を以て感別する所謂垢拔けのした趣味が支配して居ることも事實である。此の「好き嫌ひ」は高貴を願ふ心の一種の現はれである。或る蕩兒は或る四角四面なる人よりも其他の點に於ては高貴な人格の持主である事もあり得る。女性の美と、其の特殊な感情の柔らかさとに愛を感ずる事は高貴の心と反するものではない。只特に此れを觀照せむとする欲望が、其他の倫理的なる意識を壓倒して追求さるゝ處に其の罪過が生ずるのである。觀照の欲望であるが故に、それは「實」の意識を離れて居る。故に遊戲的とならざるを得ない。只それが人格に對して行はれ、且つ觀照を以て初まり乍ら肉欲の一點に於て實際

に落ちる處にその惡ご卑しさが生ずる。女の色香や、その優さしき感情を觀照せむご意圖して女に對する事は、既でに人格を物ごして取扱つて居る惡である。然も此れに對して初めより芝居氣を以て、愛や誠の眞似事をして、相手の此れに對する反應を觀照し、享樂せむごする事は虛僞である。又自己の尊威を傷つける。如何に鷹揚にして瀟洒なる趣味を以て、秋の露よりも哀れな女の風情を鑑賞する者ご雖も、その態度が既に相手の人格に對する侮辱を含み、且つ肉欲の一點に於ては觀照的態度を離れて醜き實感ごなるのである。遊蕩は結局感情耽溺ご肉欲の大食ごの結合である。若しその感情が眞似事でなくして、眞實であるならば、假令相手が娼婦であつてもそれは戀愛であつて、遊蕩ではないからである。併も此等は遊蕩の最もよき例であつて、その惡質なるものは「粋」や「意氣地」や鷹揚等の「道德」を缺き、女性に對する精神的趣味を持たず、感情耽溺の部分を離れて只肉欲を貪らむごする單なる好色に近いものである。好色は何等の精神的要素を含まざる種々の貪婪であつて、最も卑しむべきものであり、自分は此れを遊蕩ご區別する。併し乍ら今日の如き「茶屋」や「廓」の制度は蕩兒をして女の風情の明暗を鑑賞し、「粋」ご「意氣地」を尊ぶ道德の發達を困難ならしめて、單なる好色に終らしめるであらう。最後に一種の變態性欲に於ては、

其痴態は直接に端的に肉欲と結合してゐるこころの感情耽溺である。それは感情耽溺の一種であるが殆ど肉欲の官能的快感を增大せしめむとする手段に過ぎないが故に、その感情耽溺としての精神的要素の最も稀薄なるものである。所謂マソヒズムとサディズムとに於てその虐待する事も虐待される事も畢竟眞似事に過ぎない。彼等は虐めて見せ、泣いて見せてその實感でない處の感情に伴ふ特殊な快感を享樂するのである。それは惡意なき點に於て、殊に默認的合意に依る場合は單なる痴態に過ぎないが、それが直接に肉欲と結合し、精神の常態を逸したる狂態である點に於て、此れに耽溺するものは凡ゆる大食の中にて最も卑しむべきものと云はなければならない。要するに總べての大食は人格の弛緩若しく鈍麻より生ずる點に於てその揆を一にする。それは人格の尊威の念が缺乏し、その命令が嚴肅なる響きを以て、精神の全部に行き渡らない處より生ずる。人格の中樞が萎微して末梢が跋扈する處より生ずる。故にそれは感情の耽溺たると、官能的快感の大食たると、利の貪欲たるとを問はず、すべて人格をして物に下屬せしめ、精神をして肉欲に屈從せしめるこころの卑しむべきものであつて、どの點に於ても、高貴を願ふものゝ克服しなければならないこころのものである。

# 色魔に就いて

色魔は蕩兒と嚴密に區別しなければならない。蕩兒に於ては前述の如く、その意欲の主なる對象とする處は女の色香と感情のニューアンスとであつて肉慾も此等の精神的要素に依て或る程度迄美化されて居る。そして如何なる意味に於ても其の目的は純粹に色情である。卽ち男性が女性に對して犯す處の性的興味の範圍内に止まり、且つ相手に對する意識的な惡意を混へないものである。然るに色魔に於ては、初より意識的な惡意を以て女に對し、且つその意欲の對象に色情以外の利欲を含むで居る。故に色魔に於ては蕩兒に於ける「粹」や「意氣地」や「鷹揚」等の道德も、女に對する人間らしき愛撫と保護との感情も、その他總て遊蕩をして色情を美化せしむる處の要素が缺乏して居る。然のみならず蕩兒に於ては其れは利欲を犧牲にして女色に惹かれるのである。彼等が利欲に汲々たるものよりも人間として愛すべきものであるのはその爲である。利よりも女を愛するものは或る意味に於ては心情の美しきものである。彼等が自己の利欲を捨てゝ女に「肩入れ」し、借金に首が廻らず、又初めの眞似事が眞實となつて、遂に情死する過程には愛憐すべき

人間らしさを充分に窺ひ得る。然るに色魔に於てはその女を求めるのは又利欲の爲である。色と欲との兩道である。己れは何の代價をも拂はず、何ものをも犧牲にせず、徹頭徹尾我慾を貪らむとするのである。彼等は金になりさうな女を狙ふ。愛する女の爲に一本の簪を買つてやる代りに、女から搾り取らうとする。凡そ如何なる遊蕩と雖もそれが純粹に色情であり、且つ常に女に對して男としての誇りを以てこれを保護し、男の方から金品を與へることがあつても、假初にも女の方から此れを要求しないのはせめて男の意氣地である。女に金を出させて平氣で居れる事は旣に男としての誇りを失へるものである。況して女から金品を搾り取るに到つては言語道斷である。自分は遊蕩は許す事が出來るが、色情に利慾を交へるものは斷じて許す事が出來ない。その一事のみを以てその人格の陋劣を致命的に證據立てゝ居る。而も色魔に於ては、初より打算を以つて初まる色情であるが故に、如何なる意味に於ても、「誠」が現はれる事が出來ない。それは嘘言と詐欺と裏切りとを前提として初めて成立し得るものである。而も色魔をして最も卑劣なるものとならしめるものは此等の惡しき動機の他に、それは他人の秘密を利用すると云ふ卑しむべきものゝ中最も卑しむべき手段を用ひる點にある。彼等が女から金を搾り取る最も有力なる手段

は女の秘密を握り、此れを種にして脅迫する事である。羊の如く女に近寄り、蜜の如き甘言を以て彼女を誘惑し、その秘密を握るや、自己の假面を脱ぎ、狼の如く殘酷に相手の弱點を利用して、色と慾とを貪らむとするのは又一種の强盜であり、强姦であり、而も最も卑しむ可き破廉恥である。而も彼等はその用ふる手段が初めより詐欺であるが故に、最も信じ易き、淸き、初心なる女を狙ふ。他人の善良なる點を選んで利用するものである。又彼等の用ふる手段は自己の名譽を捨て、他人の名譽心を利用する點に於て最も陋劣である。卽ち彼等の所業は旣に破廉恥であるが故に、彼等の脅迫は自己の名譽心を捨てる事に依つての外に効力なきものである。而も相手が名譽を重んずる時にのみ効力あるものである。故に彼等の用ふる手段は自己の名譽を捨て他人の名譽心を利用する二重の破廉恥に依つて初めて成立するものである。併も彼等は例外なく卑怯者であるが故に、出來得る限り抵抗力なき女を選むで狙ふのである。他人の弱味に附け込むのである。正面から力を以て脅迫する强盜や强姦は素より憎むべきものであるが、色魔は憎む可きものたるのみならず、又卑しむべきものである點に於て此等よりも一層惡質である。しかのみならず、色魔に於ては、その罪惡は罪惡なるが故に、一層彼等の興味を惹くのである。彼等は女を欺むき金

をゆする事に依つて、正しき方法に依つて遂げらるゝ色慾よりも一層快感を感ずる處のサディストである。「弄んでやつた」事、「ゆすつてやつた」事は彼等にとつては手柄である。罪惡に伴ふ特殊の變態的快感と、變態性慾の快感とが結合して彼等の人格を蠱惑し、汚濁し盡くして居るのである。自分は色深かさには同情し得る。それは慾深さよりも遙かに人間的である。併し色魔に到つては徹頭徹尾惡魔的であり、その何處にも人間らしき心臟の鼓動を聞き得ざる、憎むべく卑しむべき吸血鬼である。

## 賣淫に就て

賣淫とは何ものかの手段として性的行爲を爲す事である。利慾の爲に自己の身體を他人の肉欲に提供する事はその最も典型的なるものである。それが直接にして露骨なるものに非ざるも、美くしき假面の下に間接に行はるゝものも亦賣淫の一種である。凡そ性慾の衝動以外の動機から性的行爲をなすことは總て此の種に屬する。彼の娼婦の如く職業的となれる賣淫の卑しむべき事は云ふ迄もない。それは女としての人格の矜りを根本的に放棄したるものである。固より彼女等が

かくの如き道を選ばざる可からざるに到つた事情には多くの同情すべきものがあるであらう。其處には親の責任、媒介者の責任、一般に男子の肉欲の責任、及びその存在を許さざる可からざる社會の責任が大であらう。自分の娘を賣る親は假令貧窮の爲であつても如何に卑しむべきものであらう。まして彼等の中には勞働を厭ひ、娘を喰物にする者があるのである。自分の娘を賣つて自分はぶら〳〵して暮らしてゐる如き親は、娼婦よりも更に卑しむ可きである。又賣淫の媒介をなして生活する桂庵の如きは娼婦よりも娘を賣る親よりも猶卑しむべきである。何となれば彼等は己れは何物をも犧牲にせずして、他人に罪悪を犯さしめ、卑しむ可きものに機會を與へる事に由つて生活するものだからである。更に淫を買ふものは相手をして淫を賣らしめる原因をつくるものであつて、其の行爲が金錢を以つて他人の人格を蹂躙する罪悪であるばかりでなく、相手をして彼の人格の尊嚴を放棄せしめる罪悪を犯さしめる點に於いて二重に罪悪である。加之總べての他人の人格に對する侮蔑者と同じく、彼等は他人の人格を蹂躙する事に依つて、自己の人格を蹂躙する權利を他人に是認するものである。此の意味に於いて淫を買ふ事は又自己侮蔑である。併し乍ら親や、桂庵や媒容の責任が如何に大であつてもそれを以て賣淫する者の行爲が是認され

るのではない。賣淫は根本的に自己の人格の矜持を放棄するものである。賣淫を拒む事が出來なかつたといふ事は如何なる事情に於いても、其の人格の尊厳を汚辱し盡すものである。我々は死を以つても之れを拒絶せなければならない。假令親や、夫や、兄弟の不幸を救濟せんが爲めに自分を犠牲にして賣淫する事と雖も許さるべきではない。此場合に於いては、犠牲にすべからざるものを犠牲にするのである。それは決して自己の生命を犠牲にするが如き行爲と同一視する事は出來ない。他人の不幸を救濟せんとする善行は自己の人格を汚辱し盡すといふ悪行に依つて全然その光りを失ふものである。此の場合に於いては若し他人の不幸を救濟する方法が賣淫の外にないならば、その不幸を他人に負はしめても自分は賣淫すべきではない。自己の死を以ても賣淫を拒絶すべきであるならば他人の死を以ても己の爲めに人を賣淫せしめるが如き罪悪を犯さざらしむべきである。もとよりかゝる賣淫者は、自己の利欲の爲めに賣淫したる者よりも遙に同情に値する。併し乍ら我々は忠臣藏のおかるや、出家と其の弟子の淺香に如何に人間的に同情し得ても、之れを是認する事は出來ない。

賣淫はかゝる直接にして露骨なるものにあらざるも、凡そ何物かの手段として他人の肉慾に自

己の身體を提供する事は總べて此の種に屬する卑しむべき行爲である。利害の爲めに、或は情實の爲めにする結婚は賣淫である。戀愛と性慾とを感じあたはざる配偶と衣食の爲めに離別しあたはざるも亦賣淫である。假令操を許さざるも、自己を巧みに防衞し乍ら、他人の性慾に媚びて「愛嬌を振り撒く」事に依つて、自己の利益を擴張する者は又賣淫の一種である。他人が自己に對して享樂的態度を以て近づく事を知り乍ら利害若しくは情實の爲に此れを拒絕し能はざる事も亦賣淫の一種である。又故意に異性の肉慾を刺戟するが如き服裝や姿態をなして、異性の好感と性的選擇の機會の優越を贏ち得むとする事も亦一種の賣淫である。是等は總べて何物かと引き換へに、他人の肉慾に自己の身體を提供するものであつて、その人格の矜持を傷つけて居る事は言ふ迄もない。然もそれが他の美しき假面の下に行はるゝ點に於いて一層卑しむべきものであると言つていゝ。

賣淫は女子が男子に對して行ふ場合よりも男子が女子に對して行ふ場合に於いて一層卑しむ可きである。いはゆる男妾や、貴婦人に買はるゝ或る種の役者の如きは之れである。男子は女子よりも其の本性上獨立的であり、威嚴を重んすべき筈のものである。其の男子が女子の肉慾に仕へ

男性の矜りを棄つるが如きはもはや男性としての面目なきものである。女に養はれて生きる事すら既に男子の恥辱である。況して女性に弄ばるゝに任せ、之れに屈從し、阿諛するが如きは破廉恥の極である。彼等の或る者はおそらく女を弄むでやつた上に、金を絞るのだと思ふかもしれない。然らばそれは色魔の一種である。又淫を賣るものは買ふ者に對して少くとも形式上屈從的位置に立たざるを得ない。内心その顧客を見下して居ても屈從の態度を取るならば、それは既に立派な自己侮蔑である。否寧ろ内心見下して居る者に對して屈從の形を取る事こそ申し分なき自己侮蔑である。若し韓信が金を得むが爲めに、無頼の徒の股をくゞるならば、彼が無頼の徒を見下げて居れば居る程卑しむべき屈從と言はなければならない。自から價を拂つて妾を蓄へ、己れに屈從せしむる好色家も、彼等に比ぶれば、尚自から屑よしとする根據を持つて居る。もとより彼の賭博打ちの親分や、女髮結ひの亭主等がその妻や情婦に養はれて居ても、彼等が女に眞實に愛され、自ら屈從して居ないのであるならば、それはたゞ懶惰であつて賣淫ではない。併し裕福な後家の玩弄に委するのらくら男や、貴婦人に買はれる役者や、その玩具となる美少年の如きは賣淫の最も卑しむべきものであり、全然男性としての矜りを失へるものである。

最後に尚一種の賣淫がある。それは自己が性慾を感じざるに關らず、他人に奉仕せんが爲めに自己の身體を他人の肉慾に捧げる事である。夫婦の間に於いて往々にして行はれる肉交の場合である。この場合に於いても相手の不機嫌や、立腹を怖るゝためになす事は明かに一種の賣淫である。併し純粹に奉仕の氣持を以つて、何等の報酬を求めず、たゞ相手の性慾を滿足せしめんが爲めに、自から進むで身を捧げる場合に於いても、その行爲は非難に價ひするであらうか。此の場合に於いても、奉仕の手段として、自己の身體を他人の肉慾に提供する點に於いて、依然として自己の尊威を傷つける行爲であることは免がれない。此の場合に於いては彼女は奉仕すべからざる欲望に對して奉仕するのである。卽ち夫は妻が性慾を感じざる場合には肉交を斷念すべき筈のものである。故に夫をしてその不滿足を負はしめなければならない。相手が性慾を感じざる場合に肉交する事は假令相手の運命に對する責任を持ち、相手が心から身を捧げた場合と雖も相手の人格を手段となすものである。故に自己の人格を手段として用ひしめる事は妻にとつて自己の尊威を傷付けるものでなければならない。凡そ自己の身體は自己の人格の象徵であつて人格以外の物ではない。身體は特殊な物質である。自己の所有物を以つて他人の慾望の手段となす事と自己

の身體を以て他人の欲望の手段となす事とは全然區別しなければならない。凡そ賣淫の卑しむべき所以は、自己の人格の象徵であるところの身體を、何ものかの手段として、卽ち一つの物として、取扱ふところに存する。故に此の種の奉仕は報酬を目的として淫を賣る者とは明瞭な區別を持つて居るけれども自己の人格を手段とする點に於いて同種の卑しむべき行爲に屬するものとはなければならない。

## 或る種の表出に就いて

我々の感情や意志の表出は我々の人格が如何なるものであるかを直接に他人に印象せしめる機會である。我々の內面生活は自然に肉體的表出を求めむとする衝動を持つものである。併し乍ら我々が他人に對して此の表出を印象せんと欲し、或ひは自然に印象すべき位置におかれた時、その表出の仕方は對人關係の道德に依つて制約せられなければならない。その感情や意志やの表出の外に對人關係に於けるその人の人格が特に表出されなければならない。自己の內面の狀態の自然にして僞らざる表出でありさへすれば、そのまゝ表出して差支へないと云ふわけにはゆかない。

其處には特殊な或る條件が加はつてゐるからである。此處に於いて我々の意志や感情の表出の仕方は我々の人格の如何を示す事になるのである。表出の仕方が自由であり、自然であり、その場所と時と相手とに相應しい――即ち禮に適ふか否かは我々のカルチユアの程度を示す標識であるが、自分は此處では特に我々が卑しむべきものとして考へねばならない表出のみに就いて云ふのである。即ち我々の人格の威嚴を傷つけるが如き表出の仕方のみを選んで擧げるのである。我々の內面の狀態が、即ち表出せらるゝところのものが、卑しむべきものである時、その自然なる表出が卑しむべき印象を與ふる事は云ふ迄もない。併し我々の內面の狀態が卑しむべきものでなくても、その表出の仕方が人格の威嚴を傷つけるが如きものである時には、それは猶卑しむべきものとなる。例へば我々が食慾や色慾等の生理的必需が充たされない時、飢ゑを感ずることは自然である。併し我々がかの犬の如くにその飢ゑを露骨に現して「物欲しさうな」眼附きをして他人の食膳を窺ひ、或は婦女子に附きまとふならば、それは自己の人格の威嚴を保ち能はざるものとして卑まれねばならない。單に生理的必需のみならず、我々が隣人の愛や、戀愛に飢ゑたる時に於ても、其の人間らしき孤獨の淋しさや、飢渇をも餘りに露顯的に相手と時と場所とに對する考

慮を費す餘裕なく表出する事は、人格の尊嚴を傷つけないではおかない。總て他人の感情に訴へすぎる、女々しく、未練がましく、愚痴つぽき表出は高貴の德と一致しないものである　それは決して自己の內面の現實を他人に隱蔽する事がいゝと云ふのではない。自己の苦痛や悲哀に堪へ得る事が人格の尊嚴を構成する重要な力だからである。我々が他人の苦痛や、悲哀を訴へる事は他人の苦痛や悲哀の原因となる。それに對する同情と奉仕との義務を負はせる。而も自己の無力や、運命の不可抗力や、己れ自らの不幸の爲に餘裕なく、他人の不幸を傍觀する外道がない場合が少くない。故に他人をして苦しき窮境に立たしめる事である。此れ我々が自己の苦痛や悲哀を他人に表出する事を出來得る限り抑制しなければならない所以である。故に自己の苦痛や悲哀の表出に關してはストイックな寡默な方が高貴の德と一致する。痩我慢や負け惜しみの如き不自然さは賞讃すべきものではないが、猶それは卑しむべき感を與へない。然し自己の負ふべきものを負はず、自己の過失や蟲の良さを棚に上げ、過剩にして亂れたる表情を以て、泣き、訴へる事は人格の威嚴を傷つける。而もそれが何等の効果なき愚痴の場合に於て猶更らである。不可抗なる運命を勇ましく負ふて忍受する事は人格の尊威と力との靜的なる現はれとして尊い感を與へる。單に

苦痛や悲哀の表出のみならず、愛や、戀慕や、好意や、怒りや、其他總ての感情の、表出過多にして輕々しき事は高貴の德と一致しない。此の點に於ては自分は西洋風の表出よりも東洋風の表出を好む者である。殊に彼の能樂に於ける表出法は最も洗練せられ簡素にして、しかも効果的である。固より表情の不自然な抑制も不自然な誇張と共に斥くべきであるが、特に後者の場合に於てはそれは嫌らしさと臭氣とを伴ふものである。まして嘘僞を伴ふ場合にはそれは輕蔑に價する。自分が大食の一種としてあげた感情耽溺のための表出はすべて此の種に屬する。又總ての馴々しさも此の種に屬する。相手が自分の心をアクセプトするか否かを考慮せずに、猥りに自己の感情や意志を表出し、他人の懐の中に入りこみ、膝の上に上る猫の如き馴々しさは狎褻であつて卑しむべきである。而もかくの如き馴々しさが眞心少く、且つ拔け目なき悧巧さに伴はれてゐる時、猶更らである。素より自分は天眞や、率直や、人間らしき隔てなさ（オープンハーテッド）をも愛するものである。我々が野原を散歩して其處に出會つた見しらぬ人に直ちに話しかけたにしても、それを必ずしも間違ひとは思はない。劇場に於て未知の美くしき婦人を見た時に、直ちに交際を求める事をも強ち不正とは思はない。寧ろかゝる態度の何等のわだかまりなくされるやうになる事を自分の理想の境地となす

ものである。併しかゝる態度を高貴の德に反せずして取り得る爲には、我々の內心が淸淨にして無礙でなければならない。其處に輕々しさ、馴々しさと無躾との感じが伴ふ限りはかゝる態度は自他の人格の威嚴を傷つける。我々が理想的人格に違せざる限り、我々のこだわりや遠慮は避ける事が出來ない。自己の醜さを他人に押しつけ、粗野な手を以て他人のヴェールを拂ひのけ、泥足を他人の淸堂に踏みこみ、他人の心の扉をのぞき込み、その靜けさを搖すぶるが如き、縱まなる感情や意志の表出は、他人の心情を尊ばず、自己の人格を重んぜざるものとして卑しむべきものである。素より人には樣々の個性があり、從つてその感情や意志の表出にも種々の仕方がある。或る人は內氣に、或る人は無邪氣に、或る人は人懷かしく或る人は寡默である。此等はそのまゝの特色を持ち乍ら、一つの高貴なる人格の現はれ方の種々相としてそれ〴〵に美しくあり得るものである。總ての人が同じ仕方で表出しなければならない事はない。又假令種々の缺點は持ち乍らもその人格の本質が高貴でさへあるならば、其處に善さと美さとが充分に現はれ得る。むしろ我々が各自の特色を生かし切らない間は、凡ゆる特色は總て缺點を作つて居るのが常態である。かくの如き場合に於ては我々はその表出を卑しむべきものと感じない。併し乍らそれが如何

なる特色であつても、上述の如き不自然と虚僞と過剩と狎褻と不作法とを伴つてゐる限りは、その限りに於て人格の尊威を傷つける事は免れない。此の他にも我々の意志や感情の表出が相應しくない場合は猶多い。例へばその等の或る種のものを名づけて我々は心なき業と云ふ。それは我々の人格の仕上げと、磨きとに於て我々の所謂カルチュアの重要なる課題であるが、此處では特に我々が卑しむべきものとして表象するもののみに止めて、他の機會にゆづつて置く。我々が感情や意志の表出に於て完全な自由を得る事は、我々の人格の完成の最も明らかなる表徴である。我々は彼の聖衆倶會の繪に於て祝福されたる人達が、互に高貴の德を具へて傷つけず、傷つけられず、交り合ふ天上の挨拶や遊樂の光景を想像する時に、尊き感に打たれるのである。我々の表出は人間らしさと超人らしさと天使らしさと等の種々の段階がある。より高き階段より見ればより低き階段に於ける表出は高貴の德に於て足らざるものである。超人より見れば人間らしき表出は甘く弱くもしくは哀れに見えるであらう。自己を憐れむべきものとして考へることは超人にとつては自己侮蔑であるが故に、我々が人間らしき表出として愛し得る或る種のもの、例へば婦人の嬌羞や、男子の孤獨の淋しさや、老人の同情や等は猶卑しきものと見えるかも知れない。更

らに天使より見れば、超人の氣を負へる誇りや、行者的な硬さは猶自由の點に於て足らざるものとして低く見えるかも知れない。我々は高く登り、遠く願ふに從つて、卑しむべきものゝ領域を擴張する。總ての者は自己の境涯に相應しき表出を求めるであらう。自分が此處に擧げたのは、人間らしさの階段に於て、卑しむべき表出である。人間らしき表出として卑しみに溺れ得るものは神の目に於ても、少くとも愛するに堪へたるものと成り得るであらうと信ずるからである。併し我々は天使らしき階段より自己の卑しさを省み得るまでに向上することを願はなければならない。

## 懶惰に就いて

懶惰とは凡そ活動（タート）に對する忌避若しくは無活動に對する嗜好である。抑々生命は不斷の活動の流れである。生命の中核は常に積極的な活動性（テーチツヒカイト）を帶びて居る。而して生命の外部は此の活動性を觸發する無數の刺戟を以て圍繞されて居る。故に我々は外面的にも、内面的にも不斷に活動的なる狀態に置かれて居るのである。故に我々が常に消極的であつて、活動を忌避する事は我々の生命

の本性、人格の本質に逆らふものである。自己の生命に忠實なる者は我々の中核を以つて外來の刺戟に對して鋭敏に反應し、働きかけ、之れを選擇し、攝取し、或は拒斥して自己の生命を成長せしめなければならない。然るに懶惰なるものは刺戟に對する反應が遲鈍であり、働きかける努を厭ひ、之を選擇して、攝取し、若しくは拒斥する氣力を缺き、生命の成長を努めざるものである。又是等の外來の刺戟の中には必然的に我々の人格を害するもののみならず、特に人格の尊嚴を傷つけむ事を意圖した刺戟も存在する。例へば我等の人格全體を弛緩せしめる官能的快感の刺戟や、不義の名利の誘惑があり、又我々の人格の尊嚴を特に傷つけむことを目的とする侮辱がある。是等の刺戟に對しては我々は常に溌剌として活動的なる中核を以つて働きかけ之れを拒斥しこれと戰はなければならない。人格の尊嚴は斯くの如き不斷の精神的戰ひに依つて始めて支持する事が出來るのである。我々が外來の刺戟に對して身を任せ、誘惑を拒斥せず、侮りを防がないならば、如何にして人格の尊嚴を保つ事が出來るであらう。「諸々の煩惱の賊」を征服しないならば「勝幡を道場に樹てる」事は出來ない。「男子門を出づれば」必ず出會ふ「七人の敵」に對してその侮りを防ぐ事が出來ないならば、人格の尊嚴は決して保つ事は出來ないのである。又是等の外

面的活動のみならず、我々の人格の内面に於いて、不斷の精神的活動がなければならない。則ち所謂道德的精進である。懶惰の最も厭ふべきは此の内面的活動の忌避である。我々は人格の向上を圖る爲めには常に自己の現實の相を反省し、之れを克服しなければならない。然るに懶惰なるものは自己の現實を克服せんとする氣力を缺くばかりでなく、之れを反省せんとする意志さへも起こさないのである。道德的精進の念力を全然起さないのである。蓋し總べての活動の中に於いて道德的精進は最も內面的な活動であつて、人格の中核の緊張を要するものであるが故に、最も反射的の刺戟に對する反應的活動さへも出來得る限り避けむとする事、例へば眼前の棚の上に在つて食慾を刺戟して居る牡丹餅に對してさへも、强ひて之れを取る勞を惜み、それが寢轉むで居る口許まで落下するまでは敢へて動かない程の怠け者が、緊張せる精神の中核に於いてのみ、生きた事實である道德意識に關して、努力の念を缺くのは已むを得ないといはなければならない。而も懶惰なる者は必ずしも無慾であつて、心が貧しいのではない。彼等はたゞ自己の慾を遂げる爲めの努力を厭ふのに過ぎない。努力せずして慾を遂げむとする事こそ懶惰の特質である。怠け者は多くの場合又大食家であつて、その理想とするところは出來るだけ勞せずして出來るだけ大食

せむ事である。飽滿して、肥え太り、昏々として眠らむ事である。若し勞せずして獲られるものであるならば、官能的快感も名利も彼等の厭ふところではない。たゞこれらのものが勞なくして得られないが故に之れを求めないと云ふに過ぎない。若し彼等が富貴の家に生れたならば、その幸運を生かす事能はざる安逸無能の民として、人類の重荷であり、若し貧窮の家に生れたならば衣食の爲めに働く事を厭ふ彼等は乞食となるより外に道がない。いづれにしても人類の寄生蟲であり、厄介者である。我々が一個の生命を享けたる意義は、その生命の内に含まれたる可能性を實現發展せしめる事に依つて、必然的に生ずるところの自己の個性に適する創造的活動を以て何物かを人類の文化に寄與するところにある。然るに懶惰なるものは自己の天命を全うする事は勿論、創造的活動の如きは尙更忌避するところである。又懶惰は自己の衞生に對してさへ、勞を厭ふが故に、それは不潔とならざるを得ない。活動の便宜と能率を慮らないが故に亂雜無秩序とならざるを得ない。自己の服裝や容貌の端正を保たむとする努力を怠るが故に無精とならざるを得ない。殊にそれが女子に於いて表はれる時には女子が此の地上に於いて負ふて居る使命の最も重要なる一つであるところの、地上の美の精として此の地上を飾る事が出來ないばかりでなく、

其の不潔と無精と亂雜とを以つて此の地上を醜くし、空氣を沈滯腐敗せしめ、我々をして生きるに堪へざらしめる。活動と創造を喜ばず侮りを防ぐ事能はざる男子と、美と端正とを願はず、審色を飾る事を欲せざる女子とに依つて依つて作らるゝ世界は如何に厭ふべき窒息せしめる世界となるであらう。垢面蓬髪にして犬の如くに食を人の門に乞ひ、或は不潔にして汚穢の中に逸居して豚の如くに大食し、肥滿し、惰眠を貪る者が卑しむべきであるのは云ふ迄もない。併し乍ら我々が已に或る程度の人格を保ち、地位を得、他人の尊嚴を贏ち得たる後に於いても、尚自己の人格の現實を反省する事を怠り、より高き境地に向つて成長する事を努力せざるものは又懶惰として卑しまなければならない。我々にとつて最も警戒を要する懶惰は寧ろ此の種であつて、精進に倦む事である。それは我々が次第に高く成長するに從つて、自己の周圍に自己を鞭打つに足る人格者少く、神の外に恐る可き者を持たざるに到るに及び、我々に取つて恐るべき誘惑である。勿論かゝる人には多くの尊敬者や、追從者の群が有るのを常とするが故に、自己の現狀を打破して神の外には知る者無き自己の醜狀を彼等の前に暴露して、自己の名譽ある安固なる地位を放棄する事は困難なる戰ひを要する事となる。又自己の精進が自分の周圍の者の平和と安樂とを破らざ

るを得ない時に、かゝる精進は又「同情」との苦しき戰ひを要するものとなる。此の時に於いて神の外責むる者なき自己の現狀に停止して、一層鋭き反省と、より高き登攀とを避けむとする誘惑の生じる事は同情に値ひする。又一つの克服と登攀とが他の無限の克服と登攀とを惹起するときに、而も次第にその戰ひが困難となる時に、漸くその精進に倦み來たる事も亦同情に値ひする。併し乍ら此の同情すべき誘惑をも尙我々は懶惰として卑しまなければならない。彼のダンテの神曲の淨罪の山を登攀する靈魂や、又ニーチエのツアラトウストラの不斷の自己超克の戰ひの如く、倦む事と怠る事とを鞭打たなければならない。ツアラトウストラは懶惰を高貴の精神に反するものとして實に峻嚴に輕蔑して居る。彼は永劫回歸の恐る可き思想を克服して、不斷に繼續するところの。而も決して終息することなき自己超克の旅程を人類の靈魂に課したのである。これこそ懶惰の反極である。故に超人にとつては、一つの克服の勝利に安ずる事は已でに懶惰である。ツアラトウストラは「汝、我が必然性よ、總べての小さき勝利より我れを防護せよ」と云ひ、「我が意志よ、汝が汝の勝利に於いて不撓なるを得む爲めに、汝の最後の爲めに、汝の最後の偉大を愛(おし)め、嗚呼、何人が其勝利に屈服せざりしぞ」と云つて居る。總べて自己の內なるあらゆる力の可能

性を可能性の儘に眠る事を許す事は懶惰である。かの佛教の涅槃と云ふが如き靜寂なる境涯は、リッブスも云ふが如く、總ゆる力の平衡若しくは調和であつて、それ自身積極的なるものである。總ゆる我等の內なる力の可能性は、それ自身に於いては善であつて、尊重されなければならない。從つて實現解放さるべき權利を持つて居る。唯だ是等の總ゆる力が一つの人格の發現として一つの全體に統一されなければならない。我々はそれが我々の人格全體の成長に役立つ度に從つて是等の力に上置と下屬との秩序を與へて一つの系統に包攝しなければならない。此處に我々の精進の一つの課題としての靜的努力が生じて來る。我々が或場合衆人を離れて孤獨を守り、靜所に閑居し、密室に祈禱し、山中に瞑想し、面壁して坐禪するのはそれが我々の全人格の成長の爲めにその場合必要だからであつて、街頭に出でゝ民衆の間に奔走するのと同じく積極的精進である。山に隱れる事は或る場合市に現はれる事と同じく、自我の成長の爲めに必要である。全人格の成長の爲めには或る場合或る慾望を捨離し、愛する者と別離し、一見消極的無爲と見ゆるが如き生活をも選ばなければならない事もある。斯くの如き靜寂、孤獨、若しくは無爲は決して懶惰ではない。併し乍ら當然解放さるべき自我の慾望が內に在るにも關らず、他人の思はくを憚り、周圍

に惹起する風波を怖れ、或ひは安逸を求め、面倒を避ける爲めに、その慾望を解放、追求せざる事は懶惰である。或る時は斷念せざる事が懶惰であり、或る時は斷念する事が懶惰である。全人格の成長、自我の向上の爲めに努力する事が精進であつて、その反對が懶惰である。我々は自我の成長の爲めには總ゆる階段の心境を先づ一度把握し、然る後これを超克しつゝ登攀して行かなければならない。是れ絕間なき精進の旅程であつて、把握すべき時に把握せず、超克すべき時に超克せず、現在の安逸を偸む事を懶惰として卑しまなければならない。人格の尊威を重んずる者はたゞその尊威の感覺の爲めにのみ精進する。その點を刺戟される時恰も駿馬が拍車の打擊を感ずるが如く、全生命の鼓動を感じて邁進する。彼のツアラトウストラの如く、此の感覺の鋭敏なる者にとつて、彼が已でに、多くの克服の勝利の後、雲雷を己の脚下に俯瞰する程に向上した時に、彼にとつては已に諸々の卑しむべきものは征服されてあるが故に、此の場合尙彼にとつて卑しべきものたり得るものは、たゞ懶惰のみであらう。則ち我々は懶惰を唯一の卑しむべきものとなす程、向上しなければならない。而して此の卑しむべきものは、我々の向上の最後迄我々にとつて卑しむべきものであらねばならない。

# 自卑に就て

自卑とは自己の人格の尊嚴を自から傷つけることである。上來列擧した卑しむべきものは總べて無意識的に自己の人格の尊嚴を傷つけて居るものであるが、自卑は自から意識的に自己の人格の尊嚴を害ふものである。卽ち人格に對する最も直接な露骨な冒瀆である。謙遜は自己の人格の尊嚴を重ずる心の爲めに、止むを得ずして自己の醜さを、良心の痛みを以つて承認するのであるが、自卑は自己の人格の尊嚴を重んぜざる心の爲めに、自己の醜さを、良心の痛みなくして承認するのである。其處には最早人格の尊嚴に對する感覺がない。故に其處には一切の恥辱といふものが成立しない。我々は自卑者に對して人格の尊嚴の原理を當て嵌めて責める事が出來ない。僞善者は自己の惡を善の假面を以つて隱蔽せんとする虛僞であるが故に、勿論卑しむべきものであるが、其處には尙少くとも自己の人格の尊嚴に對する感覺がある。恥辱の念がある。それは人格の尊嚴の原理の尙支配し得る世界である。併し乍ら自卑は此の原理の支配以外の治外法權の別世界である。故に我等はたゞこれを輕蔑し得るのみであつて、如何ともする事が出來ない。其處には

論議と妥協との道が絶えて居る。愧づる處なく「自分は嘘吐きである」として任ずる者に對して嘘をついた事を責める事は無意義である。恐らく彼等はかく任ずる事に依つて、自から嘘を吐き乍ら、嘘を吐かずとなす僞善者より優つて居るとなすかもしれない。併し乍ら彼等に果して僞善者を輕蔑する資格があるであらうか。嘘吐きを以つて自から任ずる者は嘘を吐く可からずといふ道德原理を超越せるものでなければならない。然らば如何なる原理に依つて僞善者を輕蔑するのであるか。それは矛盾であると云はなければならない。僞善者を輕蔑し得る者は「嘘を吐く可からず」と云ふ道德原理を承認しながら、嘘を吐いた事を認めるところの、從つて此の原理を以つて攻撃し得るところの謙遜者のみである。故に自卑者は僞善者を輕蔑する矜りさへも持つ事は出來ない。然るに事實に於いて、殆どすべての自卑者が僞善者を輕蔑するのは何故であるか。思ふにそれは自卑なる者は一つの自から支持し能はざる、矛盾の立場であつて、實際には自卑者と雖も「嘘言を吐く可からず」と云ふ原理を承認して居るのであるが、それを承認せざるが如く自から欺くのである。卽ち自卑は一種の僞惡である。故に彼等は僞善者を非難するとき、無意識的に此の原理を適用するのである。自卑は眞の意味に於いては最早何の矜りも持たざる自棄となるに

及むで始めて徹底する立場を得るのである。「我等は極重惡人である」と宣して自から任ずるものが、僞善者よりは稍々優れりとして何等かの矜持を持つ事は矛盾であるといはなければならない。故に自分はかの眞宗の惡人成佛の教理を救ひの條件として絶對に善を必要としないと云ふ意味でなく、事實として我々が何等の善をも持つてゐないと云ふ意味に解釋する事には反對する。若し然らば、親鸞のあの否定すべからざる矜持は何處より生じるのであるか、思ふに是等は一種の自欺である。自卑は謙遜と正直とが傲慢と虚僞とを憎むのあまり其の反動として自己を誇張したる變態である時、始めて道德的意義を持つところの誤謬となる。多くの自卑者には斯くの如き者がある事を見遁す事は出來ない。斯くの如き自卑者は同情すべきものであつて、其處に却つてある正直さが現れるが、それが苟くも人格の尊威を認めざる事を標榜する限りに於いて、卑しむべきものである事は免れない。自からを卑しむべきものとして承認したと云ふ事實は人格の冒瀆として牢として消す事は出來ない。

　自棄は何等の矜持をも持たず從つて他人に對する非難の感情をも起す事なく、自己を罪惡と低卑とに委ねるのである。かの或種の帮間が自己の人格を客の侮蔑と戯笑とに任せて自から恥づる

事なく、客の如何なる無禮なる要求にも唯々として從ひ其の好笑柄とならん爲めには總ゆる自己侮蔑の行爲を成して恬然たるが如きはこれである。又或る種の娼婦が自己の身體を他人の肉慾に提供して、最早何等の羞恥を感ぜざるが如きこれである。或ひは或る種の乞食や泥棒が自己の所業に對して何等の恥ぢも悔いもなく、より良き生活に就かんとする意志を全然缺いてゐる如きこれである。此の種の自卑者に對しては、我々は人格の尊威や、道徳的の原理を以つて說服する手懸りなく、彼等により善き道を勸進する方法も絕えて居る。何等の矜持をも持たざる者を道徳的に刺戟する事は不可能であり、より善き生活を願はざる者には如何なる善も無意味である。十人の人も一頭の飮む事を欲せざる馬に飮ましめる事は出來ない。勿論人間が斯くの如き自棄の狀態に陷るとすれば、それが先天的痴呆や、精神病者にあらざる限り、其處に深刻にして悲痛なる事情が存在するであらう。併し如何なる事情が存在するにもせよ、自から意識して自己の尊威を放棄する者は總ゆる卑しむ可きものゝ中にて最も卑しむべきものでなければならない。

最後に尙此處に一つの特殊な自卑がある。それは僞惡である。自棄は道徳に對する無自覺であるが、僞惡は道徳に對する謀叛である。前者はアモーラルであり、後者はアンチモーラルである。

僞惡は惡に對する趣味である。加擔である。僞善も僞惡も共に虛僞として卑しむ可きは勿論であるが、僞善は少くとも善に對する尊重を標榜して居るのに反し、僞惡は善に對する敵意を標榜するものである。故に僞惡の卑しむべきは、それが虛僞であるといふ點のみではなく、又それが善に對する反逆であり、從つて自己の人格に對する侮蔑である點にある。自己は惡人なりと標榜する事は自己の人格に對する侮蔑でなくて何であらう。それは實に白晝公然たる自己侮蔑である。然も僞惡者は此の事を矜持を持つてなすのである。總べての謀叛者が矜持を持つて居るやうに、かの神に反抗する惡魔が矜持を持つて居るやうに、善に對する叛逆者たる僞惡者も亦矜持を持つて居る。此の點に於いて僞惡者は何等の矜持をも持たざる自棄者よりも優つて居る。併し彼が矜持を持つのは善人が自己の善に對して持つ矜持ではなく、又自卑者が心密かに持つ正直に對する矜持でもなく、自己の惡に對する公然たる矜持である。善に對して反抗し得る力の感覺に伴なふ矜持である。それは力の感覺に伴ふ矜持であるが故に、少くとも形式上人格の尊威の感覺と有緣である。之れ自棄の無緣なるに比して優つて居る所以である。併し乍ら其の力は善に對する謀叛に奉仕するものであるが故に、強ければ強いだけ自己の人格の惡を證しするものである。故にそ

の力を矜る事は錯誤である、顚倒である。僞惡は善に對する公然たる反抗としては憎むべきものゝ中最も憎む可きものであり、其の最も憎む可きものと結合した虛僞である點に於いて、及び自己の人格の侮蔑を却つて矜持とする點に於いて、其れは他に比類のなき特殊な卑しむ可きものである。それは佛敎に所謂「正法を誹謗する罪」若しくは基督敎に所謂「聖靈を瀆す」罪であつて、赦さる可らざる罪とされて居るものである。神佛の憐れみにも洩れる罪とされて居るものである。

併し乍ら尚立ち入つて考察するとき、僞惡とは奇異なる槪念といはなければならない。僞惡は僞善と對立する反對槪念である。然るに僞善とは善人の假面を被むれる惡人の意味である。故に僞惡とは惡人の假面を被むれる善人の意味でなければならない。然らざれば我々はたゞ惡人の一種と呼ぶべきであつて、僞惡者と呼ぶべきではない。然るに我々は何故に之れに僞の字を附するのであるか。そこには極めて深い意味が含まれて居る。卽ち我々は人間の本性を善なるものと考へざるを得ないのである。人間は人間である限り、本來善を貪び、惡を卑しむものである事を不知不識の間に信仰して居るのである。故に彼の本心から惡を好み、此れを矜るとは考へる事が出來ないのである。それは我々にそれ自身に矛盾の感を與へるのである。故に我々が此處に惡を矜る

一人の人間を見る時に、それは僞りであつて、彼の本心からではなく、彼の本性は依然として善を好み善を矜るものであると不知不識の間に推定して居るのである。故に我々は僞善者に對立する反對概念として彼等を僞惡者であるといふのである。故に我々は彼等を惡人の假面を被むれる善人として考へて居るのである。此の事實は實に有難き事實である。而して恐らくはただに我々が之れを先驗的に要求せざるを得ないばかりでなく、又事實として眞理に中つて居るのである、自分は總べての僞惡者は僞りの惡人であると思ふ。若し彼等が僞りでないならば、彼の持つて居る矜持は何處から來るのであるか。假令それが誤謬の上に成立する矜持であるとは云へ、苟くも彼れがそれを人格の力として矜る以上は、彼の内に人格の尊威の意識、善の太源が存在する事を豫想しなければならない。否一層深く考察すれば、ただに僞惡者のみならず、自棄者に於いても亦彼が人間である限り、全然自己の矜持を棄て去つて平然たり得るとは思はれない。少くとも心に痛み若しくは曇りを、如何なる場合に於いても何等かの抵抗を感じるであらう。すらすらと水の低きに就く如くなす能はず、何ものかに逆うてなす感じを持たないわけには行かないであらう。然らば自棄者も亦僞りの自己侮蔑者である。また自卑者が僞惡者の一種である事は我々の既に考察した

ころである。然らば此の三つの概念は本來自家撞著の概念であるこいはなければならない。卽ち彼等は自から僞つて居るのであつて、自己侮蔑者の如く粧うて居るのに過ぎない。故に彼等の卑しむ可き點は眞正に自己侮蔑者であるところにあるのではなく、自己侮蔑者こ僞るところにあるのである。若し然らずして斯くの如き顚逆の顚倒が人間の本性から行はれ得るものこすれば、我々は人間の概念そのものを根本的に改約しなければならない。自分は人生に對する信仰を失はなければならない。故に自分は總べて此の種の罪惡を虛僞の一種に還元する。唯だその虛僞が神の律法こ自己心内の聖靈の聲に反逆するものである點に於いて、且つそれを公然こ標榜する點に於いて特殊な深き罪惡こなるものであるこ思ふ。虛僞を厭ひ乍ら、虛僞に陷つて居るところに其の同情すべき誤謬があり、それが人性の最深の罪惡を賭して居るところに悲壯なる冒險がある。併しそれは實に恐るべき事である！

以上自分は卑しむべきものを檢査し、その性質を吟味し、その由來を闡明し、その卑しむべき度を測量した。人性の卑しむべきものは尙之れを以つて盡きないであらう。併し恐らくは同樣な

由來と性質とを持ち、同樣の原則に依つて量定せらるべきであらう。卑しむ可きものは總べて人格の尊嚴の感情の缺乏より生じる。それは畢竟自己に對する罪惡である。他人に害惡を與ふる場合に於いても、それが卑しむ可きものとなる所以は自己に對する尊嚴の不足にある。一層適切に云へば自己の内に嚴存するところの、自己ならぬ公なるもの、萬人に普遍する道、之れを宗教的に云へば、神の屬性が個人に内在分有されて居るところの、聖靈に對する反逆である。我々は卑しむべき行ひを爲す事に依つて、憎む可き行ひを爲す事以上に、自己の内なる神に叛くものと云はなければならない。

# 心なき業に就いて

此處に自分が考へるのは人格の「仕上げ」と「磨き」とに就てゞある。我々は憎む可きものや卑しむ可きもの等の罪惡を犯さないと云ふだけでは、人格が未だ完成したとは云へない。それ以上に我々が若し眞に高貴を願ふならば、人格の仕上げと磨きとが充分に行き屆かなければならない。我々のカルチュアとはすなはち此れである。我々は一つの玉の如くに圓滿にして完成せる人格とならむ事を願はなければならない。固より斯くの如きは或る人々に取つては、有閑にして餘裕ある議論立てゞあらう。若し我々の生物學的存在を維持する事さへ脅やかされて居るならば、我々は先づ其の保證を得る爲めに心身を勞して餘裕無く、道德の問題さへも省みる事が出來ないかも知れない。今日の或人々が云ふ如く、我々が生命を脅やかされる時、暴力や殺人等の憎む可き行爲も肯定され、我々が食に飢ゑる時、窃盜や、賣淫等の卑しむ可き行爲も是認されなければならないかも知れない。故に憎む可き卑しむ可き行ひより自由となれる限りはそれ以上を要求するが如きは贅澤の沙汰となさるゝかも知れない。自分が此處に考ふるが如き問題は「衣食足つ

て」後「知る禮節」の問題であつて、衣食足らざる者に取つては無意義であるかも知れない。自分はかゝる言說には充分に同情し得る者ではあるが、自分はその人間的同情を歷へて、少くとも次の二點を主張して置かなければならない

　第一に我々が人格の仕上げと磨きとに於いて最も完成したる人と考へる聖人は、必ずしも所謂衣食の足つた人では無く寧ろ物質的貧窮の中に暮して居た人である。聖貧の士である。「疏食を飯ひ、水を飮み、肱を曲げて枕」した孔子や、食を人々の門に乞ふたフランシスである。殊に自分が此處に特に考へんとする心なき業に就いて、最も纖細にして銳敏な神經を持つて居た彼の良寛の如きは鍋を洗ふにも味噌を擦るにも一つの鉢を用ひた程貧しさを極めた人である。故に人格の仕上げと磨きとは必ずしも衣食の足つた者のみに意義ある問題であるとは思へない。固より一般の人に取つてカルチユアの問題が衣食の問題よりは緊要で無いのは當然である。衣食足らざる時人格の仕上げや磨きに心を配るだけの餘裕の持ち難き事も當然である。併し此處に嚴肅なる當爲の問題に就き我々の人間的同情を超克して考へる時、彼の聖貧の人が既に達し得たところの人格的完成は、一般の人々に對しても、貧富に關はらず、課せられなければならない道德的意義ある問

題でなければならない。我々が往相の世界に立つ時(「道心の三つの相に就いて」參照)危急に迫れる人間に取つても尙殺人は惡である。饑餓に瀕せる女に取つても、賣淫は猶卑しむ可き行爲であり、寺門に施しを乞ふ乞食に取つても、良寬の所謂「布施の多い少い云ふ事」は心なき業である。第二に我々は凡そ當爲の問題に就いて考ふる時、リツプスの云ふ如く我々の個人的制約を離れて、一般の問題として考察しなければならない。卽ち我々の主觀的事情は如何にもせよ、凡そ一人の人間が其の人格價値を最後迄徹底して求める時、我々は如何なる事を心懸けなければならないかの問題を考察しなければならない。卽ち一般に人間としての立場、人類としての見地に於いて、考察しなければならない(リツプス倫理學の根本問題參照)。故に人格の仕上げと磨きとの問題の如きも、只だ有閑階級のみの問題としてゞはなく、總べての人類に通ずる公な問題として意義を持ち得るのである。我々の生存の意義、凡ての價値の究極は人格價値である。我々の衣食住は此の價値を生かすための條件である。故に我々の衣食住が安定した時、我々は必然的に人格價値を追究して遂に其の仕上げと磨きとの問題に迄到達す可き筈である。故に衣食住が安定すると否とに關はらず、我々の人格の仕上げと磨きとの問題は依然として常に我々の究極の問題になる

のであるが、たゞ我々が、不幸にして衣食住の安定を缺く時、其處迄手が屆かないのに過ぎない。然もそれは一般の人の常であると云ふに止まり、聖人は衣食住の不安定の中に於いて、反つて人格の仕上げと磨きとを成就したのである。否寧ろ人格の仕上げと磨きとを成就せむが爲めに、衣食住の不安の中に生きざるを得なくなつたのである。固より我々は聖人ではない。併し乍ら我々が理想を設定せむとする時、我々は自己を聖人の道にも堪へ得る者として、即ち其の道に從つて少くとも自己を責め得るものとして、考へなければならない。然らざれば、凡そ道德の問題を論ずる事は初めから無意義となるからである。

　我々の人格の仕上げと磨きとに於いて、我々が最も戒めなければならない事は心なき業である。我々が已でに憎む可きもの、卑しむ可きものとして考へなければならない如き罪惡から拔たれたる後は、我々は自己の人格の尊嚴を棄却し、汚辱するが如き著しき不德を犯さないであらう。他人から爪彈きされ、面を反けられるが如き所業は爲さないであらう。少くとも我々は相當の品位を有する人格として他人の前に通用するであらう。併し乍らそれは我々が人格として通用したと云ふに止まり、我々の人格が特に他人を牽き附け、尊ばしめ、慕はしめる力は其れ以上の人

格の匂ひ、空氣でなければならない。況して自分の德の爲めに他人を德に導き、善に化せしめむが如き virtue はそれ以上の積極的な力でなければならない行爲である。心なき業は我々の人格の匂ひと空氣とを高貴ならしめる爲めに、必ず避けねばならない行爲である。他の如何なる美點と力とを具へて居ても、我々が心なき業を爲すならば、我々の人格は高貴であるわけには行かない。床しきものであるわけには行かない。心なき業とは、心使ひなき業である。思ひ遣りなき業である。同情なき業である。其れが最も人間的な形を取つて現れる時は、無智や、無作法や、我儘となつて現れるのであるが、此等の行爲の生ずる根本は、凡そ調和に對する感覺の缺乏に存する。凡そ「調和的」なるものを愛する心が乏しいところより、凡ての心なき業が生ずるのである、凡そ調和的なるものは、此の世界に於いて最も高き心である。美である。力の感じさへも此の境地に於いて は、一つの均衡を保つた靜けさとなるのである。我々は天的なるものを調和的なるものとして描かざるを得ない。故に一つの人格が高貴である爲めには、其れは豐かであり、力強くあるだけでは不充分であり、その上に調和的なるものでなければならない。「和氣」は君子の最後の德でなければならない、此の凡そ調和的なるものに對する愛が乏しく、感覺が鈍き時、我々は上は造物主に

對し、下は草木や無生物に對して心なき業を爲すに到るのである。此れを支那風に言ひ表せば凡そ「禮」に對する感覺の缺乏より總べての心なき業が生れるのである。例へば、此處に少數の親しき人々が集つて晩餐會を開いたとき、若し其處に一人の招かれざる客が侵入して來たとする。此の場合、其の客の行爲が、心なき業であるとすれば、其れが其の晩餐會の調和を破るからである。併し乍ら若し其の招かれざる客が優れて德のある人であり、又集れる人々が同じく德のある人々であるならば、其の侵入者は却つて一座の調和に刺戟と變化とを與へて、其の調和を一層豐富に、力強くせしめる事も出來、又集へる人々は其の侵入者を受け入れる事に依つて、其の晩餐會を一層樂しく生々させる事も出來るのである。卽ち我々の調和に對する德の如何に依つて一つの行爲が心なき業ともなり、或ひは無邪氣な行ひともなるのである。又例へば前にあげた良寛の所謂「布施の多い少い云ふ事」が心なき業となるのは、たゞ彼が慾深いと云ふだけからでは無く凡そ與ふるものと受ける者との間の調和の感覺の缺乏の爲めである。我々は與ふる者が無私の動機を以て、又物吝しみせずして與へ、受くる者が此れを强ひざるは勿論、物質の多少を問はず、此れを感謝して受ける事に依つて、初めて授受の問題に關する調和の意識に達するのである。故

に「布施の多い少い云ふ事」は施す者の如何を問はず、其れは受くるもの丶側に於ける心なき業である。故に同じく良寛は「くれて後其の事云ふ」事を以て心なき業の一つとなして居るのである。此れ受くる者の如何を問はず、與ふるもの丶側に於ける心なき業である。此の二つの行爲は共に授受の問題に關する調和の感覺の缺乏より生ずる。又失戀の人の前にて戀の幸福の話をする事が心なき業となるのは相手にその寂しさを增さしめる事を慮らざる相手と、場處と、時との宜しきに適はざる無感覺の爲めであつて、相手を悲しましめむとする事を意圖して爲す無慈悲の行爲と同一ではない。此の場合一人の人間が失戀に苦しみ、他の人間が戀を得て喜び、其の二人が語り合はなければならないと云ふ一つの不調和な出來事に對して感覺鈍きところより生ずるのである。若し其の感覺鋭き者は出來るだけ其の不調和を目立たしめざるやうに爲す筈である。更に一層立ち入つて考へれば、此の不調和をも調和と感じ得る程に此の世界の調和を願はずには居られない人は、かゝる行ひをも心なき業となさずして、失戀の人と戀に浸れる人と、共にその戀に就て語り合ふ事を最も強くして、深き調和ある事と感じ得る迄滿足しないであらう。故に調和の求め方が公であり、男性的であり、悲壯であり、一言にして盡せば積極的である場合と、私的であり、

女性的であり、偸安的であり、一言にして盡くせば消極的である場合とは、我々が心なき業とし て考へる行爲も自ら相異して來る。我々は出來得る限り積極的な處に於て調和を求めなければな らない。例へば病人の傍にて花見の話をするのは普通の場合に於いては心なき業である。我々は 其れを思ひ遣りなき行爲と考へるのである。併し乍ら其の病人が若し素直にして且つ强かつたな らば、他人が花見の話をして呉れる事を喜び、若し自分を憐れむで花見の話を避けるならば、却 つて心に適はないであらう。現に自分の如きは長き鍛錬の後、今日に於いては、他人の話を素直 に聞く事を喜び、他人が氣兼ねする事を却つて苦痛とするに到つて居る。此の場合に於いて病人 の傍にて花見の話をする事は必ずしも心なき業ではなく、寧ろ其れを心なき業と感ずる事は、病 人の側の德の不足である。その病人は其の人を羨まずして、其の花見の光景を聞く事を喜ぶ程素 直になる可きであつたのである。其れは病人が負はなければならない試みなのである。我々が調 和に就いて考ふる時、我々は個人的制約を離れて――卽ち病む者が自分であり、花見る者が他人 であると云ふ意識を離れて、一般に一人の病人と一人の健康者との間の調和として、最も積極的 なる處に調和を求めなければならない。積極的なる調和とは積極的により大なる生命價を創り出

さむが爲めに負はしめて求めるところの調和である。例へば此の病人と健康者との花見の場合に於いて、出來る限り生命價を大ならしめる調和は、病人に羨望を克服せしめ、健康者に姑息な同情を克服せしめ、病人は素直な心となつて耳を傾け、健康者は病人を慰めんが爲めに物語る事に依つて一つの調和を求める事である。從つてかゝる調和は一つの悲壯である。凡そ克服と悲壯とを伴はずして一つの悲劇的事件を調和に導かむとする時、其れは姑息なる偸安とならざるを得ない。負ふ可きものを負はしめずして調和を求める事は消極的なる卑屈である。心なき業は思ひ遣りなき業ではあるが、其の思ひ遣りが私的にして人間的なる時、所謂婦女子的若しくは好々爺的同情となつて、彼のツアラトウストラの嚴しく排斥したところのものとなる。斯くの如き人間的同情は我々の成長を阻むものである。故に心なき業は我々が眞に同情すべき時に、同情なき行爲をなす事でなければならない。同情すべき時に同情せず、不必要なる場合に思ひ遣りなく振舞ふ事でなければならない。例へば忠臣藏の判官切腹の場に於いて、檢死と城受取りの役人たる石堂と、藥師寺との二人の使者に於いて、石堂の示した同情と寛大とは當に同情すべき時の同情であつて、彼は役目に反して居るのではない。併し藥師寺の振舞ひは同情すべき時に

同情せず、然も不必要なる時に思ひ遣りなく振舞ふのであつて、心なき業の典型的なるものである。我々は主君の安否を氣遣つて息せき馳せつけた由良之助が、然も檢死の役人を憚つて進み兼ねて居る心と、其れを知つて、既に切腹したる主君の傍に咫尺する事を許し、促す石堂の心との間に最も時と場所とに相應しき調和を感ずる。之に反し、悲嘆に暮れて居る家臣達の心と、已むを得ずして此の無慈悲な役目を仰せ附かつたのに過ぎ無い藥師寺のあらけなき心との間に不適當にして不必要なる不調和を感じざるを得ないのである。凡そ必要であるか、不必要であるかと云ふ事は心なき業であるか否かを決定する最も重要な標準の一つである。それが必要である時は、已むを得ないものとして許される行爲も、其れが不必要である時、其の行爲を出來得べくば爲さゞらんと欲する心が無かつたと云ふ點に於いて、動機上許し難きものとなる。例へば他人の罪惡を責めると云ふ事は他人を悔い改めしめ、若しくは道德の尊嚴を維持する爲に必要である場合には、其れを爲す事を欲しない乍らも、已むを得ずして敢て爲す場合もあるであらう、併し他人が既に其の罪惡を認め、且つ其れを悔い改めて居る時、猶此れを責むる事は不必要であるが故に心なき業である。此の意味に於いて、逃ぐる敵を追ふ事や、人の嫌がる點に觸れる事や、自己の幸福を不幸な

る者に見せびらかす事や、動物を虐待する事や、草木を傷附ける事等は心なき業である。生業(なりはひ)の爲めにすなどり」する事は許されても、なぐさみに鳥魚を殺す事は心なき業である。職務の爲めでなく、他人の罪惡や過失を發く事は心なき業である。他人の無邪氣な試みや催しに、けちを附ける事は心なき業である。他人が矜つて居る時、其の「鼻を折る」事は心なき業である。童子が積み重ねて居る石を押し崩す鬼の如く、總て他人の企てを何の必要もなく此れを毀す事を喜ぶこころの心なき人が如何に世間に多い事であらう。又一つの法規がある時、不必要に杓子定規を以て其の内容を解釋し、其の適用を面倒ならしめる官吏の行爲の如きは心なき業である。

又或行爲は假令其れが必要であつても、時と場合のよろしきを得ない時は心なき業となる。例へば過失を重ねる子供や、召使や、弟子等に對して、それを戒しめる事は必要であつても、他人の面前にて此れを叱咤するが如きは心なき業である。他に適當な時と場處とを選ぶべきである。祝ひの爲めの催しの席にて、餘り眞面目(シリアス)なる、人々の心を緊張せしめ過ぎる演說を爲すが如きも其の内容が其れ自身に於いて如何に立派であつても、心なき業である。出立の準備に忙しく或は何事かに心を奪はれて餘裕なき時、眞面目なる、また入組んだ相談を持ち掛ける如きも心なき業

である。我々の生理的必需と云ふものは必要と云ふ點に於いて、最も典型的なるものであるが、同時に最も時と場所との適當を要する點に於いても典型的なるものである。生理的必需が時と場所との適當を缺く時に生ずる心なき業は極端なる無作法となつて現はれ、自他の威嚴を傷付けないでは置かない。其の具體的な例を擧げる事は避けよう。其れは又一つの心なき業であるからである。

我々の禮儀若しくは作法と云ふものは、調和に對する我々の感覺が、日常生活的な部分に現はれたものである。即ち此れに從ふ時、我々の日常生活が、最も調和ある形を取る事が出來るのである。固より不調和な心を以て禮儀作法の形式を取る事が調和を生み得ない事は當然である。併し乍ら我々の心が素直である時、我々の調和を愛する心が、其の形を取る時最も良く生かされるのである。斯くの如き形式の一つの系統となれるものが禮儀作法である。固より禮儀作法の形式は固定せずして變更すべきものである。又必ずしも或る一定の禮儀作法に從はなければならない事はない。併し禮儀作法には其の生じ來つた原因と由來とに正しき意義があり、何等かの形に於いて我々が禮儀作法を持たないならば、恐らく我々の生活は文化（カルチュア）あるものとなり得ないであらう。

我々は禮儀作法を生み出す力を尊ばなければならない。我々は天國を想像する時、其處に最も自由なる美しき形に於ける「禮」の理念を思ひ浮べざるを得ないのである。支那に於いて、古來「禮」を尊び、詩、書、樂等と共に士の必ず修むべき德となされ、彼の「禮記」の如き精緻なる典範を生じた事は、其處に、ある經世的な目的が含まつて居るとは云へ、東洋人の心が如何に調和と高貴とを愛して居たかと云ふ事を示して我々をして敬意を持たしめるに足る。故に我々が禮儀作法に反する行爲を爲す時、其れは又心なき業となる。其の父母に敬語を使はぬ子女や、老人や、長者に推讓せぬ若者や、師を敬はぬ弟子や、先輩を輕んずる年少者の行爲は心なき業である。斯くの如きは固より人間が人間として對等である事を認めた上に於いて、其れ以上に生ずる或る意識である。人間が人間として對等であるが故に、師弟や、親子や、長幼の序別を無視するが如きは卑屬にして、淺薄なる心である。我々は父母や、師や、長者を敬ふ事に依つて、些かも自己の人格が傷められたと感じない。寧ろ其の反對をなす事に依つて、自己の人格の粗野なる事を感ずるのである。ダビデがエホバの祭壇の前にぬかづく事に依つて、ダビデの王としての威嚴は少しも傷付けられない。キリストがヨハネの前に跪いて其の洗禮を受けても基督の神の子としての尊嚴は少し

和紀郎子が王仁の爲めに履も損はれない。クララがフランシスの足下に俯して此れを拜しても、和紀郎子が王仁の爲めに履を揃へても其の淸さと尊さとは毫末も減ずる事はなく、反つて床しさを添へるのである。デモクラシーは人間が人間として對等である事、如何なる人格も其の獨立と自由とを保持する權利を有する事を原理として居る限りに於いて固より正當である。併し乍ら我々が自ら欲して、自己の人格を卑しめる事無く取る處の獻身や、恭敬や、推讓やの禮をも排斥する時に、其れは其の正しき限界を越えて居る。凡て一般的なる原理以上の個性的にして特異なる部分は、我々の凡ての文化を複雜にして精彩あらしめる積極的內容であるが故に、決して猥りに此れを排斥してはならない。我々の精神の微妙なる現れ方、感情の複雜なる陰影はかゝる特異なる部分に於いて、最も具體的な形を取つて現はれるものだからである。又純粹にデモクラチックな對人關係に於いても、其の相互の人格の獨立と自由とを尊重する爲めにも、其の共同生活を秩序あらしめ、便利ならしむる爲めにも、禮儀作法は又必要である。斯くの如き禮儀作法に反する事も心なき業である。例へば他人が自分の厚意をアクセプトするかしないかを待たずして、猥りに此れに働きかけ、相手の迷惑となる事をも顧みず、好意の押し賣りを爲すが如きは此れである。假りに學資に窮せる一

人の青年を見て、此れに學資を補助せんと欲する時、其れが純粹に好意から出て居るからと云つて、我々は只金錢を與へればいゝと云ふわけには行かない。其の青年が學資を受ける事をアクセプトするか否かを待たなければならない。かゝる神經を費す事なく、只學資を出して遣れば喜ぶであらうと思ふ人に對して、其の青年が或る侮辱を感じ、此れを拒絕したとしても當然である。其處にパトロンたらんとする者の禮儀がある。況して見知らぬ婦人に對して此れを戀慕したからと云つて、直に手紙を送り、許可を得ずして訪問し、狎れ〳〵しく振舞ふ事は心なき業である。其處に戀する者の作法がある。自分が「或る表出に就いて」の中に書いた如き凡ての粗野と、狎褻と無作法とは心なき業である。此等は畢竟相手の人格の獨立と自由とを尊重せず、且つ自己の心情が粗野にして平淺なるが爲めに、他人の心情のデリカシイを推察する事の出來ない所より生ずるものであつて、自己の人格の低卑なる事を示すものである。凡て相手の迷惑となる事を慮りなく爲す事は心なき業である。故に何が相手の迷惑となるかを知らざる時我々は心なき業を爲さゞるを得ない。故に、我々は心なき業を避けむと欲すれば、先づ對人關係に於ける日常生活の事實を知らなければならない。禮儀作法は此の事實より發生したる行爲の形式的規範である。例へば未

知の人に面會を求める時、其の人の信用して居る知人の紹介狀を持ち、豫め許可を受け、日時を定めて訪問する事が、古來禮儀作法に適ふとされるのは何處より生じるのであるか。其れは我々の日常生活の事實に於いて、多くの詐欺師や、利用せんとする者や、好奇心ある者等の訪問を受け、然も業務に忙しく、時間の制限あるが故に、正しくして緊要なる動機を持つ訪問者を、不正にして無意義なる訪問者から防がむが爲めに、紹介狀の必要を生ずるのである。又我々には種々の個人的事情に依つて、他人と面會する事能はざる場合があり、又他人との約束や、業務の能率等の爲めに時間の都合があるが爲めに、豫め承諾を受け、時日を定める必要が生じるのである。此の必要より生じた訪問の禮儀、作法を守らずして訪問した時、如何なる結果が生じるであらうか。第一に主人は客を信用する事が出來ない。然も疑つてかゝる事は心苦しい。面會を謝絕すれば客の心は傷つき、面會すれば仕事の計畫は亂され、他との約束は破れる。即ち主人の立場は迷惑なる窮境である。ディレンマである。其の結果は主客の間が不調和とならざるを得ない。故に此の不調和を避けむとする智慧の爲めに、一定の禮儀作法が必要となるのである。併し此の事實の智識なき者はかゝる禮儀作法を煩瑣にして、形式的なりとし、主人の愛の缺乏に歸するであらう。

斯くの如きは純眞にして人間らしき人々の却つて犯し易き心なき業である。自分は嘗つて西田幾多郎氏を訪問せむとして、氏が面會日を指定されたと云ふだけを以て、氏に對する尊敬を放棄せむとした事があつた。其れは事實の知識なき處より生じる生一本なる誤謬である。禮儀作法が我々に取つて必要なのはこれを守らない時、人と人との間の調和が破れるからである。故に調和を愛する者は自ら禮儀作法を重んずるに到るのである。又其れは能率上の便宜より生ずる。我々は禮儀作法に從ふ時最も能率を上げ、却つて無駄を省き、目的を達する近道を歩むのである。彼の茶道の如き精緻なる禮儀作法さへも、其れは禮を重んずる我々の「こゝろ」と、實際に必要なるあらゆる手續きとを最も簡單なる方法に據つて果さむとする原理より工夫されたるものである。即ち其の道に從ふ時、主客の間に最も美しき和樂を生じ、種々の手數からや、過失なく、最も簡素に取り運ばれるのである。又我々が雜沓の場所に於いて、或る禮儀作法を持つのは、能率上の便宜の爲めである。我々が公共の場所に於いて、傍若無人に振舞ふ事を心なき業と爲すのは其の爲めである。固より斯くの如き禮儀作法は其れが純粹に形式的となり、只便宜の爲めの手段に過ぎない時に於いては、此れに反する事は我々の人格の價値を決定する程の重大なものとはならない。我々

は所謂文明人の公共的なる禮儀作法を極めて良く守り乍らも、最も本質的なる點に於いて、卑しむ可き人格ある事を知り、又反對にかゝる形式的方面を無視し乍ら、人格の本質の高貴なる人を知つて居る。併し乍ら其れは禮儀作法を重んぜざる處に高貴さがあるのではない。又禮儀作法を守る點に於いては、卑しき人にも美點があるのである。何事も强調することを愛する或る時期に於いては、我々は「心」を愛するために、好むで形式を輕蔑する。併し乍ら眞の調和はそれに相應しき形式に宿る心である。心を盛る形式が相應しくない時、其の心も眞に調和に達する事は出來ない。例へば圓滿なる「心」の宿る最も相應しき圖形は圓である。圓以外の如何なる圖形に於いてもしかく圓滿なる「心」を現はす事は出來ない。我々は徒にフオルマリズムを輕蔑してはならない。併し乍ら如何なる場合に於いても、心は主であつて形は役である。從つて禮儀作法の形は我々の日常生活の事實が變化するに從つて變化して差支へなく、又變化すべき筈のものである。又我々の心の力（ヴアチュー）に依つて形を超越する事が出來る。例へば前の例に於いて、招かれざる客が却つて一座の調和を亂す事なくして、此れに精彩を添へ得る德を持つて居るならば、彼は招待を受けずして出席すると云ふ禮儀作法に對する違反を自分の德に據つて超越したのである。故に我々の德が成

就すればするだけ、我々の禮儀作法は無駄を省き、簡素にして美しきものとなり得る。紹介狀を持つて人を訪問すると云ふが如き禮儀は、美しき禮儀では無い。其れは惡と虛僞との存在を豫想し、是れに打ち勝たむが爲めに生じたものである。若し我々の間に欺くものがないならば、我々は只素直に門を敲けば足りるのである。天上の禮と地上の禮とは此處にも亦趣きを異にする。前者に於いては禮とは只美くしきものを最も良く生かさむが爲めの形である。後者に於いては、美しきものを醜きものより守らむが爲めの形である。天上のよき人とよき人との間の挨拶は如何に美しき禮であらう。凡そ人と人とが挨拶を換はしてゐる光景は地上に於いて最も美しきものゝ一つである。自分は其の美を見出し得るに到る迄には長き歲月を要した。其處には何等の實利若しくは必要がないが故に、却つて形式的虛禮的の感じを與へたのである。併し心の深まるに從ひ地上の醜くして限られたることを體驗するにつれ、實利と必要とを含まざるが故に、却つて美しき淸き感じを與へるに到るのである。我々は地上の運命として常に實利と、限界の中に齷齪として居るのであるが、路上に偶々知人と出會ひたる時、或ひは久濶の友を訪ねた時、暫く凡ての俗事を忘れて心から安きを問ひ、祝福を送るのである。「お久しう御座います」「お變り御座いませ

んか」「お陰様で」と問ひ又答へる短き言葉の中に、限り無き意味が籠つて居る。或は「お早う」と云ひ「お休み」と云ふ言葉にも、愛と祝福との美しき味ひが含まれて居る。我々は挨拶をする時此等の實利と必要より放たれたる愛と祝福の美しき言葉を、然も單純にして心からなる禮儀の形を以て表現するのである。大人の世界に於いてかゝる美しきものは恐らく少いであらう。固より禮儀作法の形式のみが複雜であつて、自由な美しき心が伴はれない時、其れが忌む可きである事は云ふ迄も無いが、禮を辨へず、無作法に過ぎる事は一つの低卑である事は免れない。「野人禮に習はざる」の趣きは愛す可きものであつても、高貴である事は出來ない。故に相應しき禮儀作法を無視して振舞ふ事は心なき業である。凡そ相應しさとは一つの骨である。我々は相手と時と場所とに應じて如何なる行爲が、如何なる度合ひに於いて相應しきかを直感するのである。其れは智慧と徳と教養されたる感覺と趣味とが自ら體得するのである。凡そ物に徹底する事は人格の力として根本的に重要なるものであるが、調和の感じは又人格の力の靜的な現はれである。インテンシチーが大であると云ふ事だけでは人格の仕上げと磨きとに於いて未だ充分ではない。其の外に「程の良さ」がなければならない。我々が富士山をかく迄仰ぐのは、其れが高く雲上に聳えて居る

からだけではない。其の形が實に美しく調和して居るからである。殊に我々が地上の最も美しきものとして崇拜すべき淑女の名に價ひする者は其の心情に於いても、態度に於いても――其のすべてのものごしつまはづれに於いて、高貴にして調和したるものでなければならない。其れは一切の心なき業から自由となれるものでなければならない。自分は心からかゝる淑女に憧憬するものである。彼のダンテがベアトリチェの美に打たれたのは彼女に於いて其の淑女を見出したからであつた。彼は路上に於いて「此の妙へなる少女が白き衣を着て二人のよほど年長けたる貴女の間に並むで」居るのと逢ひ、彼の女が「言葉に盡くし難き禮讓より、いとも德高き仕方にて挨拶した」時に、彼は其の爲めに「其の時總ゆる祝福の限りを見る心地を覺えた」と「新生」に書いて居る。其の時の印象がダンテの一生に決定的契機を與へたのである。斯くの如き天的なる淑女に對しては、我々の一つの心なき業も彼の女の貴さと靜さを侵し傷つけ、又彼女の些細の心なき業も、全く彼女の美と釣合ふ事能はずして、淑女としての全體の調和を毀して終うであらう。我々は現實に於いて斯くの如き淑女に出會ふ事は至難であらう。併しダンテが若くして此の世を去つたベアトリチェを眞の淑女として心に祀つたやうに、天上の淑女の理念を、最も調和した、天

的に祝福せられたものとして憧憬の的とすべきである。かゝる憧憬を以て、現實の貴夫人を眺める時、我々は如何に幻滅を感じなければならないであらう。例へば一人の美しく、高貴に裝へる貴夫人を見たとする。併し彼女が一人の召使ひにはしたなき言葉をかける時、或は貧しき者に物吝しみし、若くは自己の地位を誇るが如き感じが閃めくならば、其れは貴夫人の名前に價ひしないものである。貴夫人は天上の淑女の面影を傳へて居る限りに於いて貴夫人である。眞の貴夫人は善と調和との華であつて。啻に自らが善と德とを具へて居るばかりでなく、ダンテがベアトリチエを讃めて居るやうに、其の人を見る事に依つて、周圍の者が善と德とを得る如きものでなければならない。ダンテは「新生」の中にベアトリチエの德が「如何に他の人々の上に働くか」を語らんが爲めに一つのソネットに次の如くに歌つて居る。

わが戀ふ君を貴女たちのあひだに見るものは
ありとあらゆる福ひをすべて完たく見るなれ
彼女とともにあゆむものは美しき恩寵を
神のみまへに感謝すべきなり、しかして

彼女の美しさにはたかき德あれば
れたみごころはいかなる人にもおこることなく
なほ人々をして彼女とともに貴とさと
愛と信とを衣として歩ましむ。

彼女の面わはすべてのものを謙だらしめ、
たゞ彼女ひとりたのしきすがたなるのみならで、
みな人は彼女によりて譽れをぞうく。

彼女の行ひはあつき優しさありて、
こころにかの君をもとめ思へば
人みな愛の妙へなる甘きにためいきすなり。

我が國に於いて自分が貴夫人の鑑として最も尊ぶのは彼の光明皇后である。皇后は美しく、德高く、信心深く、人民に善と美との光りを被らせる程の、其の名に相應しき后であつた。厚く三

賓を敬ひ、寺を建て、貧しき者、病める者を憐れまれた。手づから浴室に於いて癩病やみの體を洗ひ、また路傍に於いて乞丐に化成した阿閦佛に逢はれたと云ふは實に美しき說話である。我々は皇后が乞丐を惠み、其の乞丐が實は佛であつた時に、跪いて佛を拜する皇后の姿を讃美せずには居られない。凡そ帝王が神を敬ひ、皇后が佛に禮することには一種特別な美しさがある。彼等は地上の最高の權力者であるが故に、彼等が拜するは權力に對してゞはなく、其の凡ての地上の者を拜跪せしめる權力を以ても、尙拜跪せなければならない德の力を拜跪するのである。然も此れを拜跪する事に依つて彼等の威嚴は益々加はるのである。其處に天倫聖王の特殊な美しさがある。光明皇后の場合に於いては、聖武天皇を輔けて天倫聖王たらしめ、國母としての最高の地位にあつて其の美と德とを以て遍く人民を德の光りに浴せしめたのである。何者も聖貧の人の前に跪く美しくして高貴なる貴夫人程此の地上に於いて美しきものはないであらう。

自分は「父の心配」の小山夫人に於いて、又一人の母らしき、夫人らしき、年長けたる婦人を書く心算であつた。自分はあの場合小山夫人は最も相應しく振舞はせた心算である。あの場合小山夫人が道子に對して賞讃と感謝の心を持ち、其れを表現したいのは固より當然である。併し其

れなくさく言ひ現はす事は此の場合に相應しくなく、又自分の爲に幸福を與へて呉れた道子に對して、却つて露骨さなるであらう。其れは心なき業である。併し乍ら其の感謝の心持を云ひ表はさない事は又人情を知らぬ心なき業である。故に小山夫人は此の溢るゝ賞讃と感謝の心を「ほんの一口だけ」表したのである。然も一つの實際問題を、道子にとつては實に重要な音樂を勉强する爲めに洋行するさ云ふ問題を申し出たのである。あの申し出はあの場合相應しき事であり、相應しき仕方に於いて爲されたのである。然も其れは心と形との如何に依つては、最も露骨なオフェンシヴな心なき業である。小山夫人は充分に其の危險を知り乍ら、道子に對する愛の爲めに、道子に取つて此の大事なことを言つて遣らずには居られなかつたのである。其れは道子の心の悲しみを支へる一つの柱を與へむ爲めの愛であつた。夫人は道子の心を傷つけざらん事を充分に心使ひし乍ら、敢て其の申し出を爲したのである。其の申しでが心なき業とならなかつたのは夫人の徳と眞心の爲めと此れを受け入れる道子の心の素直さの爲めであつた。あのシーンを只蛇足であると云つて斥けるが如き批評家は自分には調和に對する感覺の乏しき、心情淺き人としか思へない。我々の日常生活に於いて、斯くの如き心使ひは、實素の表はれる最も大事な機會であり、

從つて此れを素直に受け入れざる事は心なき業である。例へば或る貧しき人に何事かの勞を煩はせた時に、其の人が報酬を目的として働いたのではない事を熟知し乍らも、何等かの謝禮をしたいと願ふのは自然である。而して其れを品物を以てするよりも、金錢を以てする方が便利ならむと推察して一封を贈つたとする。彼は其れに依つて恩を返したと思ふのではなく、取引きが濟むだと思ふのでもなく、相手を恥づかしめる心算では猶更にない。其の金錢は感謝と實意との象徴である。此の場合相手が立腹し、無下に此れを突き返すが如きは心なき業である。此の場合には贈つた者は赤面する外はない。此の場合は無邪氣に素直に受け取るのが相應しい。無邪氣さと素直さとが缺乏する時、我々の日常生活は實に窮屈と不自由とに堪へないものとなるであらう。心なき業は我々の德の如何に依つて生ずるものであつて、行爲の形に依つて定まるものではない。或時は矜る事が心なき業であり、或時はへり下る事が心なき業である。無邪氣さと、蟲の良さと、人懷しさと、狎々しさと、威ある事と、猛き事とを區別するは、相手と、時と、場所とに依つて生ずる一つの呼吸であり、其の呼吸を直感するものは我々の德であり、其の德を磨くものは我々のカルチュアである。調和に對する我々の愛が我々を導いて、我々の人格を圓滿なるものに仕上

け、玉の如くに磨き、玲瓏たるものとならしむる時、我々は初めて心なき業から放たれて自由になる事が出來るのである。

最後に此處に最も深き心なき業がある、其れは我々が我々に生を與へたもの、造物主に對する心なき業である。即ち造られた者が、造り主の心に適はぬ所業を爲す事である。此れは根本的の調和に對する感覺の不足である。例へば、造物主は被造物が其の與へられたる生命を感謝して享け、造物主が其の生命を奪ふ迄、泌々と其の生命をエンヂョイする事を欲して居るにも拘らず、我々が其の心を享けずして、徒らに禁欲し、若しくは蟻の如くに只勞働のみを營むで、生を樂しむ事を知らざるが如き此れである。其れは慥に造り主の心に適はざる事である。我々は動物や、草木や小兒の生活を觀る時に、つく〴〵と其の事を感ずる。其の生き、成長し、喜び遊ぶ狀は實に美しい。自分は今でもはつきりと思ひ出だすことが出來るが、自分が小學校の三年生の時、習字の授業時間に、窓の下の町外れの街道を祭りの行列が通つた時に、我々の先生は暫く習字を止めて、其れを見る事を我々に許した。生徒達は筆を棄てゝ窓に倚り、此れを眺めた。併し自分は一人書き續けて、此れを見ようとはしなかつた。其の時先生は寂しさうな顏をして「そんな事をす

るものではありません」と云つた。自分は祭りを見ようともせずして、習字にいそしむ事を、勤勉な善い行ひであると思つたのである。併し其れは其の先生の心に適はなかつた。固より其の先生は親切な、勤勉な人であり、自分は特に其の先生に愛されてゐた。其の先生の名前も、顔も特別にはつきりと覚えてゐる。其の時先生は何故其れがいけないかを少しも説明はしなかつた。其れがいけないと云ふ事をはつきりと説明する事が先生にも出来なかつたのかも知れない。自分も此頃になつて、初めて其の事がはつきりと解つた氣がする。其先生は固より勤勉を好み、怠惰を嫌ふて居るのである。併し子供達に自分が許した其れだけの樂しみは素直に樂しむで貰ひたかつたのである。斯くの如き心は、我々に生を與へたもの丶心にあるに相違ない。我々が素直に生命の喜びを享受しない事は神の心に適ふとは思へない。血眼になつて修業し、禁欲し、勞働するのみにて、其處に觀照と享受の餘裕を有せざる生活法は、被造物として相應しきものではないであらう。花鳥風月を樂しみ、異性を戀愛し、子供を育てゝ、樣々の無邪氣な遊戲を試みる事は神が許して居る事である。斯くの如き生命の享受に逆ふ事は心なき業である。又與へられた環境を有るが儘に先づ受け入れむと努力する前に、此れを改造せむとする事も心なき業である。神に從順な

る者は、先づ與へられたものを尊重し、自己の主觀を深める事に依つて、成る可く環境を其の爲に調和と觀じ得るやうに努め、然る後初めて改造の要求を起す可きである。自己の主觀を深めずして、只管與件を改造せむとする事は造化に對する心なき業である。又小兒に對して、餘りに敎訓めきたる育て方を爲すが如きも此の種の心なき業に屬する。小兒は無邪氣に遊びたのしむべき筈のものである。彼等に理解し難き宗敎の敎義や、道德的な觀念を吹き込み、又餘りに重き科業を課する事は心なき業である。無邪氣さを缺き、敎訓めきたる事を語り、餘りに勉強に捉はれたる小兒は美しくない。自分は此の點に於いては西田天香氏や江渡氏に同じ難きものである。又山室軍平氏の「平民の福音」の中に載せられた善良な少女と不良少女との日記に於いても、自分は後者の日記に寧ろ善良さを感ずる點が多い者である。自己の慾望を犧牲にし、不幸なる者を、單に經濟的に不幸なる者を救濟するのみが善ではない。眞に素直に、自由に生き、考へ、諦め、感じ、働きかける事は一層原本的な善である。我々の基督的愛と犧牲との善は、此の素直な、自由な心を以て、他人の不幸や、窮乏に對した時、自然に、必然的に起る時に於いて、最も純粹なのである。基督敎的愛を敎へる爲めに、無邪氣や、素直や、自由さを失はしめるならば、折角の目

き子供の育て方は子供をいぢけさせ、子供の此の地に於ける最も大事な使命を損はしめるものである。此れは許されたものに對して、素直でない處より生ずる心なき業である。又總て物事を性急に餘裕なく、穿鑿し過ぎ、杓子定規的に規矩せんとすることも亦此種の心なき業に屬する。其れは此の造物主の博き心と、餘裕ある宇宙の調和に適はざるものである。一つの根本的方式を立て乍ら、例外を許すこと〻に此の世界の博き心の一つの特色がある。例外無き事は一つの貧弱である。簡單である。例へば聖書にある「犬も亦食卓より落ちたパン屑を拾つて食べる」事を許す心である。大佛の鼻の穴に盜賊の住む事を許す心である。愛嬌ある怠け者を養つて置く事は勸勉なる長者の餘裕である。雲雀の如く唄ふ事しか知らない詩人や、此の世を厭ふ尼や、星を眺めて世事を顧みない學者や、死後の世界を夢見る事に生きる宗教家や、總て特色ある例外を、「總ての人が衣食住の爲めに勞働せざるべからず」と云ふ根本主義の蔭に受け入れて置く事の出來るのは世界の運行と、人類の文化史とが持たねばならない餘裕である。斯くの如くにして初めて萬物を容れて化育する宇宙の心に適ふのである。

心なき業の一々の具體的なる例を擧げれば、枚擧に暇ないであらう。(良寛の「心淺く見ゆるも

の」といふ手記の中には數十の例が擧げてある。)總ての心なき業はものゝ調和に對する感覺の缺乏より生じ、或る時は他人に對する同情なき行爲となり、禮に適はざる振舞ひとなり、神と世界の心に反するいぢけた、不自然な、餘裕なき態度となつて現はれるのである。而して此れは卑しむ可き、憎むべき罪惡でなくても、眞に高貴を願ふ人格に取つては、其の仕上げと磨きとの完成に於いて、必ず避けられなければならないところのものである。此等の缺點と、曇りと、制限と歪みとから、自由にならない限り、我々は圓滿にして、自由なる君士人となる事は出來ないであらう。(一九二三・三・二三)

# 經濟的制約に就いて

我々は地上に於て、常に不斷に、經濟的制約の中に生きてゐる者である。此れは我々にとつては「與へられたるもの」であつて、我々が此れを欲すると欲せざるとに拘はらず、我々は此の制約の中に生きざるを得ないのである。即ち我々の地上に於ける運命である。故に我々は此の運命を享けるよりほか選ぶ事が出來ない。我々にとつて最上の道は、此の運命を享けて、最も良く此れに處する事である。故に自分は此處に此の經濟的制約の概念を明瞭にし、其の範圍と限界とを定め、從つて人生に於ける此の制約の位置を確定し、然る後、如何にして此の制約に最も良く處すべきかを考へ度いのである。其れは我々の精神生活にとつて、極めて大切な事であり、殊に今日の時代の、最も厭ふべき經濟と道德との混雜——更に一般的に云へば固有價値と利用價値との混雜を訂正し、精神生活全體を健かに、且つ透徹ならしめるに役立つと信ずるからである。

第一に經濟的制約とは何であるか。其れは我々が地上に於いて、我々の生活の目的たる人格價値を生かさんとする欲望に對して、外部より必然的に規定する時間。空間。及び物質の數量的、及

び因果的條件である、例へば我々は自ら生き、隣人をも生かさん事を欲する。此れは二つとも我々の衷心よりの願望である。故に若し我々が無限のパンを持つならば、我々は素より自ら必要な丈け取り、悦んで其他を隣人に頒つであらう。然し事實として我々は一定量のパンしか持たないが故に、我々は自ら食ふ事と、隣人に頒つ事との間に或る均衡を求めなければならなくなる。又我々は戀人と親とを共に愛する。然し一は甲地に、他は乙地にあるならば、其の愛を表現する方法は、兩者を同時になす事は出來ない。又我々が一つの家を建てんとする時、我々に必要なる居室と寢床とを得んが爲には、順序上先づ礎を置かなければならない。又一定の診察時間に患者を診察せんと欲する時、我々の願望は、出來得べくんば、凡ゆる患者を一人一人充分な綿密さを以て診察せんとするにあつても、或る一定の人數を限り、且つ各個人を或る程度迄の綿密さを以て遇する外に道がない。此れは只四個の例に過ぎないが、我々は、凡ゆる日常百般の行爲に於いて、此の如き時間と空間と物質との數量的及び因果的制約の下に立つてゐる者である。故に現實生活に於いては、一刻も此の制約を度外視して、何事をも考へる事は出來ない。この事は政治や經濟のみならず、藝術や道德に於いても同樣である。此の制約は何事をなすに當つても、我々が必ず顧慮しな

ければならない具件として、我々にとつて最も實際的なるものであり、且つ我々の精神の力を以て、如何ともする事が出來ない點に於いて、最も外部的なるものである。故に我々は何事に當つても、此の實際的、且つ外部的なる條件が満されざる限り、其の實行不可能なる事を知るが故に、其他の點に於いて、如何に價値ある願望或ひは計畫であつても、此れを「浮いたもの」若しくは「空想的なるもの」として考へる。此れは確に當然の根據を含んで居るものである。如何なる願望や、計畫も、其れが實現不可能のものであるならば、其の實現せられたる曉に於てのみ生ずる價値を目的とする限り、其の願望や計畫には意義がないからである。從つて眞摯にして、實意ある願望者、若しくは計畫者は、必ず此の經濟的條件を充たし得る自信、少くとも關心を持つて居る筈であるからである。然し乍ら玆に明らかに辨別しなければならない事は、此等の經濟的制約が、我々にとつてかく迄意義を持つのは、何處迄も其の願望と計畫とが我々にとつて價値あるものであるからであつて、其れ自身の爲ではない。此の願望と計畫とが價値がないならば、如何なる經濟的制約も意義のないのは無論の事、從つて其の經濟的制約を處理する如何なる優れたる手段も亦何等の價値もない。故に願望と計畫との價値は本質的であつて、經濟的制約の意義は、從屬的

のものである。從つて如何に實現し得る願望や計畫であつても、其れ自身の價値が少いならば、其れ自身に價値大なる願望と計畫であり乍ら、實現不可能なるものよりも必ずしも勝つて居るとは云へない。此の二個の觀點は、明らかに區別しなければならない。此處に實現不可能なる場合を後に讓つて、先づ實現困難なる場合に就いて考へるならば、恐らく何人も實現容易なる價値少き計畫や、願望よりも、實現困難ではあつても價値大なる願望と計畫とを以て、より優れたるものとなすであらう。然し乍ら此の場合に於いても、我々は現實生活に於いて、順序上先づ前者を選ばなければならない場合がある。例へば理想的社會を建設せんとする時、無政府主義と集中的社會主義とに於いて、理論上明らかに前者の方が價値大なる計畫であるが、其の實現の難易に於いては、後者は前者よりも遙かに勝つて居る。此の場合我々は、先づ後者を撰ぶであらう。然し乍ら此の場合後者が前者を其の實現困難なる故を以て、空想的として排斥する根據は何處にあるか。其れは本質的意味に於いては、存在しないと云はなければならない。其れは只便宜上の若しくは、順序上の根據にすぎない。然し如何に便宜上の根據であつても、結果より考へる時、一つの計畫が其の實現せられたる曉に齎らすべき價値を目的とする限りは、決して此れを無視する事は出來ない。故に此處

には明らかに二つの視點を必要とする。即ち計畫其れ自身の價値と、其の實現の手段に從屬して生ずる價値とを區別しなければならない。嚴密に同じ理由に依つて、教會的共産主義(カソリシズム)が無政府主義よりも更らに遙かに實現困難なる計畫であつても、本質的價値に於いては、最も優れてゐると云はなければならない。若し其の實現困難なる故を以て、集中的社會主義者が、教會的共産主義者を、空想的として排斥するならば、同じ權利を以て今日の國家主義的改革主義者は、集中的社會主義者を空想的として排斥し得るであらう。此の不合理を除去せん爲には、我々は本質的價値と從屬的價値とを區別する他に道はない。又例へばバラックの家と大理石の家とが存在する時、其れを如何に人類の多數が享受し得るかと云ふ視點より見る時、勿論前者は後方より優るであらう、然し一つの家として其れ自身に於いては、何人も後者が前者よりも勝つて居るとなすのであらう。此の二つの視點は區別しなければならない。若し我々に大理石が無限に存在するならば、無論我々は後者を撰ぶのである。我々が現實生活に於いて前者を撰ばなければならないのは、經濟的制約の爲に餘儀なくされるのにすぎない。此の辨別をなさずして、本質的に價値あるものを經濟的制約の爲に從屬的に生ずる價値を以て排斥し去る事は誤謬である。大なるもの、美なるもの、强きもの、豐富なる

もの、高貴なるもの、凡て――其れ自身に價値の勝れたるものは、其の實現の難易、享受の機會の多少、因果的順序の前後如何に關はらず、尊重されなければならない。然し乍ら如何に從屬的なる價値と雖も、我々が實際に事實として、經濟的制約の下に生きてゐる限りは、或る一つのものを生み出ださんとする時、或ひは一つの行爲を決定せんとする時、我々は此の制約を無視する事は出來ない。例へば一つの演劇を試みんとする時、演劇として理想的なる演出をなす事が、他の隣人の飢餓を傍觀する事を條件とするならば、今一人の藝術家が如何程の物資と時間と勞力とを此の演出に捧ぐべきかは、一つの考慮さるべき問題である。此の場合此の藝術家の心中には同時に矛盾なく、願望としては、完全なる演出と、隣人の救助とが並立し得るのであるが、經濟的制約の爲に、此の二つが矛盾するのである。此の場合其の藝術家の正しき態度を決定するものは、何等かの他の原理でなければならない。完全なる演出を只單に贅澤として斥け、若しくは隣人の救助を、單に藝術的良心の不足として排斥する事は出來ない。只此處に我々は、如何に隣人の救助の爲とは云へ、一つの演劇として、完全なる演出を、不完全なる演出よりも尊重する事を忘れてはならない。故に現實生活に於いては、我々の前に我々の目的たる本質的價値を生かす爲に如何に經濟的制約を處理す

べきかの問題が置かれる。我々の正しき態度とは此の問題の合理的解決と云ふ事に他ならない。

然らば此の問題を合理的に解決すべき原理は何であるか。其れは其の行爲を決定せんとする時に於いて、最も良く自己の人格價値を生かし得るやうに行爲する事の他にはない。我々にとつて眞に固有なる價値は、即ち其れ自身に價値あるものは、人格價値である。(リップス倫理學の根本問題參照) 我々にとつて人格價値とは、自己に與へられたる本能の全體を意味する。此れを離れて何處にも人格價値の內容は存在しない。此の意味に於て、凡ゆる個々の本能的欲望は、それぞれに悉く自分を主張する權利を持つてゐる。只然し此等の諸々の本能的欲望は其れが人格全體の價値を如何程生かすかに從つて、上置と下屬との關係に於て、一つの體系を作らなければならない。そして我々が二個以上の動機の中から一つの行爲を決定せんとするに當つては、我々は主人的制約を離れて、人類的見地に立つて、客觀的に重要なる動機より先きに選擇しなければならない。(同書道德的正の項を參照せよ。)即ち其の動機が自己のためのものであるか、他人のためのものであるかに關はらず、客觀的に重要なるものより先きにするのである。例へば自己が花見にゆかんとする時、隣人の家が火事であるならば、花見は自己のためであつて、消防は他人のためで

ある、と云ふ個人的制約を離れて、消防と花見が何れが客觀的に重要であるかに依つて、先きにすべきものと後にすべきものとを決定するのである。然し乍らかゝる動機も結局自己の本能を離れては意義を持たない。即ち自己の内なる花見の欲望と、消防の欲望との間の選擇である。一般的に云へば、自己の内なる個人的本能と、人類的本能との間の撰擇である。此の二つの本能は、共に自己の本能として、人格價値の內容をなすものとしては同一であるが、此の二つの本能を其の重要さの度に從つて、上置と下屬との關係に於いて、人格全體の要求の中に抱攝するのである。後に善とは、自己の凡ゆる本能の間の調和である。此處に忘るべからざるは、其れは調和であるが故に、凡ゆる本能が多少の度合に於いて必ず攝り容れられなければならない。上置する本能のみを肯定して、下屬するものを全然否定する事は調和ではない。例へば、自己の内の人類的本能が、類何に凡ゆる本能の中にて上置さるべきものであつても、其れのみを生かさんが爲めに、例へば、純粹に個人的なる享受の本能を無視してはならない。個人的享受の本能も必ず其の正しき度合ひに於いて、即ち人格全體を生かすのに最も適當なる度合ひに於て生かされなければならない。素より此等の凡ゆる本能は、此の人格全體の調和的關係に於いて、同時に生かされん事を要求する

ものである。我々は今此の體系をなせる要求を以て、經濟的制約に對するのである。此處に於て當面の問題は、其の經濟的制約を此の體系的要求に依つて、處理する事によつて、解決されなければならない。所謂希臘主義と基督教主義との對立の調和の道は 此の方法の外には考へられない。前の例に就いて云へば、完全なる演出をなさんとする欲望と、隣人の飢餓を救濟せんとする欲望とは、兩者共に生かさなければならない。只然し此の二つの自己の欲望を、自己の人格全體の要求の中に、其の重要さの度に從つて、適當の度合ひに於て、攝り容れねばならない。故に此の場合に於いては、此の二つの欲望が其の人の人格内に於いてどれ丈けの重要さを占めて居るかに依つて、決定されなければならない。例へば其人が藝術家であるならば、彼にとつては完全なる演出は、自己の使命である。卽ち自己の内なる人類的本能である。隣人の飢餓を救濟せんとする欲望は、一人の個人に對する、自己の個人的愛の本能である。此の二つの本能は、其の藝術家の人格内に於て、主觀的制約を離れて、其の客觀的重要さを比較する時に、前者の方が大であるが故に、其の藝術家は、完全なる演出の爲の努力を先きにしなければならない。此れに反して、若し其の演劇が自己の使命でなくして、自己の個人的享受であるならば、我々は隣人の飢餓の救濟を先きにしなけ

ればならない。何となれば、他人の飢餓は其の人の使命を維持する爲の必須の條件であつて、其人の使命卽ち人類的本能を、生かす爲に缺くべからざる條件である。故に此の場合に於いては、自己の個人的本能と、他人の人類的本能との對立である。然るに主觀的制約を除去するが故に、此の對立は結局自己の人格内に於ける個人的本能と人類的本能との對立に歸する。然して後者は前者よりも上置するが故に、此の場合其人は後者を先きにしなければならない。然らば何故に自己の人類的本能は、自己の個人的本能より上置されるのであるか。其れは我々が生命を公物として意識する處より生ずる。卽ち生命は自己の私有物に非ずして、「與へられたるもの」であり、我々に生命を與へたるもの――神のものであると意識する處より生ずる。此の受身の意識を肯定しない限り、人類的本能が個人的本能より上置する事は我々にとつて、理解し難きものとなる。卽ち人類的本能は、生を與へたるもの、神に對する義務の意識に外ならない。生命は神より與へられたるものであるが故に、自己の生命たると、他人の生命たるとを問はず、公物である。卽ち人類的本能とは、神の前に於ける、生命を與へられたるもの丶連帶の意識である、卽ち神が「人」を造つた時、其の「人」の上に課した處の使命の意識である。我々は神に對して個人としてのみならず、

人間一般こして此の使命を果す義務を負うて居る。此れ我々があらゆる人間を同類こして意識し神の前に連帶の觀念を持つ根據である。神が人間を造つた時、人間に意匠したこころのものを人間は實現しなければならない。此の意味を離れて、人類意識こ連帶の觀念こを說明する事は出來ない。故に我々が我々の天命を完うし、與へられたる本能を生かさんこする時、我々は公けなるものを私なるものより自ら上置する。只然し如何に私的なる本能こ雖も、其れは與へられたるものであるが故に、必ず適當の度合に於て生かされなければならない。此れを全然滅却する事は生命を與へたるものに對する不從順である。例へば、自己の使命は、自己の個人的享受より重んじなければならないが、其爲に個人的享受を全然捨て去る事は正當ではない。例へば、一人の藝術家に於て、其の制作の努力は、花鳥風月を樂しむ個人的享受よりも素より重んじられなければならないが、其爲に全然花鳥風月を樂しむ事を捨て去る事は藝術家的使命に對して如何に熱誠であるこは云へ、正當な事ではない。假令花鳥風月を樂しむでも、只制作に役立つ爲にのみ此れをなす事も亦正當ではない。此の場合其の藝術家の最も正しき道は、制作に專ら力を注ぎながら、又純粹に――制作の爲でなく、個人的享受こし、花鳥風月を樂しむ餘裕をも殘す事である。此の意味に於

て、神に對する我々の義務とは我々の人格を完成すると云ふ事の外にはない。我々の使命は如何に重要であつても其の義務の一部である。人格を完成するとは與へられたる凡ゆる本能を、其の調和せる體系に於いて、生かす事の外にはない。故に個人的本能を無視して、人類的本能のみを生かす時、其の人格は完成されない。神への義務は完全に果たされない。實際に我々は、かくの如き人格に對する時、悲壯なる感動を受けても、圓滿なる滿足を得ない。人事の總ても制作欲望の爲の手段となす藝術家は、如何に仕事に熱心であつても、完成品を作り出す事は出來ない。

前述の如く人類的本能は、個人的本能より正しく上置されなければならないが、然らば同一の本能に於いて、若し主觀的制約を拂拭するならば、自他の先後は如何に定むべきであるか。例へば、自己の使命と他人の使命とは、何れを先きにすべきであるか。其れは自己の使命を先きにしなければならない。其れは權利の順序ではなく、我々の神への奉公の努力の發現する機會の自然の順序である。我々は一個の生命を神より依託されたのである。我々は此の生命を完うする義務を負うて居る。故に人類的本能と雖も、自己の本能としての他我々は意識する事は出來ないのである。已に主觀的制約を拂拭する以上、自己の使命も、他人の使命も同一である。故に、自然の順序と

して、自己の使命を先きにする道である。主觀的制約の下に考へるが故に、我々は自己を他よりも先きにする事を何等かの「私」の觀念と結合して考へるのであるが、已にこれを捨て去つたればこそ、我々は何等の疾ましさなく、平氣で、自然の順序に從ひ、自己の使命を先きにし得るのである。自己の個人的享受と他人の個人的享受との先後も此れと同樣である。我々は他人の使命の爲には、自己の個人的享受を後にしなければならないが、他人の個人的享受の爲に自己の個人的享受を後にする必要はない。然し前にも述べた如く、他人の凍餒の如き生理的必需は、他人が其の使命を果たす爲の必須の條件であるが故に、其れを救ふ爲の努力は、自己の個人的享受よりも先きにしなければならない。(此等の點に就いては、此の論文の直接の目的と離れるが故に、別に「ギリシヤ主義とキリスト教主義との調和の道」と云ふ論文に於いて詳論するであらう。)

上述の如き順序は、我々にとつて與へられたる經濟的制約が避くべからざるものであつた時に、其れに對して我々の、其れ自身には肯定さるべき二個以上の動機の間の選擇の原則である。然し其れより別に經濟的制約を出來得る限り少くし、其の我々にとつて禍なる負荷の感を滅ぜしめ、更に反つて此れを生かす道、一言にして約せば經濟的制約を超克する道はないであらうか。第一に

我々は、此の制約を出來得る限り小ならしむる爲に節約しなければならない。物質と時間と空間とを浪費する事を止めなければならない。素より一層大なる價値を生かす爲に必須なる材料を惜しんで、より小さき價値にて滿足する事は排斥しなければならない。此の意味の消極主義は人生の創造的本能を萎微せしめるものでありて、最も厭ふべきものである。然し或る一定の價値を生かすのに必要以上なる材料が費されてはならない。其れは我々の此の重荷たる經濟的制約を大ならしむる罪惡である。然かのみならず生かされざる材料は、只に無價値であるのみならず又同時に醜である。かくの如き浪費されたる材料は、實に絕對的の損失である。殊に藝術品に於ては此の無駄は全體の價値の積極的瑕瑾であつて、單に餘分なる附加物ではない。又節約は積極的な美と力とを生み出す爲にも必要である。より高き價値を生かす爲には必ずしもより多くの材料を要するとは限らない。例へば建築に於いて、素樸なる樣式の建築は、華麗なる樣式の建築よりより高き美を、實際に於いて簡素にして集中されたる表出は、複雜にして、纖巧なる表出よりもしば〳〵より强い力を持つて居る。聖人を飾るに相應しき服裝は王者を飾るに相應しき服裝よりも質素である。故に我々は出來得る限り少しの材料を以て出來得る限り大なる價値を生かさん事を努めなければなら

ない。又節約は我々の精神生活に缺くべからざる心の靜かさを保つ爲にも必要である。此の意味の節約は凡ゆる種類の節約の中にて最も尊きものである。宗教生活には殊に此の種の節約が缺けてはならない。物質的材料が多ければ多い丈け、我々の心は物に捉はれ、形の役となる　精神生活の獨立を保ち難く、他人の意を迎へ易く、己れを枉げ、種々の無理を企て、過失を作り易く、心をいら立たせて、淺ましき態度を取り易い。遺教經にある如く、節約者に却つて憐愍さるゝが如き奢侈者は愚かである。我々は靜かな、うるほうた常に熟慮と觀照と奉仕とに用意した心を保つ爲には、節約しなければならない。又鬪ひに於いて、事業に於いて、豫備を蓄へ、潜勢力を養ふ事は、最上の智略である。道德生活に於いて、謹しみ深き判斷や、他人に對する援助をなす餘裕を持つ事は、善事を行ふ爲の最高の智慧である。遺教經にある如く「智慧の水の爲の故に漏失せざらしめ」る節約は、宗教生活に於いて、禪定を保つに缺くべからざる道である　藝術生活に於ても、何よりも必要なる觀照の深さと、制作の爲の行き屆きたる仕上げに缺くべからざる、なみ／＼と湛へた靜かな心を保つ爲には、凡ゆるものを節約して、常に餘力を殘しておかなければならない。殊に感情の表現を節約する事は、我々の人格を高貴ならしめ、眞實ならしめる爲に缺ぐべからざる條件

である。或る種の感情耽溺は實に低く、或る種の贅澤は實に卑しい。此れに就いては「卑しむべきものに就いて」の中に詳論したから此處には再び繰り返へさない。

次に經濟的制約は我々にとつて必ず此れを重荷としてのみ感じなければならないであらうか。一面より見れば、經濟的制約は我々にとつて價値あるものゝ發現及び其の強調の機會である。例へば一つの都市計畫に於いて、此處にある一定の經費と年限と場所と其の他の經濟的制約があればこそ、多くのプランの中から優劣を決定する事が出來るのである。其の制約がないならば、數多のプランの中から、實際問題に於いては、優劣を決定する事が出來ない。競技に於いても同一の一定の經濟的制約が豫件として必要である。また俳句は十七文字を制限さるゝが故に、其の中に最も價値ある內容を盛り生かさんとして、其處に集中が行はれるのである。其の印象的な、強い效果は字數の制約がないならば、生れる事は出來ない。又富みたるものゝ高價なる贈物が我々を動かす事が少いのに、貧しき者の小さき贈物は其の眞心を遙かに生かして、我々を動かすのである。我々の愛や、誠や、實意は經濟的制約の大きい丈け強調されて現はれるのである。天的なる味が貧しきものゝ觀念と結合するのは其爲である。又我々は、個人意識以上の人類意識を生かす

事に依つて、人類の連帶の觀念から、此の經濟的制約の重荷を或る程度迄超克する事が出來る。例へば一人の天才が其の才能を生かす爲に、極めて多くの物質的材料を消費したとする。其時此れを單に一個の個人がかくの如き多大の消費をなしたものと考へる時、我々は其の不合理と、其爲に生ずる人類及自分の經濟的制約の增大とに對する不平と、及び人間的なる羨望と嫉妬との衝動に惱まされるであらう。然しかくの如き天才を人類の誇りとして讃美する時、其の消費は人類の消費であり、畢竟自己の消費として考へらるゝが故に、此等の苦惱を遙かに輕減する事が出來るであらう。又自分が仕事の爲に同樣の消費をなさねばならない時、同樣の人類意識に立つ事に依つて、同胞の經濟的缺乏に對する同情より生ずる苦痛から免れる事が出來るであらう。かくの如き超個人的なる人類意識は人類の文化の爲に缺くべからざるものであつて、此れなくしては人生の偉大なる積極的事業は成就する事は出來ない。共產主義的精神は此の意味に於いて、又一面の節約である。偉大なる公園や、寺院や、美術館の如き多大なる經濟的消費を要するものを、個人の經濟的制約を增大する事を出來得る限り少くして、然も享受の機會を均霑せしめるものは、共產主義の長所である。只此の場合に忘るべからざるは、其の創造が其の本來の性質上個人的なる

約束を持ち、且つ其の享受に高き教養を要するものであつても、其れがそれ自身に價値あるものである限りは、自己が此れを享受し得る機會と資格とを有すると否とに關はらず、人類の名に依つて、此れを自己のものと考へなければならない。共産主義をかくの如き高き連帶觀念に依つて高めないならば、それは畢竟人類全體の文化を低卑ならしめるものである。如何なる場合に於ても、我々は其れ自身に價値あるものを經濟的制約に依つて生ずる從屬的價値に依つて斥けてはならない。此の公明なる、崇高なる勇氣は實に人類の誇りである。

最後に經濟的制約に關する最も深き考察が殘存する。經濟的制約は、如何に我々の出來得る限りの努力を以てするも、其れは畢竟我々の存在の限界である事は免れない。我々にとつて願はしきものではなく、餘儀なきものである。我々は地上に於いては、此れを忍受する他はない。然し我々は其れ以上を願ふ事は出來ないのであるか。經濟的制約なき存在の方式を願ふことは出來ないのであるか。かく願ふことは我々の我儘若しくは忍耐の不足であらうか。勿論我々は我々の我儘と忍耐の不足から、なすべき事をなさずして、徒らに經濟的制約を、單に我々の欲望に對する障碍物として、厄介物扱ひする事は、稀れでない。節約すべきものを節約せず、無駄の爲に材料を

勞費し、更らに自他の天命を損ふ罪悪の爲の消費に依つて、此の經濟的制約を增大する事が多くない。又人類意識を缺く爲に、材料を私有して公共的に生かす事能はず、或ひは人類の文化に眞に必要なる材料も羨望と嫉妬とに依つて、勞費と考へる事より、自己の不平と苦惱を增加する事も多い。一言にして約せば、我々の德の不足の爲に經濟的制約を不合理と感ずる場合が多い。此の原因よりして經濟的制約の除去を願ふ事は我々の側の我儘、忍耐の不足、一層適切に云へば罪のよさである。然し乍ら我々が經濟的制約の除去を願ふのはかくの如き原因からのみではない。我々が最善を盡くしても如何ともする事能はざる、我々の正しき願望に對する障碍物として、此の經濟的制約は人生の最も大いなる禍ひの一つである。例へば其れ自身に矛盾せざる二つ以上の願望の中から、一つを選んで他を捨てなければならないと云ふ事は、我々にとつて諦め難き事である。例へば、かの譬話にある川の彼方と此方とに居る二人の愛兒を鬼から守らねばならない運命に置かれたる母親は、單に時間的、空間的制約の爲にのみ、「一人の愛兒を鬼に渡さなければならない」のであつて、若し出來得べくば二人の愛兒を救はんと希ふのは素よりである。此の際其の母親は、單に不可避の制約である故を以て、悲嘆から醫される事は出來ないであらう。素より其の悲嘆は

返へらぬ愚痴である。此の制約が如何ともすべからざるものであるならば、我々は此れを忍受する外はない。然し我々の最上の努力を以てして、然も此の悲嘆を餘儀なくせしむる運命を、我々が其儘にて、讃美する事が出來ないのは當然である。かゝる成り立ちを持つ世界を、其儘にて、調和ある世界と思へと云ふのは無理である。此の世界を合理的であると感じ得る爲には、此の地上の外に、かゝる制約なき何等かの世界を立て、此の地上と其の世界との合理的なる關係を求めるより他に此の無理を除去する方法はない。素より此の世界が全體として合理的である事を要求せずして生きる事の出來る、一切を偶然の所產として滿足する唯物主義者は、かくの如きを只不可避の事實とするのみであらう。然らばそれ迄の事である。只問題は我々が眞に、人間として、我々の限なき本性を素直に發露せしめた結果に於いて、かくの如き事實を只事實として、滿足する事が出來るであらうかと云ふ點である。自分は其れが出來ない者である。唯物主義者は或は云ふであらう。我々と雖も、かゝる世界の存在を願ひはするけれども、其れが事實存在せざる事を知るが故に、此れを求めない迄であると。若し然らば、其の知識は絕對的に確實なものでなければならない。其れは我々が無慾、若しくは無頓着から、どうでもいゝものゝ知識に就いて、其の確

ので ある。然もかくの如き知識の確實性は可成り薄弱なるものである。其れは我々が認識論の入門を學ぶ事に依つて、既に、少くとも唯物主義者が信じて居るが如き確實性は支持し難きものとなる程である。然らば反對にかくの如き世界の存在を肯定する絕對的に確實なる知識が存在するのであるか。其れは存在しない。然し乍ら、其處に信仰の世界があるのである。信仰の世界を支持するために、來世の存在の否定に關する知識の確實性がない事丈けで足つてゐる。必ずしも來世の存在の肯定の知識の確實性を要しない。かくの如き知識は、カントの指示する如く、我々の理論理性の能力の限界を超えて居る。併し乍ら我々は、知識以外の根據よりかくの如き世界の存在を信じる事が出來る。然も其の根據は、內面的自證性に於いて、知識に勝さるものがある。(此の來世の存在の信仰の根據に就いては、別に詳しく論ずるであらう。)我々は經濟的制約なき世界を希ふ事が出來るのみならず、願ふべき筈のものである。此の如き世界は我々が道德的意識に於いて、最善を盡し、最も良き願ひを斷念すればする丈け、益々斷念し難きものとなる。我々が總てのよきものに愛着し、あしきものを捨離する時、其のよきものに對する愛着は愈々諦め難きものとなるのである。

我々が花を眺めて居る時、其の花の美に對する觀照が深まり、其の態度に私心がなければならない程、我々は隣人の火事を消す爲にでさへ、此れを斷念する事が出來なくなる。然も隣人の火事を消して居る時、我々の愛が深まれば、深まる丈け此れを傍觀する事が出來ない。然も其の一つを撰ぶ事を餘儀なくせしむる經濟的制約は、我々の最善を盡くせばつくす程無理である。不合理である。然も我々は如何ともする事が出來ないが故に、前述の如き態度に依つて、最高可能の處に此の經濟的制約に處する道を撰ぶ他はないのである。然し其れに依つて、此の不合理が除去されたのではない。此の不合理が除去されざる限り、我々は、衷心より滿足する事は出來ない。此の世界の調和を――神の完全を信ずる事が出來ない。自分が「千手觀音の畫像を見て」の中に書いた如く、我々は此の地上の限界と人間の境涯とを忍受し、彼岸と自在身とを願はずには居られない。此の信仰に立つて、翻つて此の地上に於ける經濟的制約に對する時、初めて我々は多くの正しき觀方をなす足場を得るのである。例へば教會主義と社會主義とに於いて、社會主義が一層價値ある如く見えるのは、只此の經濟的制約の爲にすぎない。本質的價値は素より教會主義にある。大理石の家が贅澤として、排斥されるのは、只此の經濟的制約の爲にすぎない。凡て個人的にし

て、貴族的なる趣味として、其の享受の機會が一般民衆に拒まれてゐる高き文化が、斥けられるのも只此の制約の爲に過ぎない。本質的には、總て此等のものは、讃美さるべきものである。總てのものは、樂園を莊嚴し得る價値に從つて、價値を持つて居る。彼岸と此岸とを合はせて、全體として一つの世界と見る時、其處には只一つの原理が存在するのみである。我々は地上に於いて、此の唯一の原理を經濟的障碍に對して適用する時、最高可能の處まで此の原理に忠實ならんとして、我々が現に持つが如き混雜と機械主義と、散文性とを生ずるのである。此れは我々の存在の方式の限界である。觀方に依つては、神が課したる刑罰である。實際に、我々が萬人に對して持つ潤ひ充ちたる愛と、仕事に對する忠實無私なる熱情とを同時に、生かさんとする時、我々は面會日を定むるが如き夜役の診察時間の醫者の如き、機械的にして散文的なる結果とならざるを得ないのである。我々の内面的なる純一性は我々が個人に私せずして、人類に奉公せんとすればする程、稀薄、乾燥なるものとなるのである。此意味に於いて、行爲は心情の滓屑である。内部は金玉である、外部は瓦礫である。我々は常に價値其のものを重んずる時、内面を以て眞の實在とし、外部を以て其の不完全なる模型として見なければならない。常に、不完全なるものゝ中に完

全なるものを見んとする象徴主義を持せなければならない。眞の實在は理念であつて見ゆる處のものは譬喩に過ぎない。ファウストにある「一切の過ぎ去るものは譬喩にすぎず」と云ふ言葉は實に深い。然し乍ら假令其れが象徴であり、譬喩にすぎなくとも、我々が地上に於いて完全なるものの理念を表象する道は、此れに據る外はないのである。抽象的眞理を具體的形象として見んとする時、我々は此の象徴主義の他に方法を持たない以上、我々のなすべき事は、せめて出來得る限り、此の經濟的制約に依つて、變容されたる不完全なる譬喩を通して、完全なるものゝすがたを髣髴する事である。其れは譬喩であるが故に價値がないのでなく、完全なるものゝ譬喩であるが故にこそ價値があるのである。地上の理想的社會が如何に天上の樂園の拙劣にして、不完全なる模型にすぎなくとも、我々は此の模型を造り出す事を努めなければならない。其れは我々が地上に於いて、樂園を具現する爲に、許されたる最高可能の努力である。只我々が忘れてはならないのは、此れを譬喩として見る謙遜なる心である。かくすることに依つて、我々の理想的社會の價値は減ぜずして、反つて生きるのである。何となれば、此の不完全なるものは、其儘、はなく完全なるものゝ譬喩だからである。我々の心は、此の譬喩としての理想的社會を作り出したる心

は、其裡に眞の實在こしての樂園を藏してゐる事に依つて、益々我々の價値を增すのである。卽ち此の謙遜は我々の矜持である。此の譬喩の故に實在を斥けるものは、反つて我々の內なる無限の可能性を否定する事に依つて、人類の價値を低めるものこ云はなければならない。價値あるものを、其れ自身に於て、且つ其の極限に於いて求めよ。其れこそ眞の實在である。其れは理念であつても、物象であつても其れは第二の事にすぎない。（一九二三・一一・五）

附記　讀者は此の文中「神」なる語に躓く事なく一文の指示する意味を理解せられん事を希む。

# 強くなる道

## ―ソクラテス的勇氣に就いて―

自分は弱い。自分の性格は弱い。樣々の意味に於て弱い。自分は強くならなければならない。其れは其れ自身に生長であるのみならず、其の他の總ての點に於いて生長する爲に必要な條件である。リツプスが云ふ如く人格の生長とは、其れが出來得る限り豐富に、力強く、且つ調和する事である。故に強いと云ふ事は其れ自身の人格の價値である。そして豐かさと調和とを獲得する爲にも亦強くなければならない。自我の全人格を豐かにする爲めには、出來得る限り廣く攝り容れなければならない。自我の欲望を解放し、凡ゆる有り得べき動機と、意欲とに充分にして遺漏なき權利を與へなければならない。此の事は強さなくして出來得る事ではない。又人格を調和あらしむるには、此の攝り容れられたるあらゆる動機と意欲とを人格全體の爲に其の各々の占むべき處に就かしめて、一つの全體としての體系を作らなければならない。其の爲には、各々其れ自身を絕對に主張せんとするあらゆる動機と意欲とを其の許さるゝ限界迄抑壓しなければならな

い。之れは又强さなくして出來得る事ではない。此の二つの相反する方面に力の强い事が卽ち人格の弱さである。其れを與へられたるもの、天稟の傾向として觀る時に其れは性格の弱さである。自分は性格の弱さを感ずる。此れは自分の缺點である。自分は此の點を超克しなければならない。然らば其の缺點を超克する最良の道は如何。自分は其れを工夫しなければならない。

此の二つの側面の弱さは、又各々此れを他に對する弱さと、自己に對する弱さとに區別する事が出來る。先づ他に對する弱さとは、如何なる事實を云ふのであるか。其の具象的、日常的事例の典型的なるものを擧げて、其の弱さを超克する道を工夫したい。第一に自分は他人の思はくを憚る傾向を持つてゐる。此れを自分は性格の弱さと感じる。此れを超克するのには此のこゝろの出つて來たる動機を檢査し、其の善きものを攝り、惡しきものを捨てるより他に道はない。然らば自分が人の思はくを憚るこゝろは、如何なる動機より生ずるか。其れは悉く惡い動機からばかりであるか。さうではない。其處には、他人に苦痛と不快とを與へることを恐れる動機がある。自分の行爲が他人に與へる感情に銳敏なる者は鈍感なる者より他人に牽制せられるであらう。然し此の如き弱さは、恥ぢではない。其れは眞の意味に於いて弱さではないからである。故に其れは

超克する必要はない。素より此れをも超克したならば、自分は今よりももつと自由に行爲し得るであらう。然し其れは他人に苦痛と、不快とを與へる事を欲しない自己の内なる善き動機の權利を主張しない點に於いて却つて弱さである。自分が超克しなければならないのは、只其の苦痛と不快とが他人に負はしむべきものである場合に、猶且つ此れを負はせる事の出來ない弱さのみである。例へば發表する價値なき原稿の發表を依頼された時、此れを拒絕するならば、他人に苦痛と不快とを與へるであらう。其れを恐れて發表を承諾する事は、弱さである。此の場合に於いては、其の苦痛と不快とは他人が負はねばならないものである。此れを負はしむべきを負はし得ない弱さは、超克しなければならない。かくの如き場合に自分が準據すべき原理は何であるか。其れは主觀的制約を除去する事である。即ち原稿の發表を拒絕する者が自分であつて、拒絕せらるゝ者が他人であると云ふ事を離れて、一般に人として一つの發表する價値なき原稿の發表を拒絕された時に、感ずる苦痛と不快とは負はなければならないものであると云ふ客觀的判斷に從ふのである。假りに此の場合拒絕さるゝ者が自分であるならば、素より自分は其の苦痛と不快とを負ふであらう。然るに其れが他人である場合には、此れに堪へる事が出來ないのは、其の苦痛と不快と

が他人のであると思ふからである。然し自他の區別を絶して、事柄の客觀的性質に依屬する時、此の苦痛と不快とは負はるべきものである。此の客觀的制約こそ、道徳的正の本質である。故に此の意味に於ての弱さは、假令其れが他人を勞はる心であつても、一つの「私」である。其れは自分の爲に「公」を枉げたる場合と同樣に「私」である。又他人の嫉妬や、羨望に堪へて、自己の人格價値を生かす事が出來ない弱さも此れと同樣に「私」である。其れは嫉妬し、羨望する者が自己である場合と同じく超克されなければならない。一言にして約せば、拒絶すべきものを拒絶する強さを獲得しなければならない。此の強さは正しき生活に缺くべからざる條件である。此れは素より他人の嫉妬と羨望とを故意に挑發する事が強さでないのとは別事である。其れは前述の如く他人を勞はる動機の缺乏若しくは弱さである。他人の思はくを憚る弱さは、此れ以上猶微妙なものがあつて、其れは我々の深き教養と結合してゐる。例へば他人に氣障であると思はれる事を厭ふて、善をなす事を憚る事である。凡そ眞面目なる事は、其れが揭げられたる時、氣障となり易い。故に氣障となる危險を避ける爲には、出來得る限り眞面目を表面に出さないやうにするのが安全である。眞面目らしさを揭げて眞面目でない者よりも、此れを揭げずして其の實眞面目

なる者が價値があるのは無論である。然し其の爲に善を主張し、善事をなす事を憚るのは弱さである。況して眞面目を掲ぐる者を輕蔑するのは、誤謬である。此の場合尊いのは、趣味として後者を好む場合であるが、此の場合に於いても、價値があるのは、眞面目を掲げないゝ處にあるのではなく、眞面目であるこゝろにあるのである。自ら氣障でないにも拘はらず、他人に氣障であると思はれる事を憚つて眞面目を掲げ、或ひは善事をなす能はざる事は弱さである。謙遜が純粹に自己内省から來るのではなく、他人に對して高慢に思はれることを憚つてなされる時には弱さである、すべての「心なき業」を避ける事は、最も高尙なるカルチユアであるが、心なき業と思はれる事を恐れて、自己の行爲を憚る事は弱さである。かくの如き弱さは、自分が他人の思はくを憚る弱さの中にて可成りに大なる部分を占め、且つ最も同情すべきものであるが、此れは必ず超克されなければならない。

次に自分は他人に對して、高く止まる事が出來ない此れを弱さとして感ずる。然し此の弱さは超克されねばならないか。例へば、他人に對してその名を呼び捨てにせず、命令的態度を取り得ざる事は弱さであるか。確に其れは、先生らしく、主人らしく、且師らしく、況して王らしく振舞ふ事

の障碍となる性質である。自分が此等の者らしく振舞はんとする時、此の性質は弱さとして感じられるのである、然し乍ら此の弱さは、此等の階級的意識が正しきものでない限り、超克される事は出來ない。其れは超克すべからざるもの、即ち弱さではないからである。此の如き弱さを超克せんとして努力する事は、無理である。自分は此れ迄此の弱さをも超克せんと努力して來た。其れは何故であるか　其れは一には自分が王や、師や、主人や、旦那を還相の世界に於て観照する時にそれ〴〵の階級の善を見出すからである。自分は往相の世界に目をとぢる時、其の位置にしつくりと嵌まつた王や、師や、主人や、旦那を充分に愛し得る。かくて自分が假りに此等の地位に就いたと想像しても自分に愛を感ずる事が出來るからである。歴史や物語りに於いて、我々はかくの如き威厳ある王や、尊敬すべき師を見る。藝術に於いて、立派な主人や、鷹揚な旦那を描く。又現實の世界に於ても、他人がかくの如く振舞ふ時に自分は其れに憎悪を感ぜずして、敬愛を感じ得る者が少くない。故に自分も此等の者「らしからぬ」點丈けを排斥して、此等の者「らしく」ならん事を欲するに到るのである。然し乍ら他を観照する場合と自らかくなる場合とは事情を異にする。自分は相手に對して、自分を階級的に高く置く時、不自然を感ずる。主人らしく、旦那らし

く、師らしく振舞ふ時、心内に或る拘泥と「こそばゆさ」とを感ずる。況して王らしく振舞ふ事は到底出來ない。換言すれば、此等の者「らしく」なる事が出來ないのである。自分は此れを氣位なき事と感じて來た。然し自分がかくなれないのは、其れが正しくない事を知つてゐるからである。其れを知つてゐる限り、此の「弱さ」を超克する事は出來ない。其れは恥辱ではない。如何なる王や、師や、主人や、旦那と雖も、其れが本當には正しくないことを知つてゐる限りに於いて尊いのであり、彼等をそのもの「らしく」する必須の要素は、人と人との對當の自覺より生ずる謙遜である。此れを缺く時、此等の者は鼻につくものとなる。然し此の對當の自覺は其れが腹の底にかくされてゐて、自ら此れを道徳的の批判の對象となさず、相手も亦此れを強ひざる時に初めて其の自然さを生ずるのである。一度自ら此の點を批判し相手が此れを強ふるや、否や、其の立場は、支へ難きものとなる。然るに自分は素より其の生活の中心を往相の世界に置くが故に、其れは絶えず、自己批判となり、又相手が此れを背はざる時、自己の優越を強制する事が出來ない。故に自分と雖もしばらく還相の世界に立ち、又相手が其れを許し、特に望む時、師や、主人や、旦那の地位に立つて不自然を感じない時もある。然し相手の心が不明な時若しくは此れを背

んぜざる事が明らかである時、自分は、此等の者らしく振舞ふ事が出來ない。自分は二人の他人同志の場合に於いては、主從や、君臣や、師弟の自然にして強ひざる關係を美しいと思ひ得る。年少の生意氣なる學生が年齡に於いても、學德に於いても明らかに長者であり、且つ直接に其の影響を受けてゐるにも拘はらず、師らしき禮を以て對しないのを見る時、醜さと不適當さを感ずる。然し其の長者が弟子らしき禮をとらざる事を怒り、且つこれを表現する時には、其の長者を師らしき者と感ずる事を妨げられる。故に自分の場合に於いても、生意氣なる年少の學生に對して、自ら師らしき地位を保たんと努力する事は、氣が引けざるを得ない。女中や、車夫や、其他一般に所謂目下の者に對して、又智德の劣れる者に對して、高く止まり、若しくは命令的態度に出る事が出來ない。其れは當然な事であるが故に出來ないのである。それは自己の心を引き緊める事に依つて出來る事ではない。故に自分は彼我の間に自然の落ちつきを得ない限り、かくの如き所謂氣位を保たんとする意識的努力をなす事は廢棄すべきである。又自分は自分の人格や才能に自信を感ずる事の出來難い事を、弱さと感ずる。然し此の弱さは果して超克すべきものであるか。若し此の弱さが自己の人格を、即ち自己の内なる「人」を尊重する心、自我感情の稀薄であるなら

ば、其れは素より超克さるべき弱さである。然し自己の現實を自己の理想と對比する時、自ら自信を持ち得ざる事は當然であつて、弱さではない。此れは眞の意味の謙遜である。理想高く、自己反省が鋭く、且つ精進の念旺んであれば、益々自信を持ち難い。故に此の種の弱さは超克する必要はない。又自己の人格や才能を、他人と比較して自信を感ずる事は、本質的意義を持たない。其れは自然ではあつても、子供じみてゐる。且つ精進を鈍からしめる危險がある。偉大なるものから見た時、かくの如き自信は多くは滑稽なる衒氣であらう。最良の場合に於ても其れは愛すべき稚氣である。故に此の種の弱さを超克せんとする努力は廢棄して、素直になるべきである。

然し此處に一つの最も痛切な問題がある。其れは他人の侮辱に對して、如何に自己を保つべきかと云ふ問題である。自分は他人の侮辱に對して實に感じ易き神經を持つて居る。他人に對して積極的な強さの不足してゐる爲に、恐らく忍耐の點に於いてさまで缺陷を持つてゐない自分も、此の侮辱に對して丈けは、極めて怒り易き性質を持つてゐる。自分は此の性質を其れ自身には惡いとは決して思へない。寧ろ自分の人格の強みと思ふ。其れは自分の内に自分の人格價値に對する感覺が旺んである事の證據である。此の感覺を鈍くする必要は絕對にない。其れは鋭ければ鋭い

丈けいよ／＼いゝ「たゞ問題は他人の侮辱に對する最も正しき態度は、即ち此の自我感情の誇りを最も合理的に生かす道は如何と云ふ點にある。自分は「侮りを防ぐ」爲と云ふ。然し侮りとは何であるか。又其れを防ぐとは何を意味するか。抑々人格は侮辱され得るものであるか。若し侮辱され得ないものであるならば、此れを「防ぐ」と云ふ事は無意味である。侮辱とは、他人が自己の人格の現にある價値を認めず、且つ其の不承認の意志を表示する事である。若し他人の評價が當つてゐるならば、其れは當然であつて、侮辱ではない。他人が無智若しくは、正しく認識せんとする意志の缺乏の爲に、自分の人格の價値を理解し得ず、若しくは理解し得ても、惡意を以て此れを枉げて表示する場合、即ち誤解、若しくは讒謗の場合のみ其れは侮辱であり得る。然し乍ら此の場合に於ても、其れに依つて自分の現にある人格價値は毫末も減ずるのではない。其れは一定である。如何なる他人の態度も此れを動かす事は出來ない。換言すれば、人格價値は不可侵である。若し人格價値が他人の無智や、惡意に依つて傷つけられ得るものであるならば、人格の尊嚴は保つ事は出來ない。人格は自由であり得ない。我々の人格は何時にても他人に依つて傷つけられるからである、從つて我々には此れを防ぐ術がない。此の意味に於いては、侮りな

防ぐと云ふ事は無意味である。故に侮りを防ぐと云ふ事の可能なる意味は、對神乃至對眞理の問題ではなく、對他的の問題である。他人に對して、他人の評價を自分が承認しない事を表示する事である。從つて其の目的は、自己の人格に對する他人の印象を訂正する事である。併し此の目的は効果を持ち得るであらうか。讒誣に對しては素より此の目的は無意味である。何となれば彼れの印象は間違つてゐないのだからである。誤解に對しては、彼れの瞳を開き、其の認識態度を嚴肅ならしめる事に依つて、此の印象を訂正する事は或る程度まで達し得る場合もあり得るであらう。然し乍ら其れは甚だ覺束ない。我々は他人の認識能力、ものを觀る瞳を一朝一夕にして深め得るものではない。其の人が全力を盡くしても觀る事の出來ない眞を如何ともする事が出來ない。又此の努力に依つて、他人の認識態度を正しくし得るとも限らない。却つて反動的に一層不正にする場合が少くないであらう。況して我々が怒りを以て對する時猶更らである。且つ又此の種の印象の誤謬が自分の知らざる處に於いて存在した時は如何であるか。我々は絶えず他人の噂さや、批評に注意し、印刷物に目を通し、陰口を探聞しなければならない。其れは出來得る事ではない。一言に約せば、若し侮辱とは、我々の人格價値の他人の印象の誤謬であるならば、我々は

此れを防ぐ事は出來ない。故に此の種の侮りを防ぐ行爲は無意味である。リツプスが云ふ如く、名譽とは、自己の人格が現にある處のものであつて持つ處のものではない。從つて其れは傷つけられ能はぬものである。傷つけられ能はぬものを防ぐとは無意味である。只此の際他人の侮辱に對して、如何なる態度を取るかと云ふ事は、我々の現にある人格價値の一要素である。我々は嚴密に只此要素のみを關心すればいゝ。故に其の時に我々の人格から發動するものが、其れ自身に惡しきものである場合には、卽ち怒りや、憎みである時には、其他の點如何に拘はらず、我々にとつて絶對の損失である。此れこそ自己の人格價値の缺乏であるが故に眞正の不名譽である。故に我々が此の際に唯一の關心すべき事は只自己の人格から惡しきものを發動せしめないことである。更らに善なるものを發動せしめ得るならば一層いゝ。此の場合には、他人の侮辱と云ふ機會に依つて、眞の自己の人格價値、卽ち名譽を保ち得たのみならず、此れを擧げ得たのである。そして毫末も此れを傷つけられてゐないのである、換言すれば勝利である。故に他人の侮辱を受けた時の最も強き態度は、先づ此れを超越し、然る後其の犯されざる立場から、出來得るならば積極的に善をなす事である。卽ち愛の爲に他人の瞳を開き、認識態度を正しくせしめる爲に、其の

効果如何に拘はらず努力する事である。又純粹に眞理の爲に其の誤りを正す事である。然し云ふ迄もなく、其れは別の行爲であつて、侮りを防ぐ事ではない。故に他人の侮辱に對して怒りと憎みを以て反應する事は、決して強い事ではない。其れは寧ろ強さの缺乏である。故に自分は強くなる爲には、侮りを防ぐ事を廢棄すべきである。誤解と侮辱とを超越して孤獨に堪へ得る強さは凡ゆる強さの中にて、最も内面的にして且つ最も堪へ難きものを堪へる點に於いて、強さを要する、賞讃すべきものである。其れは恐らく見えざる何ものかの祝福を受けるに足る尊きものである。

一般に所謂「傷つき易き神經質」は強さではない。藝術家氣質と近代人らしき感觸の此の種の鋭さは一見強さに似て其の實弱さである。精神的刺戟に對して堪へ得る強さ、相手を容れる廣さ、悠々たる鷹揚さ、又常に陰鬱なる澁面を作り、尖りたる神經を以て人に對し、不安と焦燥とを感じ易き事は反つて人格の弱さである、寧ろ自由にして、平和に、明るき感情を保ち得ることそ強さである。素より其れが良心鈍く、感受性粗く、精神的血液の巡環惡しき結果である時、其れは弱さである。然し自分の弱さは最早や其の點にはない。反對にあまりに傷つき易く感じ易き

ところに自分の人格の弱さがある。自分は此の弱さを超克しなければならない。只此處に最後に自分の個性にとつて特殊な懸念となる一事が殘存する。其れは自分が他人に對して怒り得ず、憎み得ないのは、其れが惡、若しくは無意味であるとの認識が缺乏してゐるから許りではなく、憎むに堪へ、怒るに堪へる勇氣の缺乏の爲である事である。卽ち憎みや怒りが假令善であると認識しても、猶且つ憎み得ず、怒り得ざるものである。若し自分に此の缺陷がないならば、自分が圓滿に達する事は、遙かに容易であるであらう。若し此の缺陷のまゝにて柔和となるならば、其れは權威ある圓滿ではない。權威ある圓滿は、怒りと憎みとを堪へ得る力を持ち乍ら、只其れが惡である故のみに、此れを抑制して、柔和となる時に初めて生ずる。佛者の圓滿は此れである。此の力を缺く時、惡人はたやすく其の圓滿を輕蔑し蹂躙する。又其れは當然である。何となれば其の力の點に於いては、惡人の人格が勝つてゐるからである。故に自分の懸念は、自分が若し今如何なる相手に對しても、怒りと憎みとを壓へるならば、自分は如何にして此の權威ある圓滿に達する爲に缺くべからざる力を養成し、訓練する事が出來るであらうかと云ふ問題である。此れは自分にとつては此れ迄一つのヂレンマの如くに見えた。我々は、惡を斥けなければならない。

然も其の爲に要する力を惡に依つて訓練しなければならないならば、其れは疑ひもなく自家撞着である。然し自分は幸ひに此れを解決し得る方法を發見した。即ち惡を手段とせずして、同じ力を訓練する方法を發見した。其の方法に依る時、自分は怒りと恨みとを用ふる必要がない。然らば其の方法は如何。其れは前に述べた他人に負ふべきものを負はしむる強さと、自分が次に考察する愚痴を超克する力とを結合すればいゝのである。

自分は、愚痴である。此れを弱さと感ずる。此の弱さを超克しなければならない。愚痴とは不可避なるものに對する無益なる情動、若しくは努力である。即ち其の情動若しくは努力に依つて何等の効果をも舉げ得ないにも拘はらず、此の情動と努力とを廢棄し得ざる事、即ち無智である。例へば自分は雷を恐怖する。其の恐怖は直ちに勇氣の缺乏ではない。此れを恐怖せざるものは雷に依つて死ぬる事を知らざる愚者か、若しくは運命の僥倖を當てにする呑氣者か、若しくは死を恐れざる者でなければならない。然し多くの場合雷を恐れざる者は死を恐れざる者ではない。然し自分が死を恐れる以上、雷を恐れるのは當然である。自分は此の恐怖を弱さとは感じない。然し乍ら此れを防ぐ方法がない事を知つた場合に、猶畏怖の定まらないのは、愚痴である。狼狽し居

を失ふ事は弱さである。心配に依つて取り除く事の出來ないものを心配し、悲嘆に依つて取り返へし能はざるものを心配悲嘆する事も愚痴である。搔き口說き、恨み、悶える事が、其の効果なき事を知り乍ら猶此れを廢棄し得ざる事は愚痴である。あらゆる愚痴は盡く弱さである。此の弱さは何等の躊躇と、愛情なく、例外なく超克さるべき弱さである。此の愚痴は感傷と詠嘆と結合して人格に脆弱の影を投ずる。我々は此の弱さを超克するに依つて絕對に何ものをも損失しない。避くべからざる苦痛や悲嘆を勇ましく堪へて此れを他人に訴へざる事、即ちストイックな强さを保つ事は人格を高貴ならしめる條件である。受くべきものを受けて、快活を保つて人に接し得る强さは實に尊い。其れはプラトンのフアソドンに描かれてゐるソクラテスの臨終に現はれた强さの如き頭の下がるのを覺える。自分には他人にアッピールし易き性質がある。此の弱さは超克されなければならない。然し乍ら自分は旣に自分の生活の基調が、感傷的弱さを殆んど超克し得てセンチメンタルの臭氣から脫せんとするのを自覺する。

少くとも之を超克し得る充分なる自信を持つてゐる。自分が最も自信を缺くのは、心配と恐怖である。例へば自分が腸結核になりはすまいかと云ふ心配、雷が落ちはしまいかと云ふ恐怖である。

併し乍ら此の際自分がなすべき事は、最善を盡くして、此れを防ぐ方法をとる事のみである。其方法が既に無いならば、覺悟を定め、心配と恐怖とを廢棄すべきである。例へば惡人が殺害の威嚇を以て惡を脅迫したとする。此の際其の脅迫が嚇かしにすぎないか、眞の殺意であるか、何れにもせよ、兎に角自分が其の惡を爲すべからざるものであるならば、之を拒絶しなければならない。自分のなすべき事は、其の殺害を防ぐ方法を取る事のみであつて、其の方法が既にないならば、覺悟を定める外はない。心配と恐怖は、絶對に何の効果をも持たない。自分が服從し得ざる惡人の要求に對しては、此れを拒絶する道がある許りである。即ち惡人が其れに依つて如何に反應するかに拘はらず、拒絶すべきものを拒絶し、取るべき方法を取り、不可避なるものは覺悟すべきである。此れ眞の合理的な強さである相手に對して、何等の惡をもなさず、相手の惡を遂げしめず、正しく用ひ得る方法を用ひ盡くして猶且つ不可避なるものを忍受するのである。其れは合理的に自若としてなし得べき強さである。此の時惡人に依つて自分の人格は毫末も犯されてゐない。自分の持つものは犯されても自分のあるものは犯されてゐない。そして自分の人格からは何等の惡も發動してゐない。此れ最も強き道であり、此の場合此れ以上に強くある事は出來ない。此れ以

れ以上の道がなかつたのである。雷に打たれて死んだのと同樣である。我々が考へ得る地上に於ける最高の强さ、最上の圓滿は此れ以上に無いのである。此の强さに比して、自分の現狀は如何であるか。第一に負ふべきものを負はしめる勇氣が不足してゐるが故に、相手の不正なる要求を充分に拒絶する事が出來ない。次に天災に對する覺悟と、愚痴の斷絶の勇氣を不足する爲に、惡人の脅迫に對して自若としてゐる事が出來ない。此の二つは惡人から侮りを買ふ當然の理由を持つてゐる。然も侮辱に對する自分の敏感性は、此れに極度に反撥する。故に拒絶し得ずして、通過せしめたる惡に對しては、其の報償の要求として憎惡と呪咀とを感じ、脅迫せらるゝ屈辱に對しては、傷つけられたる内心の矜りを囘復せん爲め敵愾心となる。かくて「侮りを防ぐ」道は惡に對して惡を以て鬪ふ「强さ」を求めるに到るのである。然し自分は上來此の如き「强さ」が眞の强さでない事を見た。侮りが自己の持つものゝ損傷を意味するならば、此れを防ぐ道は存在しない。自己のあるものゝ損傷を意味するならば其れは妄想である。自己のあるものは外部から損傷さるゝ事はない。故に「侮りを防ぐ」とは畢竟妄想である。自己のあるものは、自己のみが損傷する。眞のの侮辱とは、他人の壓迫に依つて、自己のあるものを損傷する事である。此の意味の侮

辱を防ぐ道は確實に存在する。そして此の道を守る強さを訓練する合理的な道も、確實に存在する事を見た。故に自分は強くなる爲には、「侮りを防ぐ強さ」を求むる事を廢棄し、眞の内面的な強さを――何等の惡をも含まざる強さを求め其の訓練を此の合理的なる道に依つて、爲すべきである。

次に自分の弱さは、他に對する弱さのみでなく、自己に對する弱さがある。自分は此れを超克しなければならない。自己に對する弱さとは、自己が爲すべしと認めたる事をなし得ず、なすべきでないと認めたる事をなす事である。人格の自律性の缺乏である。自分の理性が善惡を判斷し得ざる懐疑せる事物に對して、實行の勇氣なき事は、弱さではない。然し理性が明らかに認識せるものを壓へ得ず、善と認識せる事をなし得ざる事は弱さである。自己の負ふべきものを負はず不正なる欲望を抑へ得ざる事は眞の弱さである。總て克己と云ふ徳の中に含み得べき力の缺乏は眞の弱さである。例へば、自分の理性は肉欲と感情耽溺とを明かに惡と認識する。然も此れを抑制し得ない事は眞の弱さである。自分は惡を惡と認め得ざる弱さは、殆んど持つてゐないと云つていゝ、自分の弱さは、其處にはなく、其の認めたる惡を抑制し得ない處にある。此れ自分が超

克しなければならない、凡ゆる弱さの中にて、自我の生長にとつて、現在最も根本的たる弱さであらう。故に自分は今さし當り此の弱さの超克に力を注がなければならない。然し此の超克は、他人に對する何等の氣兼ねや、心遣ひに依つて妨げらるゝ恐れのない、純粹に内面的な精進である。故に最も自分の性格にとつて容易であるべき筈のものであり、從つて此れをなし得ざる事は正眞正銘の懶惰である。

以上の全體に亘つて、一つの原理を求むれば、弱さを超克する道は善を行ひ、惡を拒む道である。卽ち合理的なる道である。此の理性の認識に忠實なる實行的勇氣をソクラテス的勇氣と名づけるならば、自分が自分の弱さを超克する道は、ソクラテス的勇氣の養成である。惡を行ふに堪へ得る強さを求める事を廢棄し、惡を拒み得る強さのみを訓練する事である。怒りと憎みとに堪へ得る強さを求むる事は此れを廢棄し、純粹に善なるものゝみを行ふ強さを求める事である。合理的でない勇氣を求める事は無理である。此れを持ち得ざる事は不名譽ではない。不名譽なのは合理的勇氣を缺乏する事である。而して此の勇氣を訓練する合理的なる方法も亦確實に存在する事を見た。故に此の合理的方法に依つて、合理的勇氣を養成する事こそ、自分が眞に強くなる爲

め唯一最良の道である。あのプラトンの「辯明」や「クリトン」に現はれてゐる如き合理的なるソクラテスの勇氣こそ眞の勇氣である。此の道に依つて、自分は自然さと落ちつきとを感ずる。惡に堪へ得ざる性來の弱さを矯めんとする必要はない。かくの如き弱さは、寧ろ其の弱さに徹し切ればいゝ。即ち持前の小心翼々たる性質を生かせばいゝ。何よりも容易い事である。只善を行ひ得ざる弱さのみを超克し、其の超克に全力を盡くせばいゝ。此れ性來「弱氣」なるものゝ最も行ひ易き、自然にして合理的なる方法である。かくて外面的に弱く見ゆる事は恐れ若しくは恥づる必要はない。其れは弱さではないからである。秀吉や、清盛の如く強くなれないのは、其の強さが合理的でないものを含むからである。かゝる強さに達せんとして努力する事は愚である。無理である。惡に對して弱き者即ち善良なる者程其れに適しない。一言にして約せば、出來得る限り強くなる外には道はない。

　最後に此處に最も深き問題が殘存する。我々がかくの如き合理的なる道に依つて、善を行ひ惡を拒むにも拘はらず、時として惡人が善人に克つのは何故であるか。例へば我々が最善の道を盡くして、惡人の脅迫に對した時、我々が惡人に殺されると云ふ事實は、如何に解釋すべきである

か。此れは確に不合理である。合理的なる道に依つて不合理なる結果を生ずるとすれば、かくの如き世界秩序は調和あるものとは思はれない。時として善が惡よりも禍であるが如き世界に於いて、我々がかく迄、生命を賭して迄、善を行はなければならないと云ふ事は、如何にしても不合理である。かくの如き世界に於いて、善を行ふ勇氣を支持し得ざる事は無理がない。其れは我々の側の吾が儘ではなく、世界秩序の――其の秩序の維持者の責任である。卽ち宗教的に表現すれば、神と其の創造との缺陷である。然し乍ら、我々が神と其の創造との善を信じられないとすれば、我々がかく迄善に對して感ずる何物にも代へ難き感激が理解し難きものとなる。此處に於いて我々は此の不合理を見かけもの（シャインバール）と考へざるを得なくなる。惡人が善人に、時として、克つ如く見ゆるのは只さう見える丈けであつて、事實は如何なる場合にも、善人は惡人に克つのである事を要求せずには居られなくなる。此の要求は必然的に我々を神として來世の存在の要求に導く。そして此れを單に要求としてゞなく、事實として信じ得る時、我々は宗教意識に入るのである。我々は此の事實を知る道はない。只信ずる道があるのみである。此の宗教意識に於いて、善と福との嚴密なる一致を信ずる時、初めて此の不合理は解決し得られるのである。素より我々は

福を得んが爲に善をなすのではない。然し善が福でないが如き世界に於いては、善そのものゝ權威が保たれないが故に、此れが爲めに身命を賭する勇氣を支持する事が出來ないのである。故にソクラテス的勇氣を支持せんとする時、必然的に神と來世の存在の信仰に導かずには居られない。此れ人性の必須なる、實踐理性の要請である。此の事に就いては別に委しく「善と福との一致に就いて」といふ論文に於て自分の意見を述べるであらう。（一九二三・一一・一三）

# 善と其の實行に就いて

自分は前論（善と福との一致に就いて）に附屬する問題として、かくの如くして認識せられたる善が果して實行可能であるか、否かの問題に就いて考へなければならない。善は實現せらるべき或る狀態の表象を對象とする意欲である。我々は此の狀態の表象を名づけて理想と云ふ。故に理想は其の本來の性質上實現せらるべき筈のものである。此の理想を實現せんとする意欲が我々の知覺の對象として客觀化された時、我々は此れを行爲と名づける。實行とは此の行爲を指すものに他ならない。然らば實現せらるべき狀態の表象を對象とする意欲は、行爲となる事が可能であるか。其れは完全に可能であるか、或ひは、或る程度に於いてのみ可能であるか。若し完全に可能であるならば、理想と現實とは只主觀內の表象と其の客觀化との關係に過ぎない。實行とは此の同一なる一つの狀態を主觀より、客觀に移す手續きにすぎない。我々はかくの如き關係を名づけて理想と現實との一致と呼ぶ。若し或る程度に於てのみ可能であるならば、我々の主觀內の狀態と客觀化されたる狀態とは、同一物の主觀的方面と客觀的方面との關係ではない。其れは主

觀內の狀態の不完全なる客觀化である。嚴密に云へば別物の客觀化である。我々は此の如き關係を名付けて理想と現實との矛盾と呼ぶ。又此の客觀化が全然不可能なる時に、其の主觀內の表象としての狀態を我々は空想と呼ぶのである。故に空想とは實現せらるべき筈の狀態ではあるが、實現不可能なる狀態の表象である。我々は第一にかくの如き狀態の表象を卽ち空想を意欲の對象となし得るか。其れは確に爲し得る事である。只其の意欲を客觀化する能力を我々が持たないのにすぎない。そして我々が此れを意欲し得る限り、其れが實現せられざる事は、我々にとつて苦痛である。故に此の苦痛を除去せんと欲する時、我々は此の種の意欲を放棄せんとする。然し乍ら若し我々に其の能力がありさへしたならば、素より我々は此れを放棄することを欲しないであらう。何となれば、我々の生活とは、此の主觀內のあらゆる有り得べき意欲を客觀化する事に他ならないからである。故に或る種の意欲を放棄する事は、其れ自身我々の生活の減殺を意味する。故に空想と雖も、其れが意欲の對象となり得る限りは、我々の生活を、從つて其の禍福を規定する生きたる力である。此の意味に於て我々は空想を無視する事が出來ない。然らばかくの如き空想は、實在するか。卽ち我々には實現不可能なる理想があるか。疑ひもなく此の地上の生活に於

いては、かくの如き理想は實在する。其れは此の地上の生活の限界のために、實現さるゝ事の不可能なる理想である。我々の主觀內の表象的狀態としては實在し、從つて意欲の對象となり得るのであるが、其れを客觀化する事が不可能なのである。例へば自分が「經濟的制約に就いて」の中に擧げた如き限界は卽ち此れである。我々が此の地上の生活を以て唯一の生活となす限り、此の如き制約は、如何ともなし能はざるものであつて、我々は此れを忍受する他はない。然し乍ら理想は實現せらるべき筈のものとして意欲さるゝものであるが故に、其れが實現出來ないと云ふ事は、存在的の不合理である。卽ち此の種の理想が我々に存在すると云ふ事は、我々の存在そのものゝ不合理である。故に我々は、あらゆる理想は盡く實現さるゝ事が可能である事を實踐理性から要請せずにはゐられなくなる。此の事たる此の地上の生活に於いては、事實として不可能であるが故に、我々は必然的に來世を要請せざるを得ないのである。我々は來世を否定して、理想を殺すべきであるか。若しくは來世を肯定して理想を生かすべきであるか。其れは來世の存在を否定する絕對的に確實なる認識が存在しない限り、――それは決して存在しないのであるが――後者を選ぶのが當然である。素より來世の存在を肯定する確實なる認識も亦存在しない。我々は此れを要

識し、信仰し得るのみである。此處に我々の宗教的意識が存在するのである。然し乍ら、兎も角も此の地上の生活に於いては、實現不可能なる理想が存在する事は事實である。從つて我々の最高善は其の理想の通りに實現される事は不可能である。故に我々に許されるのは、地上に於いて可能なる限りに於いて、最高の程度に、此の理想を實現する事のみである。此の意味に於いて理想と實現とは、地上に於て必然的に矛盾する。次にかくの如きは「善とは何ぞや」と云ふ問題が既に解決されたるものとして即ち善の認識が可能なものとして其の認識されたる善が實現不可能であると云ふのであるが、此の善の認識そのものが又完全に可能でない。最高善は、主觀内のあらゆるあり得べき個々の意欲を一つの全體として調和したるものでなければならない。然るに此の調和を見出す能力が人間の限界を超えてゐる。故に我々に許されるのは、我々が認識し得る最高の程度に於いての善を實行し得るのにすぎない（リップス倫理學の根本問題第五章及び第六章參照）、次に認識せられたる善が地上に於て實現可能であり、且つ實行的意志に於いて、何等缺くる處がなくとも、此の地上の制約の爲に、或る特殊の形態をとる事に依つてのみ、實行可能なる場合がある。即ち自分が「道心の三つの相」に於いて詳述した如き還相の世界は即ち此れである。

遷相の世界は、決して妥協の世界ではない。善が最高可能の處に其の相を不完全に實現したのである。例へば或る醫者が其の業務に忠實なる事の善なる事を充分に知つて居るとする。又其れを實行せんとする意志に於いても缺くる處がないとする。然し彼れは其の業務に忠實ならんが爲には、自分の持つ限りの智慧を盡くして、其の與へられたる時間を最も能率高く使用せん爲には、其のために必要なる研究や、廻診や、往診等に時間を割り當てなければならないが故に、彼れが外來患者を如何に出來得る限り親切に、忠實に診察せんとする意志を待ち、其れが善である事を確知しても、猶一定の人數を限り、或る程度の待遇しかなすことが出來ないのである。我々は診察室の醫者を見て親切と云ふが如き印象を受ける事は殆んどなく、寧ろ其の反對に事務的な印象を受けざるを得ない。然しかくの如きは其の醫者にとつては、認識したる善を最強の實行的意志を以て最高可能の程度迄實現したる相である。又一つの婚姻の晩餐の席に列つた時、我々は其處に自分が善と認識する能はざる光景を見ても、此れを其の席上にて責め、若しくは其の晩餐を不調和ならしむる如き行爲をなす事が出來ない。かくて彼は其處に醸される人間的な、從つて彼れが多少とも善と認められない如き空氣に身を任せ、例へば一つのユーモアに對して鹿爪らしき面をなさ

ず、又恐らくはさされた盃を乾さないわけにゆかないであらう。キリストが「花婿の友其の花婿と共にある間は何んぞ飲食せざらんや。」と云ふが如き境地は此れである。我々の教養が高まれば高まる丈け、我々の動機は複雜となり、意志決定は多面的となる。或る一つの意志は其れを實現せんとする時の環境に依つて種々なる形態をとる。同じく隣人の窮乏を助けんとする意志も、相手がアクセプトするか否かを顧慮する、其れ自身に於いて善良なる動機を持つ者は、此れを持たざるものよりも、同じ强さの愛を持ち乍ら、物質的提供に於て遲るゝ場合もあるであらう。凡そユーモアや、鷹揚さや、無邪氣さや、心遣ひや、すべて人格の仕上げに屬する善は、此等を缺くものよりも善の實行に於て一見劣りたるが如き觀を呈する事は少くない。

又我々が善と知つても、我々の現に把握してゐる德が足りない爲に行ふ事が出來ない場合がある。例へば一人の誘惑的なる淫婦と我々が色情の關係に陷つたとする。我々は其の女を戀愛しては居ないにも拘はらず、肉欲を挑發せられるとする。此の際我々は明らかに其の女との戀愛的自欺及び肉體的關係を斷たなければならない。然しかく迄深く接觸したる緣深き隣人として愛すべきである。故に此の際我々にとつて最も善なる行ひは、其の女に隣人としての愛と奉仕を行ひ乍

ら、然も色情的關係を斷つ事である。我々は此の事を確かに知る。然し我々の現在の德の力を以ては彼女と交り乍ら、例へば彼女と同居し、或ひは日夕往復し乍ら、其の誘惑に打ち克つ事が不可能であるならば、我々は如何すべきであるか。我々は彼女と交りを斷ち、若しくは少くとも自分が其の誘惑に打ち克ち得る程度に於て、彼女と接觸し乍ら、出來得る限り愛と奉仕を爲すより他に道がないであらう。故に德とは、逆に云へば善行を爲し得る人格の能力である。此の能力を揣らずして、他人に働きかけるならば、其の善き動機は、結果として惡となるであらう。故に其人の意志決定には猶一つの動機が參加すべきであつたのである。即ち自分の德の力が惹き起すべき結果の豫見が此れである。一つの理想が最高可能の客觀的善を結果するやうに我々の動機を決定する事を我々は智慧と云ふ。此の智慧を缺く理想家は、善を行はんと欲して惡を結果する悲劇を生み出すであらう。此れ現實の理解なき理想家の同情すべき過失である。

次ぎにかくの如きは、善の認識に於て懷疑なき場合であるが、我々は善惡の判斷がつかない時、如何にすべきであるか。危急なる出來事に面して、其の判斷がつく迄手を拱いて傍觀すべきであるか。我々は不完全なる認識のまゝに指導的本能（「せずにはゐられない行爲」參照）に依つて

行動しなければならない。以上の如く考へ來れば、地位に於て我々に可能なる善の實行は、其の理想に比して如何に不完全なるものであるかが解るであらう。卽ち此の意味に於ては、理想と現實とは、我々の全力を盡くしても、猶矛盾せざるを得ないのである。

若し我々がかくすべきであると主張する事が實行出來ない時、それが直ちに僞善であるならば、我々が僞善者たらざらん爲の唯一の道は、實行不可能なる理想を放棄する事である。嚴密に白紙主義である時、完全に僞善から免れる事が出來る。然しかくの如きは我々のとるべき態度ではなからう。非難に價するのは、揭げたる理想を實行せんとする意志の缺乏であつて、揭げたる理想と實行せられたる現實との距離ではない。此の意志が強い限り、其の理想は、高ければ高い丈けいゝ。故に理想と現實との距離は其れ自身評價の標準とはならない。理想と現實との距離を生ずる條件は二つある。一つは理想の肯定であり、二は實行的意意の強弱である。此の二つは別々に評價されなければならない。卽ち理想は高ければ高い丈け善く、意志は強ければ強い丈けいゝ。何となれば理想と現實との距離が小さい丈けいゝのであるならば、強さに於いて劣つて居る意志も只其の理想が低い爲丈けで此の距離を小くする事が可能であるからである。理想を低くして意志強さ小

乘的善人は此の距離の最も小なる故を以て同じ强さの意志を持ち乍ら理想の高遠なる爲に常に此の距離を小ならしめ得ざる眞の理想家例へばトルストイの如き人は價値少きものとなる。假令其の意志極めて薄弱なるものと雖も理想を低くして其の距離を小ならしめなければならない理由は、何處にも存在しない。かゝる人は、其の高き理想の故に益々露骨となる自己の意志の薄弱を恥ぢて其の訓練を努力すべきであつて、決して理想を低くすべきではない。素より「自分はかくなす」と宣言して、かくなさなかつた時、其れが非難に價するのは云ふ迄もない。然し「かくすべきである」と云ふ理想を掲げることゝ、實際なすことゝが相違する時、其れはソクラテス的勇氣の缺乏の點に於てのみ非難に價する。我々のなすべき事はプラトーン的理想をソクラテス的勇氣を以て實行する事である。そして其の結果として生ずる矛盾は——其れが避くべからざる事は上述の如くであるが——自己の無力として恥づべきである。此の矛盾は良心の苛責を免れ得るであらうか。其處に極めて深き問題が横はる。我々は若し眞に我々の智力と、意力との限りを盡くして、猶且つ善を行ふ事が出來ないならば、其れは自分の環境に缺陷があるのである。故に我々は環境の改造を努力しなければならない。即ち客觀の（人及び物の）狀態が善の實行の障碍とならぬ

やうに改造しなければならない。人間の（廣き意味に於ける）教化と、社會制度の改造、及び自然力の處理とに依つて、出來得る限り此の障碍を取り除かなければならない。然し乍ら、猶其の上に於いても、善を行ひ得ないならば、其れは我々の存在の地上に於ける方式の限界に到達したのである。我々は最早自分を責める事は出來ないであらう。然し其れを以て自分の存在は調和ある狀態には達したのではない。我々は良心の苛責を免れ得ても、猶不幸を感じざるを得ないであらう。其人にはもはや此の地上の存在の方式が釣り合はなくなつたのである。其人の人格價値は、此の地上の存在の方式が許す以上の善を行ひ得る能力に迄達したのである。故に其人は一層高き善を行ひ得る事を許す一層高き世界を要求する道德的權利を持つてゐる。故に我々の人格が此の境に達した以上は、此の地上の方式を拒否して、他の一層高き世界を、我々に道德意識を與へたるもの――神に對つて要求する權利がある。故にかくの如き世界が存在しない事は、最深の不合理である其れは道德意識そのものゝ虛妄である事、我々が絕對に服從しなければならない道德的義務は存在しない事を――約言すれば凡ゆる善は無意義である事を證明するものである。故に我々が既に善の意義を認める限りは、自己若しくは他人を賞讃若しくは非難する限りは、かくの如き世界の存

在を肯定しなければならない。若し此の世界を肯定せずして、然も善の意義を認め、自他を賞讃もしくは非難するものは、明らかに自家撞著である。然し乍ら我々が善の實行に於て、未だ此の方式の限界に達せざる以前に、此の方式が許す善を行はずして、此の方式の限界を拒否せんとする事は僭越である。例へば、植物と動物との間に絶對的の區別なきが故に、有情を食物となさなければならないやうに作られて居る此の世界を、道德的權利を以て否定し得る者は、總ての動物を食はず、菜食し、然も其の菜食にも堪へ得ざるに到つたものでなければならない。其人の善行に對して此の地上の方式が充分なる餘裕を持つてゐる間は、其の人が此の方式を拒否する權利はない。實際に此の地上の方式が最早や其れの道德的價値に相應しくない程に生長し得た人があるならば、其れはまさしく我々が聖（ハイリッヒ）と云ふ語に依つて呼ぶに相應しきものとなるに相違ない。故に此の地上の存在の方式は、我々にとつて充分の善行に對する餘裕を持つてゐると云はなければならない。云ひ換へれば、我々が良心の苛責を受けなくてもいゝ程に向上する迄には、我々の地上の生涯は、恐らく長すぎはしないであらう。然し乍ら我々が現在に於いて、如何に不完全なる状態にあつても、我々の道德的努力の對象たる至上善が到達可能である事を要請する事は決して僭越では

ない。從つて我々が來世の存在を要請する事は、當然の道德的權利である。我々は來世の存在を信仰して、我々の道德的努力の無意義でない事を信じ、此の地上の存在の方式が許す限り善を行ふ事を努力すべきである。其れは全然合理的であるが故に、此の努力を怠る事は、我々の罪惡であり、此れを行ふ勇氣なき事は、假借する處なく我々の懈怠である。我々の人格の道德的價値が最早此の地上の存在の方式に相應しくなくなるに到ると云ふ事は、我々にとつて何たる名譽であらう。其れは地上に於ける最高の名譽である。眞の意味に於て「此の世に克つた」のである。最早此の境涯は最早や我々の人格に釣り合はなくなつたのである。卽ち我々の「品」が更へられなければならなくなつたのである。そして此の名譽を荷ふ事は我々にとつて不可能な事ではない。合理的に可能なる事である。故に此の合理的努力をなさゞる事は又眞正の意味に於て痴愚であると云はなければならない。(一九二三・一一・一七)

附記。「善と其の實行」との關係は、「思想と其の實行」との關係とは相違する。道德意識は其の本來の性質上、實行を約束とするものである。思想は必ずしもさうではない。或る種の思想は、反對に其の本來の性質上實行となるまじき約束を持つてゐる。此の問題に就いては、自分の「轉身」の序文の他に、阿部次郎氏著「合本

三太郎日記」中「思想と實行」と題する論文に精緻にして明晰なる討究がある。參照せられ度い。

## 「せずには居られない」行爲

我々は意志決定をなす場合に善と惡とを分別して惡を排斥し、善を行はなければならないと云ふ時、或る人々は其れより異りたる、寧ろ相對立する方式に依つて行爲すべきであると云ふかも知れない。卽ち善と惡との分別をなす事を止め、せずにはゐられない行爲をなすべきであると。其の人々の主張する處に據れば、我々は善と惡との分別を完全になすことが出來ない。何が善であるか、惡であるかを明瞭に判斷する事が出來ないのに如何にしてそれに依つて行爲を撰擇するのか。假令善惡を明瞭に判斷し得たとするも、只其れを知つただけで行へるものではない。其れを行はしむる力は別のものである。故に我々は善か惡か知らないけれども「かうせずには居られなかつた」と云ふやうに行爲を撰ぶべきである。「かうせずにはゐられなかつた」のであるならば假令其れが善であるにもせよ、若しくは惡であるにもせよ、結局結果として同じ事である。其人はさうするより他なかつたのであるから、止むを得ない。假令其人が其の行爲を惡であると判斷したにしても、「かうせずにはゐられなかつた」のである。故に我々は不完全なる知識に依つて、

善惡の分別をなさんとせず、初めより只「かうせずにはゐられなかつた」と云へるやうに行爲を撰ぶべきであると云ふのである。此の主張は一應もつともに聞える。此の主張が生れるには、もつともな理由を含む過程がある。純粹な、主觀的な、熱情的な人が此の考へに陷り易い。現今の熱情ある知識階級の人々、特に藝術的なる人々、及び宗教の世界に於ても、信仰に於て最も純粹なる他力的な傾向の人々の間に此の考へは强き勢力を持つて居る。これは今の日本の新しき精神生活者の間に深く浸潤して居る思想である。しかも此の主觀主義は今の日本の精神生活者の全體に通じての缺點である。自分も亦其の例に洩れなかつた。自分の性格は殊に此の缺點に陷り易き素質を持つてゐる。今自分は自分の敬愛する友人達の殆んど全部が此の主觀主義の缺點に陷つてゐる事を感じる。此の缺點から離れない限り、我々は純熱であればある丈け、誤謬に陷り易い。今自分は其れに氣がついた。今の我々に必要なのは客觀主義である。「かうせずにはゐられない」と云ふのでなく「かうせねばならない」と云ふやうに行爲を撰ばなければならない。凡そ主觀的制約を除去して客觀的制約に依つて行爲を――生活を規定しなければならない。事實と自己との個人的な事情に依つてゞなく、客觀的に事實そのものゝ要求に依つて、行爲を撰ばなければならな

い。此の事に就いて此處に述べたいと思ふのである。

　我々はある行爲をした後で「かうせずにはゐられなかつた」と云ふ。然し其の意味は曖昧で、迷路を含んでゐる。我々は自ら錯誤に陷らないやうに、吟味する必要がある。如何なる行爲と雖も、我々が既にしてしまつた後では、其の行爲をせずにはゐられなかつたからしたのに相違ない。二つ以上の動機の間で或る動機が勝ちを占めたからこそ其の行爲がなされたのである。若しくは催眠者の場合の如く、只一つの動機しか存在しなかつたのに相違ない。「かうせずにはゐられなかつた」と云ふのは、素より此の意味ではあり得ない。若し此の意味であるならば、其れは何等特異な內容を含んでゐない。それは無主張と同一である。「かうせずには居られなかつた」と云ふやうに行爲を撰べと云ふ事は、どうでもいゝ、無標準に、勝手に行爲を撰べと云ふのと同一である。然し我々が「かうせずにはゐられなかつた」と云ふのは、別の意味である。卽ち其れは其れに反對する行爲をなさんとして全力を盡くして努力したけれども、「かうせずには居られなかつた」と云ふ意味である。いろ／＼闘つたが、かうするより他なかつたと云ふのである。其の反對の努力をしたればこそ、「かうせずにはゐられなかつた」と云ふ感じがあるのであつて、其の努力がなかつたのな

らば、我々は只「かうしたいからした」と感ずるのみであらう。例へば我々が一人の女を辱めた後で、「かうせずにはゐられなかつた」と感じたとする。其れは我々がさうすまいとして出來る限り努力したけれども、遂にさうせずにはゐられなかつたのである。故に「かうせずにはゐられなかつた」と云ふのは、第一に其處に其の動機と反對の種々の動機が働いた事を意味する。此の場合で云へば、相手の人格を物として取り扱ふ事を非難する心や、其の運命の傷つくことを恐れる心や、其の結果として自分に生じる精神的、物質的不利益を恐れる心や――其他種々の動機から此の行爲を止めようと努めたにも拘はらず、例へば肉欲の動機が強かつた爲に、他の動機が負けて遂に相手を辱めたのである。故に此の一つの意志決定の方式は種々の動機の中から思量の後一つを撰擇すると云ふ點に於いて、善惡を分別して一つの行爲を撰擇するのと同一である。然るに何故に、我々は此の二つの方式を相違すると感ずるのであるか。其れは前者の場合に於ては、實際に存在する個々の動機を何れも主觀的制約の下に於て觀、後者の場合に於ては、客觀的制約の下に於て觀るからである。（リツプス倫理學根本問題第五章參照）其處に存在するものは、同一の然も同數の動機である。そして全力を盡くして思量した點に於ても同樣である。只一つの事が相違してゐる。

其れは前者は總ての個々の動機を　自分がかうしたい」。と云ふ見地から觀て思量する。後者は同じ個々の動機を「かうせねばならぬ」と云ふ見地から見て思量する。前者に於ては「かうしたい」のは自分が「かうしたい」のである。後者に於ては、事柄の性質が、其の事柄の客觀的價値が「かうせねばならぬ」と要求するのである。例へば自分が其の女を抱擁し度いのは、自分が抱擁するからである。また自分の將來の不利益を防ぎ度いのである。此れに對して相手の人格を尊重したい心や其の運命を守り度い心が反對する時、其のたい（Mögen）心の强弱は、人間の心理的事實として、他人の事より遙かに自分の事が生き〳〵と感じられ、又將來の事より遙かに現在の事が强く感じられるが故に、其の動機の强さは、自分の、且つ現在の肉欲が他のものに比して比較にならぬ程力强く働くに相違ない。故に只動機を表象して並べた丈けで撰擇するならば、肉欲の動機が克つのは自然の數である。何となれば、此の主觀的制約のために、それ〴〵の動機が各々充分なる動機力を以て作用してゐるのではなく、只主觀と事柄との關係が最も此の場合に密接なる動機のみが、其の動機力をほしいまゝにするからである。故に自分では後に到つて其の主觀的事情が通過してしまつた時、其事を後悔し「かうすべきではなかつた」と感じるのである。然し其の

當時の心理狀態を思ひ返へして見る時、自分としては充分に反對の努力をしたのであるが故に、やはり「かうせずにはゐられなかつた」と感じるのである。既に「かうせずにはゐられなかつた」以上「かうすべきでなかつた」にしろ、他にやり方はなかつたのであるが故に、其れを憾むのは愚痴である、自分としては唯一の道を撰んだのであると云ふのである。然し乍ら、其處に誤謬の根が横はつて居る。我々は「自分がかく〳〵したい」と云ふ主觀的傾きを除去し、又現在と將來との差別を抽象して、一般に一人の人間の立場に立つて、其の事柄其れ自身の客觀的性質のみを對象として、かくてそれ〴〵の動機を並列して、いづれも同じ動機力を以て作用する此等の動機の中から、撰擇しなければならないのである。卽ち後者は客觀的制約の下に動機を觀るのである。かくて肉欲と將來の精神的、物質的不利益と人間の運命を守る事、と人格を尊重することゝ、此等の動機を比較計量する時、我々は初めて相手を抱擁し度いにも拘はらず、止めねばならないと感ずるに到るのである。善惡を分別するとは、此の意味でなければならない。動機を表象し、並列し、思量する點に於ては、方式上兩者同様であるが、只其れを主觀的制約の下に觀るのと、客觀的制約の下に觀るのとの相違である。然も此の相違は倫理上絕對の相違である。凡そ道

德意識とは、此の客觀的制約に依つて觀る事を指すのであつて、前者の立場には、何等の道德意識も含んでゐない。前者は、只自分の仕度い事を比較して、最もしたい事をしたのにすぎない。後者は自分がしたいと云ふ事を除去して其の事柄の客觀的價値を思量したのである。其の結果として、自分のしたい事を止めたのである。道德上正しき態度は只後者の態度のみである。カントの言葉に據れば、前者は傾向性に依つて行爲し、後者は義務の意識に依つて行爲したのである。我々は、一般に主觀主義の傾向を持つ近代精神の雰圍氣の中で、此の客觀主義を輕視する習慣を助長し、遂に此れを無視するに到つたのである。かくて「眞理とは何ぞや」の問題に對して、其の客觀的妥當性を懷疑し、若しくは全然認めずして主觀主義をとる事、例へばプラグマチズムの認識論の如くになると同時に、道德に於ても只傾向性のみに依つて行爲を決定し、義務に依つて決定する事を僞善、若しくは妄從と感ずるに到つたのである。然し乍ら果して此れは僞善若しくは妄從であらうか。然らば眞の善若しくは正しき服從とは何を意味するのであるか。我々は其の別の具體的心理的事實を表象する事が出來ないのである。眞の善とは、若し自分が善であると認識したことを、自分が仕度いと感じた限りに於てなす事であると云ふならば、我々が善と認識し

乍ら、それをし度くない時にはしないでもいゝことになる。しからば我々は道德に於て總ての努力を排斥するものである。我々は總ての動機を如何程自分がし度いかに依つて觀る時、前述の如く、主觀的事情に制約せられざるを得ない。其處には何等の努力もなく、自分が最もなしたき事をなしたのと同樣の結果が現はれるのに決つて居る。換言すれば其處に可能なる思量は只何れが最も仕度いかと云ふ事を比較計量する事であり、德とは只怜悧と云ふ事を意味する。不德とは、自分が實際それ程仕度くない事を最もしたい事の如く間違へた無智を意味するのみである。其れは道德的意義を持つてゐない。結局どうでもいゝ、勝手に行爲するのと、只其の怜巧と無智との點を除けば、全然同一である。我々が他人の行爲を道德的に賞讃若しくは非難するのは、彼が其のしたい事を如何に行爲するかではなく、何をしたがるかである。彼が最もしたがる事柄の性質である。此の性質は、動機そのものゝ客觀的價値よりのみ生ずる。此の客觀的價値を計量して、最も價値あるものを撰擇する思量こそ道德的思量である。又正しき服從とは、我々が善と認識したる事柄は、自分が個人的に其れをしたいと否とに拘はらず、此れを行ふと云ふ意味より他に考へる事が出來ない。若し我々が善と認識したる事柄をも、自分がしたい限りに於て行ふと云ふなら

ば、其れは自分の隨意勝手であつて、其の何處にも服從の意味を含むでゐない。かくの如き事を服從こ名づけるのは、用語例に反する。服從とは何等かの意味に於て自分のしたい事を抑制する事を意味するからである。正しき服從こは自分が善こ認識した以上は、したくても、したくなくても必ず此れを行ふ事でなければならない。妄從とは、自分が善こ認識し得ざることを只他人の意志に依り、若しくは、それが戒律、習慣である故を以て行ふ事である。僞善とは自ら善こ認識せざる事を、何等かの他の動機から行ふことである。道德意識とは、此の自分がしたいか、したくないかの主觀的制約を除去して、せねばならぬか、止めねばならぬかの客觀的制約に依つて規定さるゝ心――我々の精神の合法則性の意味である。義務の意識とは此の自己の合法則性が自己の個々の動機に對して持つ處の束縛を意味する。故に義務の意識は束縛の意識であるが其の束縛は、自己が自己を束縛するのであるが故に、內面的束縛である。卽ち自律である。然し如何に自律であつても、我々の義務の意識こ傾向性こ、卽ち客觀的制約こ主觀的制約こが對立してゐる限りは、我々は「自由」である事は出來ない。せねばならぬことゝ、したい事とは矛盾するが故に我々は常に束縛を感じ、只我々の努力を以てのみ義務に服從する事が出來るのみである。我々

のしたいことがせねばならぬ事と一致する時、我々は眞の「自由」に達したのである。故に我々は此の努力を感じないやうに行爲を撰擇してゐるなれば、其れは我々が道德意識から行爲して居ない證據である。道德意識に依つて行爲する限り、努力の感を伴ふは當然である。此の努力の感は、只我々が完全に「自由」になることによつてのみ、即ち客觀的制約と主觀的制約とが一致して、我々が「かうせねばならぬ」ことが即ち「自分がかうしたい」事になる迄除かれることは出來ない。

然し乍ら自己が自己を束縛することは如何なる意味であるか。其れは「人」が自己を束縛することである。全體としての自己が部分としての自己を束縛する事である。然らざれば自己が自己を束縛すると云ふ事はあり得ない。故に義務の意識は、自己をして、人たらしむるものが、自己に對する要求、即ち人類の聲である。人格の全體としての欲望が個々の欲望を束縛するのである。即ち全人格の聲である。故に「せねばならぬ」事も「したい」事も共に我々自身の欲望には相違ない。只全體としての欲望と部分としての欲望との相違である。我々は義務に從ふ時自己の欲望に從ふのである。只全體としての自己の欲望を滿足せしめる爲に部分としての自己の欲望を制限

するのである。其れは全體としての自己の爲である。「人」の爲である。故に我々は義務に從ふ事に依つて自己の何ものをも失ふのではなく、最もよく自己を生かすのである。リップスが云つてゐるやうに義務の意識と傾向性とは同一なる我々の意欲の異れる二つの面であつて、本質的に別物ではない。

然し乍ら最後に問題となるのは、我々のかくの如き主觀主義は、何故に生じたのであるか。と云ふ事である。其れは一般に我々が眞理の客觀的妥當性を懷疑するに到つたからである。然し乍ら、此の懷疑は如何なる意味に於て正當であるか。我々が眞理の客觀的妥當性を證明する術を持たない事と、かくの如き客觀的妥當性が存在しないと云ふ事とは同一ではない。若し我々の懷疑が前者を意味するならば、其れは正當である。然し後者を意味するならば其れは不當である。例へば悟性認識の場合に於て、我々はかくの如き客觀的妥當性の存在を疑ふ事は出來ない。地球が自轉するか、太陽が地球の周圍を廻轉するかを定めんとする時、我々は同時に此の兩者を肯定する事は出來ない。其れはどちらか一つでなければならない。素よりかくの如くして其の一つを、例へば地球が太陽の周圍を廻轉する事を肯定したにしても、其れが絕對に誤謬でないかを保證する

事が出來ないと云ふ意味に於ては、其の懷疑は正當である。我々の悟性判斷が他日に到つて變化せぬとは限らない。現在に於て悟性判斷の客觀的妥當性の根據となる條件を出來得る限り盡くして、地動說が眞理であると肯定してゐても、將來假りに只一個の新しき事實が發生したならば、只其れ丈けでも此の妥當性は覆へされ得るのである。然し乍ら其の場合に於ても、現在に於ても、實際にさうである處の事實は一定してゐなければならない。此の意味に於て客觀的に妥當なる眞理は存在してゐる。只其れを證明する術がないのである。故に我々は此の客觀的眞理の實在を信じて、現在に於て悟性認識の出來得る限り遺漏なき條件を盡くして、判斷したる結果を、客觀的に妥當なるものとして、此れを眞理としなければならない。此の事と客觀的に妥當なる眞理が存在しないと云ふ事とは別事である。後者の種類の懷疑者は、人と處と時とに依つて眞理が無數に存在する事を許すのである。かくの如き立場からは、眞僞の差別は絕對に附する事が出來ない。卽ち其れは眞僞の差別そのものを認めない時に於て初めて徹底する。此れを意志決定の場合に移せば、我々が事實の客觀的價値に依つて、行爲を撰擇せんとする時、其の事實の價値が客觀的に妥當なる事を證明する事が出來ない限り、我々はかくの如き方式に依つて行爲を撰擇する事は無

意義であると云ふ事になる。實際に此の證明力は我々に許されてゐないのである。我々は悟性認識の場合と同じく、事實の客觀的價値の認識に出來る限り遺漏なき條件を盡くして、認識し得たる結果を客觀的に妥當なるものとして肯定し、其れに依つて行爲を撰擇する外に道はないのである。懷疑者が若し此事を否定するのであるならば、其れは前の場合と同じく凡そ善惡の差別そのものを認めない時に於て初めて徹底する。卽ち彼れは自己及び他人の如何なる行爲に對しても、賞讃若しくは非難する事を止めなければならない。然し事實はさうではない。如何なる主觀主義者も自他の行爲に對して價値判斷をなす。然も此の如き主觀主義者程益々强く此れをなすのである。此の事實は如何に說明すべきであるか。其れは只彼等も亦善惡の差別を認め、客觀的に妥當なる善の存在を認めてゐるのであるが、只かくの如き眞理を證明する事が出來ないと云ふ時に於て、初めて可能である。悟性判斷に於ても價値判斷に於ても、判斷する者が主觀であると云ふ點に於ては、素より主觀的である。又判斷したる結果を客觀的に妥當なるものとして證明する道はない。主觀主義が此の範圍に止まる時、其れは正當である。然し乍ら我々の道德意識は此の範圍以上を要求するものではない。其れは只客觀的眞理の存在を肯定し、出來得る限り、此れに依つて行爲

を決定せんとする態度を要求するのみである。此れは我々にとつて可能な事である。故に我々は一つの行爲が客觀的に善である事を證明する事は出來ない。只客觀的善に達する爲の條件を出來得る限り遺漏なく盡くして、其の結果到達したる判斷を客觀的善としてその行爲を撰擇するより他はない。

然らば悟性認識に於いて其の判斷を客觀的に妥當ならしめる條件とは何であるか。其れはその判斷と關係あるあらゆる事實、經驗と一致するものでなければならない。故に先づ第一にあらゆる事實を蒐集しなければならない。次に個々の事實が充分の照明力を以て自分自身を呈露しなければならない。次に此の充分に、其れ自身を呈露したるあらゆる事實を比較、考量し、此れを連結しなければならない。かくして得たる判斷は、客觀的に妥當なる判斷、即ち眞である。故に只一個の新しき事實を逸し、其の事實を説明し得ないならば、其の判斷は、客觀的に妥當ではない、又事實に遺漏なきも、或る事實が或る他の事實よりも其の照明力が不充分である時、その判斷は客觀的に妥當ではない。又充全の經驗と充全の照明力とを具へても、其の連絡の爲めの思量が充全でない時、又其の判斷は客觀的に妥當ではない。然らばかくの如き條件を充全に充たす事は可能で

あるか。其れは不可能である。我々は出來得る限り完全に此の條件を充たし、其の結果得たる判斷を客觀的に妥當なるもの即ち眞理として認めるより他はない。然し乍ら其れは絕對に妥當なる眞理の存在を認めないのではない。かくの如き條件が完全に充たされたる時、必然的に到達さるゝが如き絕對的に妥當なる眞理の存在は、我々が既に豫想してゐるのである。我々は物理的眞理の存在を信じない事は出來ない。只我々が眞理と判斷するものが果して絕對的に眞であるか否かを證明する事が出來ない丈けである。我々が發見したる物理的眞理は、古來幾度びか轉變して來た。然し其れは絕對的なる物理的眞理が存在しないと云ふ證據ではなく、反つて其れが存在する事の證據である。何となれば、一つの判斷が他の判斷より、より正確であるとする事はかくの如き絕對的眞理を豫想せずして成立し得る事ではないからである。意志決定の場合に於ても悟性認識の場合も嚴密に同樣に、此の決定に關係あるあらゆる動機が現在し、各動機が充分に動機力を持つて作用し、此の同時に作用する同じ強さのあらゆる動機を充分に比較考量し、內面的に連絡しなければならない。かくの如きは完全には我々に不可能である。故に我々は出來得る限り、此の條件を盡くして、其の結果到達したる意志決定を客觀的に妥當なる善として認めるより他はない。

そして其れは何人にも可能な事である。此の條件を充たさうと努力する事なく、意志決定をなす事は、惡である。故に我々は一つの意志決定に際して、第一に出來得る限り多くの動機を表象しなければならない。次に各動機を自他、現在と將來、直接と間接、平常と珍異、習慣と性癖とに一致すると然らざると等の主觀的制約を出來得る限り除去する事に依つて、充分に同じ强さの動機力を以て作用せしめなければならない。次に出來得る限り充分に遺漏なく、其の動機の客觀的價値を比較考量して連絡しなければならない。かくして到達したる意志決定に依つて行爲する時、其れは我々にとつて客觀的善である。其れが絕對的妥當なる善である事を證明する事は出來ず、又自己の意志決定である點に於ては主觀的である事は免れなくても、我々は其れ以上に客觀的妥當性ある善を發見する方法を持たないのである。其れは我々の最善の努力である。我々の眞や、善が客觀的妥當であると云ふのは、此の意味であつて、其れは決して各人に各個の主觀的なる善を認める事と同一ではない。此れは明瞭に辨別しなければならない。例へば前の例に於て、一人の女に對する時、其の特定の場合に於て、善なる行爲は、只一個あるのみである。其の善なる行爲をなさん爲には、我々は前述の如き努力をなさなければならない。例へば肉欲の動機の他に、女

の運命を守る心、其の人格を尊重する心、自己の將來の精神的、物質的損害を防がんとする心、其の行爲が多くの他人の躓きとなる事を恐るゝ心、一般に社會的風紀を守らんとする心、其の結果生じるかも知れない嫉妬や、生れるかも知れない子供の運命を恐れる心、其他の出來得る限り多くの動機を表象しなければならない。其れが少い丈け其の意志決定は惡となる。次に此等の動機は前に述べた如き主觀的制約に依つて、或る動機と他の動機とは其の强さが著しく相違するが故に、主觀的制約を除去して、一般に或る人の動機として客觀的に其の動機の價値を充分に呈露せしめなければならない。然る後出來る限り綿密に且つ整合的に思量しなければならない。かくして到達せられたる意志決定は、我々が主觀的に此れを好むと否とに拘はらず、此れを義務の意識を以て實行しなければならない。自分が「かうしたかつた」からしたのでなく「かうせねばならなかつた」からしたのでなければならない。かくの如き行爲は、後日に到つて後悔する事はない筈である。「あゝしなければよかつた」と云ふ事はない筈である。若し其れが有り得るとすれば、其れは只其時に或る動機を落したか、或る動機が充分に作用しなかつたか、思量が不充分であつたか、約言すれば其の意志決定の手續きが不完全であつた場合のみである。然らば一々の動機の客觀的

價値は、何に依つて決定するのであるか。其れは其の動機が人格全體に對して占める位置に依つて決定しなければならない。人格内に起るあらゆる動機を人格全體を最もよく生かすのに役立つやうに其の地位を與へなければならない。自分が「經濟的制約に就いて」の中に於て、希臘主義と基督教主義との調和の方法に就いて述べた如く、個人の人格内のあらゆる動機に上置と下屬との地位を、人格全體の見地から與へなければならない。然し乍ら或る動機が他の動機よりも上置するか下屬するかを完全に測定する能力は我々に存在しない。故に其の客觀的價値に依つて意志決定をなさんとする場合、我々は明確なる決定に到達し得ない場合を生ずる。其時は我々は如何にすべきであるか。此れ此の種の問題に於いて最も困難なる點である。此れに對する答へは我々の内なる「指導的本能」に從つて行爲すべきであると云ふ他はない。即ち前述の如き意志決定の正しき手續きを出來得る限り盡くして、猶且つ判斷し得ざる時には、我々が「かうした方が正しいらしい」と感じたやうに行爲すべきである。此の事を古來「聖靈の導きに依つて」或ひは「ダイモニオンの聲に依つて」若しくは「神の託宣により」等の語を以て言ひ現はして居る。即ち我々の心を鎭め、私心をなくして、其處に聞えてくる何ものかの聲に從ふのである。ソクラテスは此れ

を「ダイモニオンの聲」と云つた。キリスト教的に云へば、神に禱つて聖靈の導きに從ふと云ひ、又禪宗に於いては、禪定に入つて其時に爲した行爲が最も正しきに適ふと云ふが如き此れである。卽ち我々の精神全體の一種の有機感覺とも稱すべき直覺に依つて決定するのである。其れは我々の私心を以て「したいやうに」決定するのでなく、總ての主觀的制約を拂拭した無私の心的狀態となり、心の內の聲に聽くのである。卽ちさう決定した方が精神全體が生き〳〵とし、爽やかに且つ高められた感、一言に約せば精神的健康の感覺が伴うやうに決定するのである。此れを自分は我々の內なる指導的本能に依つて決定すると云ふのである。

かくの如き手續きに從つて意志決定をなす事と、主觀的制約に依つて「せずにはゐられない」行爲をなす事とは、其の態度に於て相反する。そして前者のみが道德的態度である。蓋し我々が完全なる「人」となつた時我々が「したい」事は、「せねばならぬ」ことと全然一致する筈である。我々は此の境地に達せんことを道德的精進の目的とする。然し其の場合に於ても「せねばならぬ」ことが自ら「したいこと」と一致するのであつて、道德的態度は依然として前者である。我々が理想的人格となつた時には、傾向性 義務とは完全に一致するが故に道德意識とは只名のみに過

ぎない。我々は只したいが儘に行ふて、しかも其れが矩を踰えないのである。換言すれば「自由」である。然し其の境地に達する迄は、義務と傾向性とは對立する。旣に對立する以上、我々は義務に從つて行爲しなければならない。自分がしたい事をすべきではなく、せねばならぬことをすべきである。

最後に明らかにしてをかなければならない事は、主觀的制約に依つて行爲すると云つても、主觀的制約は必ず低き動機に伴ふと決まつてゐるのではない。例へば或る人にとつては、相手の女を抱擁したいと同じく、其の運命を守り度いのである。後者の制約が前者より大である時、主觀的制約に依つて行爲を決定しても、結果は相手を辱しめる行爲とはならないであらう。實際に我々の人格が生長すればする丈け、我々はより高き動機に主觀的に制約さるゝに到り、從つて主觀的制約に依つて行爲しても、善と一致するやうになるのである。人格が低劣である丈け、主觀的制約に依る行爲は危險である。又我々の人格に把握されたる善の傾向は、即ち德は、此の主觀的傾向性となつてしまつた限りのよき動機を指すのである。我々が客觀的思量の後努力して或る一つの善なる行ひをなし得ても、其れは未だ其の人の德ではない。他の一つの行爲に於ては、誤るかも

知れない。徳とは同じ種類の行爲に於ては、正しき意志決定をなすことが傾向性となつてしまつたと云ふ意味である。然し乍ら、其れにも拘はらず、二つの點に於いて、我々は如何なる場合にも主觀的制約に依つて、行爲してはならない。第一に我々が未だ理想的人格でないが故に。第二に道德意識は其の本來の性質上義務の意識なるが故に。我々の人格が未だ完全でない時、主觀的制約に依つて行爲するならば、我々は不正なる行爲をなす危險がある。又たとひ完全なるものとなつても、義務が自ら傾向性と一致するのであつて、如何なる場合に於ても、人格の完全と不完全とを問はず、其れが道德意識である限り、客觀的制約に依つて行爲しなければならないのであり、主觀的制約による行爲は假令其の結果が正しくても、其れは道德意識ではないからである。我々のなすべき事は客觀的制約に依つて行爲しながら、次第に主觀的制約の範圍を擴張して、我々にとつて客觀的制約とは畢竟主觀的制約に外ならないやうに向上する事である。

今日の知識階級に於て純眞なる人が主觀的制約に據つて行爲し易いのは、二つの原因から生ずる。一は認識論上の主觀主義の爲であり、二は純眞なるが爲に、自らよき動機に主觀的に制約される爲である。然し乍ら前述の如く、第一は認識の誤謬に基くものである。第二は(前述の如く)危

險であり、僭越であり、且つ道德的意識でない。此處に最も主觀的制約に依る行爲の厭ふべき例は、不完全なる人格を以て、自分の欲するが儘に行爲し乍ら、其れが正しき意志決定であるとなす處の人々である。眞宗の或る派の人々の如きは此れである。此の種の人々は、自らかく行ひ且つ此れを他人に宣傳する。然し其れは誤謬であるが故に、其の唱導者が結果として惡しき行ひから免れ得てゐるのは、只偶然にすぎない。卽ち其唱導者達の人格が勝れてゐるからにすぎないのであつて、客觀的妥當性を持つてゐるのではないが故に、人格低劣なる多くの人々が其の原理に依つて行爲を決定する時、其れは恐るべき結果となる事を免れない。此の種の唱導者達は此の點を深く反省すべきである。此種の人々が結果として正しき行ひをなしても、其れは道德ではない。從つて此の人々に可能なる態度は、自己の行爲に對しても、他人の行爲に對しても、一切賞讃及び非難をなさない事でなければならない。然るに彼等は、反つて此の價値判斷の意識が旺盛なのである。此れは明らかに自家撞着である。此の自家撞着は同情すべき誤謬より——彼等の人格が純眞である爲に生じたる誤謬より導かれる避くべからざる結果である。然し如何に同情すべきものであつても其れが誤謬である限り、其れは正しき認識に依つて訂正されなければならない。自分

も亦かくの如き傾向に屬する性格であるが故に、此の誤謬を訂正して今後は出來得る限り、客觀的制約に依つて、義務の意識に依つて、行爲を、從つて生活を導かん事を努力しなければならない。此の點に於て、カントの「實踐理性批判」と、それに源を持つリツプスの「倫理學の根本問題」とはあまりに主觀的なる我々に對して、嚴肅なる指導を與へる。そして其れは恐らく永久に人間の道德生活に與へる尊き教訓であるであらう。（一九二三・一一・二一）

# 「古風」に對する愛に就いて

我々の裏には、凡そ古風(アルトヤーディッシュ)なるものへの愛がある。其れは衣食住等の生活様式や、美術や、文學に對する趣味や、社交や、禮儀作法等のマンナーや、人倫の道德關係より、更に一般に總て我々の物の見方、考へ方そのものゝ中に存在する傾好である。今日の時代に於いては、大多數の人々にとつてはこの愛は薄れて居り、今後益々すたれてゆくであらう。然し乍ら或る少數の者の中にはこの愛が益々それと共に深濃となるであらう。自分は自分の裏にこの愛を強く感ずる者の一人である。この愛は現代の多數者より古臭きもの、時代遲れ、若しくは時代錯誤として輕蔑されて居る。然し其の輕蔑は果して正當であらうか。若しくはどの範圍に亘つてどの程度に於いて、如何なる根據の下に正當であらうか。自分は今其れを考へて見度い。

抑も古風なるものへの愛は、如何にして生ずるのであるか。第一に其れは過去の傳統のみに終始して、新しき文化の意義と、其の價値とを理解すること能はざる、若しくは理解せんと欲せざる處より生ずるであらう。人類の成長と文化史の生成とを理解せざる、頑冥にして無智なる老

人、或ひは遲鈍にして新しきものへの感覺を缺くもの、若しくは保守的にして、固定せるものゝ改廢に對する不安に堪へ得ずして、舊套を墨守するもの、若しくは新しきものに依つて、自己の既に獲得せる利權を失ふ事を恐れて、故意に新しきものに對して敵意を抱く者、かくの如き者に依つて古風なるものへの傾好が生ずる場合もあるであらう。或る種の政治家や、宗教家や、教育家が古風であるのは其爲であつて、其れは確に時代遲れである。又安逸にして物臭さなる市井の老人達が、昔風なるのも其の爲であつて、其れは疑ひもなく舊弊である。此等のものゝ古風への傾好は、素より價値なきものであるのみならず、其れが新しき文化の生長に意識的反抗をなす場合は無論の事、無意識的に障碍となる場合も人類の爲に禍である。故にかくの如き古風への傾好は輕蔑若しくは排斥されなければならない。次にかくの如き傾好は其のものゝ價値如何にかゝはらず、凡そ古きものを新しきものより只それが珍しいといふ故を以て愛する所謂骨董的趣味に依つても生ずるであらう。かくの如き趣味が無價値であるのは、恰も新しきものを新しきが故に、その眞價如何に拘らず古きものよりもたゞ其れが珍しいといふだけで好む、流行的趣味が無價値であるといふのと等しい。かくの如き古風への傾好も確に時代錯誤として排斥されねばならな

い。次にかくの如き傾好は新しき文化の缺點を感ずる餘り、其の缺點を誇張して、反動的に古きものを愛せんとする處よりも生ずるであらう。かくの如き古風への愛も亦其の同情さるべき十分の事情に關はらず、凡そ反動的なるものゝ總てが正當でないが如くに正當ならざるものとして、排斥されねばならない。

然し乍ら我々の古風に對する愛は、かくの如き處より生ずる許りではない。其他にまた自然にして正當なる根據よりも生ずるものである。第一に我々の本性の中には、凡そ現實ならぬものに對する愛がある。この愛は、我々の現存せざるものへの憧憬となつて理想的なるもの、夢幻的なるものを求めしめる。其れは一には我々を驅つて將來に對する種々の空想的なる希望を生み、二には過去に對する追想的なる憧憬を生む。將來に對する希望の場合に於いては、其れは我々をして種々の計畫や努力をなさしめて、人類の文化を生長せしむる原動力として、何人もこの非現實的なるものへの要求を排斥する者はないであらう。然し乍ら過去に對する空想の場合に於いても同じ要求は認められなければならない。其れは生命の太源に對する歸依となり、靈魂の故郷に對する憧憬となり、又我々人類の原始時代に對する愛となつて、我々の現在の文化に對する批判及

び改革のために必要なる反對の側よりの相槌を打つものである。次ぎに我々が追求するのは、價値そのものであつて、新ではない。我々が舊を捨てゝ新を採るのは、只新が舊よりも其の價値に於いて勝つて居る時に過ぎない。價値そのものには新舊の差別はない。故に我々が事物に新舊を超越して只價値あるものを求める時、我々は舊きものに新しきものよりも價値を見出す事はあり得る。我々の古風なるものに對する愛は、我々が何等の成心なき公平なる態度を以て只價値あるものを求める時、現代の新しきものよりも過去のものに、より優れたるものを見出す時自然に生じ得るものであつて。かゝる古風への愛は正當である、問題は果して現代の新しきものよりも、過去の舊きものに、より優れたるものが存在するか否かの事實の問題のみである。この事實が存在するならば、我々に古風なるものへの愛が存在するのは何等の不思議でもなく、有り得べき事であるのみならず、當に然るべき事である。約言すれば古風なるものへの愛は、この限りに於いて、可能にして且つ正當である。我々はこの限りに於いて、我々の古風なるものへの愛を捨てようとは思はない。例へば或る畫家は今日の畫壇に於いて尚、宋や元の古畫を最も愛し、其の畫風から其の制作の動機と手法とを選擇する。彼は只一つの純一なる本能――美を探求する欲望のみ

を以て、古代から現代に到るまでの繪畫に關する凡ゆる文獻の中から選ぶ時、現代に流行する或る畫風よりも、宋、元の畫風を採らないわけにゆかないのである。かくて彼の趣味は古風なるものと呼ばれ、彼の展覽會は新味なきもの、時代錯誤として非難せられる。然し彼が若し非難に價するとすれば、それは彼の畫風が現代に流行する畫風と一致しない點にあるのではなく、かくの如き古風なるものに最も美を感ずる彼の審美眼が淺薄なる點に在る。然るに彼れが自ら顧みて、現代に流行する畫風の畫家よりも、自己の美を觀る眼に深さと鋭さにおいて自信を持たない譯には行かない場合には、彼はその古風なることを恥づる必要はない。又或る思想家は、善の根本原理を追究して、人格主義に到達せざるを得ないとする。其時現代に流行する或は「新しき」人々が此れを時代遲れの思想として輕蔑するであらう。然し若し彼れが純粹に眞理を愛する心を以て、その思索力を盡し今日までの凡ゆる文獻を――勿論人格主義を否定する思想をも含めて――探り容れて、猶且人格主義に到達せざるを得ないならば、然も人格主義否定の思想家等と自分とを比べて、その眞理を愛する熱情に於ても、考へ方の公平、緻密、深さと廣さの點においても自信を持たないわけにはゆかない時、彼れは、そのいはゆる時代遲れの思想を固守しないわけには

ゆかないであらう。かくの如くして美的觀照の藝術や、人格主義の倫理學や、行乞無抵抗の宗教が、古臭きものとして、恰も過去の遺物であり、新人は此れを排斥しなければならないかの如く見做されながら、然も我々は、藝術、倫理、宗教の根本原理として、その永遠性を信ぜざるを得ず、叉此れを覆すに足る根據を、所謂新しき思想家達から聞き得た事がないのである。誰か若し正しく出來得るならば、時代の潮流と順應するを願はないものがあらう。我々は寧ろその可能なる立場を求めて、新人の思想に聽くのであるが、我々の理性を晦まさない限り、これを肯定する事が出來ないのである。かくの如くして時代遲れと呼ばれる事は不名譽ではない。他人の思想や、藝術を排斥するものは、只其れが時間的に古いといふ點でなくその誤謬を明瞭に指摘し、自身の思想や藝術を只新しいといふ點でなく、その優れて居る點を合理的に説明しなければならない。これを説明する事能はずして、只その舊新の點のみを以て是非する者は、思想家的、藝術家的良心なきものである。かくの如き人々がその自己の支へ難き立場を時代と民衆とのかげに隱れて、隱蔽し、糊塗せんとするものと見做されるのは止むを得ない。何となれば、精神の世界においては、其處に一つの合理的な公道が何人にも許されてあり、若し自説を主張せんとすれば、何

よりも容易にして、明瞭なるその道を採る事が人性の自然だからである。この自然にして容易なる道を採らないすれば、其處には何等かの故意がなければならない。その故意は、他に說明の道がないからである。又新しきものが舊きものを輕蔑する時、それは屢々前者が後者の心境の深さを理解せざるためである事は少くない。例へば同じく基督教の信者においても、プロテスタントは素よりカソリックよりも時代的に新しきものであるが、只その故を以て或る新教信者が舊教信者を古臭きものとして輕蔑する事は出來ない。我々は或るカソリックの信者には、反つて新教の信者よりも深くして純なる基督者を見出す事は稀でない。寧ろ心情高貴なる捧げ切つた、且神來を感ずる——かく如きものこそ基督教的信仰の本質であるが——人々は新教よりもカソリックの信仰を愛するであらう。素より宗教改革には、その然るべき正しき理由があつてプロテスタントが生じた事は無意義ではない。其處には確に文化史的必然性がある。只我々はその正しき點に於てのみ、舊教と新教との特色を認めるべきであつて、時代の新舊によつてプロテスタントがカソリックよりも勝れて居るとなす事は出來ない。又例へば萬葉の歌風とその以後現代までの凡ゆる歌風とを比べる時、我々は多くの、且本質的なる點において前者の勝つて居る事を感じないわ

けにゆかない。又例へば舊劇や、能の鑑賞家の中には、新しき芝居通や活動寫眞の愛好者等よりも遙に勝れた見識の所有者を見出す事は稀でない。又東洋古來の主從、師弟、長幼等の人倫の關係や、人と人との接觸の、禮儀作法や等の中には、デモクラチックな對人關係よりも、遙に勝れたものを見出し得る。又例へば日本の古來の建築や、庭園や、茶道や、婦人の服裝や、髮飾り等の中には、洋風の粗雜なる模倣を基調とする現代の新しき樣風の中に見出し難き勝れたるものを持つて居る事は爭はれない。この意味において、我々は所謂傳統的なるものゝ中に、所謂「文化的」なるものよりも勝れたるものを見出す事は稀でない。また主從や、師弟の關係は僚友、若しくは仲間の關係より、妻女は職業婦人より、萩の花はヒヤシンスより、床の間はマンテルピースより、丸髷は耳かくしより、より古くはあつても劣つては居ない。かくの如くして只價値そのものを求めて、素直に事物に對する時、自然に我々の裏に古風なるものへの愛を生ずるのである。現代の文化は、便利、速達等の經濟的必要の方に著しく發達して、善美趣味等の精神的要求の方面に甚だしく遲れて居る。夫は我々が經濟的必要に迫られた結果である。殊に大多數のものにとつて、それは止むを得ない事である。只止むを得ない事は價値ある事ではなく、まして願はしき

事ではない。故に我々は價値あるものと止むを得ざるものとを區別する他はない。殊に思想と藝術との世界においては、我々は決して固有價値と利用價値とを混同してはならない。如何なる事情においても、高貴は低卑よりも勝り豐富は貧寒よりも善であり、人格が人格に強制する事は惡であり、奉仕を金錢に換算することは粗野である。總て一般に經濟上便宜上の視點から價値そのものを測つてはならない。素より我々は經濟的制約の下に生存する者であるが故に、一日も其の視點から離れて生活する事は出來ない。只其の場合に其れが便宜上の價値である事を忘れてはならない。例へば多數者が短時間に、低廉に或る美的享樂に浴さん爲には活動寫眞が演劇よりも便利であらう。然し其れは其の美的享樂の内容の價値の優劣ではなく、其れに結合する經濟的要素の優劣である。我々が乘物として、あの優美にして調和したる馬車を捨てゝ多少とも怪奇にして不愉快なる自動車を選ばなければならないのは、乘物に對する我々の精神的、趣味的要求が經濟的要求の爲に處を讓らなければならない止むを得ざる結果である。かくの如くして我々の經濟的制約の度が切迫するに從ひ、我々の文化は便宜上の價値を以て精神的の價値を蹂躙する。到る處に安價にして無趣味なる建築や、簡單にして粗野なる服裝や、露骨にして無作法なる對人關係等が

横行する。經濟的に無縁なる、若しくは縁遠き文化は嫌れ、純粋に精神的なる思想は空想として排斥せられる。然もかくの如きは我々の經濟的制約上止むを得ざる結果より生ずる許りでなく、我々の精神の墮落若しくは誤謬に依つて發生し、若しくは著しく強められたものであつて、從つて我々の精神の力に依つて可成りの程度迄避け得るものがすくなくない。近代の自然科學の誤れる過重から生じた唯物的思潮や、工場主義から發生した不必要な生産的競爭や、精神の強壓と共に末梢的にして且つ過度なる官能的刺戟に對する欲求や、かくの如きものが重なつて實際に止むを得ざる經濟的制約以上に甚しく我々の心をあわたゞしく、乾き且粗雜なものとして居るのである。かくの如き文化に堪へざる心が自ら中世紀風の空氣に牽かれ、或ひは古典時代の藝術を慕ひ、現代の濁流から自己を守り乍らしづかに生きんとするに至るのは止むを得ない。かくの如くして古風への愛は生ずるのである。然のみならず、我が國に於いて新しいといふ要素の中には、其れが我が國固有のものでなく只異國的であるといふ故のみを以て、新しく從つて、價値があるとされて居る點が極めて多い。然も必ずしも後者が前者より勝つて居ないのはいふ迄もない。況して我々は自己の國土に產したる文化を最も良く理解し、且親みを以て愛するのは自然にして當

然であり、我々は寧ろこれを愛惜すべきである。然も觀照の深き點に於いて、西洋文明の比でない東洋風若しくは日本風の文化は靜かにして、落ち着きたる心を有する人人には尙更愛着すべきものとなるであらう。かくして正當なる東洋風若しくは日本風の思想や趣味は、只其れが西洋風でないといふ故のみを以て古臭きものとして排斥されるのである。最後に最も不合理なる事は今日の思想界の流行は其れが事實文化史上決して新しくない思想を其の無智に依つて新しいとなすところの多數者に依つて生じて居る事である。例へば其の最も著しきものは今日の唯物的思想の流行である。これは十九世紀の半頃（一八四〇年頃）より盛んとなり、自然科學の勃興と工場主義の發達となつてきたものであるが、二十世紀の初め頃に到つて思想上の主流は新理想主義となり、其の精力を失墜しつゝ今日に及んで居るのである。其後思想史上この新理想主義に變るべき新しき思想は生じて居ない。今日の流行となつて居るマルクスやエンゲルスは十九世紀の前半に生れ、恰も唯物的思想の勃興時代に活動し其の絕頂に達したる十九世紀の末葉に死したる人である。故に思想史上唯物的思想は新理想主義より明かに古いものである。例へば今日の唯物的社會主義の基礎と稱せらるるマルクス、エンゲルス共著、共產黨宣言は恰も唯物思想勃興期の一八四

八年の出版である。素より、思想史上古き思想が新しく甦つて來ること、例へばプラトンと新プラトン學派との如き關係は少くない。然し唯物思想と新理想主義との關係は明かにこれとは相違して、後者は前者の直後に、前者を覆へして發生した思想であり、最も若くして未だ十分に發達するだけの年月を經ざる思想である。故に新舊の點よりいはゞ新理想主義こそ新しくして、唯物主義は舊いものである。唯物論が今日流行するに至つたのは全く別の原因より生じた現象である。即ち一つの思想は初め選ばれたる少賢に依つて稱へられ、其れが一般人に普及されて時代思潮となる迄には或る年月を要する。而して其れが民衆の實行運動となる頃には、少賢の思想は更にこれに先んじて居るのを常とする。かくの如くして思想史上舊き唯物的社會主義が、偶々歐洲戰爭の結果として生じたる經濟的切迫を機として、一般に政治的經濟的方面の情熱となつたのに過ぎない。今日の社會學者の間には、マルクスの唯物史觀は勢力を持つて居ない。自分の如きも素より共産主義には賛成であるが、唯物史觀には與する事が出來ない。我々が中學時代に於いて既に其の眞理である事を知つて今日に及べる社會主義的思想が漸く今日に至つて一般の實行的情熱となつたのである。思想上自明の眞理である普通選擧さへも、今日に於いて未だに實行の機を見

ざる事を思へば思ひ半にすぎるであらう。思想そのものは、既に唯物的社會主義を通過して、其の中の眞理は生きのこり誤謬は覆へされて、新理想主義の精神が支配してゐるのである。然るに其れが今日一般の實行的情熱となつた故を以て、唯物思想が最新の思想であり、新理想主義が古臭き思想であるとなすのは思想史上却て明かに時代錯誤である。其れは餘りに通俗的である。思想は實行に常に先んじ少賢は民衆に一歩を拔く。かくして思想にも種々の階段を生ずる。更に我々の心境の問題に於いては、實に無限の階段を有する。二境を把握し超克したる後の心境は、一境を把握し、超克したる後の心境より、より深くして然も後者より、古く見える事は少くない。様々な階段を經て他奇なき從順となれる心境と平凡なる世界とは酷似して居る。恰も前述の或る新教の信者が或るカソリックの信者を古臭きものとして輕蔑する事が淺きが如く、一見古風なるものが反つて所謂新しきものゝ通過後に生じたるものである事は少くない。新しきものに對する感覺と趣味とを缺いで居る爲でなく、自ら進んで、古風なるものへの愛を感じて居る者に對して、淺きが爲に新しきものが輕蔑する事は嗚滸がましい。我々が神や來世の事を云々するのは自然科學を理解しないからではない。ダ・ヴィンチや、ファン・エツクの繪を愛するのはロダンやゴ

ツホの藝術を味はひ得ないからではない。アララギ派の歌風を愛するのは、牧水氏や白秋氏の歌を解し得ないからではない　釋迦や孔子を愛するのはニイチエやショウを理解し得ないからではない。其等の總てのものの中から自ら選んで只價値あるものを其度に從つて愛するのに過ぎない。

斯の如くして自ら古風となる事は止むを得ない。自分は其れを恥としない。自分は寧ろ今日に於いて、其の心の裏に古風なるものへの愛を感じない人を懐かしき人格とは思へないものである。今日に於いて良き趣味とは幾らか古風なる趣味である。深き心情とは多少とも古風なるゲミユートを意味する。自分は寧ろ今日の文化を厭ふのあまり、この愛を誇張して其の靜かなる心を愛護して生きる爲に「繭を造る」人々の心理に同情し度く思ふ。今日に於いて最高の教養ある人人は恐らく例外なく、多少とも古風なる人々であらうと想像せずには居られない。

然らば新しきものにはその意義が存在しないのであるか。素よりさうではない。第一に新しきものが古きものより事實として勝れて居る時、我々は素より新しきものを愛する。又第二に假令全體として勝れて居ない場合と雖も、その勝れて居る點においては新しきものを愛する。殆んど

凡ゆる新しきものが少くこもこの點において愛に堪へる。第三に、これは最も重要であるが、新しきものはそれが文化史上後に生じたものである點において、文化史的意義を持つて居る。若し他に何等の特別の事情も存在しないならば、新しきものは只新しきが故に古きものより特異であり、優先する。其處にノベルチイの意義がある。故に若し此處に他の點において全然同價値なる二つのものゝ間においては、自分は新しきものを探るであらう。この意味においては新しいこいふ事もそれ自身に一つの價値である。故に此處に總ての場合を通じて、一般に只一つの原理が存在するのみである。卽ち我々が求むべきは只價値そのものであつて、新舊に拘らず、事物をその價値の度に從つて愛すべきである。この原理に從つて、今日迄の我々の所有さなつて居る凡ゆる文化の所産に對する時、我々の愛が自ら古風なるものに向ふならば、それは當に然るべきここである。我々はこれを非難する根據なく、これを恥づる必要はない。然しながら我々が今日において現代のものよりも古風のものに愛を感ずるこいふ事は自然の狀態ではなく健全なる經過ではない。文化史の健全なる經過は新しきものが古きものより必然的に勝つて居るが如き經過でなければならない。故に古風なるものへの愛が正しく成立し得る事は、時代の文化の墮落を意味する。

此意味に於て我々が現代に於て古風なるものへの愛を感じなければならない事は一つの深き不幸である。又我々は假令今日に於て、價値そのものを求めて自然に古風なるものへの愛を感じる事が止むを得ない事實であつても、これを以て滿足すべきではない。過去の文化の所産は我々がこれに依つて最高の滿足を感じない限り、必ず改革、更新されなければならない。若し現今の文化が我々の滿足に價しないならば、我々は更に價値ある文化を生み出さなければならない。古代より今日に到る迄の傳統の中から價値あるものを殘して、其れを土臺として其の中の缺點を改革して、新しき文化を建設しなければならない。これをなさずして現今の文化に失望するあまり、只過去の文化を憧憬し、これに復歸し、これを反芻するのみであつて、新しき創造への情熱を缺く者は眞に文化を愛するものではない。それは文化史の生成と、人類の生長との運行に反する。我我が排斥しなければならないのは只無價値なる新であり、根據なき流行である。我々が眞に欲するのは價値ある新である。最も價値あるものが自ら民衆を支配する事によつて生ずる流行である。古風なるものへの愛は我々が過去の傳統の價値あるものを、粗大な卑近な改造論者の蹂躪から防禦し、感謝すべき祖先の遺產を更に我々の子孫に傳へる爲に、我々が謙遜に此を愛惜し、穩讖し

て置く爲に必要なる、注意深き守番である。人類は我々のこの愛を通して、人類が眞に產み出さなければならない、價値ある新しき文化の建設に缺くべからざる貴重なる資料を保存するのである。若し今日に於てこの古風なるものへの愛を抱く、恐らくは少數の謙遜にして細心なる人々が存在しないならば、人類は如何に貴重なる代へ難き寶を失ふであらう。卑近な、粗大な、應急手當的な若しくは大規模なる基礎工事が成立した後で、人類が其れ以上の特殊な、高貴な精緻な文華と裝飾とを必要として來た時(其の時期は必ず來るのであるが)、これ等の人々に依つて愛護され、珍藏された古風なる傳統が必ず生き〳〵と、甦つて來るであらう。而して建設事業の實行的方面でなく、其の構圖の方面を分擔する事を、其の適當にして本質的なる任務となす思想家は只眼前應急の立場のみでなく、其の將來に亘つての、且全體としての展望を失ふ事なく、根本的にして且周到なる見地に立たなければならない。自分は斯の如き文明批評家を今の日本に要求するものである。(一九二三・一〇・三〇)

# 猿之助の俊寛を觀て

自分は四月の春秋座の初日を觀て猿之助の俊寛に可成りの程度迄感心した。實は四年前松竹の木村君を通して猿之助君に俊寛をと云ふ申込みを受けたのであるが、自分は猿之助君はきつい感情は出るが、神經質な感じがどうかと不安に思つて居たのでお斷りしたのであつた。其の後昨年になつて親友大庭米治郎君が猿之助君の幽靈のオスワルドを觀て來て大變褒めて居たので、自分も俊寛をやつてもらふ事にしたのであつた。自作の芝居には何時も幻滅を感じる自分は餘り期待せずに觀に行つたのであつた。併し猿之助君の俊寛は非常に本氣に、其の境遇になり切つて、可成りの程度迄内面的に演つて居た。そして自分が虞れて居た荒い一方の俊寛にならないで、可成りの程度迄神經質さを出して居た。自分は滿足して歸つた。自分が自作の芝居で滿足したのは白樺演劇社で演つた「歌はぬ人」で、中山晉夫君の勤めた恭助と、今度の猿之助君の俊寛とである。自分は今度の「俊寛」は慥に上出來だつたと思ふ。自分は左團次君のよりもいゝ氣がした。そして此れ迄大庭君から聞いても冷淡であつたが、此の役者に可成りの程度迄期待を感ずる。第二場

には有王を勤めたのであるが、自分はそれほどに思はなかつた。此の役者は見たる可く、弟たる可きではない柄である。此の意味に於いて春秋座を率ゐて獨立した事は眞に良かつたと思ふ。第二場の幕が開いた後の、いはゆる「足摺り」の場は、實に強い感じが出て、觀客の心を曳きずり込むだけの力を持つて居た。ぴつたりと地の上に跪き、兩手をついて、犬の如くに俛れ伏してあなたに乞ふ」と云ふ所など、ぶち切つたやうな緊張さで、たゞセンチメンタルに惨めに見えないだけの藝の位を持つて居た。「駄目だ」と云ふ所など可成りの程度迄生きて居た。自分は此の位演つて貰へば滿足しなければならないと思ふ。固より不足を云へば限りはない。例へば第一場の終りの方で不幸の豫感を感じる弱々しいデリケートな性質の感情を生かす處では奔放若しくは内面的な變態を生かす或程度成功してゐなかつたと思ふ。又初日のせゐでもあらうが、白は所々違ひ又少し暗記がおぼつかない所があつた。一體に第一場よりも第二場の方が良かつたと思ふ。も少し弱々しい感情を生かす事を習練し、弱氣な方の藝を生かす方に骨折らねばなるまいと思ふ。併し其の方面に特色を求める事は適當ではない。此の役者は融通の利く役者では無いと思ふ。出來るだけ自分にぴつたりと嵌つた、特色を生かす役ばかりを選むで演る事は大事であると思ふ。固よ

り、其れは誰に取つても大事であるが、殊に猿之助君のやうな役者は、勘彌君などゝ異り、其れが著しいと思ふ。此れは本人も最負の人も氣を附けたい事である。今の日本で内面的な憂鬱を生かす事の出來さうな役者は猿之助君と吉右衛門君とである。そして猿之助君のは其れが強氣な方に特色がある、「憎まれ子世に蔓る」やうな面魂の要な何かの役を生かし得るのは猿之助君であると思ふ。

今後此の役者が努力しなければならない事は、其の質のいゝ持味をもつと複雜に分化せしめる事である。卽ち其の粘り氣と内面味と強さとを失ふ事無くして、一層複雜に纖細にする事である。今の儘ではまだ少し單純且つ、粗大である。併し自分が云ふのは何處迄もサイコロジーを複雜に分化せしめる事であつて、形や、動きを複雜に纖細にする事ではない。其の點に於いては此の役者には寫實主義の細かさは寧ろ禁物であると思ふ。其の方面に行く事は此の役者の特色を生かす道でない。此の役者が表現の輕妙さや細かさを覓めて行くならば、きつと平淺な藝風に墮すると思ふ。此の役者は寫實主義の方向に一つの危險を持つて居る。もう一息と云ふ所でほつと息が拔けてわきへそれる癖がある。白の語尾にもつと工夫を要する。インテンシチーを弱くする事は此の

役者に取つては邪道である。「捨兒」の中に出る勞働者などはいゝ。併し「幽靈」のオスワルドのやうな役は自分は大庭君が讃める程には思はなかつた。寫實主義の方向に進む事は此の役者の藝風を平淺にして、其の特色を生かすことを妨げるものとして自分は取らない。併しもつと澤山見なければ良くは分らない。自分は今度の俊寛を觀て猿之助君の前途に期待し此の役者が自重して其の天分を生かし切つて見れる事を樂しみ待つ者である。（一九二三。四。一〇）

# 震災所感

九月一日十二時前自分はベッドに仰臥して原稿を讀み直して居た矢先き、突然震動を感じた。自分は本能的にベランダに飛び出した。其時にはもう恐ろしい震動になつて居た。自分はどうして不自由な足でそんなに早く飛び下りる事が出來たか覺えない程無意識にもう庭の芝生の上に立つて居た。其時にはもう大震動、大音響で、地響や、屋鳴り、硝子戸のはづれて碎ける音、瓦の飛び散る音で物凄い光景になつて居た。家は今にも崩れさうであつた。自分の側には此れも何時の間に飛び出したのか妹が眞蒼な顔をして立つて居た。丁度母が大病で絶對安靜を要する容態で看護婦と父とが側に附き添つて居た。三人は出遲れて部屋の眞ん中にうつ伏しになつて慄へて居るのが見えた　自分と妹とは、一生懸命になつて「早く」「早く」と叫んで居た。然し三人はあまり恐ろしい震動と音響に度を失つて益々部屋の眞ん中にかたまつたまゝ、凝つと動かうとしない。自分等は「早くおつかさんをかついで！」と叫び乍ら側に近づかうとしても大地が搖れて幾度も膝をついた。書生や女中も出て來ない。自分はもう母は駄目かと思つた。然し看護婦が勇氣を出

して母を背負つて庭に出て異れた。自分等はもう死にさへしなければごうなつてもいゝと思つて芝生の上に打つ伏しになつた。家はもう倒れるものと思つた。其の内地震が少し收まつたひまに家族の者が皆自分達の處に集まつて來た。幸ひに一人も怪我はなかつた。それからしつきりなしに地の底から何とも云へない物凄い地鳴りが聞えるかと思ふと恐ろしい震動が襲つて來た。一圓は地が割れて落ち込みさへしなければと願ふ他には何も考へない。そして若し死ぬれば皆一緒だと云ふ事に慰めを感じて居た。然し段々震動になれるに從つて度胸が据つて來た。もう死ぬやうな事はないと思ふと其事の悦びの爲めに他の事を考へないで、反つて一種の放たれた幸福に似た感じが起きて、今夜の野宿の用意や、握り飯の事など考へる丈けの餘裕が出來た。家族は殆んど老人と病人と子供と許りなので、女中と書生との他には物の役に立つ者はゐなかつた。自分達は庭の上に外れた雨戸を敷いて病人も誰れも一緒に寢ころんで日に照らされて時を過ごした。東京から難をのがれて歸つた人の話で東京が大火事である事を知つた。成る程東京の方に當る空は眞赤であつた。そして風に吹かれて黑燒け屑が二里も離れた自分達の空迄飛むで來た。其の夕方一種異樣な無氣味な鬼の牙のやうな殺氣を含むだ雲がむく／＼と東京の空にかたまつてそれが少しも

動かなかつた。自分達は其の雲を見て何とも云へない恐怖に打たれた。後になつて思へば其の雲は恐らく本所の被服廠跡の龍巻きの爲に生じた雲であつて、其の異樣な雲の下には二萬餘の人間が燒け死んだのであつた。其の夜はよく晴れて居た。木の枝に釣つた蚊帳越しに星の美しいのが實に不思議な氣がした、翌日になつて地震に就いては、もう膽は据つて來た。家は或ひは倒れ或ひは曲り、隨分慘めな樣子になつたが、次ぎ〱に東京の怖るべき狀況を聞くにつけて自分達は結構なものだと思つた。然し其の夕方出入りの大工が「今夜あたり海嘯が襲つてくるから避難しろ」と云つて巡査が眞蒼な顏をして觸れて歩き、人は山の上に逃げたと云ふのを聞いて、又不安になつたがなにしろ動かせない病人が居るのと、婦人や老人や子供ばかりなので、そのまゝ避難しないで天幕の中で横はつて居た。すると突然、大工が顏色を變へて飛んできて「今朝鮮人と支那人とが三百人許り刄物を抜いてやつて來たから早く逃げなさい。」と云つて來た。其の大工の樣子では直ぐ其處まで押しかけて來て居るやうな口吻りであつた。急に警鐘が鳴り出し、外の方が騷がしくなつた。自分等は嘘とは思へなかつた。ありさうな事に思へるので隨分面喰らつた。早速母を、書生に背負はせて外に出た。大勢の人達が大騒ぎをして避難して居た。それで益々本當

としか思へなかつた。自分達は一寸した松林のかげになつた丘の上に息せき登つたが、もとより其處も適當な避難所でなく、それに病人と子供を連れて居るので手早くは出來ない。自分自身も一町も歩けない病人でそれに突差でコルセットをつけるひまもなかつたので氣があせつても息が切れてもう此の上歩けさうにない。松林の直ぐ下ではピストルの音が聞え、人の騒ぐ聲、子供の泣き聲が、絶えず亂打される警鐘の音にまじつて聞えてゐる。自分の頭の中をあのアン人の侵略の時の光景が掠めて過ぎた。實際その異様な叫び聲は野蠻人、それも東洋人らしい、變な、しつこい酷いことをやりさうな、恐ろしいものを聯想せしめた。素より自分達の他にも澤山の避難民が度を失つて右往左往に逃げまごひ、婦人や子供の泣いて居るのや、老人を背負ふたのや様々な人々があつた、なにしろ不用意な突差な場合なので、男子にも自信と落ち着きとがなかつた。それでも大抵の人は何處かに逃げたが、自分達は一人一人逃げるのならいくらでも逃げられるが母と自分とは歩行が出來ないので、逃げる事が出來ないので、皆一緒に離れまいとするので、結局一同が到底此の上逃げる事が出來ないと覺悟してそこらにあつた茅の藪の中に僅かに身をかくした。ヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ氣だつたのである。そ

してその隱れ場所には少しも自信がなかつた。實に不安と恐怖との數十分であつた。其の中に日が暮れて來たので眞暗では見つけられる事もあるまいと少し安心した時に、其の叫び聲は異樣な吠聲をなす變な種類の犬の吠え聲である事がやつと聞き分けられて來た。そして非常にまちまちな報知ではあつたが、ヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽて居ないと云ふ事が解つてきた。そして皆避難者が家に歸り出したので自分達も藪から出た。其時初めて方々を茅で切つて居る事や、無數の藪蚊に螫されて居る事や、泥まみれになつて居る事を氣が注いた。日は全く暮れて其の夜も東京の空は眞赤であつた。電燈が點らず、眞暗だから大丈夫だらうと云つて家に歸つた。しかしまた幾度も朝鮮人が來たといふてはくらやみの中に隱れねばならなかつた。その夜は夜通し警鐘の音が聞えて居た。町では朝鮮人が横濱方面から入り、ヽヽヽヽヽヽヽヽ捕へられたりしたさうであるが、自警隊の組織が出來、地震も漸く收まつて、今は取り亂れた狀態の中にもやゝ落ち着き、東京の恐ろしい出來事や、今後の復興に就いての覺悟や、友人達の安否や、自分達のうけた災害に對する處置や、困難になつた生計の方法や等に就いて考へる丈けの餘裕の中に、兎も角も日々を送つて居る。素より自分達も恐怖と、不安と、大きな災害とを受けたが、然し生命は助かり、食

物を缺かず、新らしく生きる勇氣と希望を失はない。東京の罹災者のあの慘酷な恐るべき地震と火と、水との責苦を受けて死んだ人達の事を思へば、自分達のは云ふに足りない。生きて居ると云ふ事丈けがどんなに感謝すべき幸運であらう。東京で燒け死んだ人達は實に恐ろしい地獄そのまゝの光景を見、その難にあつたのである。さう云ふ人々に對しては何も云ふ氣になれない。今後の善後策などゝ云ふ氣になれない。只恐怖に身慄ひする許りである。同情と云ふやうな氣持ちも起らない。慘酷な盲目的な機械的な自然の破壞力の壓迫を感ずる許りである。生き殘つた者と死んだ者との間には絕對的な區別がある。素より生き殘つた者は勇氣を出して新らしく起き上がり、積極的に建設してゆくべきであらう。新らしい東京は必ず建設せられねばならない。人類は此の震災に依つて屈服する事は決して無い。文化史は反つて進步するであらう。失はれた人口は實に夥しくはあるが、生れる人口よりは素より遙かに少く、燒失した都市も、建築も、財貨も、十數年後には回復されるであらう。再び得る事の出來ない文書や、美術品等があつても永遠の文化史は決して後戻りする事は無く、其の缺陷を埋めてゆくであらう。人類と文化史とは、今度の震災に依つてびくともしないと云つて良い。そして生き殘つて居る者は、皆新らしき人生を切り

拓き見出してゆくであらう。然し災害にあつて地獄の如き境遇の中に死んだ個人にとつて、それが何であらうか、其處に人類意識と個人意識とのはつきりした對立がある。死したる者をして死したる者を葬らしめよと云ふのは生き殘つた人の事である。若し自分が難にたほれたらどうであらうか。生き殘つた者が新らしく勇氣を出だして生き、此の災害に依つて一段と進歩した文化を造り出さなければならないのは云ふ迄もなく、其の方法に就いては種々の意見が百出するであらう。自分は今其の問題には觸れない。それは多くの才能ある人々が論じるであらう。自分は依然として死んだ人の運命の問題、何故にかゝる災難にあはねばならないのか、其の機械的自然力は抑々何ものであり、それと人間との關係は如何にして合理的であるか。又死したる個人と、殘つた人類の進歩との關係は、如何にして合理的であるか。約言すれば、かゝる恐るべき出來事の存在する人生を如何にして調和あるものと感じて、生きる悦びを感ずる事が出來るか。と云ふ問題が最も重大に感じられる。素よりそれは自分が生き殘つたから考へられるのである。又餘裕があるから考へられるのである。切齒つまつた場合、我々は本能に依つて動くのであつて、それは恰も自分が災害に依つて生命の脅かされた時、取つた態度で明らかである。突差の場合我々は考へずに

本能に依つて動くからこそ、危急の場合生命の安全を保つことが出來るのである。それは生命を守る自然の智慧である。今度の地震で壓死された者の意外に少いのは、地震と同時に自分で氣が注かない程に早く飛び出すからである。又切齒つまつた場合のみならず、是非善惡の判斷のつかない場合には、我々は本能に依つて動かなければならない。後から考へた時結局それが其の場合になすべきことをなして居る場合が多い。此の意味に於いて本能に依つて動く事は最も健全である。そして臨機の場合に於ける最も正しい態度である。然し我々は絶えず切齒つまつた場合で生きて居るのではない。何は兎もあれ、生きねばならず、生きる爲には衣食が必須であるが故に、只生きんとする本能に依つて生きんが爲の努力をして居るのみであると云ふのは事實でない。若し、我々が自分の生存を生きる價なしと厭離し、否定する自由を持つてないならば、我々は精神生活者ではなく、自主者ではなく、動物と等しく、明らかな奴隷である。プロレタリアがブルジヨアに隷屬して居る以上に、遙かに根本的、全體的、絶對的な奴隷生活である。生物學的本能は我々にとつて與へられたるもの、自然の一種であつて、我々が此れを肯定する時、初めて價値があるのにすぎない。本能は我々が自主的に此れを肯定しない限り、我々にとつて「外部」であり

其の命令は外部的壓迫である。精神生活とは、本能を處置する事である。我々は此の世界を生きる價値ありと認める時のみ生きればいゝ。只生物學的本能に依つて生物學的存在を保つ爲に必須なる衣食の爲の鬪ひを第一義として其の本能そのものに對する肯定、否定の自主的權利を抛棄する事は徹底的な奴隷生活である。今我々はかゝる恐るべき出來事に遭遇して、生き殘つた者として差し當り此の非常の場合、兎も角も我々の生きむとする本能のまゝに、種々の方面に努力する。それは前にも述べた如く最も賢く、適當である。然し我々はそれ丈けを以て滿足する事は出來ない。前に擧げた如き深くして、永久なる人生問題が我々に解決を迫るのである。假りに我々が難に死した個人であるならば、今我々が努力して居る如き一切の問題はそのまゝでは空である、何等の價値も、權威もない。此れを意義あらしめる爲には、只個人と人類との關係が明瞭に把握されるか、若しくは神と個人、宇宙と個人、生を與へるものと與へられたるものとの關係、約言すれば、宗教意識が明瞭に把握されて、それが一つの本能となる程に我々にとつてぴつたりと自己のものとなるかの二つの道より存在しない。たゞに死者のみならず、生き殘つた者と雖も、何時かゝる災難に死すかも知れない運命に曝されたるものとして、此の問題を解決せずして、我々は

自主的に生きる事は出來ない。若し我々が個人意識に終始するのでなく、人類意識で生きるならば、そして其の人類意識が個人意識程に生き生きと感じられるならば、我々は初めて自分は難に死しても、生き殘つた人類の生長を、祝福して死ぬる事が出來るであらう。若しくは我々が前述の如き宗教的信仰を、確實に自己のものとして居るならば、其の運命をも合理的なものとして忍受して死ぬる事が出來るであらう。何れにもせよ、我々が個人意識に終始する限り、我々はかくの如き恐るべき事件を持つ世界を、肯定して生きる事は出來ない。個人意識以上を持たずして、かくの如き世界に生き得る道は、只我々の自主的生活を拋棄して本能のまゝに、卽ち自然力に屈從して、千切れ千切れに其時其時の衝動に從つて生きる奴隷生活の外にはない。卽ち平常はかくの如き災難に多分あふ事はあるまいとの僥倖心に依賴して生き、若し生き殘つたならば、善後策のみに腐心し、漫然とそれを總ての人間の爲すべき、又爲す事の可能なる生活の如くに考へるのである。かくの如き人が若し災難にあつたならば。同じ心理に依つて總ての囘復事業の如きを空と感じるであらう。彼が囘復事業の價値を見出すのは、只偶然の境遇の爲に過ぎない。我々はかくの如き狀態に滿足する事は出來ない、今後我々がかくの如き災難に死する場合があり得るものとし

て、若し幸ひに恙かつたとしても、かくの如き世界を生きるに價あるものとして、自主的に肯定して生き度い。其の爲には、我々が個人意識以上の人類意識、若しくは宇宙意識(信仰)をさながら個人意識の如き生き〲しさを以て把握する道の他にはない。其れは其の自然にして生き〲と感じられる點に於いて、我々の個人的本能の如くでなければならない。實際に我々の内にはかゝる人類的宇宙的本能が存在して居る事は事實である。然し其れは實に微弱に且つ不完全にしか發達して居ない。誰れか自分の目前の災難と、自分の死後の人類の慶福とを同じ生き〲しさを以て感ずる事が出來よう。然も我々は此の方法の他に此の世界苦からの解脱の道を持たないのである。我々は我々の内の人類的、宇宙的本能を出來得る限り發達せしめて、其れが個人意識以上に生き生きと感じられるやうにする他はない。實際に釋迦や基督の如き宗教的天才や、殉教者や社會的犧牲者はかゝる本能の稀有に發達した個人であつたに相違ない。近代人は個人意識を重んじ此れが發達せしめる事に急であつて、此の人類的宇宙的本能を發達せしめる事を怠つて來た。自分の如きも個人意識の著しき發達と比較して此の個人以上の意識の實に貧寒なのを感ずる。總ての人類的事業には、必ず自主的犧牲が必要であり、其の犧牲は我々の人類的本能の發達にまた

ない限り、如何にしても不合理である。革命事業の如きも自分は或る人々の如く個人意識から導く事は不合理であると信ずる。（階級意識は、多くの場合個人意識の變形であり、稀に一種の超個人意識である場合があるが、何れにしても人類意識とは明瞭に相違して居る。此れに就いては別に委しく論じ度い。）若し革命は、無産階級が個人の生活苦から差し當り免れんと欲する鬪ひより生ずるものであるならば、同じ權利を以てブルジョアが其の個人意識に依つて、自己の生活の安全を擁護する事を許さなければならない。例へば自分の如き病人は假令革命の目的が病人を無料で養護する如き社會を實現せんとするにあるにしても、革命が成就する過渡の時代に於いて少數の病人の如きは犧牲となつて拋棄されるならば、自分の如き病人にとつては、現在の制度が遙かに望ましいものであつて、革命は甚しき恐怖である。それは自分にとつては個人的死を意味するからである。故に自分が個人意識以上の人類意識に依つて生き、假令自分一個は革命の爲に死するも、それに依つて人類全體が進歩する事を自己の事の如くに悦び得るに到らない限り、自分が革命事業の爲に努力する事は不合理である。總ての志士や先驅者や殉難者の生活は個人意識以上の意識に立つ事に依つて初めて可能である。如何に考へても、犧牲は其れ自身に目的を持つ行爲

として說明する事は出來ない。それは自我の擴大としての超個人意識の行爲として初めて積極的である。革命は個人意識からでなく、人類意識の上に根據を持たねばならない。從つてプロレタリア自身へも、人類の爲の犧牲となる事を要求する權利を持つ意識の上に立たなければならない。かくの如くして初めてブルジョアにも、病人にも、凡ゆる個人に、其の事業の遂行に依つて個人的利益を受くると否とに關はらず、革命事業に努力する事を人類の名に依つて要求する事が出來るのである。然らざれば革命に依つて利益を得る個人のみが革命に努力すべきであつて、然らざるものが此れに反對する事を非難する根據はない。然し乍らかくの如き犧牲も自主的犧牲の場合であつて犧牲を強制する事は別の根據を要する。それは他人に奴隷を強ひる事である。自ら奴隷狀態より擺脫せむ爲に努力する者が、他人に奴隷を強ふる事は不合理である。奴隷とは自己の自由意志の選擇に依らずして、他人の意志によつて行爲するものゝ謂であつて其の意志の善惡に依るのではない。假令他人の意志が人類の幸福を目的とするものであつても、自ら其の行爲を欲せずして外部より強制されてなす事は奴隷である。其の行爲が結果として人類の幸福に役立つても其の個人の人格は死滅したのである。又單に多數の爲には少數者の犧牲はかまはないと云ふ事は

說明なくして通過する根據ではない。單に犧牲者の數より云ふならば、今度の震災に依つて生じた犧牲者の數丈け犧牲にすれば、丶丶丶丶丶丶丶丶我々が既に自然力の無意義な破壞に對して此れ丈けの犧牲を、不可抗ながらも、耐へ得るならば、彼の根本的××の爲には其れ丈けの犧牲を忍むでもいゝとも考へられるであらう。然し我々にとつて問題となるのは數量のみではない。自ら犧牲となる事を欲せざる個人に、犧牲を强制すると云ふ一つの全然新らしい行爲の正不正である。自分は今の處其の根據をはつきりと把握する事が出來ない。自分一個が自分の個人的利益に反して、革命の爲に努力する事は、自分の內なる人類的本能を發達せしめる事に依つて可能であるとの希望を感じ得るが、他人にこれを要求する道は、他人の內なる人類的本能を呼び醒す方法に依る他には、今の自分には、正しき根據が見出だされない。素より他人をして、人類の爲に自己の利益を犧牲にせしめると云ふ事は、他人をして負うべきものを負はしめる强く正しき一道である。然し負うべきものを負はしめる道は、如何なる場合に於ても、他人の人格の獨立と自由とを侵害せざる條件の下に於いて正しいのである。自己の人格の獨立と自由との爲に鬪ふ者が、他人の人格の獨立と自由とを侵害して、此れに奴隸生活を强制する事は、自分は如何にして

も合理的とは思へない。故に今の自分にとつては、他人に犧牲を強制する道は是認出來ない。自分一個は、自分の内なる極めて貧寒なる人類的本能を出來得る限り發達せしめる事に依つて、自分が悦んで自主的犧牲を個人的本能からの如くになし得るやうになる事に依つて、自分一個の苦痛から解脱し度い。他人に對しては、その人類的本能を呼び醒す道以上には、自分には正しき道が見出だされない。自分が今後自己を救ふ爲になさなければならない事は、自分が此れ迄個人意識に出來得る限り忠實であつたと同じ情熱を以て、其れ以上の情熱を以つて、自分の内なる人類的本能を發達せしめる事である。其の他に合理的なる解脱の道は見出だされない。かくして初めて自分が災難に死す事があつても、生き殘る人類の生長を悦んで死す事が出來、自分が生き殘つた時には、死したる個人の如何に關はらず、生き殘つた人類の爲に復興の事業に努力する事が出來るであらう。死したる個人の運命に就いては、同じ道に依つて自分の内なる宇宙的本能を發達せしめて、宗教意識に深入りし、はつきりした信仰を摑まねばならない。今日の時代には宗教意識は、輕蔑され、單なる空想に過ぎない如く思はれて居るが、自分は宗教意識なくして、我々が合理的に生き得る道は決して無いと確信する。此れなくして生き得るとなす者は、人間の本性上

あきらめる事の出來ないものに目を瞑つて、自分をごまかして偽れないですませるか、若しくは自分の生活の部分々々の矛盾に目を瞑つて、刹那刹那に、切れ／＼となつた生活を無批判に營んで、此れに陶醉するか、或ひは不滿足ながら引きずられて行くかの二つの生活法しかない。陶醉するにせよ、引きずられて生きるにせよ、我々の精神生活が、それ自身の中の矛盾に目を瞑ると云ふ事は、精神生活としての死を意味する。其れは少くも懶惰、卑怯、虛僞である。人格はばらばらに切り離される時最早や人格ではない。我々が或る瞬間、甲を肯定し他の瞬間に此れを否定し、若しくは同一瞬間に甲と非甲とを肯定し、然も其の間に內面的必然の連絡なくして生き得るならば、其れは人格的生活ではない、我々がかくの如き矛盾に目をつむり得るならば、我々はどんなに生き易く、苦惱なく、自由自在となれるであらう。我々が精神生活者として營めねばならない慘澹なる苦痛は、我々が此の矛盾を自分に許す事が出來ない處から生ずる。例へば我々は自己の生きんとする本能を肯定する時、論理的に必然に他人の同じ本能を肯定しないわけにはゆかない。然るに他人の此の本能を否定しなければ、自己の本能を肯定する事が出來ない時、我々は他人の本能を否定するとする。(正當防衛の如き場合は即ち此れである。)其れが正しいとされる爲

には、我々は生きむとする本能を肯定する丈けでは不可能である。其れは他のものから導かれなければならない。然らざれば、明らかに矛盾である。然るに我々は其の正しき根據を、自分に滿足するやうに說明されたためしがない。然も漫然として生きむとする本能と、正當防衛とを、同時に切れ〴〵に肯定して滿足し得るものは、精神生活者ではない。此の矛盾を感じ乍ら目をとぢる者は自欺者である。又我々が戀に生きる時、其の極致が情死であると信じたとする。然も我々が同時に人類に對する愛の極致を奉公的犧牲であると信じて居るならば、此の二つを調和する事なくして、情死する事は矛盾である。人格の分裂である。我々の精神生活は、此の矛盾を許さない時初めて至難となり、嚴肅となるのである。又我々が愛する者と永久に別離し、惡が時として善に克ち、自己の生命が肉體的死を以て滅亡すると、本當に信じながら、果して我々が此の世界に生きる價あるものとして、悅びを以て生き生きと人生の營爲を、例へば東京市の復興事業の如きを努力する氣になれるであらうか。かくなし得る事が自然であるか。なし得ざる事が自然であるか。自分はなし得ざる事が自然で當然で、なし得る事こそ不思議であると思ふ。なし得ない事は恥辱ではない。然も我々は來世の存在と、善の勝利とを確信して居るのであるか。此の確信を得る事

は困難であらう。我々は之を宗教的求道と云ふ。只自分が不思議なのは、かゝる求道を必要でないと云ふ人である。其れを空想的、感傷的として排斥して生きてゆける人である。然も彼等はそれに代はる如何なる確實なるものを所有して居るのであるか。自分はそれを聞き得た事がない。我々が聞き得るのは、結局中途半端な「何々すべし」の聲か、或ひは生物學的本能に其の儘屈從し、壓迫され若しくは引きずられたものゝ「パンを與へよ」との聲のみである。自分は遙かに後者の聲に心を打たれる。其れは實に自然力の壓迫、強制だからである。其の性質に於いて、地震や、火事や、海嘯と同一な自然力に對する人間の叫びだからである。我々の生物學的本能は前にも述べた如く、我々が此れを自主的に肯定しない限り、我々にとつて外部であり、自然と全然同一である。「兎にも角にも、我々にパンを與へよ」と云ふ叫びは、燒かれたものが求めるのと同じ聲である。其れは確に必然的である。實に悲慘である。然も其の悲慘は奴隷が悲慘であるのと、同じ性質の悲慘である。それは如何に悲慘であつても、人格的生活ではない。精神生活ではない。我々が其の境遇に置かれて居る事は何と云ふ不幸であらう。其れは災難の一種である。然し其れは人間らしき生活でも正しき生活でも、況して願はしき生活でもない。只悲慘な不幸な、奴隷生

活である。かくの如き生活から自ら逃がれんとする事、他人を逃がれしめんとする事は素より正しい。只かくの如き狀態にあるものが、人間らしき、正しき、願はしき生活を求むるもの、宗敎的求道者を否定する時、其れは不正であり、矛盾であり、道理に適はない。前にも述べた如く個人と人類、宇宙との關係が內面的に把握されない限り、我々は解脫する事は出來ない。其れは宗敎意識でなくて何であらう。人は來世を云ふ事を夢だと云ふ。然し何等かの形に於いて生命の永久と善の勝利とを可能ならしむる來世が存在しないならば、我々の個人としての生活は畢竟無意義である。其れを否定して生き得る者は奴隸若しくは自欺者、白痴、狂人、夢遊者の一種であつて、何れにしても自主者ではない。然も來世があると考へる事と、無いと考へる事と何れが、我々の理性に本當らしい（ワーシャインリッヒ）事であるか。自分は遙かに前者の方が本當らしいと思ふ。此れを嘘らしいと感ずる根據は何處にあるか。其れは只近代人の粗雜な自然科學的知識の他にはない。然もそれは自然科學の責任ではなく、自然科學の限界と、任務と、本質とを極めて粗大に理解してゐる我我の敎養の罪である。自然科學は決して來世の有無等の問題に觸れるものではない。自然科學が來世を否定すると考へるのは、中學的敎養の名殘りをひいた常識である。今しばらく自然科學的

知識の束縛を脱して我々の感覺に無條件的に、實在的權利を與へる事を止めて、さて素直に我々の本性の要求の全體から考へる時、來世が無いと云ふ事は、有ると云ふ事よりも何人にとつても信じ難きことゝなるであらう。少くとも來世の存在は個人的生命の永續と、善の勝利とを可能ならしむる條件として、我々が立てないわけにはゆかないポスツラートである。假令此れを否定する事が可能であるとするも、此れなくしては我々が此の世界に價値を感じて生きる事が出來ないと云ふ事實を如何ともする事が出來ない。此れを否定し乍ら、なほ自主的に此の世界に價値を感じ得る者は、我々の本性上あきらめる事の出來ないものをあきらめて生き得るとなす自欺者である。然らざれば生物學的本能に、そのまゝに——此れを肯定若しくは否定する自由なしに——屈從して生きる奴隷である。自分は今度の震災に就いてかくの如き感想を述べる事の、目前現實の事局の問題から著しく離れて居る事を知悉して居る。然も自分が敢へて其れを爲したのは誰れか一人はかゝる異常の出來事に際しても、目前現實の問題以外に純粹に思想的な考へ方をしなければならないと思つたからである。そして自分の如き人間は、それをなす事を自然な、自分の分限を知つた、謙遜な道であると思つたからである。今後震災を如何にして防禦すべきか。罹災者

を如何にして物質的に救濟すべきか。東京を如何にして復興すべきかと云ふ當面の重大な實際問題に就いては、素より自分と雖も相當の意見を持つてはゐるが、自分などよりも遙かに才能ある多くの人々の意見が百出するであらう。自分は謙遜に教を乞ひ度いと思ふ。只自分は精神的事業に從事するものとして、希望して置き度い事は、復興事業に於いて衣食住の實際問題が解決せらるゝ迄は、學問や藝術等の精神的問題を後廻しにする一つの過渡の時期を認めると云ふ仕方でなく、文化的復興事業に着手する當初より衣食住の問題と同時に學問や藝術の復興が企畫されなければならないと云ふ事である。素より物理的必然と、及び便宜上先きにすべきものと後にすべきものがと區別されるのは當然である。其點に於いて例へば住宅の問題が、劇場の問題より先きにされなければならない事に素より自分は不服はない。然し其れは物理的及び便宜的順序であつて、權利の順序ではない。我々はパンを得て、後初めて神の道を欲するのではなく、同時に此の二つを欲するのであるが、先づパンを得なければ、神の道を聞く事が出來ないのに過ぎない。我我の生命は不可分の精神的肉體的一如である。此の辨別は思想的には決して小さな事ではない。しかのみならず當局者が此の權利の問題を腹の中に會得して居ると否とは、精神文化的機關の復

界の進歩に重大な關係を持つであらう（一九二三・九・十七）

# 人間苦より放たるゝ道

――或る人の問に答へて――

人間が生きてゐる間は、苦しみから離れる事は出來ません。ですから人間苦を救濟する道は、苦しみを無くして仕舞ふといふ意味では不可能であります。苦しみの中に在りながら、其の苦しみを忍受して、我々の主觀を深め清めすなほにする事によつて、却つて其の苦しみから快樂ではないところの福祉を感じられるやうになることより他はないと思ひます。

言ひ換へればほんとに人間苦を救濟する道は、宗教の道より外には無いと思ひます。

環境を改造する事丈によつて、人間苦から徹底的にまぬがれる事は到底出來ないと思ひます。

人間苦といふものには種々なものがありますが、凡そ次ぎの三つに分けることが出來ると思ひます。

第一は、良心の苦痛、第二は、生活難、第三は、生き甲斐が無い、といふ苦痛です。

第一の良心の苦痛といふのは、自分のやうな者でも生きてゐてもいゝのであらうか、といふ不安

です。この苦痛は、或る人々には實に深刻な苦痛であつて、他の總ての點では幸福であつても、この點に於て、心の落ち着きが得られない時には、自分の存在其のものが、この世界に容れられてゐるかゐないかの點に就いての大煩悶であつて、眞に眞面目な人は、必ずこの苦痛に打つ突かる筈なのです。昔からこの宗教的な苦痛に惱んで、血の出る樣に慘憺として煩悶した人は、ほんたうの宗教家です。そして自分が生きてゐる事を許されてゐる、といふ自覺に達した時に、初めてその人は生きる權利を得たのであつて、ほんたうの救ひといふものは、之を以て最も本質的な根本的なものとしなければなりません。この外の第二第三の問題は、この第一の救ひが得られてから後の話しです。

如何に衣食住が豐富であつても、生活の興味を感ずる材料が充ち足りてゐても、この安心立命が無いならば、我々は最深の苦痛から救はれる事は出來ません、然らばこの安心立命は如何にして得られるか。それは私は、このまゝで我々の存在が許されてゐる、と信ずる他力の、眞宗的な信仰の意識に立つより外にはないと思ひます。其の外の如何なる意識も、この不安から我々を救つては呉れないのです。我々は良くても惡くても、兎も角もこのまゝで、此の瞬間に、存在をこ

の法界に容れられてゐると信じ得なくては、救ひにはなりません。

この點に就いては『靜思』中の『眞心がなくてもいゝといふ意味に就いて』といふ感想の中に委しく書きましたから、再び繰り返しません。

私自身は、このまゝで許されてゐると大安心して、その上で出來得る限り、善人とならうと心がけてゐる者です。法然上人の『罪は十惡五逆のもの、猶生ると信じて小罪をも犯さじ』と願ふ氣持ちに生きなければならないと思ひます。この救ひの自覺に達し得た人は、他の二つの苦痛も自ら、同じハンブルな心持ちから先づ解決し得てゐるのを常とするものですが、兎も角もこの安心立命を得ても、第三に生活問題が解決されなくては苦しみから逃れる事は出來ません。これも矢張り信仰に立たなくては徹底的に救濟される事は出來ないと思ひます。卽ちマタイ傳にあるやうに神にパンをデペンドして生きる心、或は西田氏の所謂、佛假に養はれて生きる心にならなくては徹底的には解決出來ないと思ひます。この點に就ては同じく靜思中の『新しき村に就いて』及『勞働運動の道德的根據に就いて』の中に委しく書きましたからこゝには繰返しません。

自分が正しく暮す限りには『先づ神の國と其の正しきとを求め』たならば、『これ等のものは（衣

食）汝等に加へられん。天の父は、これらのものゝなくてかなはぬ事を知り給へばなり。」といふ信仰に立つて、自分は出来る丈け労働する事より外に解決の道は無いと思ひます。

パンの報酬を求めずに働き、働いた爲めに他人から貰ふ報酬を神の名によつてうけ、愛と奉仕の爲に働くのです。そして、若し働いてもパンが得られないならば、神か、即ち我々に生命を與へたものが、自分が生きることを許さなくなつたのだと思つて、餓死することを覺悟して働くのです。働けない病人は、人に養つてもらふことを神から養つて貰ふのだと思ひ、養つてくれるものに甘んじて、死に就くことを覺悟しなくてはならないと思ひます。どんな無理をしても、どんな惡を犯しても、必ず生きないではおかない、といふ心は無理であつて、其の無理が通る時に、初めて救はれたのであるといふならば、さういふ救ひは決して得られないと思ひます。さうはこの世界が造られてゐないのです。我々は、先づこの信仰に立ち、然る後に環境を改造しなければならないのです。環境を改造する事は確かに必要な事であります。今日の不合理な經濟組織は、必ず改革されなければなりませんし、又、されないではゐない文化史的必然性を有つてゐるのです。しかしそれによつて我々の精神的苦痛が、徹底的に解決されると思ふのは餘りに唯物的でありま

す。

それは決して出來ないと私は思ひます。環境を改造しさへすれば、パンの問題に關する人間苦が解決すると思ふのは、人間がパンのみにて生くる物でない事を忘れ過ぎてゐます。

我々の生活慾望の、物質的需要は未だ〳〵強いのです。そして、それが充されない時には、吾吾は依然として苦しみから逃れる事は出來ません。それは吾々の物質的慾望が原理として、それが必ず充されなければ救はれないと云ふのでは救はれる時はないのです。必ず受身に考へて與へられたものを感謝して受けるといふ、從つて與へられなければそれを忍受するといふ、宗教の道に立たなければ解決されないのです。こゝに於て第三の、生き甲斐の問題が生じて來ます。吾々は安心立命し、又生理的必需が保證されてもそれだけでは生きる興味がありません。これが有るからこの世に生きてゐたい、と願ふ生活材料が無ければなりません。それがないならば、吾々は生きてゐる事は耐へ難い重荷であります。これは或る人には事業か、或る人には戀愛か、或る人には子供がその生き甲斐となつてゐますが、しかしこれも徹底的には矢張り宗教の道に立つて、神に於いて生きるといふところ迄行かなくてはほんたうに落ち着く事は出來ません。事業は失敗

するかも知れません。戀は失はれるかも知れません。子供が死ぬるかも知れません。才能もなく容貌も醜く子供もなく、事業も戀も子供も得られない事もあります。その上に、生活にも苦しむならば生き甲斐は感じられません。我々は才能のない、醜い、かつ貧しい女の人達に、どうしてかくの如き方法によつて、生き甲斐を感じよといふ事が出來ませう。これ等のもの丶一つに强く執着してこれに生き甲斐を感じてゐる時、それを失ふならば生きてはゐられなくなります。例へば戀人に裏切られた時、或は子供に死別れた時、其の苦しみは救ふべからざるものとなります。我々は實に淋しい道ではあるが、先づ一度、事業と、戀と、子供とを離し、神に於て生きる道に立たなければならないのです。神以外の者に、生活の最後の足場を置いてはなりません。

トマス・ア・ケムピスやボーロの如く、神に於て生き、神に於て死に、神とともに働く生活に最後の足場を置く時に、初めて何物にも毀れない平和と安息とを得るのであります。

斯の如き生活は、もとより苦しみをなくするのではありません。苦しみの中で平和と、喜悅と安息とを得るのであります。

然らば、事業や、戀や、子供や、總て我々が人間性の本能から、それによつて生き甲斐を感ず

る生活材料を捨てなければならないのであるかといふに、決してさうではないのです。一度神に於て生きる道に立つた上に於て、これ等の生活材料は、神から許されて與へられたものとして、從順にうけて差支ないので、むしろすなほにうける方が宗教の道に適ふのであります。與へられた生命を感謝して享け、沁々と樂しむ事は、我々に生を與へたものゝ心に適ふ事であります。

その反對に、これ等のものを拒み禁慾し、殊更に苦痛と、悲哀と不幸を選ばうとする事はいぢけたひねくれた、素直な道ではありません。我々は我々の生命を樂しみ、異性を戀愛し、子供を慈しみ育て、又生命の本能である創造的或は遊戲的衝動から何等かの事業をなし、それに生き甲斐を感ずる事は最も素直な從順な、かつ公けな事であります。この氣持ちは、『轉身』中の『宗教的享樂主義の立場から』といふ論文の中に委しく書きましたから、此處には繰り返す事を省きます。

たゞ大事な事は、宗教の道に於てはこれ等のものを、なくてならぬもの、としてはならないのです。これ等は、神が許して與へて下さるから吾々は喜んで之を受けるのであつて、神が之を取上げられたならば、不服を言つてはならないのです。卽ち事業や戀愛や子供は、之を失ふ事があつても、吾等は猶ほ神に於て感謝して生きなければなりませんし、壽命が盡きたならば、安心して死な

ねばなりません。之等のものを必ず離さないと執着して、これ等の物がなくては生き甲斐が感じられないといふのでは、吾々は人間苦から救はれることは出來ないのです。何となれば、前にも述べた如く、之等のものは何時失はれるかも知れないからであります。與へられたものを素直に受け、しかも之を許された間だけ喜んで樂しみ、之を失つても、猶最後の足場を神に於て持つてゐる點に、初めて確實な、運命に毀れない平和があるのであつて、或人にはこの事はあきらめに見えるかも知れないし、或は消極的にして情熱を缺くものと見えるかも知れません。しかし、それは未だ心持が深くなく素直でないからであります。我々は神から用ひられて、その聖業に參與してゐると思ふ時に、却つて其の事業に價値を認め、意義を感ずる事が出來るのです。そして、もはや神が自分を用ひ給はぬ時に、我々は其の事業を、他の、もつと適當なる人に委ねればよろしい。

斯くの如くして初めて、自己の使命を果したものは若くして新にし、後繼者に道を讓つて、人類の爲に沒落する事が出來るのであります。又神の前に立つて戀人と愛し合ふ時、初めて本當の戀愛が出來るので、戀愛の中の總ての不純なるもの、無理なるもの、例へば強制や、嫉妬や、貪慾から潔められる事が出來、亦戀人同志の間にもまぬがれ難き、孤獨と淋しさに耐へる事が出來

るのであります。神の前に立たざる戀愛は、平和と圓滿とを保つ事とは至難であります。又親が子供を愛する時、その子供を自己の所有物と思はず神のもの、神に用ひられて人類の爲に働らくべき者、神よりあづかつたもの、と思ふ時に初めて、親子の間に必ず伴ふ偏愛や、强制や、妄執から離れる事が出來るのであります。子供の職業や戀愛の自由を尊重し、その個々の性能を、自己の慾望によつて枉げず、又自分の子を愛する餘り他人を虐たげる事からまぬかれるのです。自分が命ともして育てゝ來た子供が年頃となつて親を離れ、その事業と戀人とに奔る時に、失望せずして之を送り、その前途を祝福し、自分は淋しさに耐える事が出來るのであります。親として必ず逢はなければならない淋しさに耐へ得る道は、神の前に立つて子供を愛するより外にはないのです。斯くして事業と、戀愛と、育兒とは、信仰の道に立つ時、その情熱を失ふ事なくして、その相應しき限界を保つ事が出來るのであります。この限界を忍受する事は決して諦でなく被造物の最も正順なる智慧ある道なのです。斯くして總ての人間苦はことごとく、其の最後は宗教の道に立つ事によつて初めて、眞に救はれ得るものであつて、それ以外の方法によつては徹底的に、しつくりと落き着きを得て、安息と平和に達する事は出來ないのであると思ひます。

# 女性美の種々の段階に就いて

女性は美しい。造化は美しきものとして女性を創つたに相違ない。少くとも美の秘密の種子を女性の内に播いたに相違ない。天には星、地には花、そして人には女がある。然も女は靈魂（ゼーレ）を有するものとして、其の美は最も複雜に、微妙に、且つ生々とし、特に成長して行くことの出來るものとして、星や花よりも、一層深き美に對する造化の密意がこもつて居るに相違ない。恐らく女は法界に於いて最も美しきものとして造化が意匠したものに相違ない。此の意味に於て、自分は「女性的なるもの」の美を崇拜（アドア）する。自分のかゝる見方は恐らく甘き、ロマンチツクなるものとして鋭利ではあるが淺薄なる現實家の一笑を買ふに過ぎないであらう。もとより星や花が完成されたる美であると異り、女は常に可能性としての美であるのみならず、往々にして其れは醜であり、或る意味においては女は低卑と纖弱と邪惡と――約言すれば醜の爲めに意匠され、宇宙に於いて最も醜きものとして創られたるものゝ如き觀を呈する。併し乍ら女性の内なる斯くの如き醜は美を豐富にする爲めの陰影として與へられたるものである。造化は何よりも貧寒を厭ふ。世

界に於いて最も美しき女性美を創り出さんが爲めには、其の素材として出來得る限り豐富なる原料を與へ、其の中より選擇し、精錬せしめなければならない。其れは我々が藝術的心境に於いて一度び「物を創らんとする意識」に沒入して、造物主の意匠に參與する瞬間、我々に明かに洞察出來る消息である。我々は最も美しきものを創らんと欲するならば、そして其處に時間と空間と物質との――約言すれば經濟的制約が存在しないならば、必ず先づ凡そ美として生かし得る總ゆる材料を用意するであらう。其れが如何に不純なる混淆物を含むで居てもそれは恐れるに足りない。併し美として生かし得る要素を唯一つでも逸する事は取り返しのつかぬ缺損である。何となれば、永遠の時間に於いて、不純なる混淆物は精錬し得るけれども、逸したる要素は如何ともする事が出來ないからである。況して醜を以て反つて美を創る事は造化の最深の手法である。審意である。女性が其の内に如何に多くの醜を含んで居るかと云ふ事は女性が醜きものとして創られたと云ふ證據ではなく、反つて最も美しきものとして創られたと云ふ證據である。其の複雜なる醜さ執拗なる惡とは其の内から最も豐富なる、神秘なる美の輝き出づる暗である。現實の個々の女性は如何に醜であつても、「女性的なるもの」は何處迄も美である。自分の斯くの如き女性觀に

就いては「靜思」中の「女性崇拜に就いて」の中に詳しく書いたから此處には再び繰り返さない。現實の世界に於ては男性は女性よりも優越して居るが、ある可き世界に於いては恐らく女性は男性よりも優越するであらう。女性は男性よりも進化に愛されて居る。惠まれて居る女性の優越の根據は此處に存する。蓋しある可き世界、永遠の世界が來たる迄は其處には暴力や、敵を防ぎ、惡と闘ひ、自然力を征服し、物質を處理する（衣食住の爲めの勞働の如きは此れである）。爲めに必要なる能力がすぐれたる男性が、女性に優越する事は免れない。併しながらかゝる能力は永遠の世界に於いては不必要なる能力である。斯くの如き能力は如何にすぐれて居ても其れは永遠の世界に於いては德とはならない。永遠の世界に於いては積極的なる德のみが譽れある德である。我々は純粹に價値に就いて考察する時此の觀點を忘れてはならない。現實の世界に於いて女性が男性に下屬しなければならないのは、斯くの如き永遠の世界に於ては、不必要なる能力の缺けて居る爲めである。例へば、暴力の如き野蠻なる力が支配する世界に於いては女性は男性に壓迫されるであらう。パンの爲めに勞働する能力が根本的に全生活の基礎を支配する世界に於いては、勞働に適せざる女性は從屬せざるを得ないであらう。併しパンのために勞働に適せないといふ事

は永遠の世界に於いては、決して恥辱ではない。其處ではもはやパンの爲めに勞働する必要がないからである（固より地上に於てはパンのために勞働は尊い。此の事に就いては後に再び述べるであらう。）。寒さを防ぎ、自然力を征服する爲めの能力の如きも亦ある可き世界に於いては其の必要を失ふであらう。斯くて純粹に其の人格の積極的なる德を以て、男性と相對峙する時、其處に支配するものは造化が男性と女性とに與へたる「位」の優劣である。其れ以上に我々は優劣の擬議を與へる事は出來ない。「陶器師が一つの器を尊く一つの器を卑しく造る」如くに、造化が其の創造的遊戲の意匠に於いて、男性と女性とに附與したる位置が兩性の優劣を決定するであらう。其れは恐らく優劣と呼ぶ可きものではないであらう。寧ろ演（シュピーレン）ずる役割（ロルレ）の相違である。造化の意匠の構圖を成就する爲めに各々相應しき處に就くのである。創られたるものは其の位置を以つて安んず可きである。我々が作品に於いて、例へば一人の貴夫人と一人の騎士とを描くが如く、男性と女性の占む可き位は造化に於いては其の創造的構圖の中に於いて定まつて居るのである。然も調和的に定まつて居るのである。則ち斯くの如く兩者の位置が定められる事が、全體として最も相應しく、從つて男性にとつても、女性にとつても、最も祝福であるやうに定められて居る

のである。我々は此の調和を信仰して、定められたる位置を感謝して享けなければならない。此れ從順なる歸依である。我々は造化が女性を男性よりも高く定めたからと云つて呟いてはならない。又かゝる不平が男性に生じないやうに、則ち男性が其の特色を以て女性と對立し、且つ女性を稍々高き位置に置いて此れを尊敬する事に於いて、其の性的滿足を感じ得るやうに創られて居るに相違ない。自分は斯くの如き事を決して猥りに想像するのではない。自分の内に斯くの如く想像せしめる一種の深き根據を感ずるのである。自分は現實の世界に於ける男性の女性に對する優越は、反つて其の性質に於いて、永遠の世界に於ける女性に對する從屬を證據立てるものである如く考へる。其の智略や、鬪爭的本能や又總て其の働く事に有能なる性能は總て下屬するものの性質である、女性の優しき愛や、纖細なる性能や、ものを育む心や、働く事に能力を缺き、總てかしづき護られなければ存在する事の出來ない性質は總て上置さるゝものゝ性質である。現實の世界に於ける貴夫人と騎士との關係は、必ずしも其の德に依らず、然も不合理なる力を根據とする社會制度より生じたるものとして、永遠の世界に於ける男性と女性との地位の關係と比することは素より不適當であるが、然も我々が經濟的階級ではなく、德に依る——寧ろ造化の「位定

め」に依る階級に依つて、最深の意味に於いて合理的に成立する事を想像し得る男性と女性との關係の型を、それによつて髣髴する事が出來る。我々は會々現在の社會的事情に於いて、如何に經濟の問題が重要であり、階級の撤廢が急務であるからと云つて、此れのみの視點より價値其のものを眺めてはならない。凡そものとものとの上層と下層との關係、秩序の意識は我々が經濟的制約を離れ得た後に於いても、合理的に存在し得る。其れは決して我々の調和の觀念と相容れないものでないばかりではなく、寧ろ此れに缺く可からざるものである。若し神に從屬する事を欲しない人間（モータル）があるならば、其の關係を決して調和せしめる事は出來ない。又我々は神の前に頭を下げる事に依つて、自分の威嚴が傷いたと感じないのである。法界の「位定め」は歸依を以て承認されなければならない。我々は主を持つ事を欲する本能をもつて居る。主を持たなければ寂しい心を與へられて居る。我々が忠義の德を斯く迄高く値踏みするのは其の本能の爲めである。主從の意識は實に深い。經濟的階級の世界に於いて、主從の關係は人格の侮蔑であらう。併し神的秩序の世界に於いては決して卑屈若しくは盲從ではない。德に於いて優れたる者を高き席に据ゑる事は我々の喜びである。造化の「位定め」に於いて、ものゝ「境涯」と「品」とに於いて、より

高きものをより高き位置に置いて、此れを仰ぐことは我々の最深の滿足である。若し此の本能が處を得ないならば、我々の靈魂は滿足しないであらう。自ら働かざるもの〻爲に働く事は、必ず如何なる場合に於いても、我々にとつて苦痛なのではない。我々は愛するもの、尊ぶもの、守るもの、祈るものの爲に働く事は悦びである。自分は嘗つて廣島の病院に居た時に、一人の勞働者が自分は殆んどシャツとズボンとの他衣類を持たざる程にして、自分の妻には美くしく裝はせて居るのを見た。其の勞働者は、自分が寵愛物を樂むで眺める爲に、若くは恰も豚を飼ふ者が自分がやがて屠らむが爲に、其の豚が肥え太つてゐるのを見る事を悦んで、多くの食物を與へるが如き、利己的なる心からかくなして居たのではない、妻の美しい事を誇りに思つて居たのである。自分は裸かになつても、妻が美しい事に悦びを感じて居たのである。騎士が貴婦人の爲に其の手袋を拾ふ時、彼れは自分の人格の誇りの働く事を感ずるのではない。我々が天女や、聖母を仰ぐ時、吾々の内に男性としての最深の滿足を感ずるのである。我々は高きとして、調和ある世界を心に描く時、「女なるもの」を「男なるもの」より上置する事を欲する、不思議な靈魂的要求をあたへられて居るのである。彼のダンテの神曲に於いて、ベアトリチエがダンテに導かれる事よりも、

ベアトリチエがダンテを導く事に於いて我々は遙かに浄くして、天的なる美を感ずるのである。

我々は又女子が子供を生む事を以て此れを地上的なるものと考へ、女子は生殖の爲の機關に過ぎない如く考へる。かくて男子の暴力が支配する時代に於いては、男子は其の胤の爲に只女子の胎を借りるに過ぎず。此れに育兒と薪水との事を司らしむるに過ぎない。又其の生殖の事を以て女人を淺ましく、業深きものと考へる。自分は生物學的な見地を離れて、純粹に靈魂的な立場より見る時、現實の世界に於いてはかゝる見方に然るべき根據がある事を認めないわけには行かない。生殖は地上の方式である。凡そ「地的なるもの」の絶頂である。我々は「天的なるもの（ダスヒムリツセ）」と「地的なるもの（ダスイルディツセ）」とを感じ分ける時、肉交や、姙娠や、分娩や、哺育等を天的なるものとして感ずる事は出來ない。其の激情や、醜くして不調和なる形や、不安の狀態や、官能的にして盲目的なる徵候等を天的なるものとして、表象する事は出來ない。それは確かに淺ましきものゝ觀念と結合して居る。地的なるものゝシンボルである。然し乍ら現實世界に於いて、かくの如く地的なる此れ等のものも、此れを永遠の世界に高める時、其れは却つて不思議に天的なるものゝ理念を

構成する。我々は彼のものを生み創る力、物を攝容れる德、物を育ぐむ性能、一言に約せば母性の理念を最も天的なるものとして思ひ浮べる事が出來るのである。彼の聖母は此れである。子供を抱いて居るマリアの姿は如何に天的であらう。我々はマリアを處女たらしめ、その肉體的なる性徵と、盲目的なる激情を淨化して、此處に最も美くして調和ある天的なる像（ビルド）を造り上げるのである。此の點に於いては、自分は嬰兒に乳房を哺ませて居るルーベンスのマドンナの繪を好む事が出來ない。彼のファン・エックの高貴にして靜かなる聖母の像を其の發展すべき方向に徹底したる最も天的なる聖母の像となすものである。（聖母に就いては後にまた書くであらう。）女性は現實の世界に於いては、男性よりも凡ゆる點に於いて醜惡、劣弱、低卑である如く見えても、永遠の世界に於いては美くしく、淨く、高貴なるものとして約束されて居るものである。

然し乍ら其れはもとより永遠の世界に於いて、女性が造化より附與されたる豐富にして複雜なる素材を精練し、淨化し、其の可能性を發展せしめたる究極であつて、其れに達する迄には無限の段階が存在する。然し乍ら其の凡ゆる段階は一つの「女性的なるもの」の美が其れ自身を分化發展する過程であるが故に、それ〴〵の段階に於いて其の程度の美を持つて居る。逆に云へば凡

ゆる階段に於ける同一なる女性美である。もとより其の素材が生かし切られる迄は、其の内に種種の不純なるもの、醜や惡を含んで居る事は免れない。然し其れは醜や惡を持ち乍らも美である。凡ゆる段階に於いて、それ〴〵に特殊な美を持つて居る。寧ろ其れは現實の世界に於いては、常に地上的なる美として我々に認識されるのであつて、只理念の世界に於いて、藝術の作品に於いて、其の天的なる美を我々は髣髴し得るに過ぎない。然し乍ら女性美が天的なるものとして我々に認識される機會がかくの如く乏しく、且つ假象としてのみ其の姿を現しても、其れは決して容しきものではない。此の段階あるが故に女性美の價値が支へられるのである。天的なるべきものとして、意匠されたる女性美の、地上的なる現はれとして初めて凡ゆる現實の女性美が價値を持ち得るのである。我々が女性を崇拜する事が出來るのは只かゝる天的なるものとして約束されて居る事を信じ得るからに過ぎない。若し女性が此の理念と假像との美を斥けて、地上的なる美の段階を以て終始するならば、それは自己を見くびる者であり、永久に男性に下屬する地位を以て甘んずる外はないであらう。又若し男性が女性にかくの如き美をのみ要求して滿足するならば、其れは男性が自分の願望の高貴でない事を證しするものである。與へられた眞珠を踏み躙る豚の

頗くに豊かである。自分は以下鬼女より聖母に到る迄の、凡ゆる階段に於ける女性美の特殊的なる種々の型を列擧して、それが如何なる意味に於いて美であり、如何なる段階に屬するかに就いて考へて見度いと思ふ。

自分は前節に於いて女性美は凡ゆる階段に於いて盡くそれ〴〵に美くしいと云つた。恐らく女性を造つた造化の眼より見れば、凡ゆる女性が盡く美しきものとして其の愛を恣し得るに相違ない。造化は愛し得ないものを造る筈はないからである。然し乍らそれは造化に於いて初めて可能な立場である。我々は造化の意匠に参じ、造化の心と一つに成る徳を得る事に依つて初めて凡ゆる女性を愛する事が出來る。我々が美を見出し得るには我々の徳が必要である。我々の徳の如何に依つて我々が愛し得る女の範圍及び其の深さの程度は甚だしく相違する。例へば或る種の人々にとつては聖母の如きは美として感じられないかも知れない。凡そ我々が假象若しくは理念として描き得るに過ぎない女性美の如きは空に等しいかも知れない。又或る種の人々には我々が美を見出し得る貴婦人や、皇后や、侍女の如き階級的なる意識の上に初めて成立し得る女性美は、美として感じ得ないかも知れない。又或る種の人々は、我々が愛し得る鬼女や、淫女や、寡婦の如

き女性に美を見出し得ないかも知れない。それは其の人の現に攝取し得たる世界の廣さに依る事である。然らば自分は凡ゆる女性を愛し得るか、自分は愛し得ん事を欲する。然し乍ら造化の如く自由であり得ない現在の自分には、自分の德の力を以てしては愛する事の出來ない數種の女性がある。自分は其等の女性が必ずしも醜惡を持つて居るが故に愛し得ないのではない。其の意味に於いては、地上的なる女性美は必ず多少とも醜惡を含むで居るのである。只其等の醜惡の質の中に自分の力を以てしては、其れを美の中に攝取する事の出來ない種類のものがあるのである。即ち此の種の醜惡を持つて居る限り、他に如何なる美點があつても其れを全體として美として感ずる事が出來ないのである。其れは如何なる種類のものであるか。第一に自分は彼の繼母を美として感ずる事が出來ない。繼母は聖母の反極である。母性の「母らしきもの」ゝ否定である。自分は「繼母らしきもの」を愛する事が出來ない。素より其れは繼母としての地位にあるものゝ名稱を指すのではない。繼母の地位にあつても母らしき女は、素より美しい。又假令繼母の地位になくても、「繼母らしさ」は愛する事が出來ない。其れは淺ましく、憎々しい、彼の中將姫の母の如きは此れである。又政子の如き女は繼母らしき女である。然し乍ら、自ら繼母の地位に立つ時

繼母らしき虐待の生ずる事は恐るべき運命である。我々はそれに同情しなければならない。然しかくの如き女は多くは母らしき繼母である。自分は繼母を愛する事は出來ない。自分は又彼の繼母らしき姑や小姑をも此の種の型の中に數へ度い。次に自分は彼の鴇母(やりて)を愛する事が出來ない。此れは憎むべく卑しむべき者である。我々は或る種の遊女を愛する事は出來る。然し鴇母は如何なる意味に於いても愛する事は出來ない。其れは女の涙を搾るものゝ手先となつて、此れを苛む一種の獄吏である。遊女や、藝妓と成り得る事は猶其の人の人らしさの勝負に於いて絶望的ではない。然し鴇母となり得る事は、今の自分の力では、人らしきものとしても神經が信ずる事が出來ない。次に桂庵と賣女とを自分は愛する事が出來ない。自分は情事の媒介をなす者は愛する事が出來ない。美くしき戀の使は彼の花と花との間をなかだちする蝶の如くに美くしい事もあり得る。然し利の爲にとりもつ者を愛する事は出來ない。然も不義の情事を、例へば富みたる好色家と貧しき處女との密淫を金を取つてとりもつ者を愛する事は出來ない。賣女は已むを得ざる事情なくして色を賣る女であつて、自分は此れを遊女と區別する。假令遊女にあらざるも利の爲に身を任す女は賣女である。又假令利の爲に非ざるも、矜りなくして男子に身を任かせ若しくは男子

に媚びる事を好む甘すぎる女は賣女の型である。自分は矜りなき女を愛する事は出來ない。次に不貞腐れた、自分は愛し得ない。不貞腐れは賣女の図太きものである。其の醜惡を露出し、恥づる處なきものである。其等の或者は嘘をつき或ひは白ばくれる。彼女等に悔悟せしめる事は不可能に近い。彼女等は自ら他人の心を傷つけ若し此れを責めればめそめそ泣き、恰も自ら傷つけられたる者の如く見せかける。然も心を緩めれば直ちに懐に飛び込むで怖るべき害を與へる。實に度し難き女である。次に或る種の貴婦人を愛し得ない。其の地位を誇り、さかしらであり、且つ吝嗇である時には貴婦人は最も厭ふべきものとなる。殊に其の美くしさを鼻にかけて居る時、猶更らである。次に姦しき女を愛し得ない。出しやばり易く、不必要な事に嘴を入れ、呟き易く荒々しき女は實に醜い、おしやべりする陽氣な女はそれが無邪氣である時には、一種の美しさを持つて居る。然し小ざかしく、さし出がましく、口はしたなき女は愛する事は出來ない。次に自分は或る種の後家を愛し得ない。素より貞淑にして亡き主人の遺志を守り、家の名譽を保ち、遺兒の扶養と教育とに、身を捧げてゐる後家は特に美くしい。我々は彼の剃髪して亡き夫の菩提を弔ふ尼に次いでかゝる後家を愛する。然し主人を失つて常に物欲しさうに男子を求め、其の殘さ

れたる遺産に依つて主人の生前の良妻賢母的なる忠實と反對に懶惰、淫亂、となり特に年少の男子を寵愛する後家は實に醜い。それが放逸若しくは驕奢と云ふ感じでなく、其の反對に秘密且つ吝嗇に行はれる時更らに醜い。

此の種の女性は其の醜惡の質が今の自分が美として包擁出來ない種類のものであつて、此等の性質が具つて居る限りは、他に如何なる美點を有するも、自分は美くしき女性として感じ得ないのである。此の點に於いて醜惡を持ち乍らも美しき女性と感じ得る他の總ての地上的なる女性美とは、今の自分にとつては明瞭に區別されなければならない。而して總ての醜きものゝ中、女の醜きものは最も醜きものである。それは面を反けしむる、吐き出しさうな、鼻持ちのならぬ醜くさである。腐つた女の圖太さと、意地惡き女の面憎さと、矜なき女の卑しさと、誇る女の鳴滸がましさと姦しき女の淺ましさとは、地上に於いて最も厭はしき種類のものである。此の意味に於いて女性は其の素質の内に呪咀を與へられてゐる。業深きものである。かくの如く最も美くしきもの、又最も醜きものとなり得る素質を與へられたる點に於いて、女性の運命は深刻である。即ち造化が多く賭けたる勞作である。其れは最深の意味に於いて、女性が男性よりも多く受けて居

る嚴みである。

以下自分は自分が愛する事の出來る種々の階段の女性美を數へてゆきたい。

自分は第一に鬼女を愛する。鬼女は鬼に成つたのである。異界のもの異形のものと化した女である。その靈魂がその強くして深き念願を、此の地上の生命の形式を以て遂げる事が出來なかつた時、彼女等は人身の境涯より轉身（メタモルフォース）して他の生命の形式に入り、其の念願を貫かむとするのである。或ひは其のあきらめ難き念願の爲に彷徨するのである。其の一筋の、思ひ込むだる念願が純熱なるものであるが故にこそ、其の靈魂は安息する事が出來ないのである。故に鬼女たり得る事は其の女の性格の純粹にして一筋なる證據である。宗教的素質を具へて居る證據である。移り氣な、もしくは利害に敏なる女は鬼女となる事は出來ない。又たゞ常識的に優しく、善良にして、無性格な女も亦鬼女となる事は出來ない。鬼女たり得る女は賴むに足る女である。若し運命が順であつたならば、貞女となり、尼となる筈であつた女である。もとよりそれが鬼女であつて妄執の爲めにさまよひ、靜かな涅槃に入り得ない限り、其れは一つの外道であり、物凄きものである事は免れない。併し我々は彼女等が此の地上に執着し、人間性を忘れ得ず、魂魄此の土に止まつ

て、その永き悲哀と怨恨の爲めに、或ひは慟哭し、或ひは搔き口說き、或ひは異形の相となつて恐ろしき沈默をたもつのは、我々の深き憐憫に値ひする。我々は涅槃の世界が如何に淨くして美しきものであつても、特別に此の現世に執着する。此の匂ひと、人間の愛と誓ひと色香と――其等のものに牽かるゝ心は憐れむ可きものである。彼女等は其の願つて與へられなかつた幸福や、漸くゝ嬉しかつた暫くの契りや、又自分の腕から奪はれた自分の命を賭けて居た者の面影を忘れる事が出來ないのである。彼の蛇となつて道成寺の梵鐘にとぐろを捲いた清姫を我々は深刻なる女性美として愛する事が出來る。又牡丹燈籠の灯影に立つお露の亡靈を、凄艶にして可憐なるものとして愛する事が出來る。又韓國に使ひした夫を慕つて、其の去り行く船を招いで領巾(ひれ)を振つたまゝ石と化した佐用姫を深き痛みを以て愛悼する。自分は殊に人身以外の野干の類や、草木の精が緣あつて人間と化して、假りの契りを結び、時來たつて愛する者と別れねばならなくなつた時、其の受けた恩愛を忘れ兼て一種の靈(スピリット)となつて、懷しき家の周りをさまよふ心を特に深き同情を以て愛憐する。彼の狐の變化であつた葛の葉や、熊野の柳の精であつたお柳の如きは此れである。殊に彼女等は子までなしたのである。我々は狐火の燃える薄の原に其の子に乳を與へる葛

の葉や、幼き童女に引かれて行く斷られた柳の木の精に云ひ難き悲哀を罩めた愛を感じないではゐられない。彼女等は皆恐く愛するに堪へるものである。其處には一種深刻なる宗教的な輝きさへあるのである。併し乍ら其れは如何に同情出來ても、眞如ではなく、祝福ではない。彼女達の靈魂は安らかな處を撰ばなければならなかつたのである。其の傷ましき運命から解脫して、美しき佛となる可き筈であつたのである。彼女等は依然として、輪廻に迷ふ淺ましき存在である事は免れない。自分は又彼の淫女を愛する。淫女は色深き女である。其の素質の中に男性に依つて其の運命の契機を感ずるやうに創られて居る女である。彼女等は男性に依つて生き且つ死に、其れに依つて生活の意味と主導機とを感ずるのである。彼女等が男性に牽かれるのは、彼女等に取つては浮薄ではなく、氣紛れでもなく、さうせずには居られないのである。其れは彼の浮氣なる蓮葉女とは區別しなければならない。蓮葉女は戀愛の感情のインテンシティ弱く戀愛に賭ける心を缺き、從つて戀愛に依つて其の一生の運命を破綻せしめるが如き危險なく、極めて輕き氣分を以て戀愛を享樂するものである。故に其の羽を傷つける事なくして、たゞ其の蜜のみを吸つて花より花に移る蜂の如く戀を漁るのである。故に浮氣女は多くの場合拔け目なき悧巧者であり、最良

の場合に於いても人の好い輕薄者である。それは色深いのでなく色淺いのである。淫女には結ほれ易く、善良なる愛情深き女性が多い、少くとも其れは手應へある女である。敲けば鳴り返す女である。觸れゝば縮やかに絡み、心を捧げ、深く喰ひ入る事の出來る女である。淫女は男を騙ます女ではなく、男に騙され易き女である。故に淫女は又鬼女と同じく佛緣に近き女性である。彼女等が一度び決心した時には道心に入り易く、靈魂の純潔に却つて感じ易い。彼のマグダラのマリア如きは此れである。又彼女等は男性の内に、善と眞とを見出さむとする感覺の强きものである。蓋し戀愛は男性と女性との、心と心との問題であり、假令其れが官能的のものであつても、尙且つ美の意識と結合したものである。故に色深き女は人の心と心との交りや、其の明暗や、持味——約言すれば人物の味に牽かれるのである。其の人物の味を官覺的な色香に溶かして其の中に耽溺したいのである。彼女等が多く感情耽溺家であるのは、彼女等は人間らしく、潤ひある心の持主だからである。故に其處には對人關係の愛と誠と涙との支配する機會が多い。彼女等が男性に牽かれるのは純粹に色情の爲めであつて利害の爲めではない。且つ節度を踏み外し易く、拔目なく振まふ事能はず、社會生活に於いて、無防禦である點に於いて、彼の精巧な貴婦人の遊蕩

的戀愛や、身の振方に鋭敏な令孃の求婚愛や等に比して、はるかに色情に關する純粹さを持つて居る。彼女等が男性と結ばれ易いのは絶えず自己の心に適ふ男性を覓めて居るからである。彼女等が或ひは粹な俠客や、おとなしき小姓や、善良なる若旦那や、凛々しき武士や、時としては清潔なる僧や、忠實なる下男等に牽かれるのは、其等の對象の中に「男なるもの」の美と眞とを見出すからである。彼女等は男なるものゝ美を覓めて遍歴するのである。故に彼女等が自己の心に適ふ最も美しき男性に出逢ひたる時、眞と操を捧げる事は多い。基督に對するマグダラのマリアや、ドミトリイに對するグルーシエンカや、ホウガッツアロの聖者に對する彼の淫女や、皆相手の靈魂の內の純潔なるものに最も牽きつけられて居るのである。彼女等は少くとも惡意を以て男に對するのではない。寧ろ彼女等は男に瞞き易く、欺かれ易いものである。淫女は多くの場合一種尼らしき素質を具へて居るものである。彼の維摩經に佛が身を現じて淫女となり、諸々の色を好む者と結緣して佛智に入らしむと云ふが如きも肯く事の出來る消息である。×××× ××××

×× ×××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××

×× ×××××××××××××××××××××××××××××××××一××××××××××××××

×××××××。併し乍ら其れが淫女である限り、則ち其の戀愛に於いて、或る堅さと愼ましさとを缺き、やゝもすれば官能的となり易く、且つ其の感情が浪費さるゝ點に於いて、淫女はたしかに非難に價する。其れは決して彼の淑女の如く貪ばるべきものではなく、又其の一徹さに於いて鬼女の如く同情される事は出來ない。そして其の感情耽溺と官能的大食とが超克されない限り、淫女は白日の女ではなく、鬼女と共に夜陰の女である。夜半に其の洞窟を出で愛する者の家の周りをさまよひ、若しくは其の閨に忍び入つても、陽と共に姿を隱さねばならぬ女である。併し乍ら自分は如何なる女性であつても、何等かの形に於いて、鬼女と淫女との素質を持つて居る女性でないならば、趣味として牽き着けられない。此の性質を全然缺いで居る女性は愛人として如何に賴り無く、又魅力なきものであらう。自分は寧ろ此の二つの素質を具へて居る女性が、其の缺點を超克して、淑女となり、聖母となる事に依つて、最も自分の心に適ふ女性に達し得る氣がする。其處に或執拗さと、深刻さと、善良さと、又地獄に陥るだけの耽溺に堪へ得る賭ける心と、靈の如き魅力と、水も洩さぬ程にひた〳〵と湛へる隈なさがある。此等の性質は其れが淨められ、高められた時には彼のフラ・アンゼリコの天使や、藥師寺の吉祥天の如き眞に優美にして生命ある女

性となる材料であるからである。自分は鬼女と淫女に對しては其の醜惡を知悉し乍ら、猶其の靈質に善と美とを認め、全體としては、一つの女性美の段階として愛する事が出來るものである。

自分は又彼の遊女を愛し得る。遊女は其の不幸な運命に依つて、春を賣る事を強いられたる女性である。或ひは無慈悲な親や誘拐者から強制され。或ひは愛する者の爲めに自から進むで身を賣つたのである。併し何れにもせよ「卑しむ可きものに就いて」の中に書いた如く、彼女等が自己の弱さの爲めに己の人格を他人の翻弄に委ねたと云ふ事は許される事は出來ない。其れは輕蔑に價する。併し乍ら其の罪惡はもとより積極的な惡意に依るものではなく、弱さに依る受身のものである。其の多くはまだ年齒も行かぬ娘のうちに賣られたのである。我々は彼女等を卑蔑する前に憐みに打勝たれる。もとより彼女等の中には野卑、低劣であつて、我々が到底愛し得ぬ者があるであらう。併し斯くの如きものは寧ろ此れを賣女として區別す可きである。遊女は賣る事を欲せずして、其の誇りを傷けて、賣ることを強いられて居る女である。かゝる遊女の中には我々は愛すべき者を見出し得る。高尾の如き氣位ある遊女は稀であるとしても、猶三千歳や、小春や、梅川や、お俊やの如き義理と誠に感じ易き、又一筋な捧げた心を有する遊女は少くないであら

う、愛する者と共に戀に殉死する事は容易に出來ることではない。義理に絡まれ易き事は心情美しさも因である。又其處には其の世界に於ける、粹と美と意氣地との教養がある。此の教養に依つて磨かれたる美は又一種の特別な美である事も認め得る。其處には或一點に於いては、良家の婦女に見出し得ざる洗練さがあるであらう。其處では先づ家庭の婦女に於ける、衣食住の爲めに必要な實利的性能から放たれる。次に家庭に伴ふ事を常とする樣々の虚僞とコンヴエションから自由になる。斯くて純粹に女性の性の方面だけを切り放して教養される。即ち「遊び女」である故に彼の浮世繪の畫家が見出したる如き一種の驚く可き美を作り出す事が出來たのである。併し乍ら其の美は人格の或一部を切放して洗練したるものなるが故に、はじめより不自然である。其の不自然さは其の美に於いても、頽廢的要素となつて表はれずにはおかない。其れは寧ろ男性から寵愛するによろしく、翫弄するに便宜なるものとして教養されたのである。故にかゝる頽廢的要素も斯くの如き男性の要求より見れば、反つて美とされるのであらう。併し斯くの如きは美感ではなく、一つの實感である。浮世繪の中の頽廢的要素は我々の實感にアッピールするのである。此の意味に於いて「遊女」と「遊行する天女」とは明瞭に區別されなければならない。、遊行

する天女の美しさは我々の實感を除去して、美感を徹底せしめて生ずる「樂」の境地である。遊女の美は斯くの如き「樂」の要素と實感との混淆である。我々は彼の浮世繪の美を愛する時に此の事を忘れてはならない。我々が遊女を女性美の或階段として愛し得るのは其の卑屈と弱さと頽廢と醜惡とを知悉した上に於て、猶其の特殊な美を認めるのでなければならない。自分は又彼の醜婦を愛し得る。もとより其の心も其の形の如く醜き女は愛する事は出來ない。併し其の塵みつけられたる顏容の醜きにも關らず、其の心の美しき醜婦は又一種の特殊な美を持ち得る。眞心ある醜婦は可憐である。德高く品位ある醜婦は或力ある美を持つて居る。又決心した時の醜婦の顏は美しい。少くとも其れは美しさの鼻につく美人や、しだれかかる貴女よりは遙に愛に價する。板額の如きは力ある美を持つて居る。又其の眞心に依つて良人から愛された瀧氏の妻の如きも此れである。自分は又彼の毒婦を愛し得る。毒婦はもとより其の心の内に毒を含む女である。其れが醜惡である事は云ふ迄もない。併し乍ら毒婦の持つて居る辛さと冷めたさとは、甘過ぎる女や、人形の如き無性格な女やに對して、少くとも其の點に於て優れて居る。其れは女の甘たるさが女性美の一種の醜惡であるのに對して、一種の藥味であり、防腐劑である。彼の稻妻お光や

姐妃のお百の如き女はもとより其れが惡辣である事は愛し得ないが、其の齒切れの良さに於いて一つの性格を持つて居る點に於いて、一種の冷めたい美を持つて居る。特に女が多くは甘くして脆く、男子の寵愛物であるのに反して、甘き紳士や、蟲の良き四十男や、好色なる守錢奴等に逆に女の又侮る可からざるものである事を示し得る點に於いて、一つの役目を持つて居る。殊に彼女等が其の自己の罪惡を罪惡として認めて居る時に、それは我々の愛に堪へる。我々は彼の啖呵を切る女白浪を野中の觀音堂や、辻の地藏尊に對立せしめる時、そして彼女の惡運の盡きる時を豫感して居る時に、我々は此の世相の無限なる意識の中に、猶彼女達を愛すべきものとして包攝する事が出來る。自分は又彼の姐御を愛し得る。姐御は俠客の妻である。姐御はもとより教養なき身分低き者の配偶として其の優美なるものはなく況して高貴なるものではない、併し乍ら男を磨く俠客の妻として、義理と人情とを貴び、卑劣と無節操とを卑しむ男伊達の內助者として、其處には善と力と誠とに對する趣味と感覺とが支配して居る。然も亦多くの血氣にはやる無頼の若者を養ひ、心服せしめる親分の女房として、或度量がなければならない。如何なる意味に於いても陰客である事は出來ない。又かゝる不敵の若者に對して自分の地位を保つ爲めには、侮り難き威を

具へてゐなければならない。其の上に恐らくはまた身持の治らない多くの乾分達の爲めに、或ひは戒め、或ひは同情して、何くれとなく世話をしてやらなければならない一種の母親らしき優しさと、又譯の分かつた苦勞人としての頭のよさがなければならない。然も男を賣る稼業として何時危險に遭遇するかも知れない、覺悟を定めて居なければならない點に於いて、其れは武士の妻に似た決心を要する。然も其れは常に公儀の法度の下に身分低きものとして、常に無防備なる地位であり、彼の長兵衛の妻の如きは、討死する事の分つて居る正成と別れる妻と同じ境遇である。其れは容易な決心ではない。殊に彼女等の美しいのは其の夫との結合が多くは心と心で意氣に感じて生た戀愛や、少くとも人目を忍むで愛し合つた義理に絡つた深き結合である。かゝる夫婦は美しい。彼の腕の喜三郎の妻の如きも此れである。更に美しいのは此等の俠客は其の氣を負ふた性質が、人倫の關係に對する實に稀な義理堅さと結合して居る事である。彼等は法度を重んじ、社會の約束を重んじ、人倫の義理を重んじる。其の法度に對する神妙さへ、目上に對する禮儀正しさや、主に對する恩義の情の强さは美しい。かの腕の喜三郎夫妻の舊主人と其の娘とに對する忠誠の如きは感動せしめる。姐御は女性としての美しさが、男性的要素の混淆に依つて、其の女性

としての誇りを守る必要以上に、不自然となつて居る事は免れないが、其れは猶或段階の女性美として、我々の愛を牽くに充分な價値を持つて居る。自分は又或種の妾を愛する。妾は其れが妻でない點に於いて、則ち禮を以て迎へられざる、人と人との正しくして對等なる結合でない點に於いて、卑しきものである事は免れない。他人の妾として甘んじ得る事は慥かに卑屈である。其れは男子に對する誇りなき從屬である。併し乍ら一夫一婦が原則となつて居る時代の社會制度の下に於いて妻ある男子と愛し合ふ女が、自から衣食を得る力なき時、愛する男子に養はれる事が自から妾としての地位をつくる時、斯くの如き妾は愛なき男子に利害の爲めに身を任せて居る「囲ひ者」と同一視する事は出來ない。女性が自から衣食の爲めに勞働する事に依つて、其の美と教養とを保つ事能はず、又侮りを防ぐ事能はざる時、愛する者の保護を受ける事はさまで蔑む可き事ではない。況して二人の間に愛と誠實とがあり、男子が此れを保護する事を恩がらせて居ない時、其の社會的名稱の如きは本質的意義を持たない。或妾は或夫人よりも愛す可き女である事は少くない。彼の靜御前や、巴御前の如き誠實なる妾をもただ其れが妾なる故のみを以つて、愛し得ない事は陋吝である。又或種の人々の如く、唯だ養はれて居る故のみを以て、妻妾の賣淫と同

一瞥するが如きは、粗野にして淺薄である。もとより衣食の爲めに愛なき男子に身を任せ、若しくは養ふ事を厭がらせる男子の扶養を謝絶する事能はざる妻妾は一種の賣淫である。併し乍ら男子の奉仕としての扶養を受ける事は賣淫ではない。抑々我々人間が衣食を得る權利の根據は勞働にあるのではなく、造化の惠みにあるのである。此の點に於いては男子も妻妾も神に養はれて生きるのである。男子が妻妾を養つて居ると考へるのは、僭越である。我々は最も正しく深き意味に於て「養はれて生き」て差支へないのである。妻妾が其の人格全體の爲めに、男子に養はれる事が適當である時、斯くの如き扶養を受くる事は止むを得ない。もとより其れは自己の無能力である點に於いて、人格の缺點である。併し乍ら衣食の爲めに猶一層人格の侮蔑を忍ばなければならないならば、愛し合ふ男子からの贈り物を、神の名に依つて受ける事は左迄非難す可き事ではない。少くとも決して賣淫ではない。純粹に經濟的なる缺點は、道德上最も許し易き輕微なものであつて、人格の價値を決定すべき重要なるものではない。もとより自活して居る女は養はれて居る妻妾より其の點に於いて勝つてをり、特にかくの如き職業婦人が自己の人格の矜りを傷つける事なくして、殊に今日の如き社會組織の下に於いて其の美を保つ事が出來て居るならばそれは見上げてい

い。(此の種の女に就いては後に書くであらう。)併し乍ら我々は自から働いて衣食を得る醜悪な自活の女よりも、心を捧げて義經に從ひ、美しくして操ある靜御前をより美しきものとして愛し得るものである。其處には又夫人とは異なれる特殊な美が存在する。妾に於いては妻の如き地位に誇る心や、家政上の事務や、凡て社會的實際的なる利害關係をはなれて、純粹に戀愛のみに依る結合が生じ易い。妻よりも妾との間に純粹なる結合の存在する事は稀でない。もとより惰情にして、奢侈であり、愛と操なき妾は賣女であつて卑しむ可きは云ふ迄もない。又如何に理想的なる妾であつても、其れが妾である限り、卑屈である事は免れない。併し其等の點はあり乍ら、或種の妾は猶女性美の或る段階として我々の愛に價するものである。

次に自分は婢を愛し得る。婢は恐らく家の内にて最も祝福せられたるものであらう。彼女等は一家の人々の生活を其の身を勞する事に依つて支へて居るのである。炊事や、洗濯や、煤掃や、一家になくてならぬハンブルな雜用等、皆彼女等の奉仕に依つて取り運ばれるのである。素より骨惜しみする且つ呟き易き婢は醜い。特に主人や家族の陰口をきゝ、家の内の秘密を他に吹聽する婢は淺猿しい。然し忠實なる、主人思ひの、骨惜しみせぬ婢は實に美しい。主從と云ふ感じの

美しさは主人と婢との間に最もよく現はれる。彼のヴァントルダイクの「ナーマン」に描かれたる盲ひたる英雄にかしづく奴隷の女の如き實に愛すべきである。又彼の「鏡山」の尾上に仕へるお初の如きは最も誠ある婢である。自分は彼の女が主人の肩を揉みながら、忠臣藏の狂言の話にことよせて、それとなく主人の短慮を諫める場面を見る時、常に深く感動する。素より婢は他人に對して自ら卑くして、一種の階級意識の上にのみ生じ得るものである點に於いて、或る因襲的道德に支配されてゐると云はなければならない。殊に其れが德や、年齢の差異に依らず、社會的地位の高下に依つて生じたる關係である時猶更である。然し乍ら唯其の點のみに依つて、其他の美點を無視する事は出來ない。況して德勝れたる人に、特に長者に對して心を貧しくして、自主的に婢の位置を以て對することを悦び、眞心から奉仕する婢は必ずしも自己を卑しめて居るとは云へない。我々には主人を持ちたき奉仕したき、願ひがある事を忘れてはならない。神に對する人間の從屬は此れである。我々は神に對して己れを僕婢として意識することを恥ぢとしない。其の意味に於いては女王の如き矜りに充ちたる女も猶佛像や、聖人の前に悅んで冠を下げ、己れを婢と感じ得るのである。又彼の光明皇后の如きは此れであるが、皇后は猶此れを以て滿足せず民衆の婢

として自ら浴室に其の垢を洗はれたのである。又彼の處女マリアが天使ガブリエルから其の聖靈懷胎のことを告げられた時、いと小さき婢を選んで、其の光榮ある役目を命じられた祝福を身にあまるものと感じたであらう。マグダラのマリアがキリストの足に香を塗り、己れの髮の毛を以て拭き、此れに接吻した時、自分を婢と感じたであらう。處女が其の戀人に捧げ盡くす時、また自分を婢と感ずるであらう。其時我々の心に特殊なる獻身と感謝と感情の高揚がある。其れは只主從の關係に於いてのみ生ずるものであつて、彼我の對等の關係からは決して生じない特殊な感激である。又死を肯う程の幸福である。若しデモクラシイが絕對に主從の意識を排斥するならば其れは人性の最も深き要求の一つを殺すものである。次に自分は侍女を愛する。侍女は一つの美しきもの尊きものを守りかしづく女である。其れは婢よりも、衣食のつとめより放れて直接に身邊を守る役目を持つ。稚き若殿や、美しき姬君には又美しき侍女がなければならない。又位高き貴夫人にも氣品ある侍女がなければならない。其れは其のものゝ美しさと尊さとを保つ爲めに、此れを傷つけ易き身體の勞働を代りて勤め、また犯す者から此れを防ぎ、且つ其のものを引て立てる爲に必要なのである。故に其れは忠實と、才能と、且つ美さを持たなければならない。實際に美

しき侍女は美しき姫君とは異つた性質の美を以て、此れに優に對比し得る程である。彼の十種香の八重垣姫に仕へる侍女、濡衣の美は姫に劣るとは云はれない。かゝる侍女が美しき内氣なる姫君と清く凛々しき若殿との間の戀の文函を持つて使ひするのは相應しい。又歌麿の宮詣での繪に於いて、まだ總角のいとけなき若君の羽織、袴を着けたのにかしづいて、小さき刀指したる侍女の姿は品位を以て且つ美しく描かれてゐる。又かゝる侍女に才氣があつて、氣性面白く、然も主人思ひなのは相應しい「賢者ナータン」の娘の侍女ダーヤやミンナ・フオン・バルンヘルムのミンナの侍女フランチスカの如きは此れである。又かゝる侍女の年長けて、乳母を兼ねて居る時には其處には又母らしき優しさが加はるのである。家光の乳母春日局や、鶴千代の乳母政岡の如きは此れである。彼女等は危險のなかに、其の珠の如き貴きものゝ運命を、身を賭して守つたのである。又彼の深雪の乳母淺香は惡漢と闘うて雖に死し主人を無事に落したのである。又ジユリエツトの乳母の如く年老いて、可笑しみのある、然し本能的に主人思ひの乳母も亦愛すべきである貴夫人にかしづく侍女は才智と、品位と、美とを兼ね備へて居なければならない。其れに依つて其の主人を尊く、美しく、且つ侮り難きものとならしむるのである。皇后に側近く仕へ其の卓に

陪乘する女官の如きは其の最も典型的なるものである。紫式部や、清少納言の如き才智ある女も亦皇后や中宮に仕へた侍女であつたのである。次に自分はあらゆる種類の娘を愛する娘は地上の花である。若し娘が居ないならば、此の地上は如何に淋しきものとなるであらう。娘なき街はすさび、娘なき家は陰氣である。彼女等は花の如くに地上を飾り、人生をして生き〳〵した精彩あるものとならしめる。故に娘には何よりも先きに其の美しき花としての要素を求めなければならない。此の意味に於て、自分は彼の人形の如き娘を愛し得る。只美の爲にのみ存在する、然も自らの美しき事をも自覺せざる、人形の如き娘は美しい。かの人形芝居の娘人形は何故美しいか。其處には現實の娘に伴ふアフェクションや、半可通なる「思想」や、又拔け目なき悧巧さがなく、純粹に娘らしき美のみが匂うてゐるからである。我々は只其處に型のみを見る。其の理髪や、櫛飾りや、整うた目鼻立ちや、長い袂や――其の娘らしき型の中に、我々は心のまゝに娘の「魂」を移入する事が出來るからである。かくの如き人形がさながら其の箱から動き出でたかと思はれるやうな娘は美しい。素より其れは自ら守る力なきが故に犯すものに依つて直ちに傷つけられるであらう。然し乍ら其れは傷つける者が悪いのである。美しきものを只美しきものとして一指をも

觸れずに尊重する德を我々が持つてさへゐるならば、何の爲に此の可憐なるものに、敵に備へる武裝した心を與へる必要があらう。又ツルゲネーフの貴族の家に出る娘や、プーシュキンの「オネーギン」の中のタチアナや、又レッシングのエミリヤ・ガロッチイの中のエミリヤの如き、純粹に娘らしく、華奢にして、内氣なる、且つ淋しみを含める娘も此の種の娘の中に數ふべきであらう。かゝる娘の最も高貴なるものを姫と云ふ。其れは深窓にあつて、珠の如くに守られ、出入りには輿や車に乘る。彼の支那の貴族の娘の如く、纒足して歩行に堪へざらしむる如きも、其の姫としての特質を純粹に生かさんとする要求である。素よりかゝる娘や、姫は敵に備へる力なく、且つ衣食住の爲めに身と心とを勞する人生の義務を顧みない點に於いて、人格の獨立性を缺いて居る。其れは此の地上に於いては確かに非難に價する。然し我々は其れを非難する前に、寧ろかくの如きことこそ彼女等に要求しなければならないやうな、此の地上の制約を嘆息する。我々がしばらく此の地上の制約を忘れる時、何人か、此の小さく、美しきものゝ勞働せざる事や、自ら守る力なき事を責める氣になれよう。我々は彼の桂姫の死や、玉織姫の最後を見て、男子の粗野と、無殘とを憎む許りである。又彼の彦星との天の河の戀に名高き七夕の織姫の如きも此の

種の姫として地上の戀の乙女の淋しき憧憬の對象であらう。然し乍ら娘の美しさは只此の種のもののみでない。よく働らく、生き〳〵した娘も亦實に美しい。牧場にバケツを下げて乳を搾る娘や、葡萄園や、茶畑に甲斐〳〵しく働く娘や、田を植ゑる早乙女や、皆美しく、古來外國の田園詩人や日本の歌人の好題目である。其の健康さ、潑な生命の悅びさ、無邪氣な快活さ、又自らなる羞恥――其等は最も健全な美しさである。また機を織り、蠶をかひ、又母を助けて村に働らく襷をかけた娘も美しい。よく働くマルタはマリアに劣らず美しい。又小さき店を守る娘の、自ら愛嬌よく、客足を惹くのも相應しい。彼女等がよき程に、客と冗談を云ひ交はすのも、人間味のある憎からぬ風情である。ゲーテは特に娘の美を描く時、此の種の「心の働らき」と、朗らかな世帯味とを含ましめる事を好んだやうに見える。オッテイリエにもグレーチヘンにも、ドロテアにも働く事に依つて現はれる娘の美を描いて居る。又彼のヘルマン・ドロテアとが井戸端で其の健康な美しい顔を水鏡に映す處は、自分の腦に殘つてゐる。又只戀に生き戀に死ぬる事を欲する娘も娘らしく美しい。戀は娘の生命である、戀よりも先きに身の振り方を考へ、世帯味や、世智の勝ちすぎる娘は美しくない。寧ろお七の如き情熱や、戀に病み死ぬる程の萬葉の娘や、その思ひを胸に秘めて守る娘

は其の純一なる心根に於て、一層愛すべきである。娘の時髦よりも名や、富や、社交を先きに關ふ如き女は、其の人格全體を燒はしめる。此の意味に於いて彼の妹背山のお三輪や、鮨屋のお里の如き、所謂下町風の娘は美しい。然し乍ら其れは必ずしも日本風の内氣な娘らしさである事を要しない。彼のミンナ・フオン・バルンヘルムの令孃ミンナの如く、快活にして、積極的に、且つ節度を外れたるものであつても、本質的な點に於いて、眞面目であり、低卑を厭ふ本能を持つてゐさへ居るならば、其れは又特殊な美しさである。かくて水泳や、乘馬や、陸上競技や、登山やダンスの如きを好む活潑にして生き〳〵した娘も亦美しい。鳥の如くに歌ひ、兎の如くに跳ね、若しくは勝氣にしてよくしやべる娘も亦美しい。又ドストエフスキーの虐げられし人々の中に出るネルリや、ウヰルヘルム・マイスターの中のミニヨンの如き狂熱的にして且つエキセントリツクなる娘も亦美しい。如何なる種類たるを問はず只其れは娘としての本質的なる價値——其の純潔と愛らしさと内面的な矜りとを持つてゐなければならない。

次に自分は美人と才女とを愛し得る。美人と才女とはそれ自身の爲に愛されなければならない。其れは美と才とが生命の價値であるからである。美人らしき美人と、才女らしき才女とは其他の

缺點にも拘はらず、我々の愛に堪へる、美人が其の美を飾り才を磨く爲に浮身をやつし、又自ら此れを誇つても、其れが眞にその柄にはまつて居るならば、しばらく此れを許さなければならない。素よりさまで美しからぬ女が、自ら美しさと自負して、其れを他人に誇示する時、其れはをこがましく反感を起さしめる。然し眞に美しき女が其の美しさに對して矜りを持つてゐるのは又其の美しさの一つの要素である。此處に美人らしさと云ふ事の中に其の美としての洗練さが要求されてゐるのは勿論である。例へば其美人らしき矜りと雖も、其れが粗野露骨であつて押しつけがましかつたならば、其れは美人らしさと調和する事は出來ない。然し美しき女王が自ら矜りを持つてゐると云ふ事は、其れが他人に承認せしめるだけの實力を持つてゐる時には女王らしさの一つの要素である。我々は羨望若しくは嫉妬に依つて美を美として觀照し得ないならば、其れは自己の陰吝に依つて、自己の世界を局限するものである。此の意味に於いて、彼のクレオパトラがアントニーを迎へる舟の爲に用意した彼の豪奢なる綺裝や華麗なる裝ひをも其の美にめでゝ許し度い。楊貴妃や、小野小町やの如き美人が如何程其の衣裳や髮飾りに美を凝らしても、出來得る限りは非難する事を差し控へたい。彼女等の存在は人生を飾り、豐富ならしめ我々をして人生が生きる

に價するものである事を感ぜしめる點に於いて、既に功績を持つものである。華は實を結ぶ爲に存在するのみではなく、美の爲に存在するのである。或ひは冷艶玉を欺く、或ひは窈窕華を恥ぢしめる、或ひは雨に惱み月に愁ひ、若しくは秋の露よりもあはれな樣々の趣きを、彼の支那の詩人が極めて無邪氣な、捉はれざる心を以てうたつた如く、眺め得ないことは名譽ではない。此の意味に於いて自分は彼の春信の描いた「美人採蓮之圖」や、源琦の描いた楊貴妃の海棠の枝の前に、簾の垂れた欄干に近く榻に凭りたる繪の如きを恍惚こ眺め得るものである。又紫式部や清少納言の如き才女は其の才の故に愛でらるべきである。此の場合に於いても、才女らしさの中には既に其の洗練さが要求されて居る。彼の枕草紙に見える如き、ものゝ觀方や、心の態度や、服裝等に到る迄纎鋭を極めたる洗練さは一つの「德」の意識であつて其處に才なきものゝさかしらな誇りの醜さなごが混れ込むべき隙間はない。また源氏物語の男性の感情や、女性の美の描寫には如何に磨かれたるカルチユアこ、奥ゆかしきゲミユートこが織り込まれてゐるであらう。美こ才この中には自ら道德的意識が含まれざるを得ないのである。只に文學や其他の藝術の才のみならず教育や、實業や、社會事業に於ける才能勝れたる婦人も亦才女である。更らに社交や、運動競技

や、ダンス等に於いて才能ある婦人さへも才女としての美を持つて居る。此等の女性は其の才能の爲に生き〳〵した精神の働きが肉體の上に反映し、其の態度や容貌に力ある輝きを添へるのである。然し乍ら美人と才女とは其れに依つて、其他の人生の義務から免除される事が出來ないのは勿論である。其の美と才とを支へる根據の中に罪惡や低卑があるならば、其の點に於いては當然非難に價する。例へば美人が其の化粧の爲に愛する者への奉仕を怠り、其の指を皺から防ぐ爲に他人を代りて勞働せしめる事は倫理的非難を免れる權利を持つのではない。然も又美と才とは究極のものではなく、其れが德に從屬する限りに於いて、價値を持つのである。故に我々は高貴なるもの〳〵觀念に美人らしさや才女らしさを結合しないのである。例へば皇后や聖母は其れが美人らしさや、才女らしさを備へて居る時には或る「位の低さ」を生ずる。其れは一層大味でなければならない。蜜の如き甘さや、針の如き鋭さは高貴の德と一致しない。故に美人と才女とは我我をして仰がしめるの女性美ではなく、賞でしめる女性美である。

自分は又或る職業婦人を愛する。職業婦人とは自活する女の總稱である。女も人間である以上は勞働する義務を持つて居る。故に總ての女は勞働に堪へ得る能力に從つて勞働しなければなら

ない。そして彼女等のパンは同じく彼女等が人間であるが故に何處からか——神からか社會からか若しくは個人を通じて、與へられなければならない。理想的社會に於いては、此の勞働とパンとの關係は合理的に解決される筈であるが、今日の社會組織に於いては、パンを他人に負う事は自己の人格の獨立と自由とを傷つける結果となり易い。故にパンの爲に自己を枉げて生きるを欲せざる女は、職業婦人となる事を餘儀なくされる場合が多い。今日の經濟組織に於いて、其の極めて不利益なる女の立場にも拘はらず、猶自活する事を決心し得る女は賞讃に價する。其れはパンの爲に愛なき男子と結婚し、若しくは當然離婚すべき事情にあり乍ら、夫婦生活を持續して居る女に比して、遙かに見上げていゝ。又自活し得ると云ふ事は、その女が此の獨立的意志の他に又才能を持つて居る證據である。其れは又人格の力である。只其の事が女性としての人格の他の大切なる點を損傷しないか否かゞ問題である。自分は少數の職業婦人に自活し乍ら猶其の女性としての美と優しさとを保ち得て居る人達をも見出だす。或る女醫や、事務員や、藝術家や、看護婦等には其の美と優しさとを保ち乍ら、然も侮り難き自己の立場を守つて居る人々を發見する。其れは尊敬の念を抱かしめる。自分は又彼の質素な洋裝をした市街自働車の小さな女車掌や、淋し

さうに店頭を守る女賣子や特に低級な女輕業師等に淋しき愛を感ずる。然し乍ら多くの場合に於いて自分は職業婦人に女性美を見出す事が出來ない。其れはパンの點に於いて正しくあり乍ら、他の點に於いては其の人格が損傷されて居るからである。殊に女性として缺くべからざる心情のデリカシイが缺けてゐるからである。男性の間に在つて生活の爲めに鬪ひ多くの人々と接して其の神經を磨滅し事務的となり、且つ物質上の事に關して怜悧となつて居る。約言すれば我々が男性と對比するものとして、特に女性に求めんと欲する當のものが損傷されて居るのである。多くの職業婦人は既に外面的にも其の美を顧みる餘裕を持たない。辛うじて其の服裝や外貌の美を保ち得るものも、其の心情は乾き且つ粗い事を免れない。然し乍ら此れは誠に止むを得ない事である。職業婦人を責める事は出來ない。只如何に止むを得ない事であつても、依然として美ではない。其れは恰も病める女が其人の罪ではなくても、美でないのと同樣である。然し如何に外貌や服裝や心情の女性美を保ち得なくても、猶其れが自己の人格の獨立と自由とを保つ爲に止むを得ない手段であるならば、其人は最高可能の處に其の女性としての人格價値を生かしたのである。故に其れは善と幸福との地上的矛盾より生ずる悲壯として賞讃さるべきである。例へば其の寡

貌や、服裝や、心情の女性美を保たん爲には必ず愛なき人に身を任せなければならないならば、其の女性としての最大の矜りを守らんが爲には何ものを捨てゝも其の扶養を拒絕しなければならないからである。故に職業婦人が一方に於いて此の種の貞操を保ち得て居ないならば、其れは全然其の價値を失ふものである。職業婦人が若し其の操を賣つて居るならば、其れは家庭の賣淫として の愛なき結婚よりも更らに慘めである。故に若し職業婦人となる事に依つて、パンの點以外のあらゆる女性としての美と矜りを保つ事が出來ないならば、愛ある男子と結婚して其の扶養を受くべきである。彼女等が勞働し、且つ節約してさへ居るならば、パンが何處から與へらるゝかは、本質的な問題ではない。又理想的社會に於いても、女は男と同樣に、且つ同質の勞働を課せられてはならない。女は其の女としての美を失はない程度に於いて、且つ失はない性質の勞働を課せらるべきである。男は女子をして其の美を保たしめるのために自ら進んで餘分に勞働すべきである。今日の社會に於いて矜りある女をして、其の矜りを保たんが爲に、女性美を失はなければならない窮境に立たしめて居ると云ふ事は、社會の、そして殊に男子の罪惡であり且つ無智である。次に自分は夫と共稼ぎする、貧しき妻を愛する。夫の曳く車の後を押し、夫と共に耕し、又

市に擬んで小さき露店を張り、或ひは内職して乏しき生計を援くる妻は美しい。かくの如き妻には恐らく其の夫との苦しき共生（ミツトレーベン）より生まるゝ親身の愛があるであらう。自分は彼の萬葉集にある感動すべき歌を此處に引用する事を禁じ得ない。

つぎねふ山城路を、人夫の馬よりゆくに、おの夫の歩よりゆけば、見るごとに音のみし泣かゆ、其思ふに心し痛し、垂乳根の母が形見と、吾が持たる眞澄鏡に、蜻蛉領布、おひ並め持ちて、馬買へ吾が夫

又此れに比べては稍々身體の勞働から放たれてはゐるが、猶常に乏しき生計を營む薄給なる官吏や、藝人や、小商人の妻も亦愛すべきである。彼の「壺坂」のお里の如き貞節にして夫思ひの女房は美しい。貧苦の中から其のまごゝろは光の如く輝き出る。凡そ世帶染みた女の美しさは特殊な深い味がある。其處には此の世相のあらゆる人間苦に依つて、磨かれたる複雑な心持ちの背景がある。其れは哀愁と云ふよりはもつと厳肅な、溫い人情の味である。うら若き巡査の女房が給の内だけ化粧して晴着を――恐らくは前から用意して漸く作つた新しい着物に着更へたのや、

丸儲けに結つた魚屋の女房が其の餘つた乳をすてた手で、血にまみれて魚を料理して居る光景や、或ひは貧しい母親が玩具屋の店頭に立つて、僅か許りのおもちやをねだる子供に、帯の間から紙入を出して思案をして居る様子や、又何か願の筋あつて世帯やつれのした女が觀音堂に一心に願を掛けて居る光景や――此等のものには此の種の貧しき女の間に於いてしか見出だすことの出來ない特殊な深い美がある。自分は又愛する旦那に落籍された藝者が、其の夫に先き立たれて殘つた子供を養ふ爲めに其の色香の衰へた身を以つて、二度の勤めをして居る如きも又此の種類に數へたい。又やゝ餘裕ある町家の女房がよく働き、つましく家を整へ近所の人々に務めを怠らず、其の暇に三味線など稽古してあるのも相應しい。やゝ地位あるものゝ妻が貞節に夫に仕へ、子供を育てゝ召使に優しく、行儀正しく、常に自分の身のまはりを丹精に整へて居るのは美しい彼女等が小綺麗に身なりを整へて、よく磨かれた火鉢の側に、たぎる鐵瓶の前に坐つて、新聞を讀んでるからと云つて、此れを咎めるのは否である。彼女等は直ぐにも、生じて來る用事に、何時にても立ち上らんと用意し乍ら、寸暇を偸んで讀んで居るのだからである。又日本の武士の妻には貞節にして家を修め、夫に仕へて忠實に、如何なる艱難にも操を枉げざる貞婦烈女に富んで

居る。平常節約して夫の不時の用に役立てたる彼の山内一豐の妻や、討死した夫の遺孤を育てゝ遺志を繼ぐ忠臣たらしめた正成の妻の如き此れである。妻の身分高きものを夫人と云ふ。夫人は直接に衣食の爲め勞働を爲さず召使達を使用して家事を整へる。其れは地位に相應しき品位を保たんだ爲であつて、虛榮の爲ではない。此の種の夫人には反つて獻身的に家庭の爲に生き多くの家族の調和を量り、外部に對して家の名譽を保ち、子供を敎育して、自ら身を修める立派な婦人のある事を忘れてはならない、此の種の夫人は奢侈も願はず、享樂も欲せず、只家の爲に、且つ家の中で生きて居るのである。日本語の「佳室」と云ふ語は、よく此の種の夫人の持つ感じを現はして居る。善き夫人が家にある時其の室に芬蘭の香がするのである。特に日本は古來かくの如き佳室を多く持つてゐる。賢夫人の傳記は極めて多い。夫人に於いて、女性としての美は內體的にも精神的にも成熟し、其の內容に於いて娘の時代よりも複雜にして、豐滿せるものとなる。殊に此の種の夫人に高き敎養があり、且つ子供がある時には最も親しみある人間らしさの完成を遂げる。シャルロッテの如きは此の種の美しき夫人である。幸福なる家庭生活に於いて、充ち足れる、樂しげなる四十歲に近き子供ある夫人は、自然にして落ちつきある、釣り合ひのとれた美を持つて

ある。女としての人間的なる幸福は此處に其の實を結んだと云つていゝ。夫人の其地位最も高きものを貴夫人と云ふ。貴夫人は最早や衣食に關する身體の勞働も心遣ひも一切此れを他人に委ね、自分は只其の美と存在とに依つて一家に平和と名譽とを與へるものである。彼女等が生計の事や處世上の心遣ひを爲す事は其の位と釣り合ふ事が出來ない、何となれば此等のものは多少とも人間の心情を低卑に誘はずにはおかないからである。故に彼女等はその責任上其の全力を擧げて、女性美の教養に捧げなければならない。禮儀や、言語や、服裝や皆最高度のカルチュアを持たなければならない。從つて他の低き階段にあつては、必ずしも缺點とならない粗野も、此の種の夫人にあつては直ちに其の全體の美を傷つける。其の召使に一つの粗き言葉を發する事も最早や、其の全體と釣り合ふことが出來ない。彼女等は物質的なる煩ひから放たれてる代りに、此の種の教養に於いて最高度の批判を負はなければならない。凡そ人間の教養に依つて――天賦及び神の惠みに照らさるゝより他の――能ふ限りの最高度の洗錬を必要とする。此れに就いては「心なき業に就いて」の中に委しく書いたから此處には再び繰り返へさない。貴人の最も高きものは皇后である。皇后は社會的地位の最高なるものとして、物質的華麗と高貴と權威とを許されなけ

ればならない。如何なる宏壯なる宮殿も、嚴肅なる行列も、高貴なる寶石も皇后を飾るのに吝まれてはならない。其の人民が熱しむ同情としての愛を、甘くして馴れしむるものであつてはならない。此の點に於いて漢の高祖の皇后呂后の如きは人を畏れしむる寒き程の威嚴を持つて居る。然し乍ら皇后は只表面的權威と物質的豪華とを以て、萬人を畏服せしめるだけではなく、實に德を以て四海を征服しなければならない。其の皇后が戴くことに依つて其の國内の婦德が興起する如きものでなければならない。故に皇后は如何なる人種の前にも決して屈せざる其の頭をも德の前には慎んで下げなければならない。皇后が萬人の拜む神佛を敬ふ時に、其處には特殊な有難き美を呈する。皇后の威嚴は其れに依つて傷つかず、却つて一層輝くのである。彼の印度の韋提希夫人や、日本の光明皇后の如きは此の種の尊き皇后である。故に眞に貴夫人の名に價する貴夫人を現實の世界に於いて求むる事は甚だ容易でない。女性美は今や次第に「人間らしき」以上のものとなりつゝあるのである。貴夫人が貴夫人らしくない時、其れは其の本來の約束上、最も醜き、且つ反感を抱かしめるものとならざるを得ない。其れは自分が「愛し得ない女性」の中に加へざるを得なかつたものである。然し乍ら現實の貴夫人が如何に醜きものであつても、其の故を以て貴

夫人の觀念を排斥してはならない。其れは高貴なる男性の心の内に必ず生ずべき筈の憧憬である。ゲーテや、シルレルの如き心情高貴なる詩人が貴夫人に交りを求めたのは其の物質的豪奢や社交的華やかさに、惹かれたからではなく、女性としての高貴にして優美なる且つ教養されたる美の理想にアトラクトされたのである。此の事に就いては「女性崇拜に就いて」の中に書いたから、此處には再び繰り返へさない。我々が貴夫人に對して尊敬を持つ當然の道徳的根據が二つある。一つは其の人間的階級意識である。一つは其の衣食住の生活的勞働である。我々が靈肉の世界に立つて、此の二つの缺點を許して、其他の美點を見ない限り貴夫人は甚しい非難さるべきものである。序論に於いて述べた如く女性美の凡ゆる段階は、各々醜を含み乍ら其の程度に於いての美を持つてゐるのであつて、高き階段に進むに從つて次第に其の醜を超克してゆくのである。階段の意識は只靈精の世界に於てのみ生じ得るものである。(「道心の三つの相に就いて」参照)。故に我我は地上的なる女性美の最高の階段として淑女を見る。淑女は先づ貴夫人の如き人間的な階級的權威から放たれなければならない。從つて其の權威を莊嚴する爲に必要なる物質的華麗や、儀式的尊嚴を要しない。次に淑女は貧賤でなければならない。從つて貴夫人の如く無偶さ子供でな

持つ事が出來ない。貴夫人に於ては、其の美は配偶を持つ事に依つて初めて生ずるものであり、且つ子供を持つ事は其の美を增すものとして相應しい。皇后に皇儲や、皇子、女のある事や、貴夫人に公達や公女のある事は少しも其の美の障りとはならない。然し淑女に於いては其れは相應しからぬ事である。淑女に於いては肉欲の單なる聯想も其の美を傷つけるからである。淑女は素直にして美しく自然にして自由に且つ汚れなきものでなければならない。其れは必ずしも民衆を避ける必要なく、寧ろ民衆の間に自然に生きる時、自ら其の周圍のものゝ悅びとなる如きものでなければならない。人爲を以て其の威嚴を保つ必要なく、自ら人々から仰がれるものでなければならない。華麗や豪奢を以て飾られず、自然に野の花の如く、陽の光りの如く、叉鳥の聲の如く見る者の心に美と祝福とを送るものでなければならない。其れは明るく、朗らかに、作らずして親切に人の意を迎ふる事なくして愛嬌よく天來の快活でなければならない。かくの如き存在に對して、人は反感や嫉妬を抱く事は出來ないであらう。其處には必ずしも宗教意識は必要ではない殊更ら捨離や、厭世は必要でない。生命の悅びと純潔なる無邪氣さと、自然なる人懷しさと愛と——一言に約せば積極的にして健全なる生命の肯定があれば足りるのである。此れに就いても「心

なき業に就いて」の中に詳しく書いたから再び繰り返へす事を避け度い。此れより後自分が掲げる女性美の諸階段は純粋に地上的なる要素のみに依つては成立し得ず、天的なる要素を持ち、宗教的雰圍氣の中に照らし出される事に依つて、初めて生ずるものである。自分は第一にかくの如きものとして尼を擧げたい、尼は一度此の地上的なる生活を捨離して、天的なる生活に歸化した女である。素より彼女等と雖も此の地上に生きて居る限りは、其の肉體を養ふ營みや地上的なる煩ひから全く離れる事は出來ない。然し彼女等が此の世に生きて居るのは、あの世に一度既に其の魂を廻向しつくして、只假りに殘つてゐる形骸を保つてゐるのに過ぎない。其れは只自ら殺す事が罪悪であり、不謙遜であるが故に、其の玉の緒の絶える日を待つて居るのに過ぎない。故に彼女等は最早や地上のものではない。假令彼女が常に暗き厭世の情緒の中に生きず、神佛の恵みの中に朗らかに生きてゐても、其れは決して此の世の悦びを以て生命を肯定してゐるのではない。彼の蓮月尼の如く、其の日々の露命をつなぐ爲には、陶器を作り、歌を書いて在俗の者に鬻いでも、其の心は出世間の異界に住んで居るのである。クラヽの如く生き生きとして隣人の爲に其の業を助けても、魂は既でに祈に捧げ盡くして彼岸に生きて居るのである。故に尼は例外なく清貧で且つ貞潔でな

ければならない。素より尼は淑女の如く初めより貞である事を要しない。様々の人生の惱みや、汚れを經て後、決心して出家したものであつて差し支へない。然し一旦出家した以上は貞潔でなければならない。尼の美は文學や繪畫に於いて古來勝れた描出を得て居る事甚だ多い。グレコやアンゼリコの描く尼の淨き美しさは素より。マーテルリンクやシャヴアンヌや皆其の特殊な美をよく生かしてゐる。カソリツクの尼や佛教の尼の服裝の美しさは人のよく知る處である。クララや中將姫の如く、處女のまゝにて出家したる尼は特別に天より惠まれたる女性と云ふべきである。我々は彼女等が人性の歡樂を知らずして出家した事を憐れまなければならないであらうか。此の人生の汚濁と煩ひと、羞恥とを痛感する我々は彼女等が之を知らずして逃れ得た事を寧ろ祝福すべきであらう。又彼女等の運命を勇氣なきものとして非難しなければならないであらうか。自分は我々に其の權利がない事を感ずる。何となれば此の地上の制約は我々に或る罪惡を強制する。そして罪惡に堪へ得る勇氣は賞讚すべきものではないからである。例へば我々は他人に對して其の人格を疑つてかゝる事は淋しきことである。然し此の世に於いて、未知の人に何等の疑ふ處なき、全然の信頼を以て對する事は不可能である。殊に女性は未知の男子に對して、其心に何

等の武裝する事なくして打ち任せる事は出來る事ではない。然も相手が信頼に價する人であつた時には、自分がかくの如き心を以て對した事を恥ぢずには居られない。此れは只一つの例に過ぎない。蓋し只此の一事のみを以てするも、善良なる魂が此の世に堪へない當然の、そして充分の根據である。自分の周圍に罪惡がある時、我々は其の周圍の中に生きんと欲する限りは、自分の心を汚さずに保つ事は出來ない。然も自ら殺す事も亦罪惡であるならば、我々は遁れるより外に道がない。かくの如くして尼となつた女性を、其の罪惡に堪へ得る我々が、如何にして非難する事が出來よう。我々のなすべき事は、彼女等に同情し、尊敬し、彼女等の生活を出來る丈け亂さないやうに守つてやる事である。そして彼女等とても、避ける事の出來ない、其の衣食の資を貧しき心を持つて喜捨する事である。かくの如き喜捨は在家のものが出家に對する最も適當な謙遜な、そして唯一可能なる贈物である。從つて尼は喜捨されたものに依つて露命を養ふ清貧の生活を營まなければならない。或ひは在家の門に施しを乞ひ、若しくは執着なき心を以て、其の心やりの手すさびから作つた品物を、何等の強制さ、射利の念なき恬淡たる心を以て、人に鬻ぎ僅かに其の口を糊するを以て、滿足しなければならない。從つて尼は亦謙讓純でなければならない。

我々は物語に於いて、かくの如き尼の傳記に富んで居る。亡き夫の菩提を弔ふ尼の例はもとより、武家の妻に數多く人情の苦しき葛藤から無常を感じて出家したおさんの如き、帝の寵愛をも捨てて出家した松虫、鈴虫の如き、深き過去の因緣から犬に伴はれて、山に逃れた伏姫の如き、我々の心を深く打ち、痛ましさの中に不思議な淨めの力を持つのである。彼女等は所詮此の世のものではなかつたのである。彼のかぐや姫の如き、時の天皇の熱き戀さへも、猶彼女の運命に相應する事能はず、月光の中に昇り去つたのも、此の種の女性の中に數ふべきであらう。次に我々が地上に於いて此の世ならぬ光りの中に眺める二種の女性美がある。卽ちそれは童女と老女である。童女は未だ官能的性徴の現はれざる稚なき女子である。其の美は地上に於いて不思議なる位置を占める、其れは官能的なる性徴を持たないが故に乙女に見る如きアフエクションや、嬌媚羞恥がない。從つて我々は何等の不安や、危な氣なき心を持つて此れに對する事が出來る。然も官能的性徴を持たざるとはいへ、童女は決して男子ではない。其れは明らかに女性としての特徴を持つて居る。然も生き〳〵汚れなく、無邪氣に且つ無限の可能性を持つて、力に充ちて居る。其の活潑なる然も優しさを失はぬ動作、其の自然にして巧妙なる表情特に其の生き〳〵した美しき聲

――我々は其處に抵抗し難き魅力を備へた小さく愛すべきものを見る。童女の合唱する聲程天國的な感じを起さしむるものはない。天國にはきつと童女の合唱群があるに相違ない。自分が今夏或る病院に入院してゐた時、直ぐ隣りの小學校で童女たちの體操する聲や、本を讀む聲を聞く事はどんなに樂しかつたらう。ベットで瞑目して耳をすますと「蓮の花が咲いて居ます〳〵」と聲を揃へて讀む聲が其處だけはつきりと繰り返へして聞えて來た。自分は思はず涙ぐんだ。其の淨い、優しい、然も魅力のある聲を忘れる事が出來ない。幼な子の群れ遊んで居る樣を見れば、珠を連らねたやうに可愛ゆき氣がする。「はしけやし」と云ふ言葉は我々の此の愛を云ひ現はすのに最も相應しい。幼な子の野邊の遊び程此の世に於いて天國的な光景は恐らくあるまい。彼女等が春の野邊に小さな籠を携へて摘み草をして居る樣を見る時、思はずほゝゑまずには居られない。羽子をつき毬をつき雛人形や、まゝ事や、彼女等の世界は無心の樂しき遊戯に充ちて居る。彼の良寛が庵から里に出た時童女と毬をついて遊んだと云ふ事も肯づかれる。彼女等は天性の外交家である。如何なる人の家にも侵入し、然も立派に愛を贏ち得る。彼女等に物をねだられて拒絶する事は不可能に近い。彼女等の行く處には祝福がついて行く。又た、生長して十二三にもなつた童

女が學校通ひに脛まで出た小さき洋服や、或ひは輕きフランネルなど着て若葉の下を友達の肩に手をかけ合つて囀り交はし乍ら通るのを見る時、其の生き〳〵した、美は我々の心を爽やかにほほゑませる。女性に對して淨き心を持つ事の難い成熟した男子も、童女に依つて初めて女性が男性を淨め慰める力のある事を知る事が出來る。素より童女は人として必要なる其他の總ての性能が未だ發達せざるものであるが故に、我々が眞に完成したる女性から求める淨めと慰めとは童女の與へる其等のものとは相違して居る。然し我々は童女に依つて其の約束を信じる事が出來るのである。女性を必ずしも汚れたものと考へなくてもいろ〳〵證據を與へられるのである。天的なる女性の俤を童女に依つて髣髴する事が出來るのである。彼の神々の託宣をきく巫女が童女であると云ふ事は實に相應しい。素より我々は童女に對しても官能的態度を以て對し得られない事はない。其の色香の漸く綻びんとする蕾の如き美は未來の春を約束し、見る者の心にある特殊な魅力を觸發する彼の花魁に從ふ禿の如き古來浮世繪の畫家が其の美を捉へて生かす事を忘れて居ない。彼の湖龍齋の描いた花魁につき從ふ二人の禿の、だらりと結びぼつくりを穿いて、活潑に歩いて居る圖や、春章の描いた大きな花籠を重さうに携げた三人の童女の圖や、同じ畫家の描いた

漆黒の髪が肩で斷つた、羽織を着草履をはいた後向きの童女の圖や、桑文の描いた屛風のかげに面だけ窺けた、花かんざしを挿した童女の繪の如き皆それ〴〵に童女の持つ此の種の美を提へたものである、又源氏物語りの光君が初めて紫の上を垣間見た時、「頰つきいとらうたげにて、眉わたり打ちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髮ざしい、みじう美し」。と眺めたのである「幼心地にも、流石にうちまもりて、伏目になつて俯したるに、こほれかゝりたる髮、つやつやとめでたう見」えたのである。又ヸルヘルム・マイスターが田舍の旅館で初めてミシンを見た時此の「スペイン風の袖のある短かい絹のチヨツキと、髮の飾りがしつくりと身に適ふ長いズボンをつけた」「髮々の黑い鬱いだやうな姿」の妻に不思議に心を惹きつけられて「見ても〳〵滿足する事は出來なかつた」のである。京都の祇園の舞妓の、美しき帶を垂れて、鈴のついた下駄を履いて道ゆく幼なき姿は、人を立ち止まらしむる丈けの美を持つて居る。女の色香を限なく漁する時すれ瀏らしたる男心に對して、恐らく童女の美は新鮮な魅力を以て居るであらう。然し乍ら未だ年もゆかぬ官能的なるものに目覺めざる童女の美を、かくの如き眼を持つて見る事は相應しい事ではあるまい。我々は既に到る處に於いて女性の官能的刺戟に不安を感じ過ぎて居るのである。

其の壓迫せられたる心を、せめて童女に依つて解放されん事を求むべきであらう。地上に童女が存在する使命は確に此の後の點にある。男性の靈魂を其の汚れから洗ひ其の頽廢から救うて、然も女性的美の淨めと慰めの力の信仰を喰ひ止める點にある。彼のダンテが初めて九つの時のベアトリチエを見た時の記憶は彼の一生を通じて淨めの働きをなしたに相違ない。老女は年老いて既に人生の努めを果たし、其の官能的性徴から淨められたる女性である。其の髮既でに白き六十歳以上の婦人が經て來た樣々の運命に依つて、其の感情を和められて、忍耐深く年若き者の過ちをも怒ることなく、總てのものに慈愛深くして憐みの瞳を以て眺め、何等要求することなき足りたる心を以て靜かに生きて居るのは實に尊い。殊にかゝる老女が又信心深かつた時には猶更ら淨き感じを伴ひ尊敬の念を抱かしむる、老尼は嚴かに美しい。又僕婢に守られて寺詣でする頭巾を被り杖つきたる、腰のかゞめる老女は奥床しい。更らに高齢に達して筋骨脱落し、神色枯痩せる老女は我々をして畏れしむる威嚴を持つて居る。其れは既に神々しき祖先らしさの感じである。彼女等は既に半ばあの世に屬して居るのである。過去の長き生涯の樣々の光景は過ぎ去つた夢の如く、其の追憶も最早や彼女等の魂を亂さない。多くの子供達や孫達に祝福を送り乍ら、靜かに瞳を閉

ち、此の世を去る日を待つて居るのである。次に我々が最早や地上的存在として實行する事は出來ないが、天上的存在として考へ得る、そして考へずには居られない理念としての二つの女性美がある。其れは天女と聖母とである。天女は天上に住む惠まれた、女性的存在である　彼女等は既に地上の如何なる汚濁にも染む事なく、如何なる煩ひに依つても亂さるゝ事なく、輕き羽衣を身に着けて、自在に遊行する。其處にはあらゆる實感なく、只美感のみが支配する。「樂」の境地である。彼の寺院の壁畫に見る華鬘を戴き、輕羅を纏へし、蓮華を盛りたる籠を捧げて、天空を飛翔する天女の像は最もよく此の「樂」の境涯を現はして居る。其處には音樂と遊樂とがあつて何等の勞苦がない。我々は靜かな寺院に獨坐して、天女の像を仰ぐ時、其處に地上の我々と品を異にせる別境涯を見る。

彼の謡曲羽衣に於いて三保の松原に降りた天女が漁師伯龍に「いや疑ひは人間にあり。天に僞りなきものを。」と云ふ時、伯龍が「あら恥かしや」と云ふのは此の間の消息を甚だよく傳へて居る。其れは我々に依つてのみ擧げらるゝを得べき境地ではなく、惠みによつてのみ擧げらるゝを得べき境地である。我々は此の境に架橋して上るすべなく、從つて此れに狎れ得る心を起す事が出來な

い。彼女等の悠々として大空に遊行する相を仰ぐ時、我々は我々が「地上の存在」である事をまざまざと感ぜしめられる。勞苦と悲哀と汚濁との中に喘いでゐる。我々の存在を自ら憐れむ感に堪へないそして我々もかくの如き境涯に相應しくならん事を願はずには居られない。そして其れが我々の勵に依つてでなく惠みに依つてゞなくては出來ない性質の、根本的存在方式の遷化である事を感ずる。淨土の七樂の中に數へられる遊行自在樂の趣きは此れである。彼の藥師寺の吉祥天女像の如きも、其の優美を極めたる姿は、凡ゆる實感を除去して純化せられたる美感であつて、其の與ふる効果は純粹の「樂」である。其の漆の如く黒き髮、豐かすぎる程の頰、流るゝが如き衣裳の柔らかき線も我々の實感に訴へない。浮世繪の遊女の美と危ふく境を接し乍ら、然も截然と劃されてゐる。前者の頽廢的要素は我々の實感に訴へ、從つて我々の心に或る惱みを喚起するが、後者は美感のみに訴へ我々の心を純粹の「樂」に浸らしめる。前者は我々を惱殺し、後者は我々を恍惚たらしめる。其れは純粹の甘美の世界である。彼のフラ・アンヂエリコの天使や、詩神(ゼーム)の如きも此の種に數ふべきであらう。フラ・アンゼリコの繪の中には實に美しき惠まれたる天使の遊樂の光景が數多く描かれてゐる。樣々の樂器を持つた長き裳を引いた、羽の生えた天使達や、又

輪の如く美しき人々が手を連ねた聖衆倶會の光景や、不思議にカーヴをつくつて、いと高き天へとうねり上る坂道を、美しき天使が花を摘みつゝ幾組にも分れて上りゆく光景や、此の種の淨樂を以て充ちてゐる。日本の辨財天や、伎藝天の如き天女も人のよく知る處であらう。最後に此處にあらゆる女性美の最高の階段として聖母が位する。聖母は母性の觀念を純化して得たる理念である。其れは地上に存在する事は出來ない。然らば地上の母と聖母とは如何なる點に於いて相違するのであるか。後者は前者の中の罪惡と低卑とを斥け、よきものを高めて生じたるものである。地上の母は優しきもの、愛に充ち且つ渝らぬものとして我々の限りなく懷しむものではあるが、猶其の中には罪惡と低卑とを含んで居る事を免れない。其の愛は未だ地上的本能的なるものである。母親の自分の子に對する愛は第一に他人に對するエゴイズムとなり易く、少くとも他人に對する愛と同質ではない。自分の子に對する本能的なる愛と、其の子守に對する愛とを比較する時此事は極めて明らかである。第二に自分の子に對する愛さへも亦エゴーイズムとなり易い。子供の使命や、戀愛が自分の希望と背反した時の母親の態度は此れを證する。即ち自分の子供に對する愛が他人に對する愛と矛盾せず、子供の運命を、子供の爲めに愛するためには本能的愛だけでは

充分でなく、其内に叡智がなければならない。認識に依つて照らされたる、愛がなければならない。此のことは地上の母親が一度自己の相を反省して、此れを超克せんとする時初めて可能である、又我々は先入主なき公明な心を以て見るも、猶肉交や、姙娠や、分娩や、哺乳に現はるゝ肉體的性徴を低卑と感じない譯にはゆかない。其の不調和なる形や、激情や、苦悩や、醜くして露骨なる動物的徴候を高貴として感ずる事は出來ない。素より、此等のものにも眞摯にして胸を打つ熱情と、感動せしめる力とはある。生命の營爲としての嚴肅さもある。更に或る階段としての美さへもある。然し乍ら其れに拘はらず、其れは依然として高貴ではない。其れは確に我々が高めん事を欲する或るものである。其れは寧ろ我々の地的存在の烙印である。然るに地上の母は此等の低卑なくしては成立する事が出來ない。聖母は此等の低卑を高める事に依つて初めて生ずるものである。我々は動物の母が、例へば牝牛が其の犢を舐めまはして居る、所謂舐犢の愛の光景を見る時深く感動するが、其れを低卑と感じない譯にはゆかない。又貧民窟の母親が多くの子供を加へ、或ひは哺乳し、姙娠し、然も生活に追はれて、子供の世話をなす事能はず、此れを叱咤し打擲し或は放置して顧みず、辛うじて僥倖に依つて生育するに任せ、煩勞と混亂と泣き聲との中

に目を逐つてゐるのを見る時、同情し乍らも淺ましきもの、業深きものと感ぜざるを得ないであらう。我々は現實生活に於いては、母親の觀念と勞苦の觀念とを結合する。又多產や双產や連產に羞恥を感ずるのである。聖母は此等の煩勞と低卑から全然解放されたるものでなければならない。故に聖母は美しく、慈愛深く、嚴かに、淨く、且つ自由なる母でなければならない。此の點に於いて子供に乳房を哺ませて居る聖母像は聖母の理念を純粹に生かしてゐるとは云へない。眞の聖母は彼のファン・アイクの或る聖母像――ゴシックの寺院の中に只子供を抱きたる儘にて嚴かに靜かに、且つ優美に立つて居るもの――の如く、人間的なる感じを超克したるものでなければならない。著しく云へば其の抱きたる子供の重さが手に感ぜられそれが疲勞を聯想せしむるが如きさへも斥けなければならない。デューラーの聖母は粗朴にして眞心に充ちては居るがあまりにハンブルにすぎて位が低い。ラファエルの聖母はやさしさに於いて最も勝つては居るが高貴さが足りない。フラ・アンゼリコの聖母は優美と淸淨とを充分に生かしてゐるが、嚴肅さに於いてやゝ足りない。自分は前述のファン・アイクの聖母に最も愛を感ずる。ルーベンスの聖母は豐麗ではあるが、人間的にすぎ、ゴヤの聖母に到りてはその官能的魅力は我々を不安ならしめる。聖母は我

我の心に何等の負荷を負へざる「樂」の境涯を示さなければならない。然らば聖母と天女とは如何なる點に於いて相違するのであるか。此處には極めて深き重要なる差異が存在する。天女に於いては、其處には何等の營爲がなく、只遊戲が存在するのみであるが、聖母に於いては其處に明らかに營爲が存在しなければならない。然も此の兩者とも「正」の境涯でなければならない。此の事は如何にして可能であるか。我々は現實生活に於いて、營爲と遊戲とを區別する。そして目的なき創作衝動、例へば藝術の如き、實際目的なきものを、即ち其れが成就すると否とが我々の安危に對する關心から自由であるものを、遊戲となづけて、其の結果にのみ純粹の「樂」を期待するのである。此れに反して、營爲は實際的目的を持ち、其れが成就すると否とは、我々の安危に關係するものとして、此れに關心せざるを得ず、然も其の成就を障碍に充ち、且つ如何なる努力に依つても必ず成就するとの保證を豫め持つことが出來ないが故に、我々の營爲は初めより終りまで、我々にとつて心配と煩勞である。即ち其れは「樂」ではない。故に現實生活に於いては營爲の存在するところ必ず苦を伴ふが故に、我々は純粹の「樂」の境地を想像する時、總ての營爲を除去して遊戲のみの世界を表象する。此れ即ち天女の理念を生ずる所以である。故に地上

に於いては我々が樂園を想像する時此れを遊戲と樂との觀念と結合するのは誠に然るべき事である。確に其れは樂園の充たさなければならない必須條件である。彼の阿彌陀經に「此の土の衆生諸々の苦ある事なく、只諸々の樂を受く」と云ひ又精神生活の極致を遊戲三昧の境地に置くが如きも此の必然の要求である。此の意味に於いて遊戲と樂とは決して排斥さるべきものではなく、寧ろ我々の理想境であり其れが現實生活に於いて排斥されるのは地上の方式が其れに堪へない爲にすぎない。卽ち此の地上には相應しくない程尊いものだからである。我々が花を眺め、都踊りを見る時かく迄此れに惹きつけられるのは其點に於いて樂園に似てゐるからである。然し乍ら其れは樂園の充たさなければならない條件の一面であるに過ぎない。樂園は又他面に他の條件を充たさなければならない。卽ち我々は此の世界を完全なるものとして考へる時其處に一つの眞面目なる究極的が存在する事を要求せずにはゐられない。此の目的を缺ぐ時我々は此の世界が空しきものであるとの感を抱かざるを得ない。故に樂園は一つの眞面目なる目的を追及する努力が何等の害を伴はない世界でなければならない。卽ち營爲は同時に遊戲でなければならない。神に於いては其の世界創造は營爲であつて同時に遊戲である。此の二つは一つの事實の二つの面であつ

で分ける事は出來ない。實際に我々は既に地上の生活に於いても藝術的制作をかくの如き兩面の一致せるものとして不完全ながらも要求するのである。女性美に於ても亦同樣である。我々が最高階段の女性美を考へる時我々は其れが只遊樂してゐるのみでは滿足する事が出來ない。其れは必ず一つの目的に奉仕する營爲を持たなければならない。然も我々は理想境として、其れが樂の境地である事を要求せざるを得ない。故に聖母に於ては其の營爲が同時に遊戲でなければならない。彼女は生み且つ育てる、眞面目なる營爲を持つ。然も其の營爲は同時に遊戲であつて何等の煩勞を伴はない。美觀と實感とは全然一致する。其處には最早や罪惡なく、低卑なく然も眞面目なる營爲を持ち、且つ純粹に「樂」なる一つの階段が成立する。此れ聖母の理念である。かくの如きは地上に於いて可能なる事ではない。地上に於ては生み且つ育てる營みは低卑と勞苦と心配とを、而して恐らくは罪惡をも伴はないわけに行かない。然もかくの如き理念は我々が女性の內なる凡ゆるよき可能性を生かして、あしきものを超克する時、必然的に到達せざるを得ない階段である。故は我々の內なる「女性的なるもの」への要求を究極まで追及する時、我々は聖母に達せざるを得ない。故に完全なる聖母は同時に永遠の女性である。聖母崇拜の心は此處に生ずるの

である。其れは高められたる戀慕の心である。凡ゆる女性的なるものゝあり得べき美を含んで、且つ此れを最高の階段まで淨化したものである 故にかくの如き聖母が如何なる具象的女性となるかを我々は完全には知らない。只心の内に憧憬として、模索するのみである、偶々或る恵まれたる天才が、詩や繪の中に此れを描く時、我々は心内の憧憬の或る程度迄の具象化を見出だして特歡喜を感ずるのである。故に古來あらゆる畫家が聖母の像を描いた。其れは各々の點に於いて特色を持ち、完全なる聖母の或る部分を、各々すぐれて表現してゐるのであるが、前述の如く自分の知れる限りに於いては、全體としてファン・アイクの聖母に最も惹きつけられる。然し素より其れも完全ではない。完全なる聖母は描かれる事は出來ない。併し我々は更らにファン・アイクの聖母より勝れたる聖女を描く事を努力しなければならない。そして女性は出來得る限り、此の像に似るやうに地上に於いて努力しなければならない。此處に於いて、我々は前に觸れずに殘した一つの問題に逢着する。即ち我々が或る階段の女性美を或る他の階段の女性美よりも上置するのは前者が後者よりも全體として聖母に似るからである。例へば我々が貴夫人を農夫の妻よりも上置するのは其の教養や、言語や、服裝や禮儀等の點に於いて、より多く聖母に似て居るからで

ある。素より其の正直さや、心の貧しさや、奉仕に捧げた心に於いて、農夫の妻は貴夫人よりも勝つてゐる場合もあるであらう。故に此等の點に特に關心する時、デューラーの描く聖母の如く、質朴にしてハンブルなる像となるのである。然し正直さや、心の貧しさや、奉仕に捧げた心を持てる貴夫人は同樣の農夫の妻よりも上置されなければならない。此の點に於いて我々は女性美を其の在る處のものに依つてのみ賞讃し、在らぬ處のものに依つて賞讃してはならない。即ち積極的態度を持せなければならない。貴夫人が非難されなければならないのは、其の上品な言葉づかひや、禮儀作法の爲ではなく、其の勞働を缺ぐ事、無邪氣でない事、心の貧しくない事等の缺けたるものゝ爲でなければならない。同樣に農夫の妻が賞讃されるのは其の粗野や、無智や、低卑の爲ではなく、其の正直さや、心の貧しさや、勤勞の爲でなければならない。其の全體としての人格の價値如何に依つて判斷する時、我々はデューラーの聖母よりもファン・アイクの聖母を上置すべきである。

以上に於いて、自分は凡ゆる女性美の主なる階段を列舉して來た。其れは序論に於いて述べた如く、還相の世界に立つて眺めたるものであるが故に、それ〴〵の階段は其の程度の美を持つてゐ

るのにすぎず、完全なる聖母を除くの他は盡く多少の度合に於いて、醜を含んでゐるものである。故に我々は此れを美の階段としてゞなく、醜の階段として眺める事も同時に可能なのである然るに自分は何故に此れを醜の階段の展開として見ずして、美の階段の展開として見たのであるか、其れは我々の本性の先驗的要求たる、積極主義に依つたのである。同時に可能なる二つの立場の間に於いては、我々は積極的なるものを選擇する本性を持つてゐるのである。さて最後に我々の忘るべからざる眞面目なる問題が殘存する。上來述べ來つたる女性美の諸階段は、かくの如き女性美が、既に存在するものとして其れが如何なる手續きに依つて現出（フォールユムメン）したかに拘はらず、此れを觀照した結果である。然し我々が現實生活に於いて、現在置かれたる境遇から、より高き階段の女性美に到達せんと努力する時、其處には其の手續きも亦倫理的批判の對象とならなければならない。例へば、前述の農夫の妻が貴夫人たらんと欲する時、若し貴夫人の言語や、教養や、服裝が他の不正なる階級意識や貧しきものゝ重荷を條件としてのみ成立し、且つ自分が周圍の者に負うてゐる責任の義務を例へば夫を援けて田を耕す事や、子供を飢ゑしめない事等を、放棄する事に依つて初めて可能であるならば、其の農夫の妻にとつては貴夫人たる事は道徳的に不可能である。反對に

若し貴夫人が更に一層高く、例へば聖母の如くならんと欲するならば、自己の生活の中から罪惡を除去する爲には、其の財産を私有せず、貧者に勞苦を負はせる事を止めなければならないが故に、其の生活樣式は現にあるが如き形態を留める事は不可能であらう。故に地上に於いて、一般に、一人の女性が聖母の如くならんとして道德的に可能なる最高の階段を求めるならば、今日の如き人類の經濟狀態に於いては、恐らくデューラーの描いた聖母の如きものとならなければならないであらう。卽ち其れは粗朴で、貧しく、其の合はせたる手は勞働の爲にあれてゐるが、然も優美と淨さとを保つてゐる聖母である。

此處に注意すべきは女性美と勞働との關係である。我々は貴夫人以上の段階に於いては衣食住の爲の勞働を免ぜなければならなかつた。我々が女性美の高き階段として考へる部分に於いて、特に此の事を必要とするのは如何なる理由であらうか。衣食住の爲の勞働が其等の高き階段の女性美と釣り合ふ事が出來ないと云ふ事は實に著しき事實でなければならない。殊に其れは今日の經濟的逼迫の時代に於いて、我々が衣食住の爲の勞働なきことを罪惡として非難せんと欲する場合猶更ら奇異の感を生ぜしむるであらう。然らば此の事實は如何に解釋すべきであるか。我々は

最も強くして公明なる態度を以て此れを解釋しなければならない。抑々人間が其の生物學的存在を保つ爲に必要なる衣食住の物資を與へらるゝ權利は彼れが、生命を與へられた點になければならない。我々は生きるべく造られた。故に其れに必須なる物資は與へられなければならない。其れは我々を造つたものが當然用意しなければならない義務である。我々は人間である限り衣食住の物資を要求する權利がある。故に本來我々は其の物資を得る爲めに勞働しなければならない筈はない。從つて我々は本來我々の人格價値に於いて、此の勞働の問題を除外し得る筈だつたのである。素より我々には眞面目なる營爲がなければならない。然し乍ら其の營爲は創造の爲の營爲であつて衣食住の爲の勞働とは明瞭に區別されなければならない。創造の爲の營爲は我々の義務である。此の義務を果たさんが爲に必須の豫件たる生物學的存在を、保持する爲に。必要なる物資を要求する權利を我々は持つのである。故に聖書の創世紀に於いてはアダムとイヴとは衣食住の爲の勞働は課せられてゐない。此れは當然さうあるべき事である。我々が生きるべく造られ乍ら創造の爲の營爲の他に衣食住の爲の勞働を爲さなければならないと云ふ事は確に不合理である此れは此の地上の存在の方式の限界としてより他解釋する道がない。聖書にある『土は汝の爲に

詛はる。汝一生の間勞苦して其れより食を得』と云ふ一つの刑罰、若しくは呪咀としてより他說明出來ない。卽ち此の地上の世界（娑婆或ひは地（エルデ））は地獄や、煉獄と並列すべき一つの咎められたる、若しくは不完全なる段階の世界である。故に此の世界に生きる限り我々は衣食住の爲にも勞働しなければならない。此の勞働と創造の爲の營爲とを區別し、前者を果したる餘裕あるもののみが後者に從ふ事が出來るのに過ぎない、而して現在の經濟組織の下に於いては人類の大部分は只前者のみを爲してゐるのである。故に此の地上の生活に於いては。我々は勞働しなければならない。然し其れは本來あるべき狀態ではないが故に、我々が此處に人格價値の階段を考へる時には高き階段に昇る丈け其の衣食住の爲の勞働が不調和となるのである。祝福せられる存在に刑罰や呪咀の結果なる勞働が調和する事が出來ないのは當然である。故に我々は此處に明らかに二つの基點を區別しなければならない。卽ちあるべき世界に於いては我々は衣食住の爲の勞働は除外すべきである。然し地上の世界に於いては、衣食住の爲の勞働は、恰も我々が負債を拂ひ、懲役に服するが如き意味に於いて、なすべき義務がある。此の義務を果してからでなくては創造の爲の營爲に從ふことが出來ないからである。此の區別は實に重要である。凡ゆる物の觀方が此の點か

ら歪んで來る。我々は勞働に從つてパンの權利を得るのではない。パンの權利は我々が生命を與へられた點より生ずる。我々の勞働は本來の義務ではなく、此の世界の限界から生ずる、宗教的に云へば淨めと償ひの爲に生ずる義務である。素より其の義務は果されなければならない。然し我々が高き存在を表象する時、此の義務は除去されなければならない。其處には只創造の爲の營爲のみが殘されるのである。故に聖母の像に於いて其の肉體や服裝が衣食住の爲の勞働を聯想せしめる事は、聖母の理念とは調和しない。デューラーの聖母が聖母像として不完全なのは此の爲である。然し乍ら我々が地上に於いて完全なる聖母像に最も近く似るやうに努力するならば、其の爲に必要なる他人への愛や奉仕を實現せん爲には、衣食住の爲に勞働する事を餘儀なくせられるのである。此の勞働をなさずして、地上に於いて愛と奉仕とを生かす事は不可能である。何となれば其れは自分の代りに、自分の爲に、他人を勞働せしめる結果となるからである。故に一般にはデューラーの聖母像の如く、其の合はせたる手は粗く節太くならざるを得ない。然し我々の理想は其處にあるのではなく、ファン・エツク の聖母の如く美しく、しなやかな手を持つた聖母像である。地上に於いては我々は、謙遜に其の限界を忍受し、天なる世界を仰ぎ、自らも何時か

は其の世界に住むに相應しくなる事を祈らなければならない。此處に我々の宗教の世界が存在するのである。還相の世界に立つて觀照する時と、往相の世界に立つて精進する時とは事情を異にする事を忘れてはならない。かくの如くして自らデューラーの聖母の如くなり乍らも、他人に對する時には、其低き階段、例へば淫女や、婢に對する時にも、猥りに此れを輕蔑する事なく、又貴夫人や皇后に對する時には、其の物質的華麗に對して徒らに反感を抱く事なく、此等を或る階段に於ける女性美として愛するだけの雅量を持たなければならない。かくするは聖母らしき事である然も亦自分が餘儀なくして現在の階段に居るとは云へ、猶一層高貴なる聖母とならん事を念願しなければならない。童貞にして子供を生み、他人に勞苦を負はしめずして、自ら高貴に裝ふ事が地上に於いて不可能であつても我々が既に在るべき、女性美として、此れを表象し得る限りはかくの如き聖母たらんことを念願しなければならない。しかも其の念願が滿足する世界が存在する事を信仰する事は可能である。其處ではあらゆる營爲が同時に遊戯であり、「樂」と「實」とが一致し善と美とが全然調和する世界——卽ち樂園が存在する事を信仰する事は、精神生活の必然的に到達せずにはゐられない歸結である。其れは決して蟲のよき事でも、甘き事でも又決してなま

けた幻影でもなく、嚴肅なる道德意識の必然的なる要請である。かくの如くして我々は我々の想像力の描き得る限りの高き階段の女性美を理想とし、現實の事情に於いて、最高可能なる階段迄精進し、他に對しては凡ゆる階段の女性美を其の程度に於いて認める事を以て、最も正しくして合理的なる態度となさなければならない。（一九二三・八・二〇）

## 正誤表

| 頁 | 誤 | 正 |
|---|---|---|
| 二〇七 | 人と人との對當 | 人と人の對等 |
| 同 | 此の對當の | 此の對等の |
| 二一三 | 鷹揚さ | 鷹揚さは人格の力である。 |
| 二一四 | 怒りと憎みとを | 怒りと憎みとに |
| 二一六 | 心閒悲嘆する | 悲嘆する |
| 同 | 愛情なく | 愛惜なく |
| 同 | ファッドン | ファイドン |
| 二一八 | 敵が斥けば | 敵が退けば |
| 二二〇 | 眞のの侮辱 | 眞の侮辱 |
| 二二一 | 合理的な道も | 合理的な道も亦 |
| 同 | 次に自分の弱さは | 次に自分の弱さには |
| 同 | 理性が明らかに認識 | 明らかに惡と認識 |
| 二二二 | ならない、凡ゆる | ならない凡ゆる |
| 二二三 | め唯一 | めの唯一 |
| 同 | 出來得る限り強 | 出來得る限り善 |
| 二二四 | 我々を神として來世 | 我々をして神と來世 |

| 頁 | 誤 | 正 |
|---|---|---|
| 二二六 | 地位に於て | 地上に於て |
| 同 | 理想の肯定 | 理想の高低 |
| [illegible] | 理想た低くして | 理想低くして |
| 二三四 | 小なる故を以て同じ | 小なる故を以て價値大に同じ |
| 同 | 露骨となる。自己 | 露骨となる、自己 |
| 二三五 | 態には達し | 態に達し |
| 同 | そのもゝ虛妄 | そのものの虛妄 |
| 二三六 | 最早や其れの | 最早や其の |
| 二三七 | 此の境涯は最早や我々 | 此の境涯は我々 |
| 二五二 | 場合も嚴密に | 場合と嚴密に |
| 二五八 | 運命を守り度い | 運命を守り度い、 |
| 三〇三 | ワーシヤインリツヒ | ワールシヤインリツヒ |
| 三一〇 | に甘んじて | 養つて吳れる者がなくなつた時には甘んじて |
| 三一五 | 保つ事とは至難 | 保つ事は至難 |

| | | |
|---|---|---|
| 二四五 | ヴアントルダイク | ヴアンダイク |
| 二四六 | 婢と然する | 婢と感ずる |
| 二四八 | 其の理髪や | 其の黒髪や |
| 二四九 | 貴族の家 | 「貴族の家」 |
| 同 | 華奢 | 華奢 |
| 二五〇 | 居るならば | するならば |
| 二五九 | な丹精に整へて | な端正に整へて |
| 二六三 | 國母としての愛な | 國母としての愛も |
| 同 | 「人間らしき」 | 「人間らしさ」 |
| 二六八 | 月光の中に昇り | 月光の中に天に昇り |
| 二七〇 | 考へなくてもいろ〳〵 | 考へなくてもいいいろ〳〵 |
| 同 | 觸發する | 觸發する。 |
| 同 | だらりと | だらりに |
| 二七二 | 漆黑の髮が肩 | 漆黑い髮な肩 |
| 同 | 美な提へ | 美な提へ |
| 同 | 眉わたり | 眉のわたり |
| 同 | 髮ざしい、みじう | 髮ざしいみじう |
| 同 | なつて伏したる | なりて伏したる |
| 同 | ミシン | ミニヨン |
| 同 | 髮々の黑い | 髮の黑い |
| 同 | 妻に | 女兒に |
| 同 | 年もゆかぬ | 年齡もゆかぬ |
| 二七三 | 抱かしむる、老尼は | 抱かしむる。かの老尼は |
| 二七五 | 我々に依つてのみ擧 | 我々の功に依つて擧 |
| 二七六 | 加へ | 抱へ |
| 二七八 | 「正」の境涯 | 「樂」の境涯 |
| 二七九 | 究極的が | 究極目的が |
| 二八〇 | 美觀と實感 | 美感と實感 |
| 同 | 到達せざるな | 到達せざるな |
| 二八二 | フアン・アイク | フアン・エック |
| 二八六 | フオールユンメン | フオールコンメン |
| 二九六 | 基點 | 視點 |

大正十三年一月十六日印刷
大正十三年一月十九日発行
大正十三年一月二十一日再版
大正十三年一月二十二日三版
大正十三年一月二十三日四版
大正十三年一月二十四日五版
大正十三年一月二十五日六版
大正十三年一月二十六日七版
大正十三年一月二十七日八版
大正十三年一月二十八日九版
大正十三年一月二十九日十版
大正十三年二月一日十一版
大正十三年二月二日十二版
大正十三年二月三日十三版
大正十三年二月四日十四版
大正十三年二月五日十五版
大正十三年二月六日十六版
大正十三年二月七日十七版
大正十三年二月八日十八版
大正十三年二月九日十九版
大正十三年二月十日二十版

定價 [illegible]

著者 倉田百三
東京[illegible]二丁目一番地

発行者 [illegible]木[illegible]

[illegible]町[illegible]

印刷者 王[illegible]

発行所 [illegible]
東京[illegible]町一ノ一
電話 [illegible]
振替 東京八四〇二[illegible]

東京[illegible]印刷所